九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

——XXXI——

福岡県小郡市三沢所在遺跡群の調査

中　　巻

—弥生時代墳墓編—

1 9 7 9

福 岡 県 教 育 委 員 会

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告

— XXXI — 中巻

正　誤　表

頁	行	誤	正
105	Tab. 8	K11 ♀ 成年	K11 ♀？ 成年
134	14	第1期文化の開始は	第2期文化の開始は
135	11	「漢倭奴国王」印	「漢委奴国王」印
136	30	Ⅳ式	Ⅵ式
153	Fig. 107	KⅢa式の甕棺(縮尺1/12)	KⅢa式の甕棺(縮尺1/12) 1. 原K10　2. 北牟田K24 3. スダレK3
174	Fig. 125	番号なし	左下→左上へ　1～3 右下→右上へ　4～6
176～177	Fig. 127	KⅢc式甕棺併用期の	KⅢc式甕棺併行期の
〃	Fig. 129	板付F－6b井戸出土土器 (縮尺 1/6)	板付F－6b井戸出土土器 (縮尺 1/6) (数字は層位を示す)
180	28	原の辻第9試掘壙	原の辻第9′試掘壙
182	Fig. 132	6～3類	6－3類
184	30	KⅤc式 行期の	KⅤc式併行期の
194	3	「日光凍治」鏡	「日光凍治」鏡
〃	27	KⅡa式は	KⅢa式は
195	参考文献	2 橋口達也・折尾学「 」	2 福岡県教育委員会「 」
198	Tab. 21	KⅠb式　宇木汲田 K18 〃 K32 大友 K1	KⅠc式　宇木汲田 K18 〃 K32 大友 K1
199	〃	〔北牟田 D12（銅剣切先）	〔北牟田 D12（銅剣切先）〕

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

——XXXI——

福岡県小郡市三沢所在遺跡群の調査

中　　巻

—弥生時代墳墓編—

昭 和 54 年

福 岡 県 教 育 委 員 会

例　言

1．この報告書は、九州縦貫自動車道建設による土取工事に伴なって、調査を行なった小郡市三沢所在遺跡群の弥生時代墳墓群をまとめたものである。

2．正原遺跡は土取工事に伴なう調査ではないが、関連資料として収録した。

3．人骨については九州大学医学部永井昌文教授の同定を頂いた。

4．ハサコの宮K18は国立奈良文化財研究所埋蔵文化財センターに出品中であったため、実測図、写真撮影は同センター工楽善通氏他にお願いした。その際の復原にかかる、接着と補強についての所見をいただいたので、本書に収録した。

5．本報告書の執筆分担は次のとおりである。

はじめに……橋口達也
I　はじめに……森田　勉
1－a……橋口達也
b……森田　勉
c……森田　勉
II　はじめに……橋口達也
1……橋口達也
2……橋口達也
3……永井昌文
III　はじめに……橋口達也
1……橋口達也
2……永井昌文
IV　1……橋口達也
2……橋口達也
3……橋口達也
4……橋口達也
V……工楽善通・秋山隆保

6．各遺跡の遺構実測は各担当者および調査補助員が、甕棺の実測は橋口達也が行い、一部中野恵子の協力を得た。製図は各担当者が行った他、川村博、田浦郁子、芦塚照子の協力を得た。遺構の写真撮影は各担当者が行ない、遺物撮影は、岡紀久夫、前田次郎が行った。

7．本書の編集は橋口達也が担当した。

本 文 目 次

頁

はじめに…… 1

I 北牟田遺跡…… 3

はじめに…… 3

1 土壙墓・木棺墓…… 3

a 分類の基準 …… 3

b 土壙墓・木棺墓各説 …… 5

c 木棺墓・甕棺墓出土遺物…… 25

2 甕棺墓および甕棺…… 25

II ハサコの宮遺跡…… 63

はじめに…… 63

1 土壙墓・木棺墓…… 63

2 甕棺墓及び甕棺…… 68

3 ハサコの宮人骨…… 105

III 正原遺跡…… 107

はじめに…… 107

1 甕棺墓および甕棺…… 107

2 正原人骨…… 120

IV 考 察…… 121

1 甕棺埋葬の傾斜角について…… 121

2 甕棺黒塗りの風習について…… 124

3 甕棺製作技術について…… 125

はじめに…… 125

(1) 整形段階における諸問題…… 125

a) 粘土帯の幅 …… 125

b) 粘土帯の積み上げ …… 127

c) 整形の段階について …… 128

d) 凸帯の位置について …… 129

e) 再びタタキ技法の存在について …… 129

(2) 調整段階の所見…… 131

4 甕棺の編年的研究…… 133

はじめに…… 133
1) 甕棺の型式分類…… 139
a) KⅠ期の甕棺…… 140
b) KⅡ期の甕棺 …… 143
c) KⅢ期の甕棺 …… 152
d) KⅣ期の甕棺 …… 160
e) KⅤ期の甕棺 …… 161
f) まとめ …… 166
2) 甕棺編年と日常容器編年との関係…… 167
3) 甕棺副葬品からみた弥生時代年代論 …… 186
a) 各甕棺型式と副葬品との関係…… 186
b) 副葬品からみた甕棺の年代…… 193
おわりに…… 197
Ⅴ 甕棺の接着と補強…… 204

挿 図 目 次

北 牟 田 遺 跡

Fig. 1 土壙墓・木棺墓実測図1（縮尺1/30）…… 11
2 土壙墓・木棺墓実測図2（縮尺1/30）…… 12
3 土壙墓・木棺墓実測図3（縮尺1/30）…… 13
4 土壙墓・木棺墓実測図4（縮尺1/30）…… 14
5 土壙墓・木棺墓実測図5（縮尺1/30）…… 15
6 土壙墓・木棺墓実測図6（縮尺1/30）…… 16
7 土壙墓・木棺墓実測図7（縮尺1/30）…… 17
8 土壙墓・木棺墓実測図8（縮尺1/30）…… 18
9 土壙墓・木棺墓実測図9（縮尺1/30）…… 19
10 土壙墓・木棺墓実測図10（縮尺1/30）…… 20
11 土壙墓・木棺墓実測図11（縮尺1/30）…… 21
12 土壙墓・木棺墓実測図12（縮尺1/30）…… 22
13 土壙墓・木棺墓実測図13（縮尺1/30）…… 23
14 土壙墓・木棺墓実測図14（縮尺1/30）…… 24

Fig. 15 甕棺墓・木棺墓出土遺物（縮尺2/3）……26
16 甕棺墓実測図1（縮尺1/20）…… 27
17 甕棺墓実測図2（縮尺1/20）…… 29
18 甕棺墓実測図3（縮尺1/20）…… 30
19 甕棺墓実測図4（縮尺1/20）…… 31
20 甕棺墓実測図5（縮尺1/20）…… 32
21 甕棺墓実測図6（縮尺1/20）…… 33
22 甕棺墓実測図7（縮尺1/20）…… 34
23 甕棺墓実測図8（縮尺1/20）……折込み
24 甕棺墓実測図9（縮尺1/20）…… 35
25 甕棺墓実測図10（縮尺1/20）…… 36
26 甕棺墓実測図11（縮尺1/20）…… 37
27 甕棺墓実測図12（縮尺1/20）……折込み
28 甕棺墓実測図13（縮尺1/20）…… 38
29 甕棺墓実測図14（縮尺1/20）……折込み
30 甕棺墓実測図15（縮尺1/20）…… 39
31 甕棺墓実測図16（縮尺1/20）……折込み
32 甕棺実測図1（縮尺1/8）…… 46
33 甕棺実測図2（縮尺1/8）…… 47
34 甕棺実測図3（縮尺1/8）…… 48
35 甕棺実測図4（縮尺1/8）…… 49
36 甕棺実測図5（縮尺1/8）…… 50
37 甕棺実測図6（縮尺1/8）…… 51
38 甕棺実測図7（縮尺1/8）…… 52
39 甕棺実測図8（縮尺1/8）…… 53
40 甕棺実測図9（縮尺1/8）…… 54
41 甕棺実測図10（縮尺1/8）…… 55
42 甕棺実測図11（縮尺1/8）…… 56
43 甕棺実測図12（縮尺1/8）…… 57
44 甕棺実測図13（縮尺1/8）…… 58
45 甕棺実測図14（縮尺1/8）…… 59
46 甕棺実測図15（縮尺1/6）…… 60
47 甕棺実測図16（縮尺1/6）……折込み

Fig. 48 甕棺実測図17（縮尺1/6） …… 61

ハサコの宮遺跡

Fig. 49 ハサコの宮土壙墓・木棺墓出土石鏃・石剣（縮尺1/2） …… 65
50 木棺墓（D4）実測図（縮尺1/30） …… 66
51 土壙墓・木棺墓実測図（縮尺1/30） …… 67
52 甕棺墓実測図1（縮尺1/20） …… 69
53 甕棺墓実測図2〔第2次K2〕（縮尺1/20） …… 70
54 甕棺墓実測図3（縮尺1/20） …… 71
55 甕棺墓実測図4（縮尺1/20） ……折込み
56 甕棺墓実測図5（縮尺1/20） …… 72
57 甕棺墓実測図6（縮尺1/20） ……折込み
58 甕棺墓実測図7（縮尺1/20） …… 73
59 甕棺墓実測図8（縮尺1/20） …… 74
60 甕棺墓実測図9（縮尺1/20） …… 75
61 甕棺墓実測図10（縮尺1/20） …… 76
62 甕棺墓実測図11（縮尺1/20） …… 77
63 甕棺墓実測図12（縮尺1/20） …… 78
64 甕棺墓実測図13（縮尺1/20） …… 79
65 甕棺墓実測図14（縮尺1/20） …… 80
66 甕棺墓実測図15（縮尺1/20） …… 81
67 甕棺墓実測図16（縮尺1/20） …… 82
68 甕棺実測図1（縮尺1/8） …… 88
69 甕棺実測図2〔第2次K2〕（縮尺1/8） …… 89
90 甕棺実測図3（縮尺1/8） …… 90
71 甕棺実測図4（縮尺1/8） …… 91
72 甕棺実測図5（縮尺1/8） …… 92
73 甕棺実測図6（縮尺1/8） …… 93
74 甕棺実測図7（縮尺1/8） …… 94
75 甕棺実測図9（縮尺1/8） …… 95
76 甕棺実測図9（縮尺1/8） …… 96
77 甕棺実測図10（縮尺1/8） …… 97
78 甕棺実測図11（縮尺1/8） …… 98

Fig. 79 甕棺実測図12（縮尺1/8）…… 99
80 甕棺実測図13（縮尺1/8）…… 100
81 甕棺実測図14（縮尺1/8）…… 101
82 甕棺実測図15（縮尺1/8）…… 102
83 甕棺実測図16（縮尺1/8）…… 103
84 甕棺実測図17（縮尺1/8）…… 104
85 甕棺実測図18（縮尺1/6）……折込み

正　原　遺　跡

Fig. 86 正原甕棺配置図（縮尺1/10）…… 108
87 甕棺墓実測図1（縮尺1/20）…… 109
88 甕棺墓実測図2（縮尺1/20）…… 110
89 甕棺墓実測図3（縮尺1/20）…… 111
90 甕棺墓実測図4（縮尺1/20）…… 112
91 甕棺実測図1（縮尺1/8）…… 114
92 甕棺実測図2（縮尺1/8）…… 115
93 甕棺実測図3（縮尺1/8）…… 116
94 甕棺実測図4（縮尺1/8）…… 117
95 甕棺実測図5（縮尺1/8）…… 118
96 甕棺実測図6（縮尺1/8）…… 119

考　　察

Fig. 97 タタキ痕拓影…… 130
98 KIa式の甕棺（縮尺1/12）…… 140
99 KIb式の甕棺（縮尺1/12）…… 141
100 KIc式の甕棺（縮尺1/12）…… 142
101 KIIa式の甕棺1（縮尺1/12）…… 144
102 KIIa式の甕棺2（縮尺1/12）…… 145
103 KIIa式の地方色ある甕棺1（縮尺1/12）…… 147
104 KIIa式の地方色ある甕棺2（縮尺1/12）…… 148
105 KIIb式の甕棺（縮尺1/12）…… 150
106 KIIc式の甕棺（縮尺1/12）…… 151
107 KIIIa式の甕棺（縮尺1/12）…… 153

Fig. 108 KIIb～KIIIa式の丸味を帯びた甕棺（縮尺1/12）…… 154
109 KIIIb式の甕棺（縮尺1/12）…… 156
110 KIIIc式の甕棺（縮尺1/12）…… 157
111 KIVa式の甕棺（縮尺1/12）…… 158
112 KIVb式の甕棺（縮尺1/12）…… 159
113 KIVc式の甕棺（縮尺1/12）…… 160
114 KVa式の甕棺…… 161
115 KV期の甕棺（縮尺1/12）…… 162
116 KV期甕棺ハケ目拓影（縮尺1/4）……折込み
117 KIa・KIb式甕棺の副葬小壺（縮尺1/3）…… 168
118 KIc式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）…… 169
119 飯氏出土土器（縮尺1/6）…… 169
120 KIIa式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）…… 170
121 KIIb式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）…… 171
122 KIIc式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）…… 172
123 永岡遺跡竪穴・溝出土土器（KIIc甕棺供備土器）（縮尺1/8）…… 172
124 KIIIa式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）…… 173
125 宝台遺跡甕棺および祭祀土器…… 174
126 KIIIb式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）…… 175
127 KIIIc式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）……折込み
128 板付遺跡J・K・25トレンチ旧河川層出土土器（KIIIc式併行期）（縮尺1/6）…折込み
129 板付F－6b井戸出土土器（縮尺1/6）……折込み
130 KIVa式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）…… 177
131 細頸・長頸壺の形態分類（縮尺1/3）…… 181
132 高杯の形態分類…… 182
133 KVc式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/6）…… 183
134 KVe式甕棺併行期の土器（縮尺1/8）…… 185
135 KIb式甕棺に副葬された磨製石鏃（縮尺1/2）…… 186
136 ハサコの宮K18下甕内部補強状況…… 205
137 甕棺の接着と裏打ち法模式図…… 205

表　目　次

北　牟　田　遺　跡

Tab. 1　北牟田土壙墓・木棺墓一覧表…… 7
2　土壙墓・木棺墓の棺法量表…… 9
3　北牟田甕棺墓一覧表…… 28
4　北牟田甕棺一覧表……40～45

ハ　サ　コ　の　宮　遺　跡

Tab. 5　ハサコの宮土壙墓・木棺墓一覧表…… 65
6　ハサコの宮甕棺墓一覧表…… 68～69
7　ハサコの宮甕棺一覧表……83～88
8　ハサコの宮人骨一覧表…… 105

正　原　遺　跡

Tab. 9　正原甕棺墓一覧表…… 107
10　正原甕棺一覧表……113～114
11　正原人骨一覧表…… 120

考　　察

Tab. 12　甕棺の傾斜角一覧表…… 122
13　金隈遺跡のＫⅡａ～ＫⅡｃ式甕棺の埋葬傾斜角…… 122
14　粘土帯の幅一覧表…… 126
15　岡崎氏編年表…… 135
16　各編年案対照表…… 166
17　副葬品を有する主要甕棺一覧表……188～191
18　洛湯焼溝漢墓鏡出土状況…… 193
19　甕棺内人骨の死亡年令表…… 195
20　絶対年代推定表…… 197
21　主要甕棺一覧表……198～199

付　図　目　次

1　北牟田遺跡遺構配置図（３枚）(縮尺１/50)
2　ハサコの宮遺跡遺構配置図(縮尺１/50)

はじめに

本報告書は小郡市三沢所在遺跡群のなかから、土壙墓・木棺墓、甕棺墓で構成される弥生時代墳墓群をまとめたものである。

土壙墓・木棺墓は前期を主体とし、甕棺墓は中期前半を主体としている。これらを報告するにあたり、昨年度報告した中期後葉～後期前葉の甕棺を主体とした道場山遺跡の甕棺を加えて、甕棺の資料も各時期にわたって資料がととのってきている。したがって甕棺編年を中心として、甕棺の製作技術、甕棺墓の埋葬角等についての考察を行った。

以上の報告をまとめるにあたって、甕棺の量が多く、担当者の無理な要求にこたえて、復原を急いでいただいた九州歴史資料館の岩瀬正信氏をはじめ、復原作業に従事された方々、甕棺実測に協力をいただいた中野恵子嬢、多大な量の遺物撮影を担当した岡紀久夫、前田次郎両氏、製図他諸々に多大な協力を得た川村博氏、田浦郁子嬢に感謝の意を表したい。

又、甕棺等の実測に便宜をいただいた諸機関、未発表資料の提供および資料の提供に御協力いただいた皆さまにも感謝します。

I　北　牟　田　遺　跡

I　北　牟　田　遺　跡

はじめに

北牟田遺跡墳墓群の調査は、土取り作業中に甕棺が出土しているとの連絡により、調査を開始したが、すでに大部分の土取り作業は終了していたことから、　調査を実施した部分は墓域の一部であると考えられる。調査担当者が1人で、ハサコの宮遺跡、松尾口遺跡それに北牟田遺跡の調査を同時に実施するという最悪の事態であったが、多くの調査員の援助を受け不充分ながら調査を完了することができた。

検出した遺構は土壙墓・木棺墓51基（1基は第1次調査分）・甕棺33基（7基は第1次調査分）である。甕棺と土壙墓・木棺墓との切り合いを各所で発見したが、全て前者が後者を切っていた。このことから、当遺跡でも土壙墓、木棺墓が甕を使用する埋葬形態に先行する墓制であることが知れた。また、多数の木棺墓を検出したが、既往のA・B型式に加えて、新らたにC型式（箱形）の棺を発見したことも不充分なる調査であったが、大きな成果といえよう。

1　土壙墓・木棺墓

a　分類の基準

木棺墓の分類は、小郡市津古内畑遺跡の報告で、柳田康雄氏によって、

A……両側板の間に小口板がはいり、両側板は小口板の面より長くはみ出るもの

B……両側板が小口板で止められ、両小口板が両側板の外側幅と同じか、それ以上の長いもの

との両者に分類し[(1)]以後これを基準としながら若干の分類が行なわれた。[(2)]

副島邦弘氏は、飯氏馬場遺跡の報告で、この両者に加えてC……小口板と側板を井桁状に組んだものを設定した。[(3)]

森田勉・山本信夫氏は、北牟田遺跡の木棺墓をA・Bに加えて、

C……側板と小口板の端がきちんと組み合う箱型のもので、小口部分を埋めこむもの

([　　])

D……Cと同種のものであるが小口の部分に掘り方がないもの

E……Dと同種であるが二段掘りでないものに分類している。(4)

橋口は、スダレ遺跡のCは副島分類と同様に考え、A・B・Cに加えて、

D……箱形に組み合わすもの（ ）に分類している。(5)

今回、北牟田遺跡、ハサコノ宮遺跡の土壙墓・木棺墓の分類では、これらを参考にしながら次のとおりに分類する。

まず木棺墓の構築法において、地山を二段掘りして棺を設置するもの、墓壙を掘り棺を設置してから裏込するものの両者があるので、

I……地山掘込のもの（）

II……裏込するもの　（）

に分類し、次に棺の組み合せ方を

A……木口板を両側板で挟みこむもの（ ）

B……木口板で側板を挟みこむもの（ 、）

C……箱形に組み合わすもの（ ）

D……土壙墓

に分類する。副島分類のC型式はきわめて稀なため、A・B型式いずれかの変形としてとらえることとし、これを省略した。

側板および木口板の掘込の有無の○・①・△は、

○……板材を据えるための掘込が両側にあるもの

①……片方だけ掘込のあるもの

△……掘込はないが、板をはめ込む切り込みを設けたものを示す。

註1）小郡町教育委員会「津古内畑遺跡」1970　1970

2）藤田等「藤が迫弥生時代墳墓群」広島県文化財調査報告　第9集　1971

福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集　1971

橋口達也「木棺墓」　下関市教育委員会『新下関駅周辺遺跡発掘調査概報——下関市大字秋根町所在の遺跡——』1972　所収

森田勉・山本信夫「貴重な集落と墳墓群——北牟田遺跡の調査——」歴史を自然をまもる会　『ふるさとの自然と歴史』23　1973・4　所収

穂波町教育委員会「スダレ遺跡」穂波町文化財調査報告書　第1集　1976

3）福岡県教育委員会『前掲書』

4）森田勉・山本信夫『前掲書』

5）穂波町教育委員会『前掲書』

b　土壙墓・木棺墓各説

墳墓群の北半は50～100*cm*程既に掘り下げられていたため、裏込めおよび木口に掘り込みのあるもの以外は墓壙を有するかどうか決し難いが棺の形状および壁のあり方から土壙墓・木棺墓の区分を行い、また木棺墓と推知できた場合各型式を決した。

土壙墓

土壙墓は計16基検出したが、住居跡群の1基を除き、他は全て墓地群から発見した。

D－5（Fig.1、PL53）1*m*近く削平されたと考えられることから二段掘りで、墓壙を有すると考えられる。Ⅰ－C型式かも知れないが壁および床面にその痕跡が認められないことから土壙墓とした。

D－8（Fig.1）D－5と同様に大きく上部を削平されているため墓壙を有するかどうか定かでない。

D－10（Fig.4）D－11を切って棺を造っている。墓壙は不明である。

D－13（Fig.4）隅丸方形の平面形を呈する。墓壙は削平のため不明である。

D－14（Fig.4）棺の北側が削平されているため全長は不明である。

D－18（Fig.3、PL55）棺の蓋が炭化して遺存している。その遺存状態から、1枚板ではなく数枚の板材を縦横に架して蓋としている。墓壙の規模は削平のため不明である。

D－19 古墳時代の東西大溝によって切られているため棺の幅は明らかにしえないが、検出土壙墓中幅の大きな部類に入る。

D－21 北側をピットにより切られているため正確な棺長を知りえないが60*cm*内外になると考えられる。

D－26（Fig.6） 西側を攪乱され不整な形状を呈しているが、復原すると隅丸方形に近い掘り方になる。壙中から炭化材の小片を検出した。おそらくこれは、土壙墓の蓋として板材を横架したものの一部が炭化したものと考えられる。

D－37（Fig.11） 長円形に近い隅丸方形の平面形を呈し、北側木口部分は若干内傾する壁を有している。

D－42（Fig.14、PL55）上部が削平されていることから、二段掘りの墓壙と棺を有する土壙墓と考えられる。蓋の炭化材が多量に残存しており、D－18と同様に1枚板を使用するのではなく、板材を縦横に架して蓋としている。

D－43（Fig.14、PL69）K－31により南側部分が切られているため棺長は明らかにしえない。幅と深さから考えると乳幼児か小児用のものと考えられる。

D－46（Fig.14） 隅丸方形の掘り方の棺を有するが、上部が削平されているため墓壙の有無

については不明である。

D－53（Fig.14）土壙墓中もっとも小形の部類に入るものである。

D－55　棺の構造については、K－33から大部分破壊され、明らかにしえないため土壙墓としたが、I－C型式の木棺墓になる可能性がある。

木棺墓

検出した木棺はI－B型式3基・I－C型式19基・II－A型式4基・II－B型式3基・II－C型式1基合計30基の多数にのぼった。

D－2（Fig.1、PL52）床面は凹凸が激しいが、木口板のための浅い掘り込みを両木口に有し、両側に側板のための裏込めが若干認められることから、木棺墓と見做した。

D－3（Fig.1、PL52）北側木口部分を削平されているため両端に木口板の掘り込みがあるかどうか不明である。側板のための裏込めの粘土が若干残っている。

D－4（Fig.1、PL53）東北隅で側板と木口板が接したように壁が直角近くに曲がり、また北側木口壁は直に立ち上っている。このことからI－C型式のものと推知できた。墓壙は上部削平のため不明。

D－6（Fig.2、PL54）側板が地山と接した部分が粘土化し、その粘土化した痕跡からII－A型式のものと判明した。側板の厚さは5*cm*前後あったと考えられる。

D－7（Fig.2、PL54）地山を不整形に二段掘りした後に両端に木口板用の穴を穿っている。床面で側板跡とみられる凹みを検出したが、これは上からの圧力により生じた凹みと考えられる。その痕跡は木口板東端と直近に接し、C型式様であるが、西側板は木口によって狭まれることからB型式の変形と考えられる。また、棺の裏込めがあることからII－B型式として捉えられる。

D－12（Fig.3、PL54）約7～8*cm*の幅を有する西側板の痕跡から、II－A型式と把握できた。棺外底面から銅剣先が検出され、また、埋土中から打製石鏃が出土した。

D－15（Fig.4）東壁が直に近く立ち上りしっかりしていることからI－C型式としたが、土壙墓かも知れない。

D－16（Fig.4、PL56）壁の上半は崩壊しているが、残存部分は直に立ち上ることから木棺墓と考えられる。

D－17（Fig.3、PL56）両木口板が側板をはさみ、棺用の掘り込みを有するI－B型式のものである。

D－20（Fig.4）壁の遺存状態の良い東半部では壁は直に立ち上ることから、I－C型式の木棺墓と考えられる。墓壙は削平のため不明。

D－22（Fig.5、PL57）D－12の西隣りに平行するように造られたI－B型式の木棺墓で蓋および側板の一部が炭化して残存している。側板の炭化材は方向を微妙に異にしていることから、

Tab. 1　北牟田土壙墓・木棺墓一覧表

番号	方位	墓壙の規模		棺の規模			掘込の有無		形態	備考
		長(cm)	幅(cm)	長(cm)	幅(cm)	深(cm)	木口板	側板		
D 1				152	60				D	1次調査分
D 2	N-7°30′-W			(132)	(20)		○		II－B	
D 3	N-5°30′-W				31		(○)		II－B	
D 4	N-29°30′-E			140	48	(45)			I－C	
D 5	(N-25°-E)			130	45	(32)			D	
D 6	N-16°-E	245	(164)	155	45	(30)	○		II－A	
D 7	N-5°30′-E			165	46	(30)	○		II－B	
D 8	N-27°30′-W			105	46	(20)			D	
D 9										墓跡かどうか不明
D10	N-20°30′-W			70	34	(24)			D	
D11	N-49°30′-E									墓跡かどうか不明
D12	N-17°-W	260	159	143	43		○		II－A	銅剣先・石鏃出土
D13	N-25°-W			80	30				D	
D14	N-15°-W				34	(16)			D	
D15	N-10°-E			103	32				I－C	
D16	N-23°-E			138	42	(45)			I－C	石鏃出土
D17	N-18°30′-E	180	73	133	40	45	○		I－B	
D18	N-17°-E			165	60	(28)			D	蓋の炭化材出土
D19	N-88°-E			120		(10)			D	
D20	N-70°30′-W			135	40	(46)			I－C	
D21	N-13°-E			(60)	34	13～31			D	
D22	N-22°30′-W	210	(170)	138	43	41	○		I－B	蓋・側板の炭化材出土
D23	N-5°-E	(225)	(145)	113	30	36	○		II－C	
D24	N-4°-E	(250)	195	132	40	50	○	①	I－B	
D25	N-58°30′-W		95		37	(13)			I－B	
D26	N-23°-W			126	55～95	43			D	蓋の炭化材出土
D27	N-31°-W	285	220	175	51	33	○		II－A	
D28	N-26°30′-W	227	155	158	48	49	○		I－C	
D29	N-30°30′-W	187	122	120	45	53			I－C	
D30	N-16°30′-E	223	150	140	38	44			I－C	
D31	N-12°-E	285	75	153	40	30	○	①	II－A	
D32										D51から切られ不明
D33	N-33°-E	120	77	61	25	30			I－C	
D34	N-6°30′-E	260	170	145	30	40			I－C	
D35	N-11°-E		146	130	40	45			I－C	
D36	N-22°30′-W	(300)	(190)	138	37	70			I－C	
D37	N-39°30′-E			137	57	37			D	
D38										欠
D39	N-11°30′-E	156	122	80	25	25			I－C	
D40	N-31°30′-W	114	(85)	61	21	25			I－C	
D41	N-40°-W			73	31	50			I－C	
D42	N-15°-E			155～162	45～65	45			D	
D43	N-21°-W				28	(18)			D	
D44										欠
D45										欠
D46	N-29°-W			127	38	22			D	
D47	N-42°30′-E	(100)	(85)	70	20	33			I－C	
D48	N-15°45′-W		106		67	40			I－C	
D49	N-61°-E	210	122	150	42	43			I－C	
D50		160	130							K 24に切られ不明
D51	N-33°30′-E		(165)	164	45	(26)			I－C	
D52	N-61°-W			108	33	24			I－C	
D53	N-89°-W			63	21	(23)			D	
D54	N-19°30′-W				35	(30)				
D55	(N-23°-E)				30	40			D	
D56										不　明

ハサコの宮遺跡D－4のように幾枚かの板材を使用して側板とした可能性がある。

D－23（Fig. 5、PL57)棺の側壁が外傾しているが、これは棺材が朽ち落ちた後に裏込めの土が早くくずれたためと考えられる。北側木口板が短かったためか、床面を約5 *cm*程度平担に埋めて木口板を安定させている。

D－24（Fig. 6、PL57)棺用の掘り込みをした後に、床に厚さ約7 *cm*程土を埋め、そこに木口板の掘り込みおよび東側板用に幅2 *cm*、深さ約1 *cm*程の掘り込みをしている。Ⅰ－B型式のものである。

D－25 大部分はD－29から切られ、棺の詳細については定かでないが、東南木口の片方に木口板のためと考えられる切り込みがみられることから、Ⅰ－B型式の変形になる構造と思われる。

D－27（Fig. 7、PL56)西側板の痕跡から、側板の厚さは2.5～3.0*cm*程度のものであると考えられる。Ⅱ－A型式のものである。

D－28（Fig. 8、PL56)墓壙を2段掘りした後に、木口板のための穴を穿っているものである。棺を復原すると木口板と側板が相接するようになることからⅠ－C型式のものであると判断できる。

D－29（Fig. 8、PL58）D－25を切って造られたもので、木口に広狭があることから土壙墓とした方が良いかもしれない。墓壙の西北隅でD－30と重複していたが、その重複は極く一部であったためその切り合いについては確たる判断はできなかった。しかし、D－30から切られた可能性が強い。

D－30（Fig. 9、PL58）棺の西北隅で、木口板と側板が合わさったように壁が直交、直立していることからⅠ－C型式のものと考えた。

D－31（Fig.10、PL58)棺の上面で検出した側板の跡と床面で検出した側板の掘り込みとがずれることから、側板は1枚板ではなく、ハサコの宮D－4のように幾板か重ねて側板としたのかも知れない。Ⅱ－A型式である。

D－33（Fig.11、PL58）D－51から切られた小型の棺を有するもので、壁の状態から、Ⅰ－C型式と考えた。

D－34（Fig.12） 墓壙の掘り込みが2段になっているものである。確認はできなかったが、上段の部分に裏込めの土を入れると、Ⅰ－C型式の木棺墓となるが、木棺墓の痕跡を検出していないため、土壙墓とした方が良いかも知れない。

D－35（Fig.12） 崩壊した部分を除くと壁はしっかりしていることからⅠ－C型式としたが、これもD－34と同様に土壙墓かも知れない。

D－36（Fig.11、PL59)棺蓋のために地山に掘り方を有する木棺墓である。棺中位で棺の北側の側板跡を検出した。復原すると、厚さ2 *cm*前後の側板を用い、厚さ15*cm*程度の蓋を使用し

たＩ－Ｃ型式の木棺墓になる。Ｉ－Ｃ型式の存在を裏付ける典型的な遺構である。

Ｄ－39（Fig.13、PL57）Ｄ－34と同様に棺の部分が一部２段掘りになっているものである。土壙墓かも知れない。

Ｄ－40（Fig.13、PL66）Ｋ－27から墓壙および棺の一部が切られている。南壁は直に立ち上っているが、他の部分の壁は崩壊のため傾斜を有している。この南壁の形状からＩ－Ｃ型式と考えた。

Ｄ－41（Fig.13、PL59）棺の長さの倍近くある蓋のための掘り込み（約150*cm*）を有している。崩壊した部分を除き壁は直に近くしっかりしている。

Ｄ－47（Fig.14、PL69）Ｋ－20・30から墓壙・棺の一部を切られたもので、木口壁と側壁は直交し、直立することから、Ｉ－Ｃ型式と推知された。

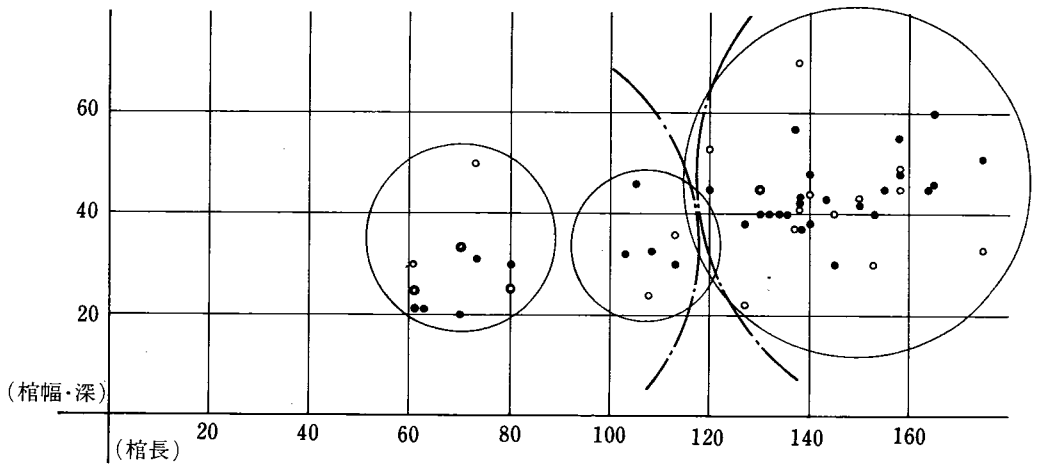
Ｄ－48（Fig.14、PL68）Ｋ－36から棺が切られ棺の長さを知りえない。木口板・側板・蓋の一部が炭化して遺存し、また側板・木口板の圧痕からＩ－Ｃ型式の木棺であることが知れる。棺内床面から石剣の切先を３個検出した。

Ｄ－49（Fig.９）　Ｋ28・29から切られたＩ－Ｃ型式のものである。棺の壁の崩壊は激しいが床付近ではシャープな壁・コーナーを残している。

Ｄ－51（PL58）　棺の西北隅で側板が木口を挟んで箱型になる痕跡が認められたことからＩ－Ｃ型式のものになることが判明した。なお棺の床面は木口両端で約10*cm*のレベル差がある。

Ｄ－52（PL58）　Ｄ－51を切り、Ｄ－55から切られたもので、棺の遺存状態は良好ではないが、壁は直線的に造られていることからＩ－Ｃ型式のものと考えた。

以上、土壙墓・木棺墓の概要について記したが、次に棺の法量を表にするとTab.２のごとくなる。この表は棺の長さが知れるものを選出しその棺長に対する棺幅および棺深の関係を示し



Tab.　２　土壙基・木棺墓の棺法量表

ている。

棺長により、60*cm*以上80*cm*以下、100*cm*以上120*cm*未満、120*cm*以上の三つのグループに分けることが可能である。また、それぞれのグループ内の数をみると、8、4、24となり、それぞれの比率は22.2%、11.1%、66.7%になる。

また、一方今回検出した北牟田遺跡の小形の甕棺と大形の甕棺の比率をみると前者が34%、後者が66%であり、ハサコの宮遺跡では小形棺が30%強を占めている。

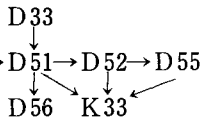
この北牟田・ハサコの宮両遺跡からみると、小形の甕棺は全体の30～40%占めているといえ、先の三つのグループのうち棺長120*cm*未満が33.3%を占める事実と合致する。

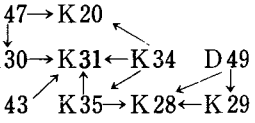
以上のことから本遺跡では棺長が80*cm*以下のものを乳幼児用、100*cm*～120*cm*未満のものを小児用の墓と考えることが可能で、120*cm*未満のものが、甕棺における小形棺に対応するものと考えられる。

墳墓相互の切り合い関係は以下のとおりである。（古→新で示す）

D11→D10

D24→K23





D40→K27

D48→K36

D50→K24

以上のように多くの切り合いを有しているが、土壙墓・木棺墓は、それぞれ墓壙のみならず棺をも切り合うのであるが、甕棺を切るものは1例もない。このことは土壙墓・木棺墓が甕棺墓に先行する墓制として把握できる。そして、その下限の時期の手掛りはKⅡa期のK27・30・36によって切られるD40・47・48に求めることができ、中期初頭頃と考えられる。墓造営開始期については住居跡群から出土する土器から板付Ⅱ式の古期と見做すことが可能である。

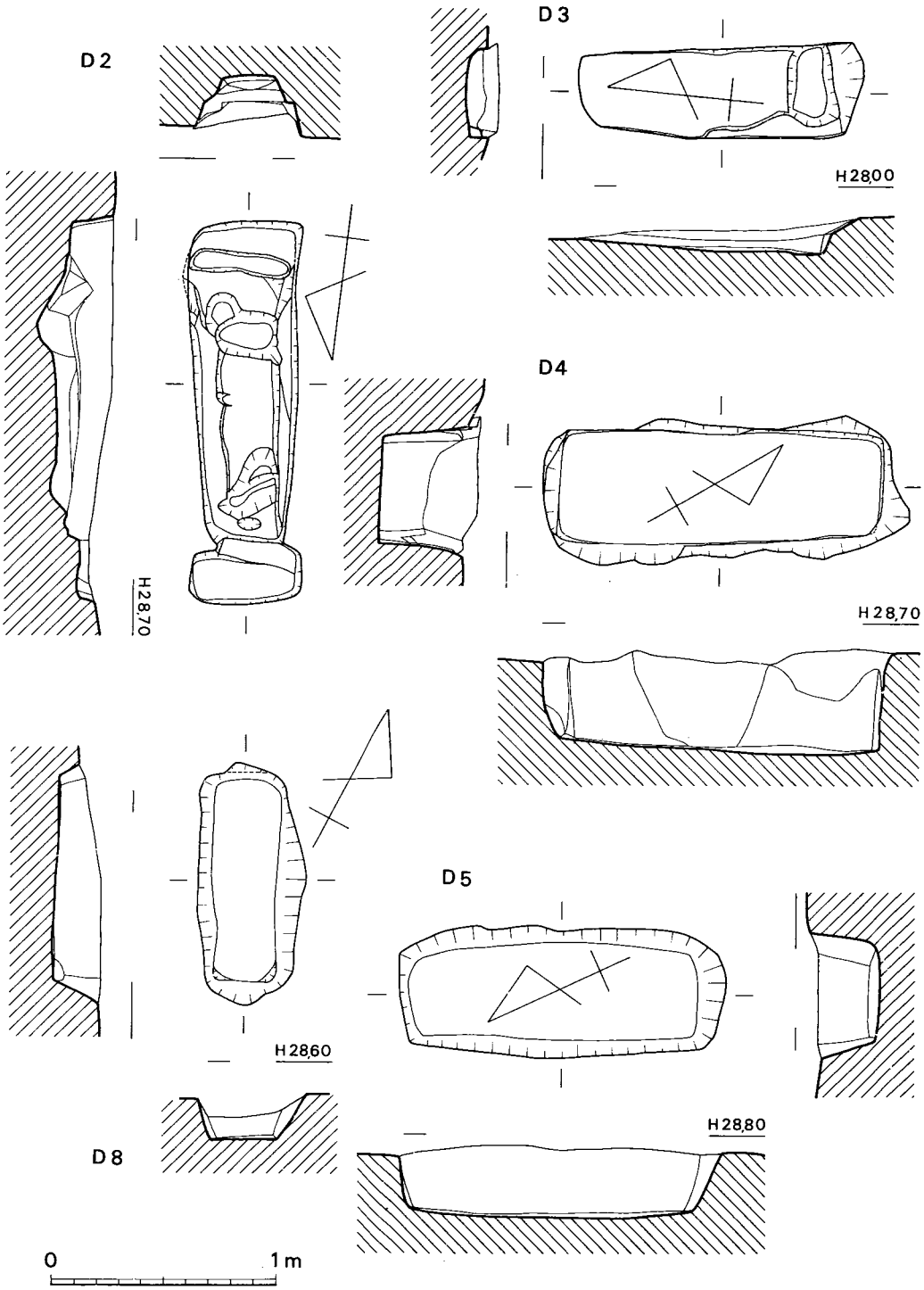


Fig. 1 土壙墓・木棺墓実測図1（縮尺1/30）

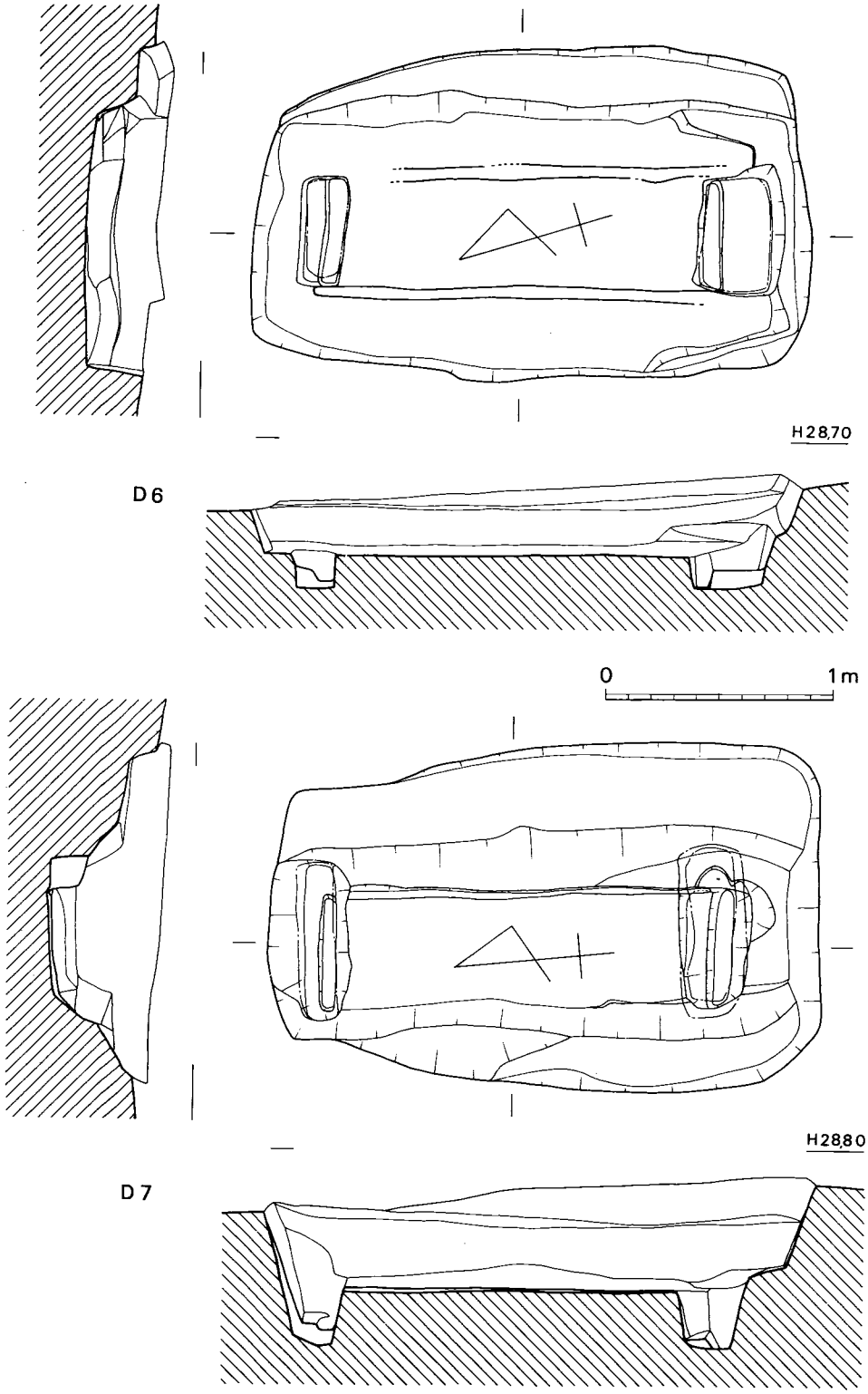


Fig. 2 土壙墓・木棺墓実測図2（縮尺1/30）

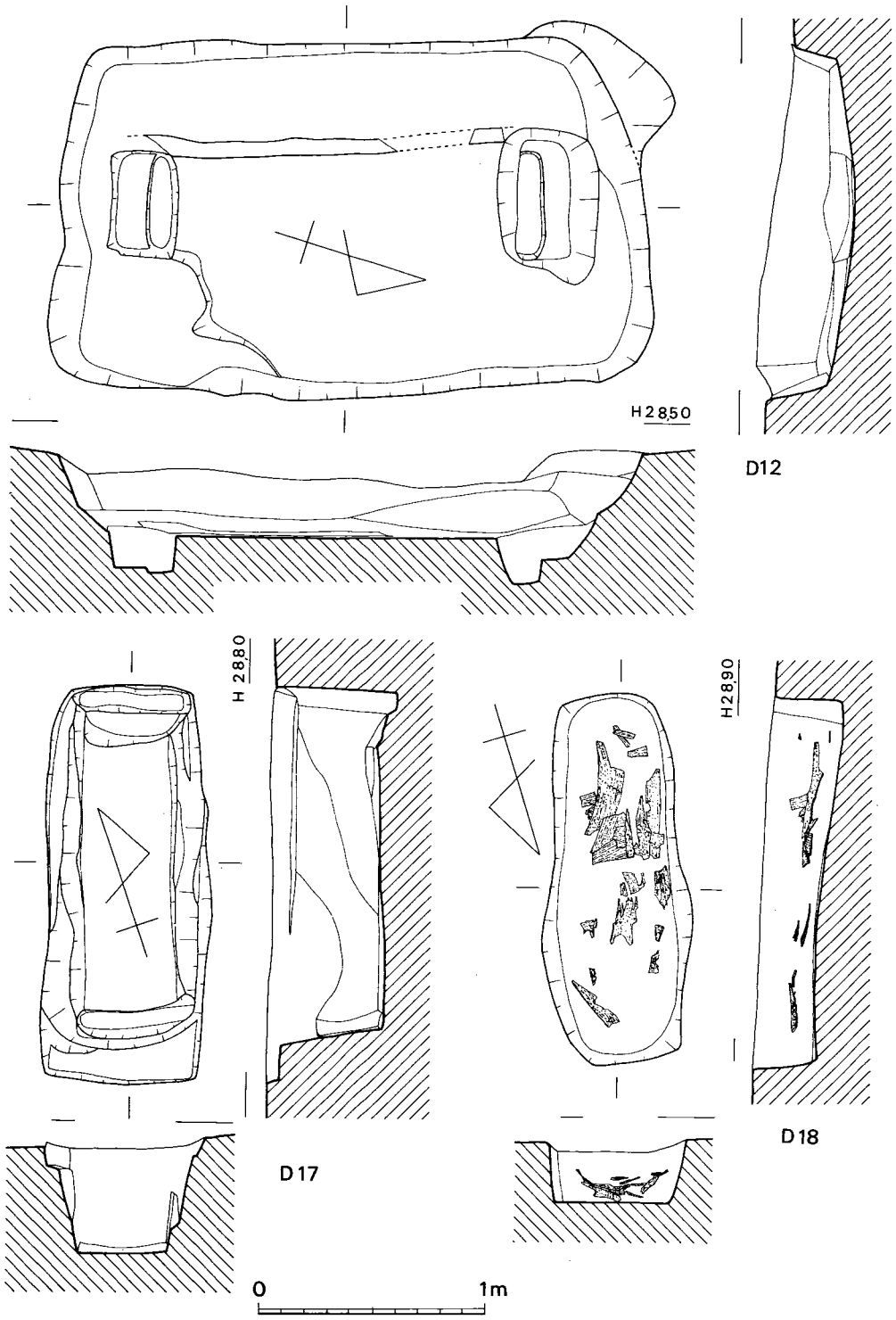


Fig. 3 土壙墓・木棺墓実測図3（縮尺1/30）

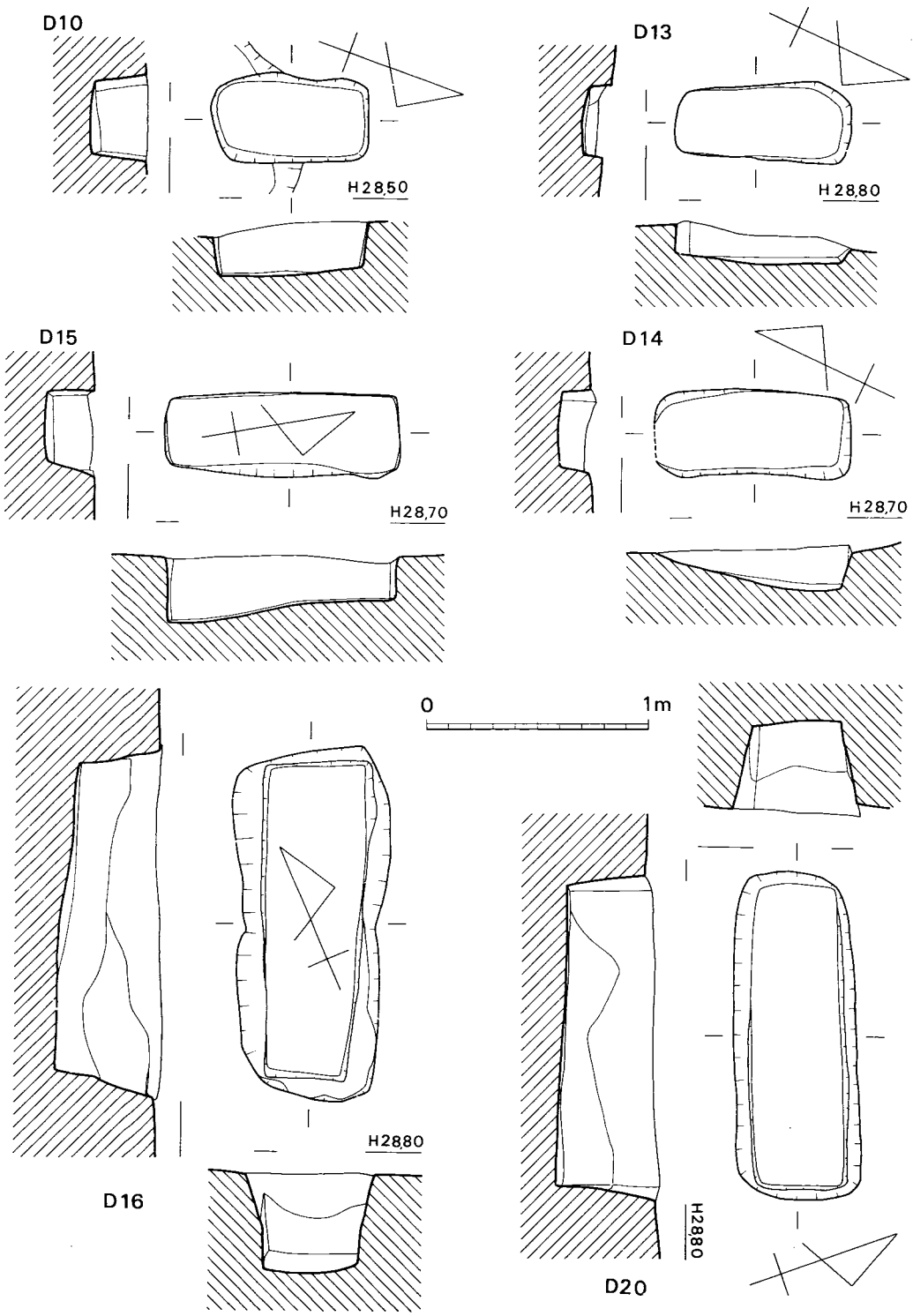


Fig. 4 土壙墓・木棺墓実測図4((縮尺1/30)

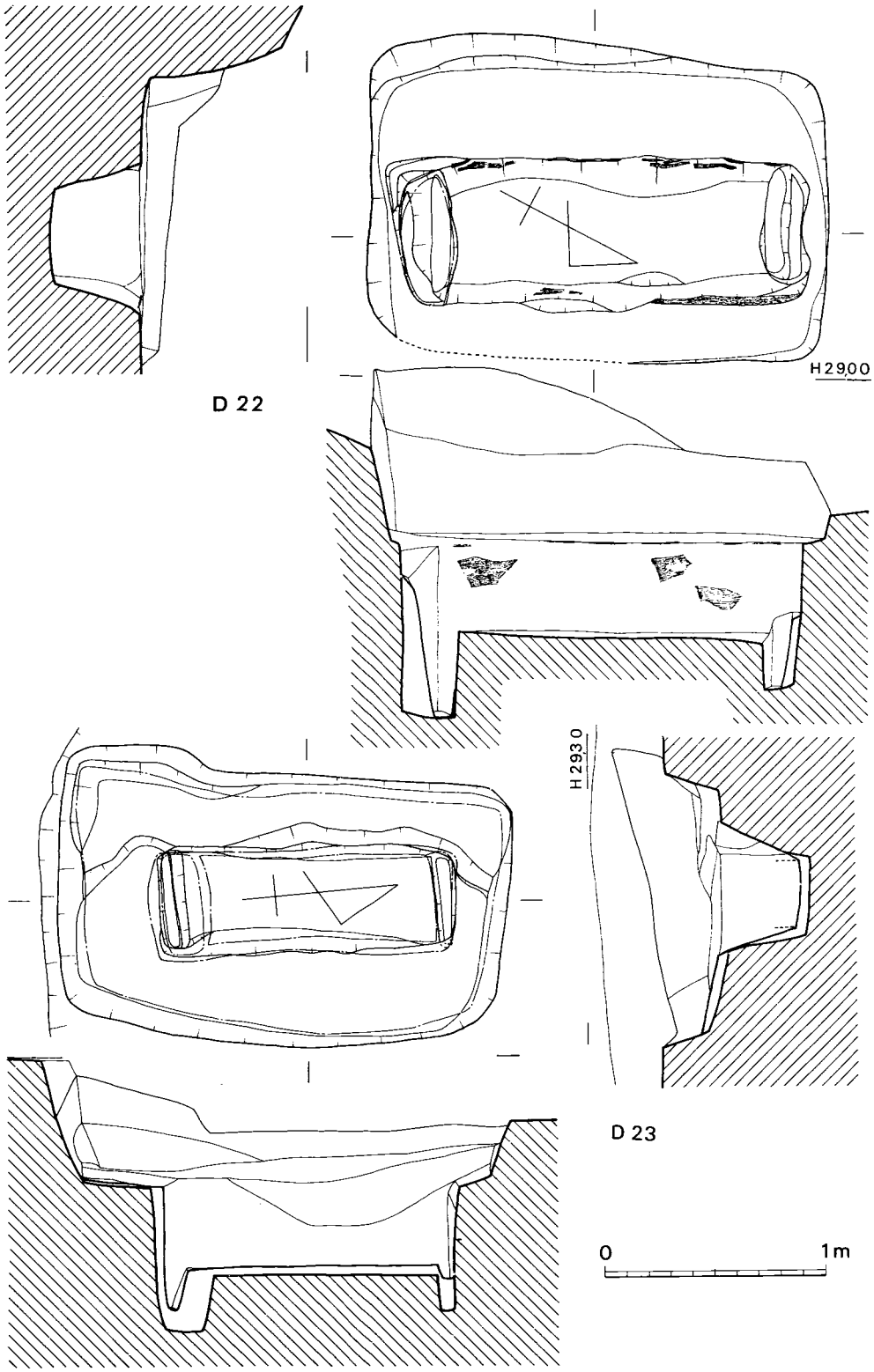


Fig. 5 土壙墓・木棺墓実測図5（縮尺1/30）

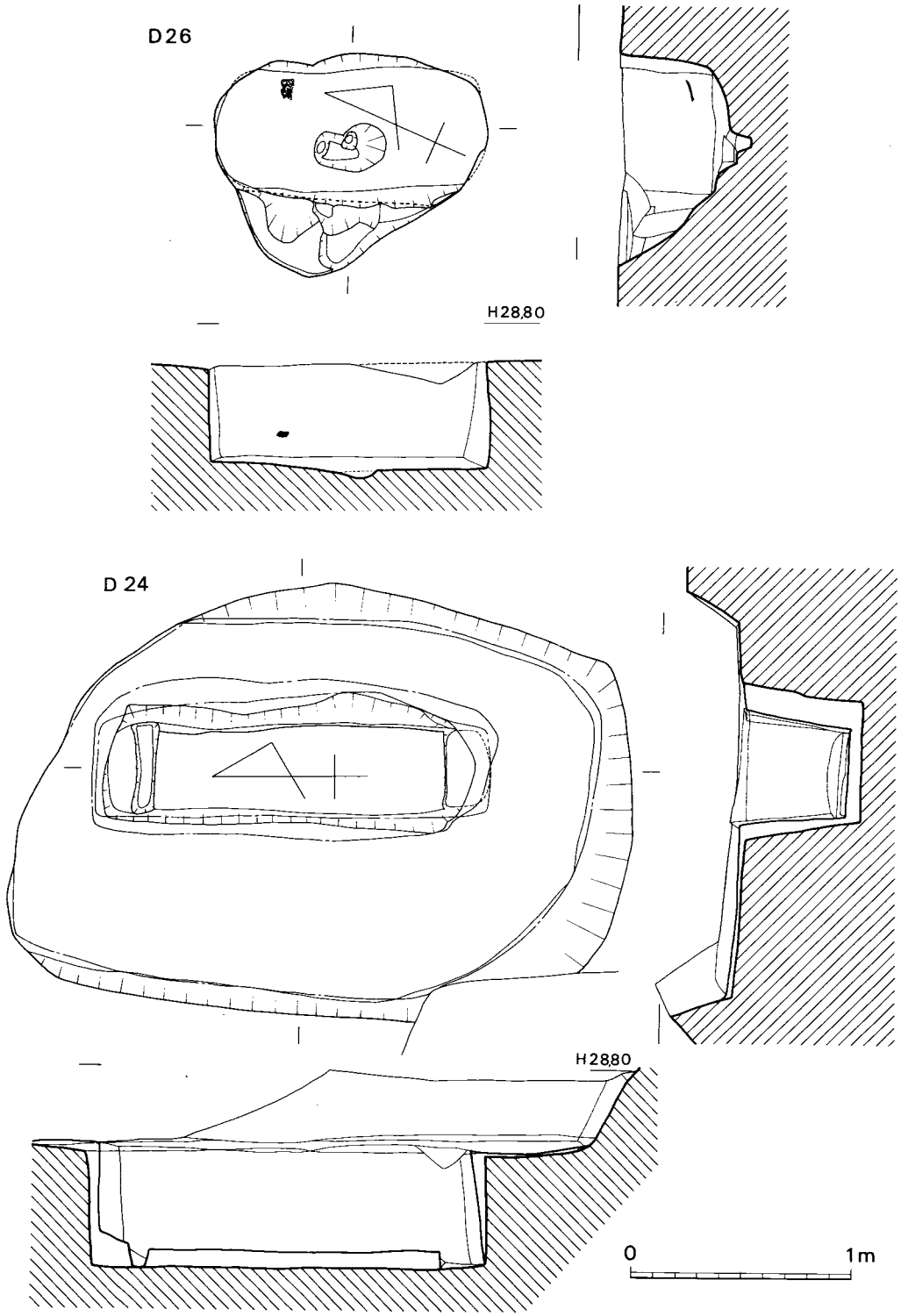


Fig. 6 土壙墓・木棺墓実測図6（縮尺1/30）

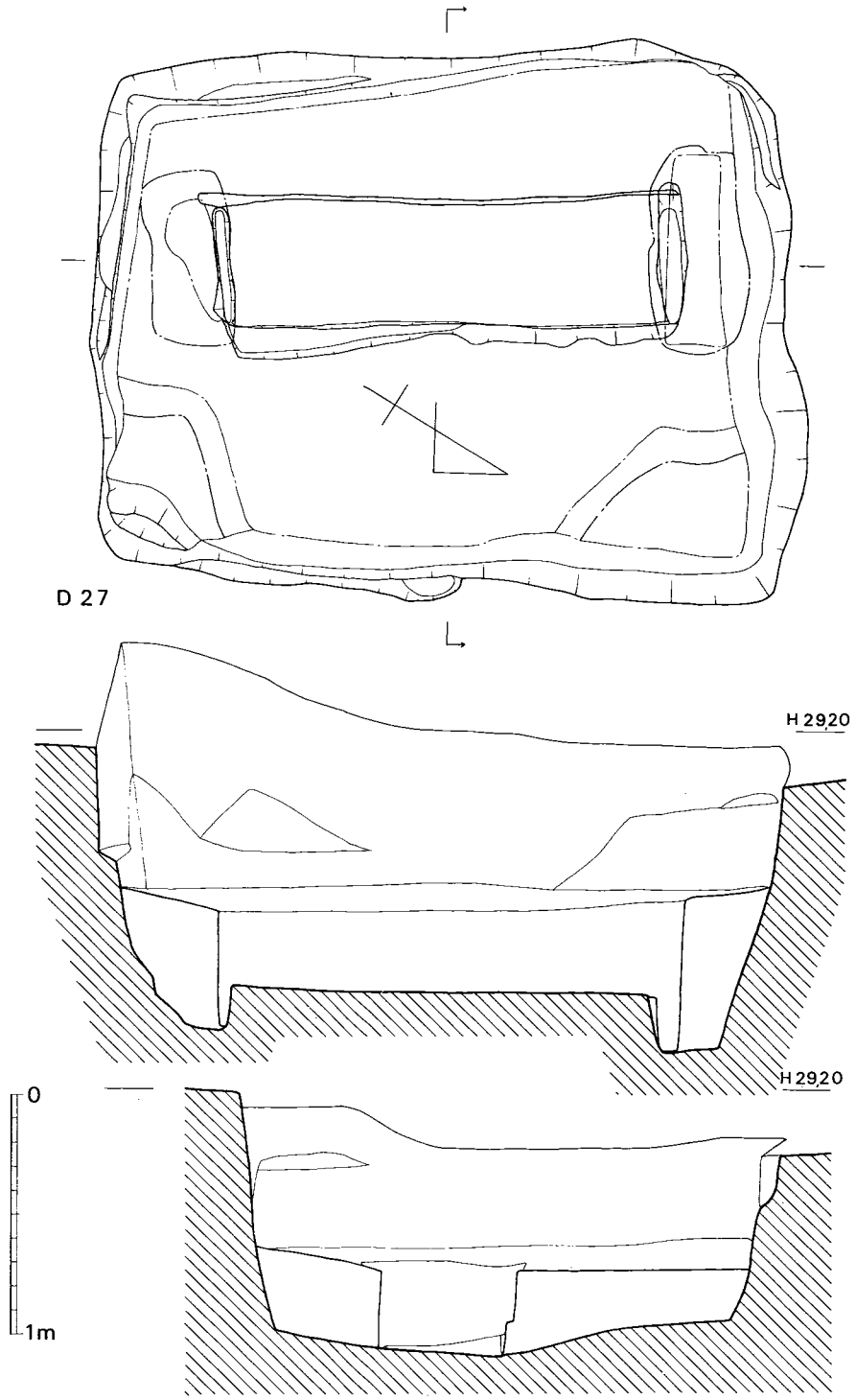


Fig. 7 土壙墓・木棺墓実測図7（縮尺1/30）

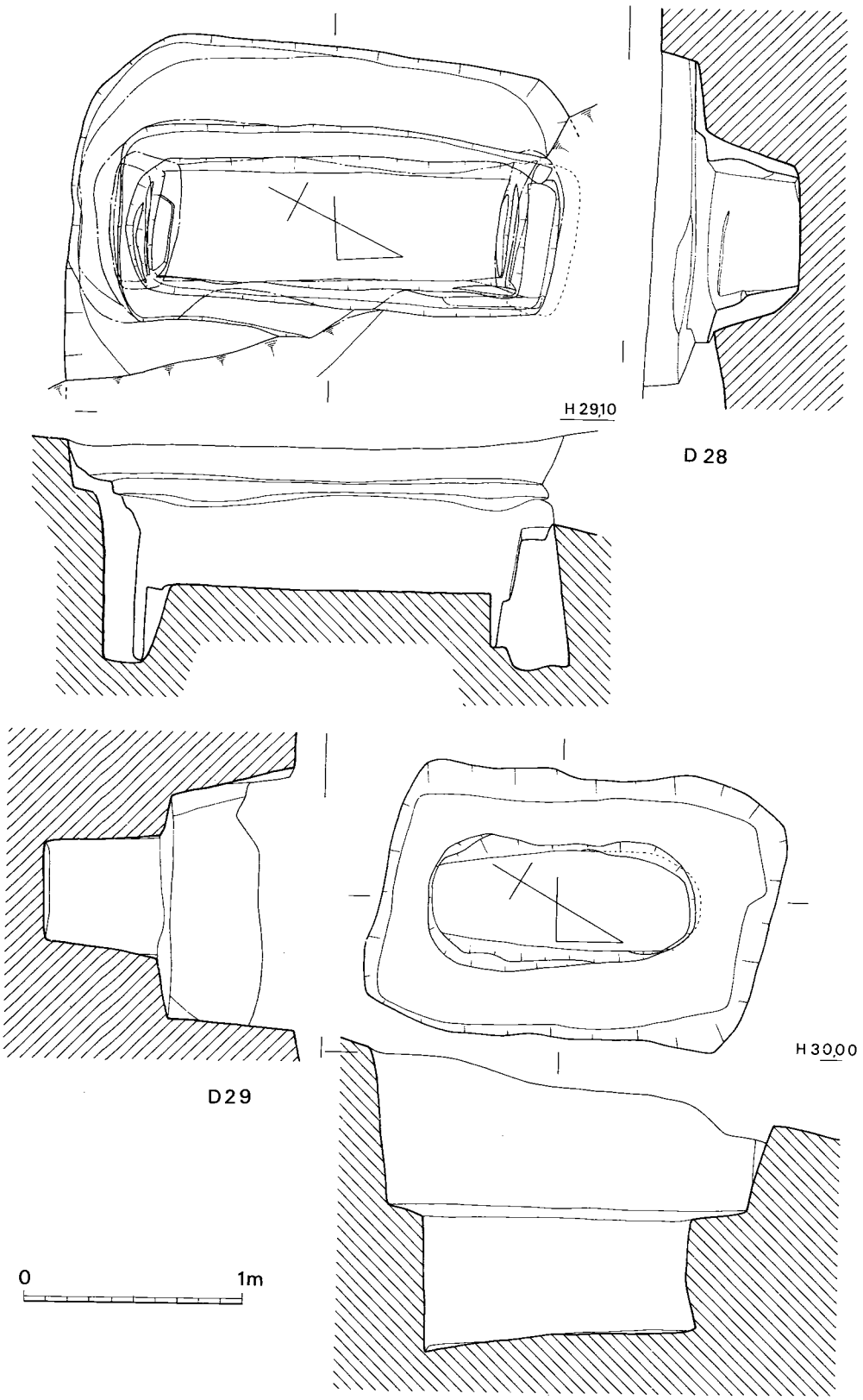


Fig. 8 土壙墓・木棺墓実測図 8 （縮尺1/30）

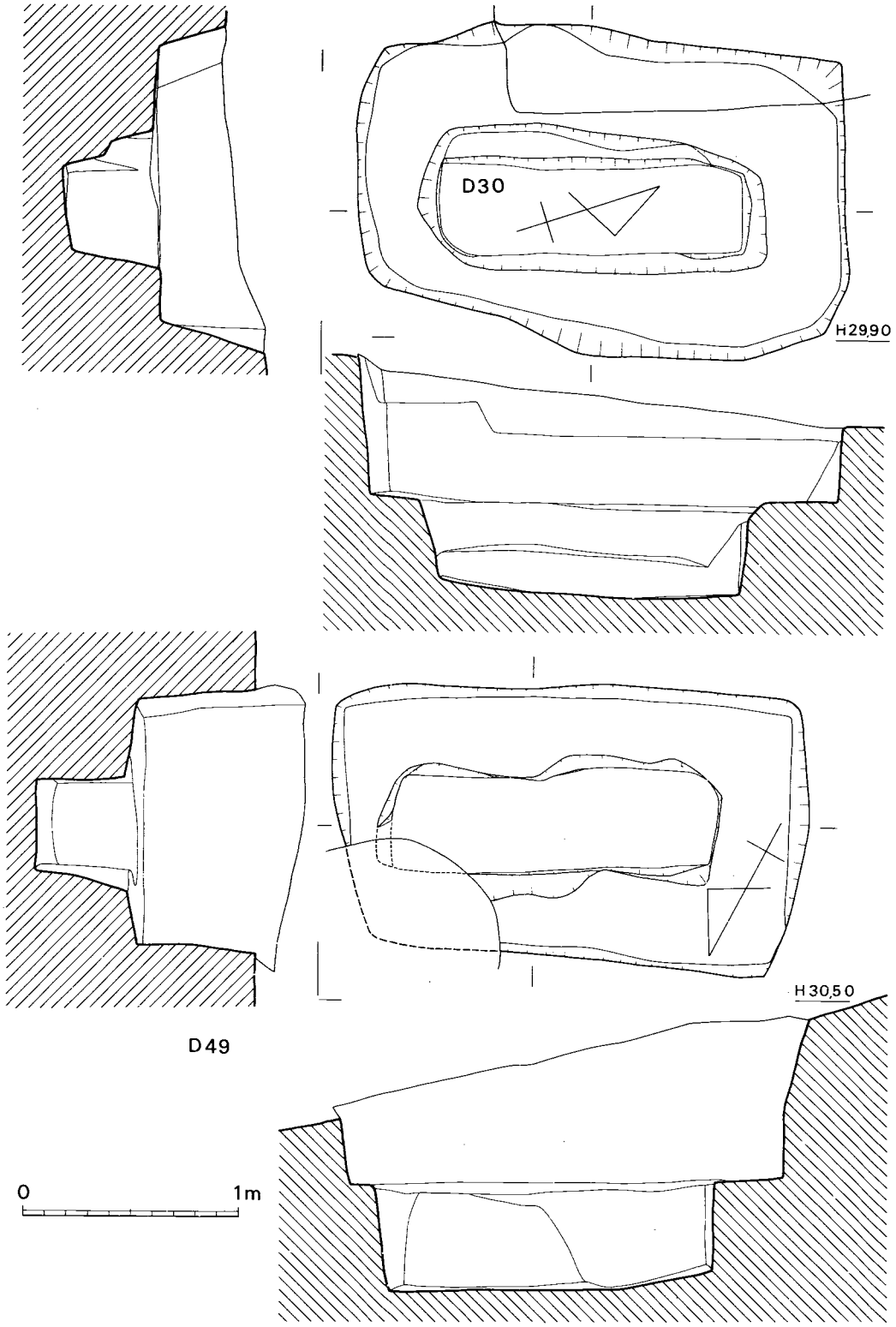


Fig. 9 土壙墓・木棺墓実測図9（縮尺1/30）

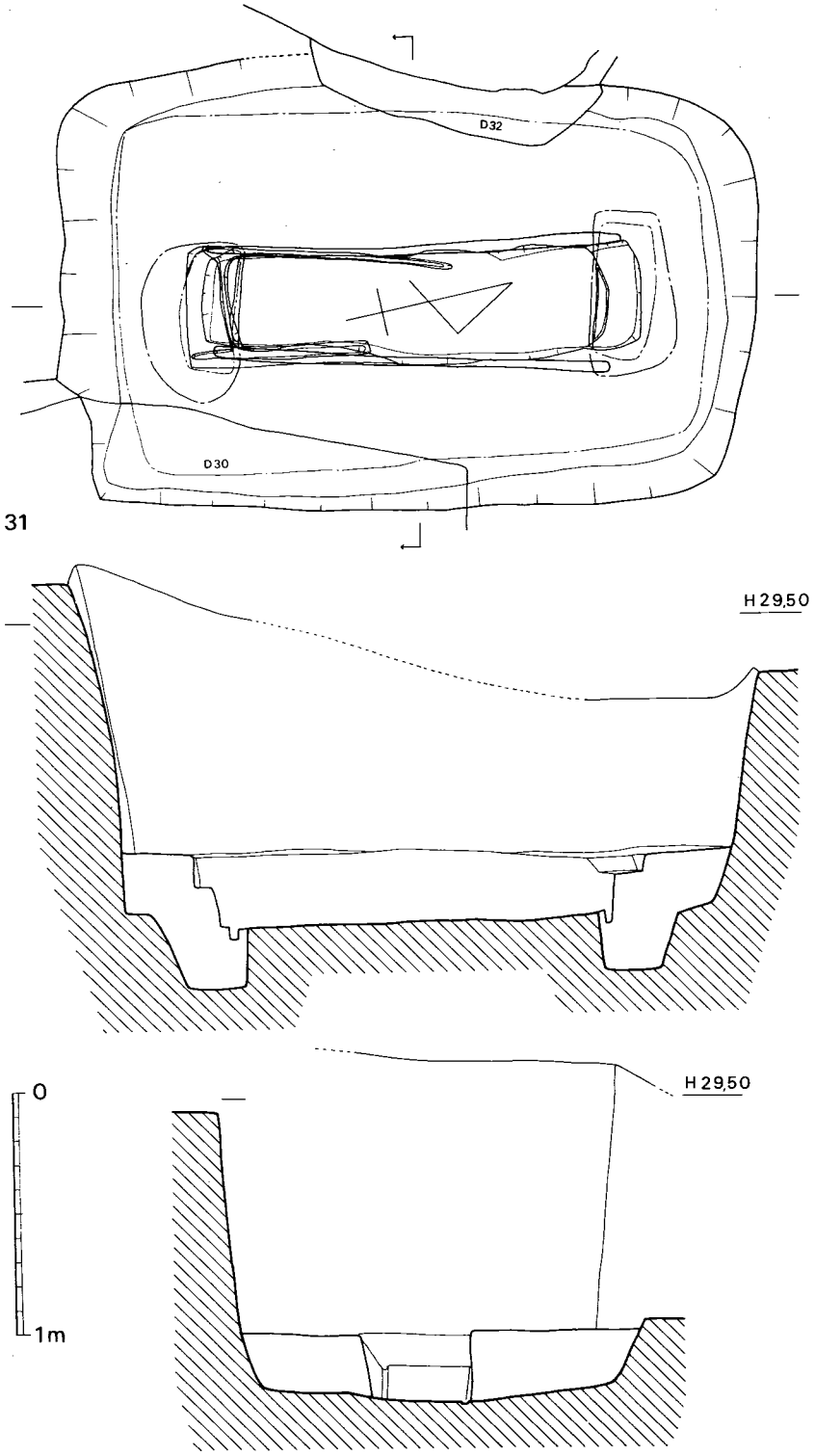


Fig. 10 土壙墓・木棺墓実測図10（縮尺1/30）

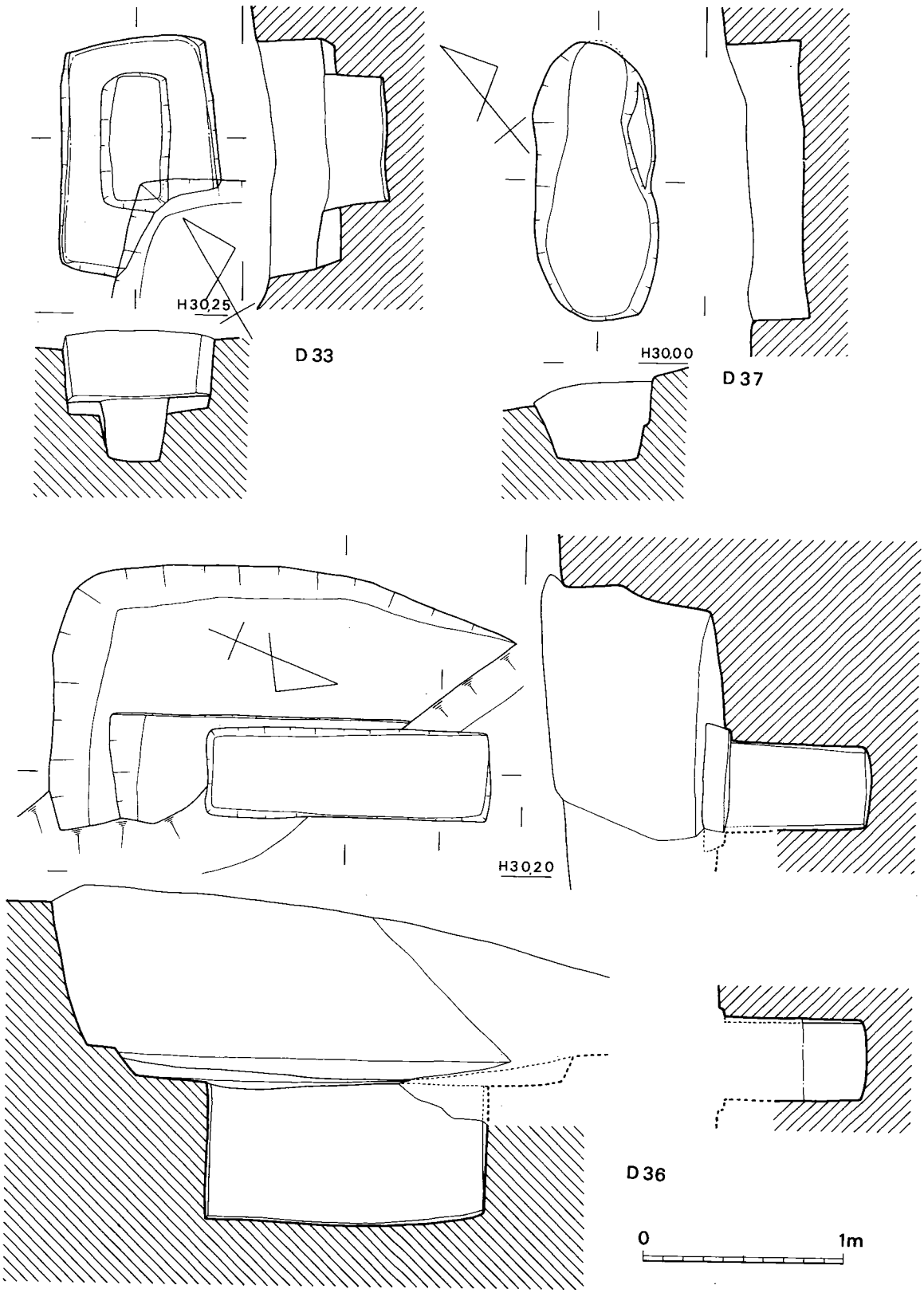


Fig. 11 土壙墓・木棺墓実測図11（縮尺1/30）

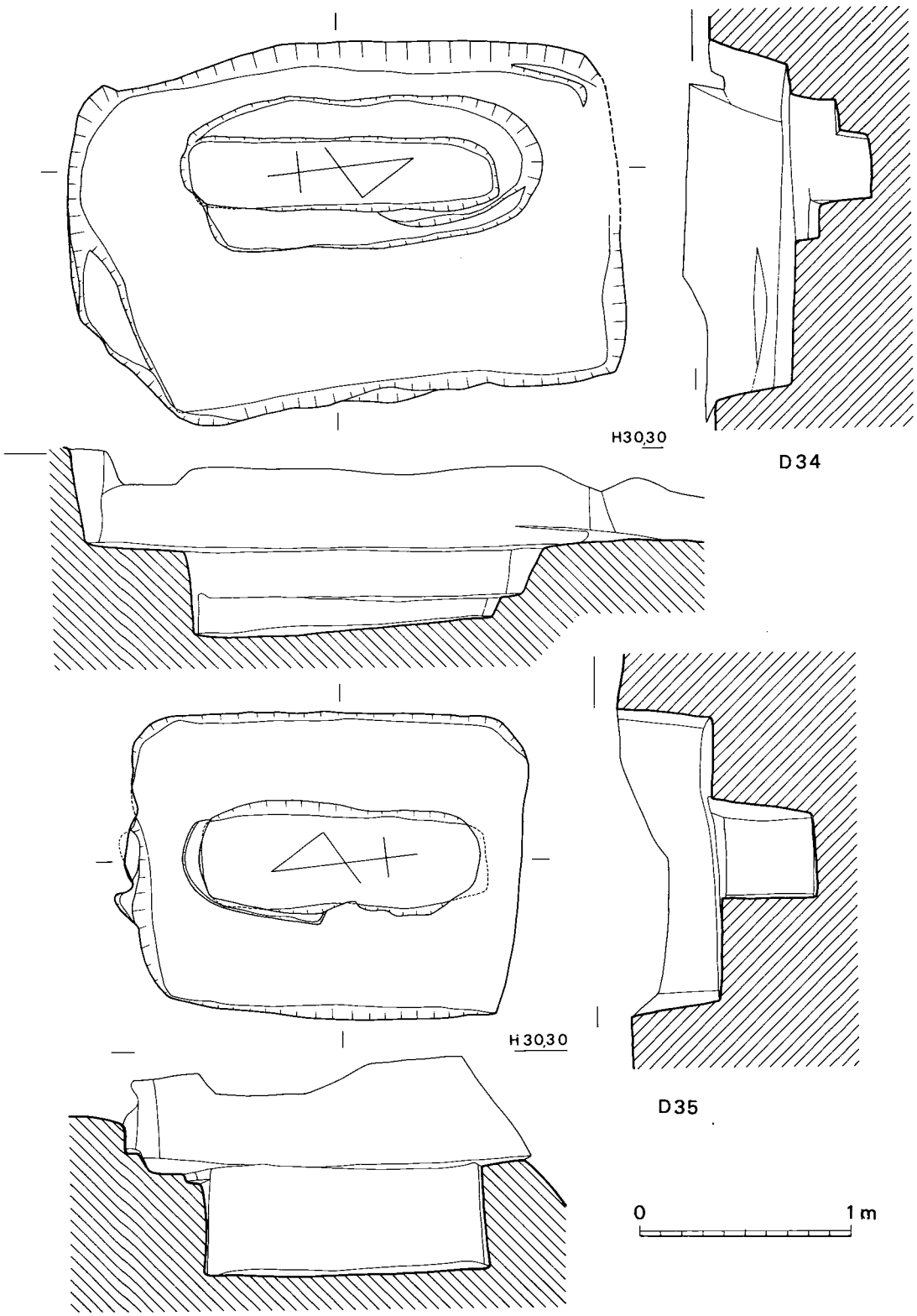


Fig. 12 土壙墓・木棺墓実測図12（縮尺1/30）

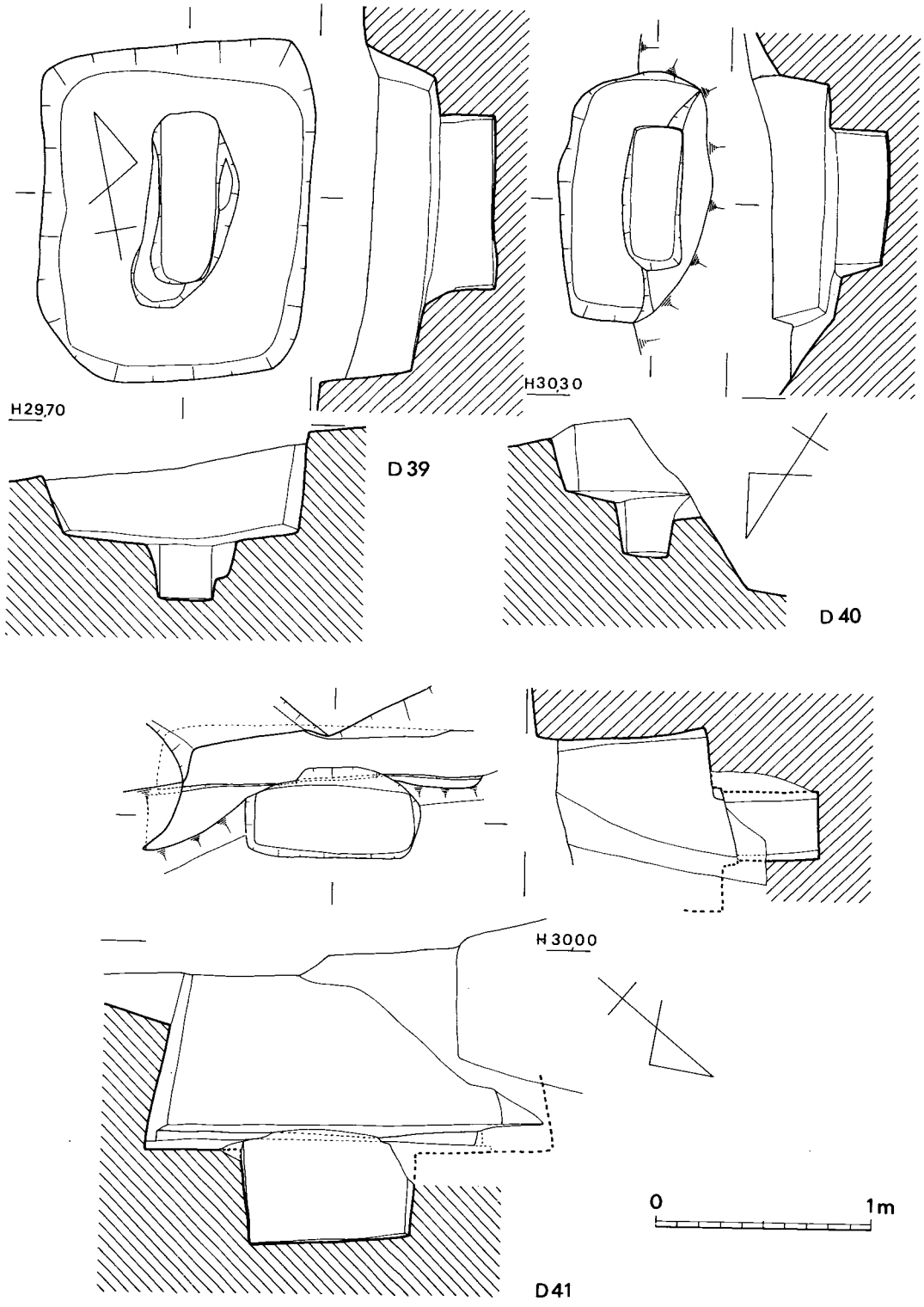


Fig. 13 土壙墓・木棺墓実測図13（縮尺1/30）

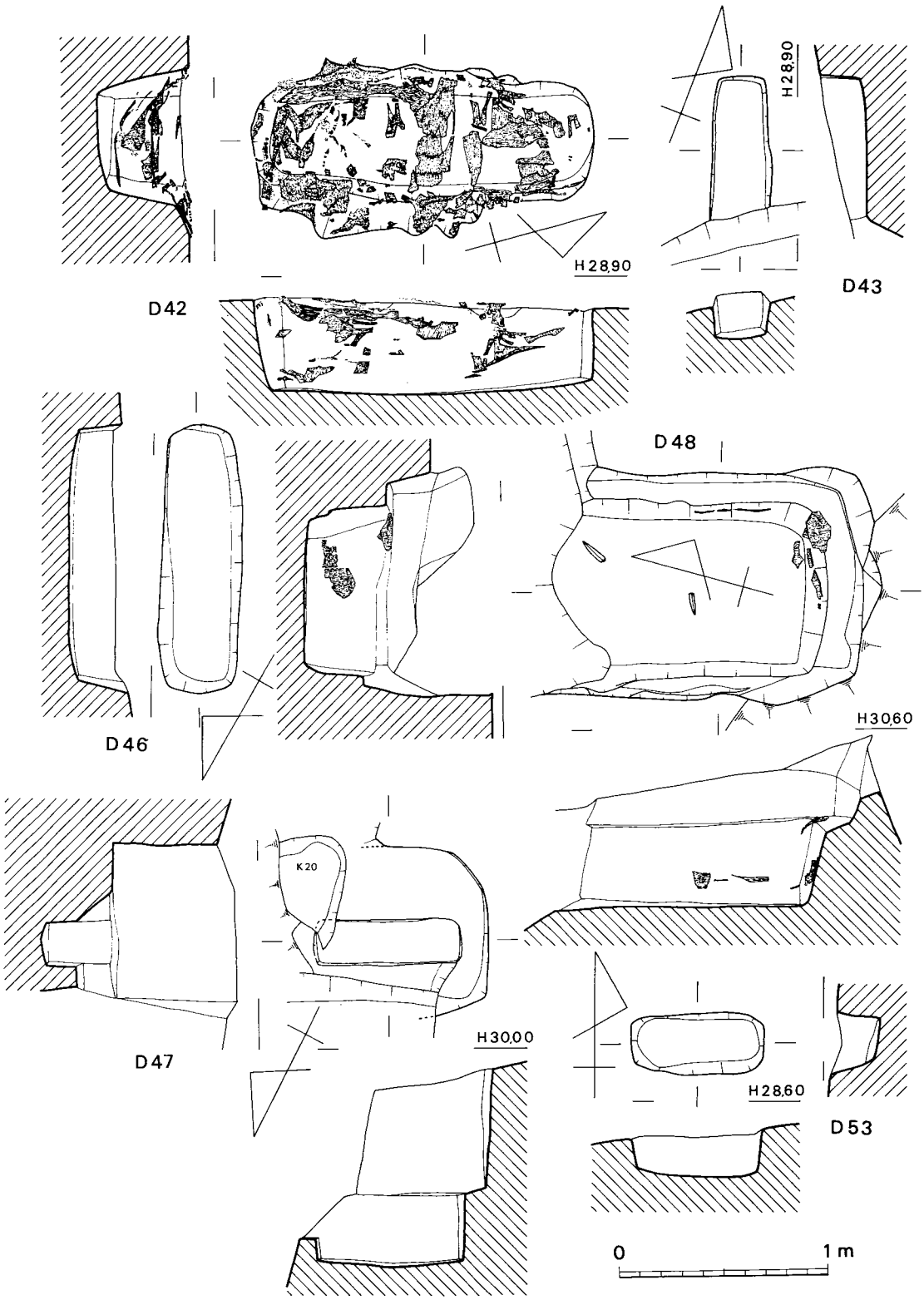


Fig. 14 土壙墓・木棺墓実測図14（縮尺1/30）

c　木棺墓・甕棺墓出土遺物（Fig. 15）

木棺墓・甕棺墓から出土した遺物は細片化した土器や石器類である。そのうち「意識」的に入れられていたものは、K15出土の石鏃1、D12の銅剣片1およびD48の石剣片3のみである。

1はK15の上甕の内壁に密着して出土したサヌカイトの打製石鏃である。先端を欠失しているが、復原すると最大長1.9*cm*、最大幅1.7*cm*を測る。 2はD12の南木口板付近の棺外底面に密着して出土した銅剣切先である。残存長5.1*cm*、折損部復原幅2.4*cm*を測る。折損部は2次的な研磨は施していない。錆化が進行し、白緑色を呈する。3・4はD48の棺内床面から出土した磨製石剣片である。D48から剣先片が3点出土したが、4は北木口板寄り、3は棺中央部、他の1点は南木口側付近から発見された。3は残存長10.1*cm*、折損部幅2.9*cm*、厚さ0.9*cm*を測る。風化のため表面は白灰色を呈すが、内部は淡青灰色を呈する硬質の頁岩である。刃部は若干刃こぼれしている。4は残存長13.7*cm*、折損部幅3.2*cm*、厚さ0.8*cm*を測る。青灰色を呈する硬質の頁岩で、表面の研磨は丁寧で滑らかである。刃部は全体に刃こぼれが著るしい。

2　甕棺墓および甕棺

北牟田遺跡では第一次調査で7基、第2次調査で26基、計33基の甕棺が出土している。そのうち1基の大きさが不明であるが、大形棺と小形棺の比率は21：11で、小形棺の割合は、34.38%となる。ここで小形棺としたものは、道場山で分類した小形棺[(1)]と異なり、通称するところの小児棺のことである。

甕棺の時期はＫＩｃ式からＫⅢａ式にわたる（編年は後述）。時期の判明するものは、

ＫＩｃ式……4基（大形棺2、小形棺2）

ＫⅡａ式……13基（大形棺10、小形棺3）

ＫⅡｂ式……8基（大形棺6、小形棺2）

ＫⅡｃ式……4基（大形棺2、小形棺2）

ＫⅢａ式……1基（大形棺1）となる。

これからみるならば北牟田遺跡の甕棺墓はＫⅡａ式、ＫⅡｂ式を主体とし、ＫⅡｃ式では衰退し、ＫⅢａ式で終焉する。

土壙墓・木棺墓との前後関係は甕棺が新しい。切り合いからいうならばD40→K27、D47→K30、D48→K36のように土壙墓・木棺墓はＫⅡａ式の甕棺から切られているので、前期末以前と考えられる。

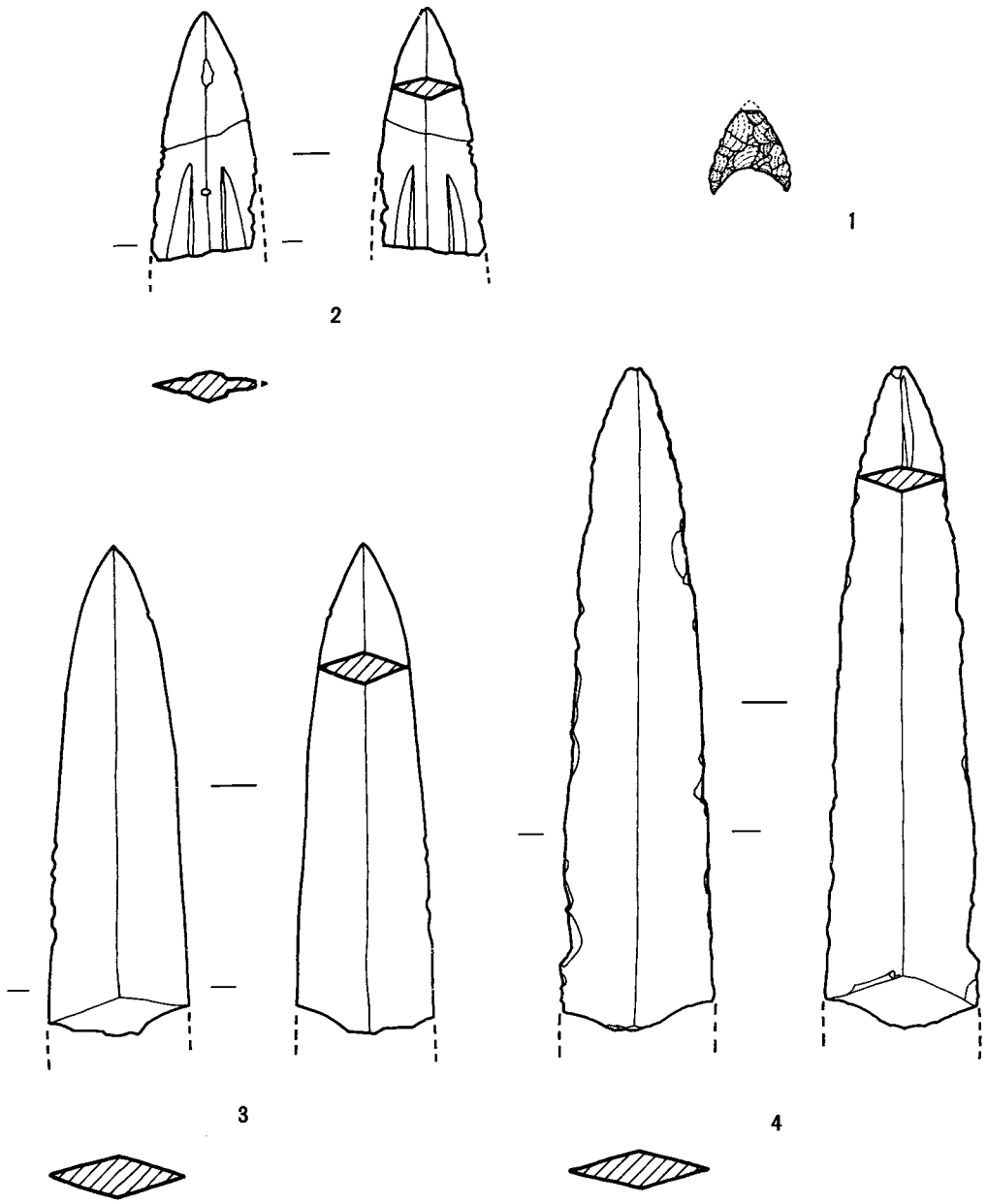


Fig. 15 甕棺墓・木棺墓出土遺物（縮尺2/3）

詳細については、甕棺墓および甕棺とも一覧表を付すが、第1次調査の甕棺墓については上巻に記載があるので省略する。

註1. 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」 XXV 1978

K5上甕凸帯上部に包埋された布片について (Pl.75)

北牟田K5上甕の凸帯上部に、化粧土の下に布片が包埋されていた。成形段階でしばるのではないかという意見もあるので、一応他の部分もたしかめたが、部分的なものであった。ナデに使用したものが包埋されたものかと考える。

布は麻と思われる平織のもので経×緯は10*mm*につき18×14である。糸は左撚りである。

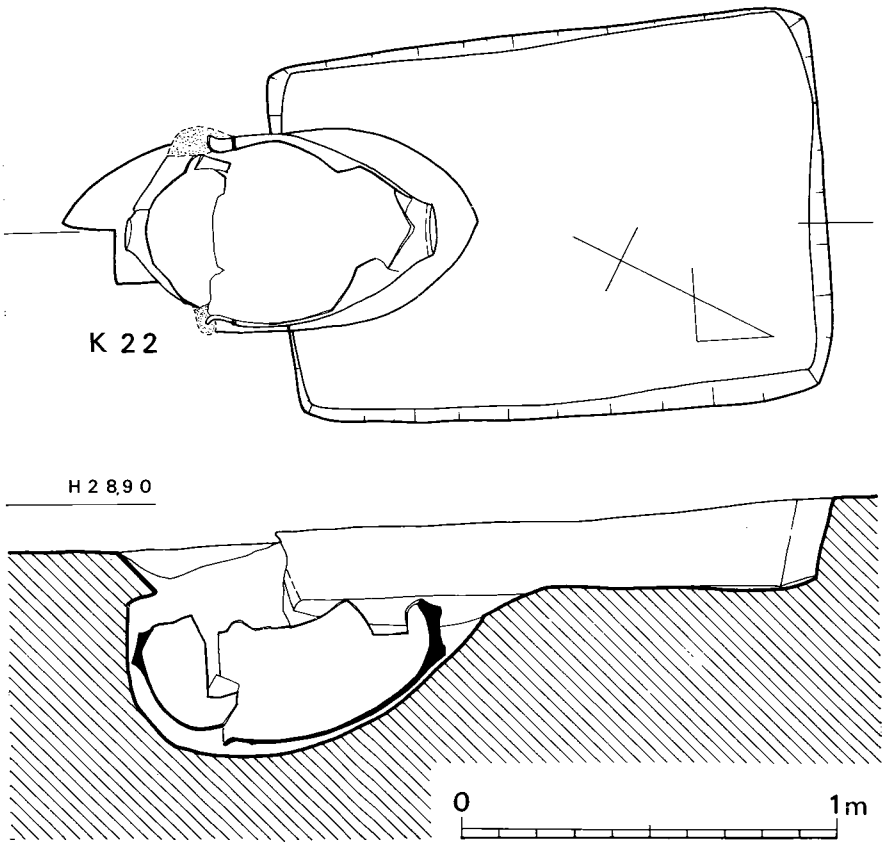


Fig. 16 甕棺墓実測図1 (縮尺1/20)

Tab. 3　北牟田甕棺墓一覧表

番号	時　期	方　位	傾斜角	墓　壙　の　規　模		合せ口の方法				棺の規模		備　　考
				長(cm)	幅(cm)	単棺	呑口	覆蓋	接口	大形	小形	
K10	KⅡa	N-48°30′-E								○		
K11	KⅡa	N-8°-E							○	○		
K12	KⅡa	N-10°-W							○	○		
K13	KⅡa	N-19°-W	−5°	190	118	○				○		
K14		(0°)									○	
K15	KⅠc	N-30°-E					○			○		上甕部より打製石鏃出土
K16	KⅡb	N-78°30′-W							○	○		
K17	KⅡa	N-9°-W		170	150				○	○		
K18	KⅡa	N-14°30′-W	−18°	125	85	○				○		
K19	KⅡa 併行期	N-11°-E									○	
K20	KⅡb 併行期	N-5°30′-E									○	
K21												欠　番
K22	KⅡa 併行期	N-26°-W	2°	148	103		○				○	
K23	KⅡc	N-18°30′-E	−5°	226	160				○	○		D−24→K−23 上甕はKⅡb式
K24	KⅢa	N-2°-E	5°	(130)	100				○	○		上は鉢
K25		N-85°30′-E	6°	103	84				○		○	
K26	KⅡc	N18°30′-E	1°	237	173				○	○		
K27	KⅡa 併行期	N-38°30′-W	−3°	221	154		○			○		D40→K27
K28	KⅡc 併行期	N-88°-E	−4°	105	117			○			○	D−49 K−29→K−28
K29	KⅡc 併行期	N-29°-E	−4°						○		○	
K30	KⅡa	N-66°-E	−12°30′	172	166				○	○		K3030→K−31 K−34
K31	KⅡb	N-56°-E	−10°30′	217	173				○	○		K−34→K−31（D−43、K−35）
K32	KⅡb 併行期	N-56°30′-E	4°30′	104	104				○		○	
K33	KⅡb	N-45°-E	4°	215	180				○	○		D−51→K−33 D−55
K34	KⅡa	N-61°30′-E	−8°	197	(120)				○	○		K−34→K−35（K−31、K−28）→K−28
K35	KⅡa	N-69°-E	−10°	160	122				○	○		
K36	KⅡa 併行期	N-64°-E	2°	130	125			○			○	D−48→K−36

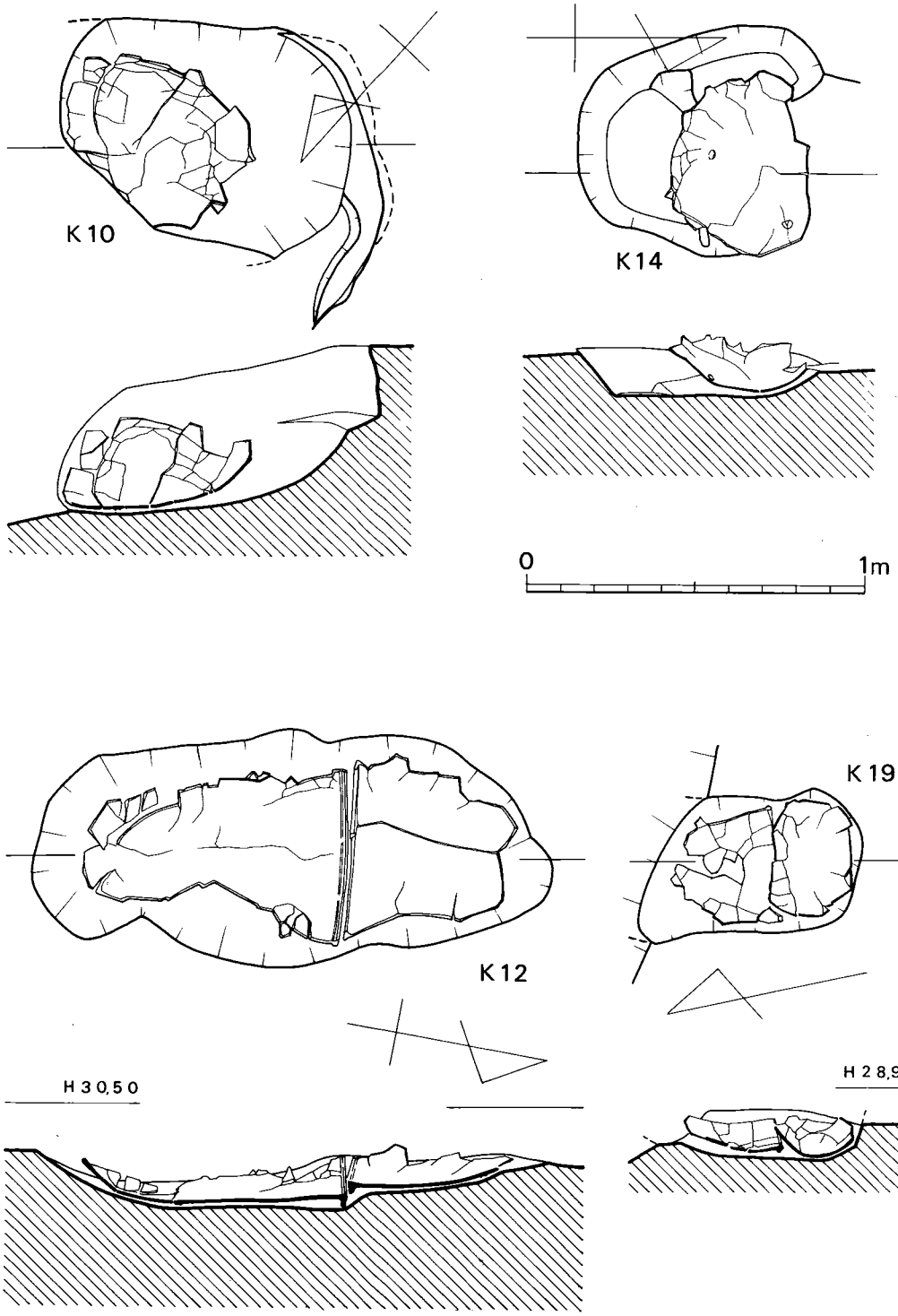


Fig. 17 甕棺墓実測図2（縮尺1/20）

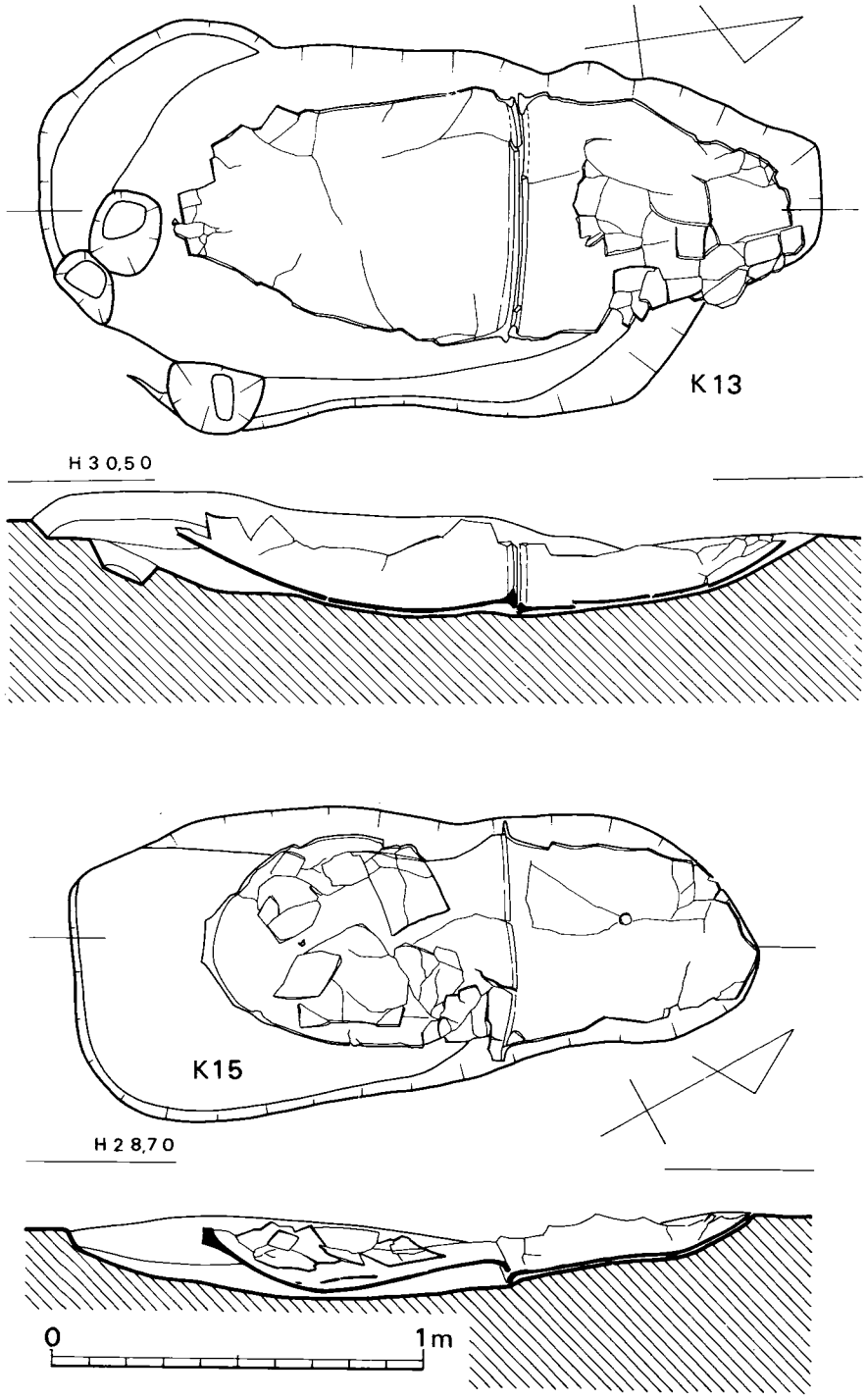


Fig. 18 甕棺墓実測図3（縮尺1/20）

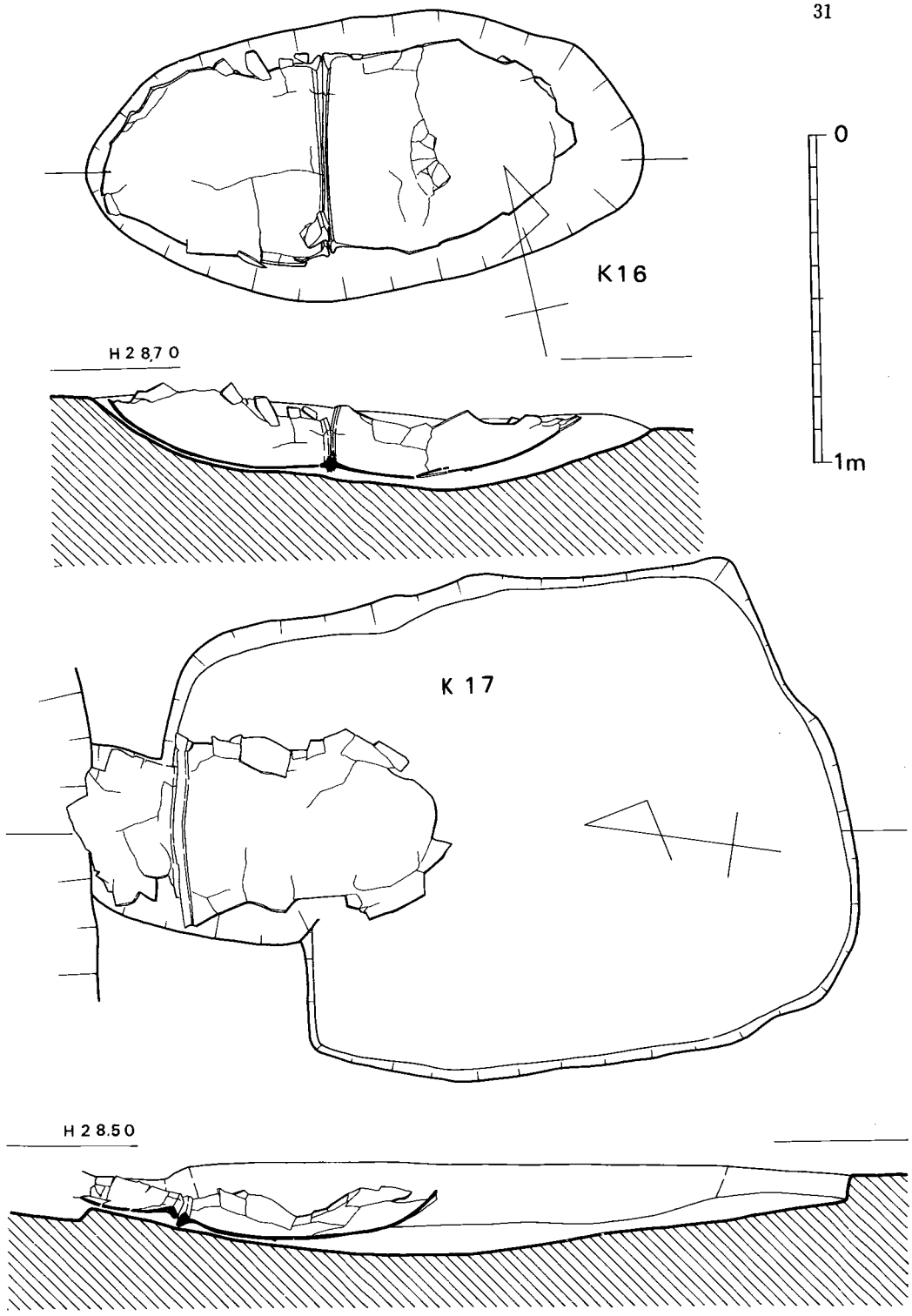


Fig. 19 甕棺墓実測図4 (縮尺1/20)

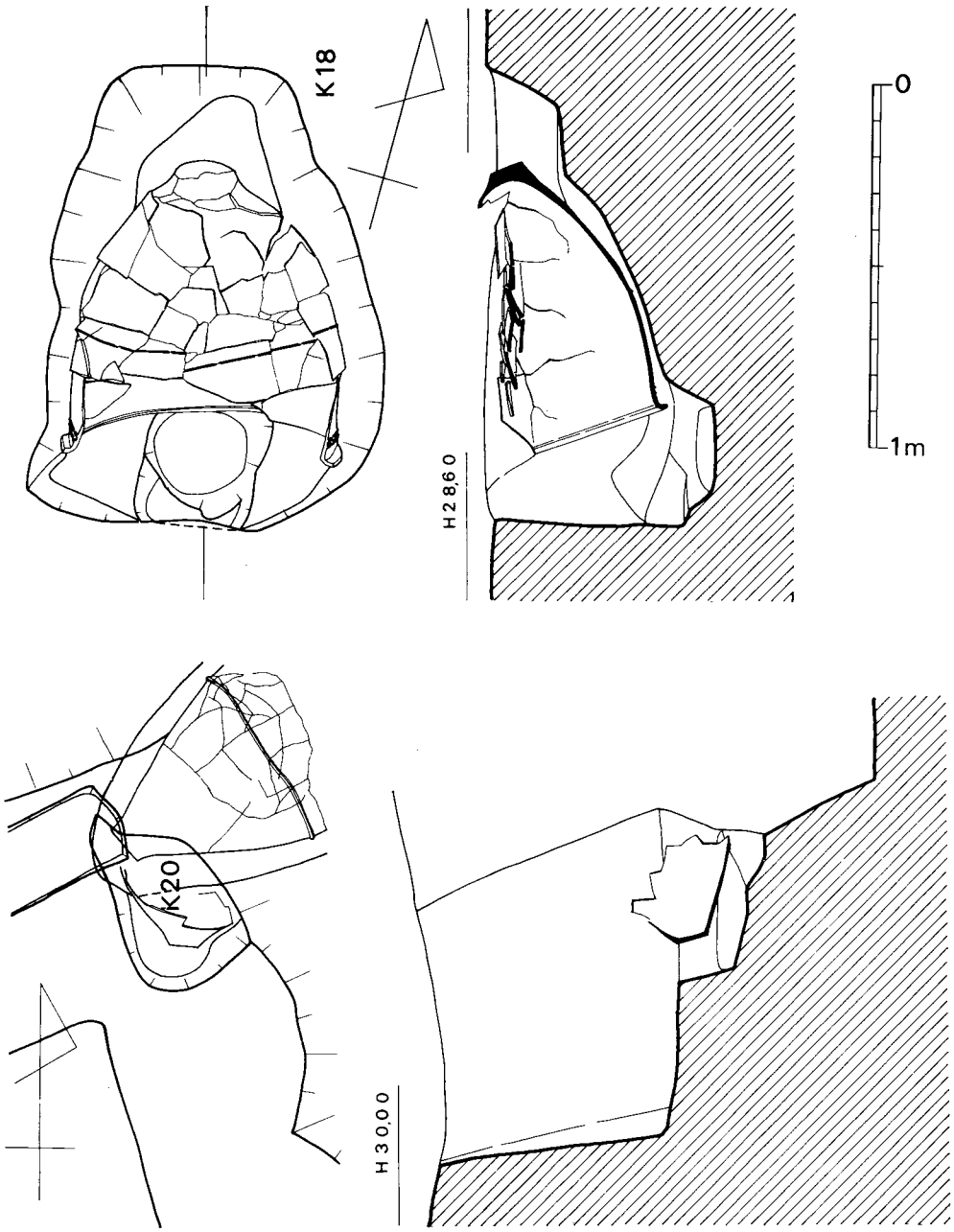


Fig. 20 甕棺墓実測図5（縮尺1/20）

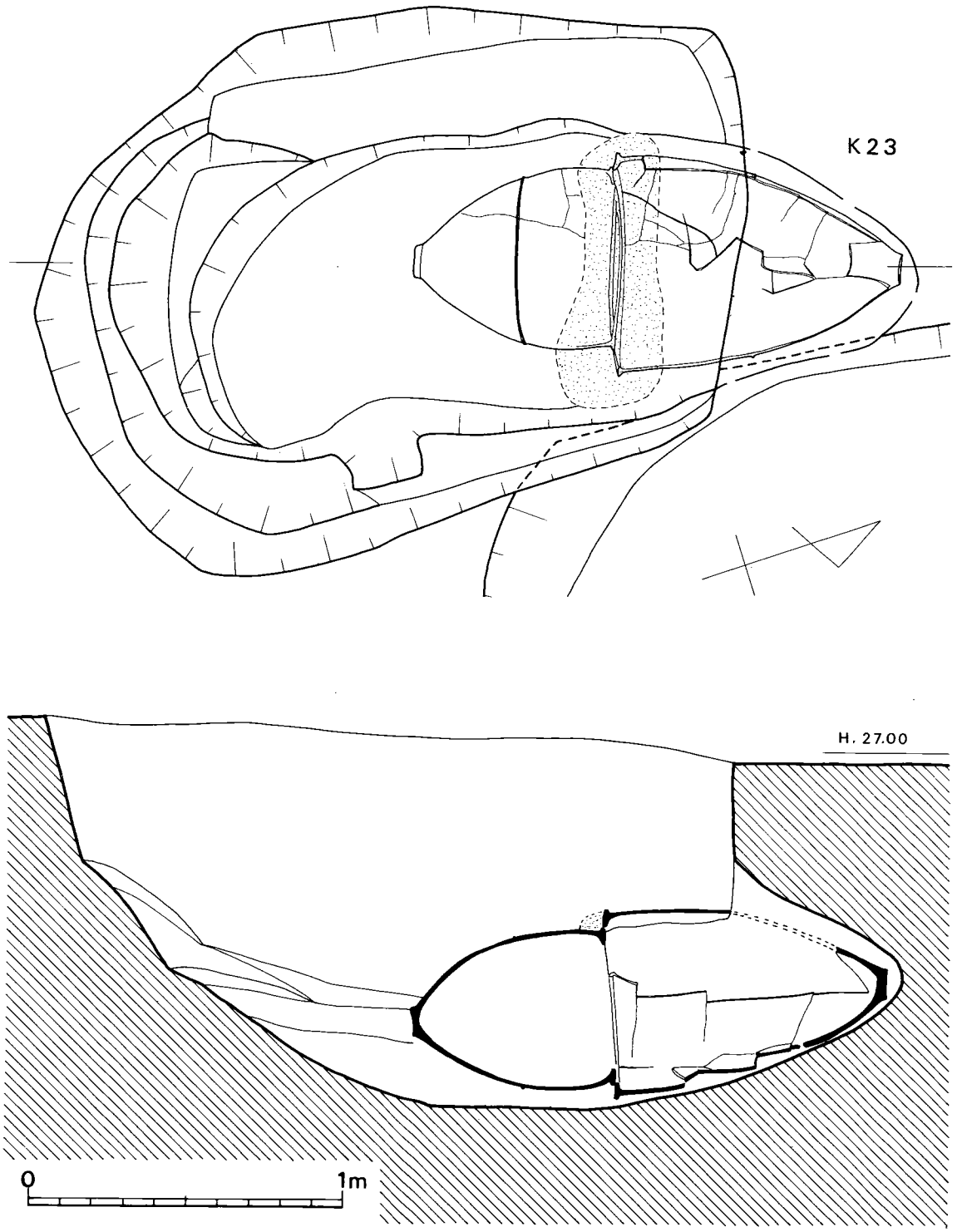


Fig. 21 甕棺墓実測図6（縮尺1/20）

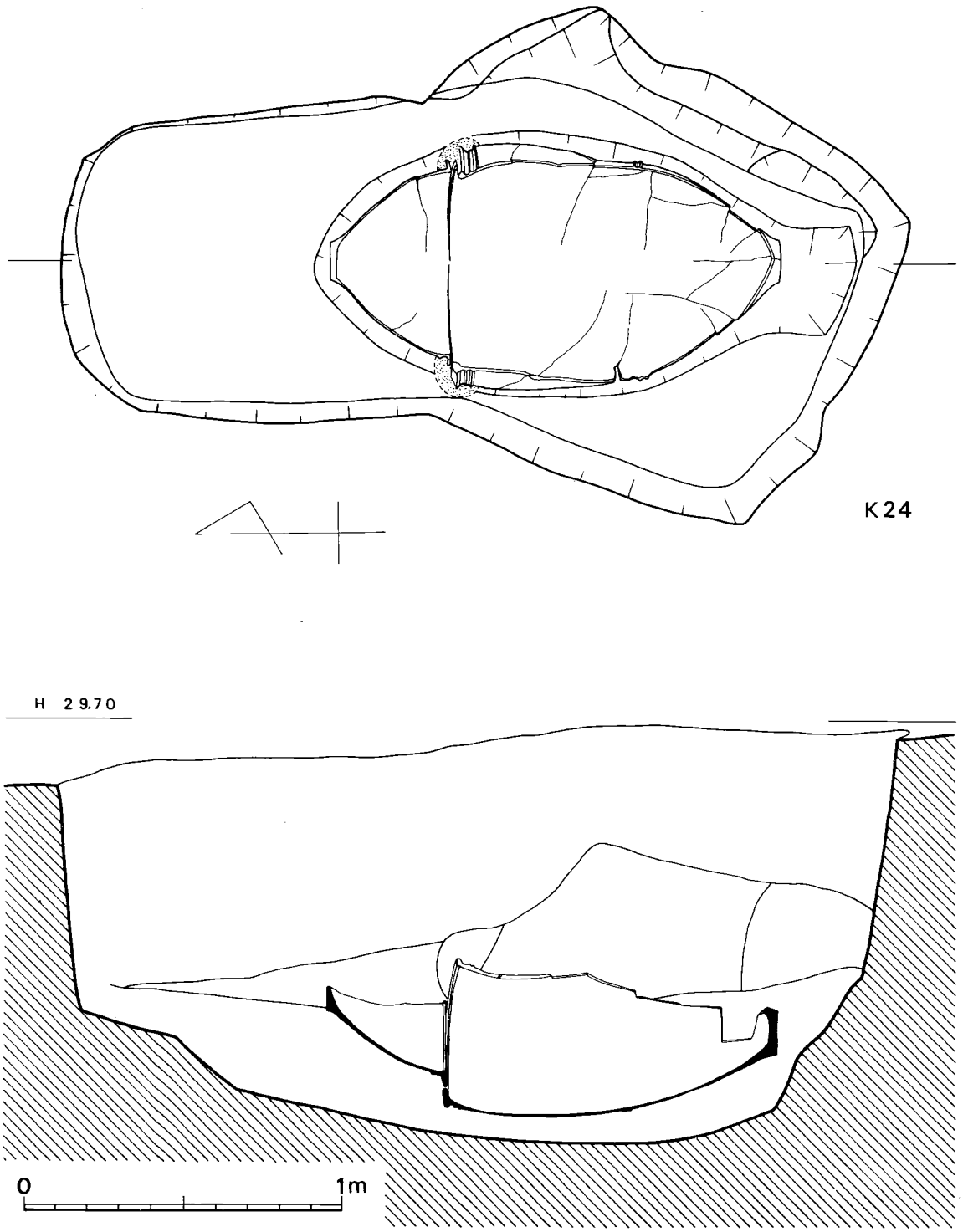


Fig. 22 甕棺墓実測図7（縮尺1/20）

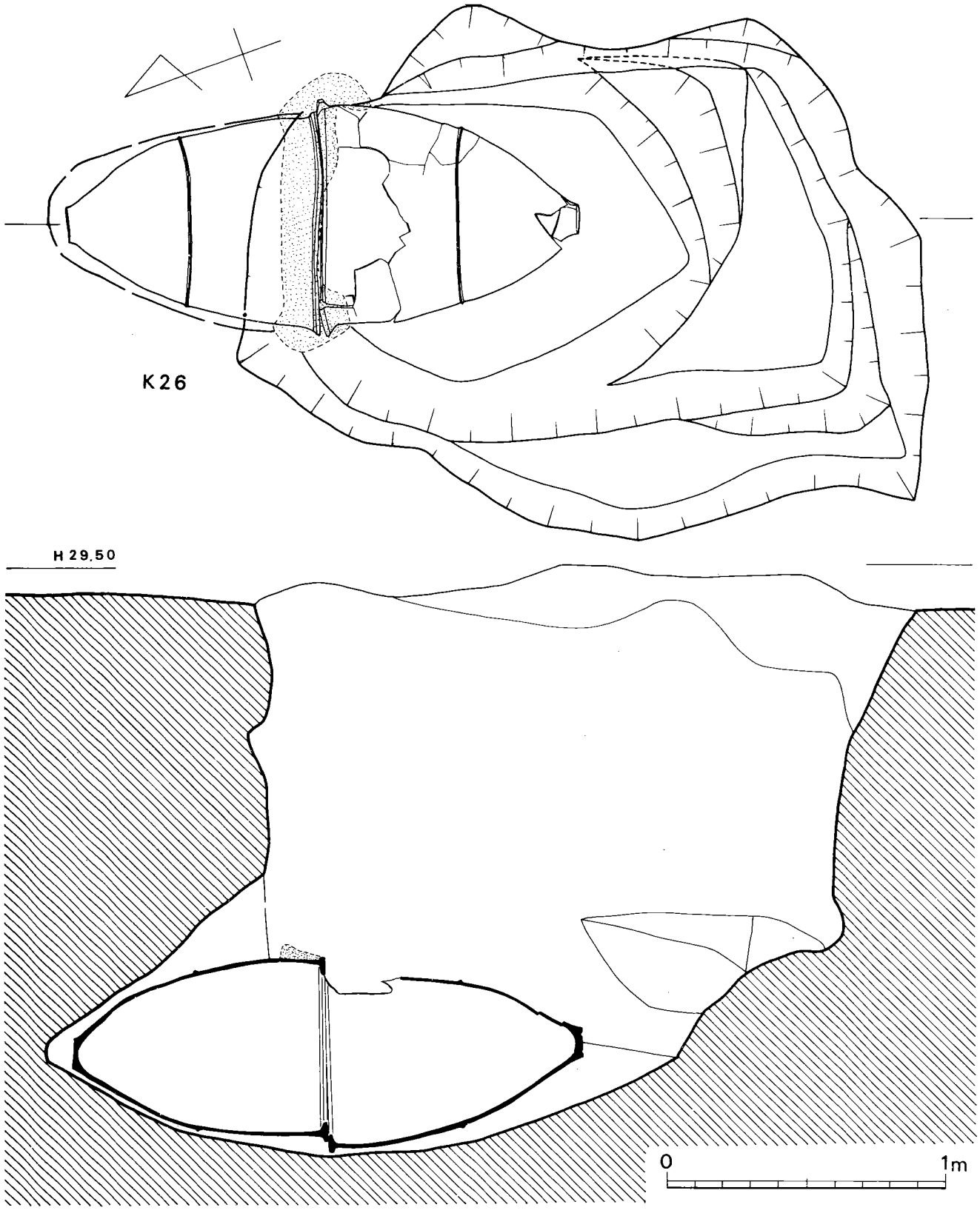


Fig. 23 甕棺墓実測図8（縮尺1/20）

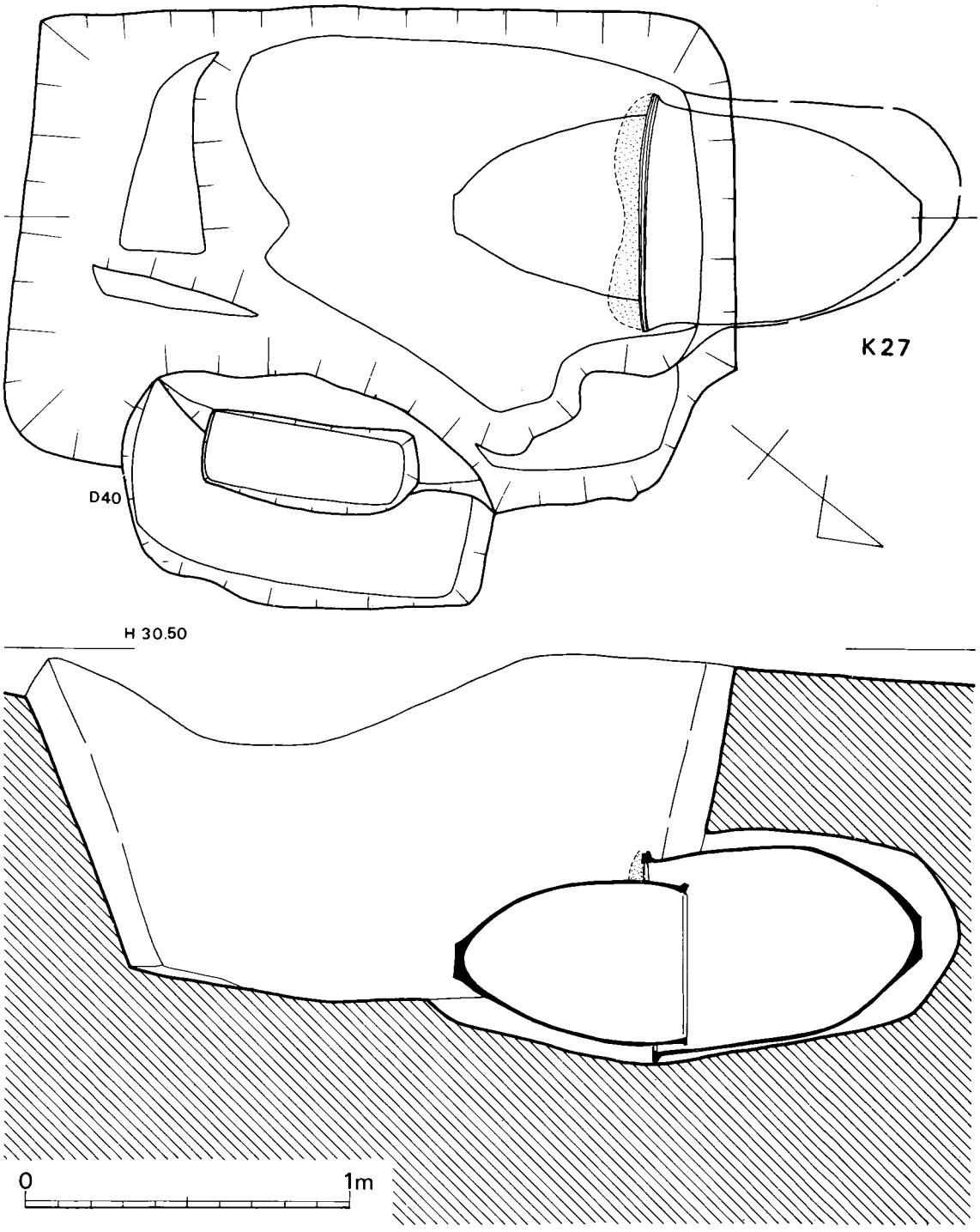


Fig. 24 甕棺墓実測図9（縮尺1/20）

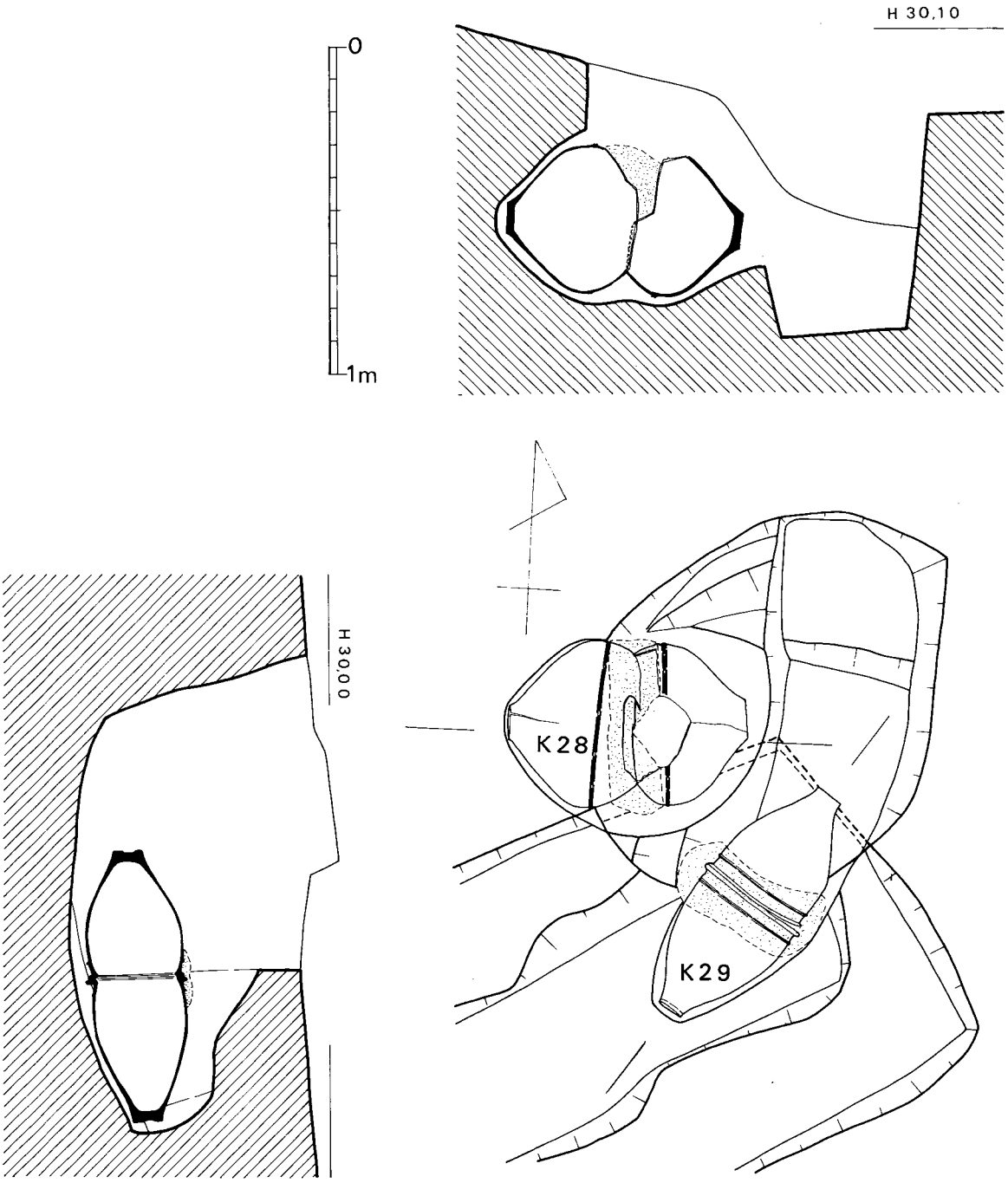
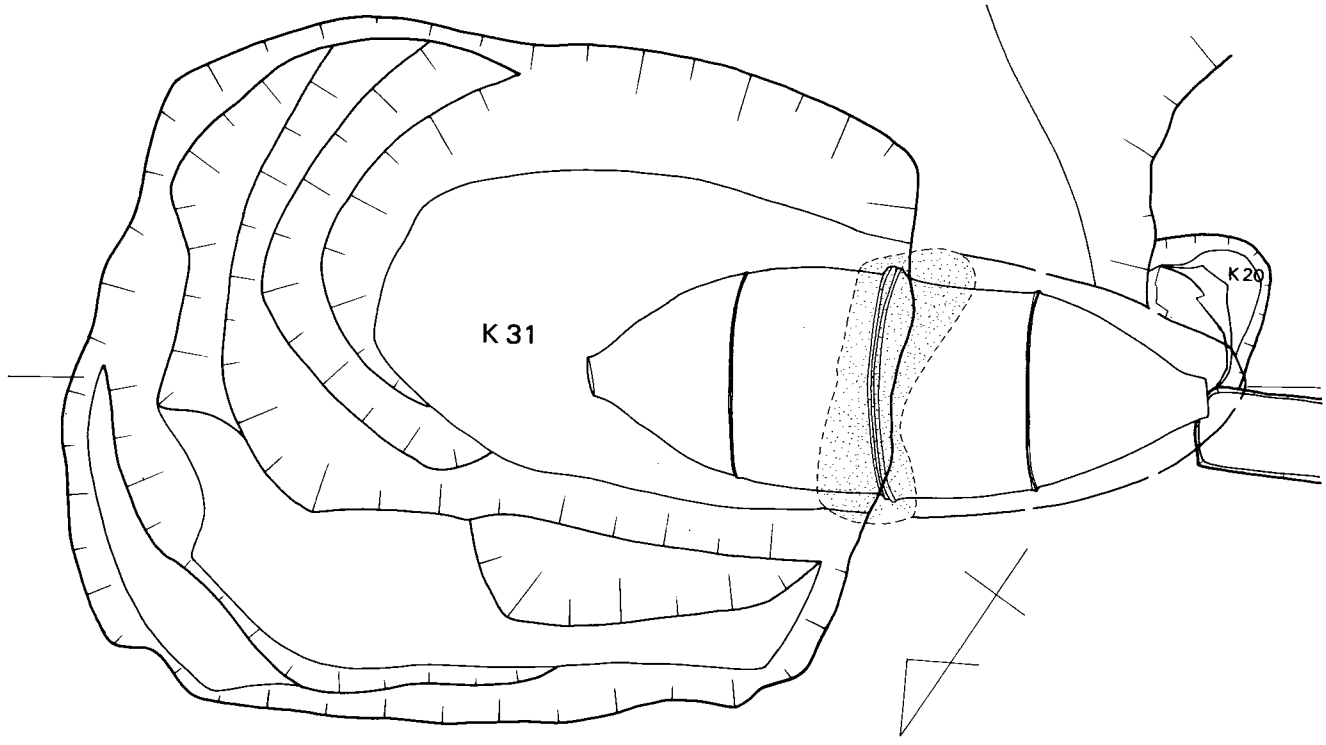


Fig. 25　甕棺墓実測図10（縮尺1/20）



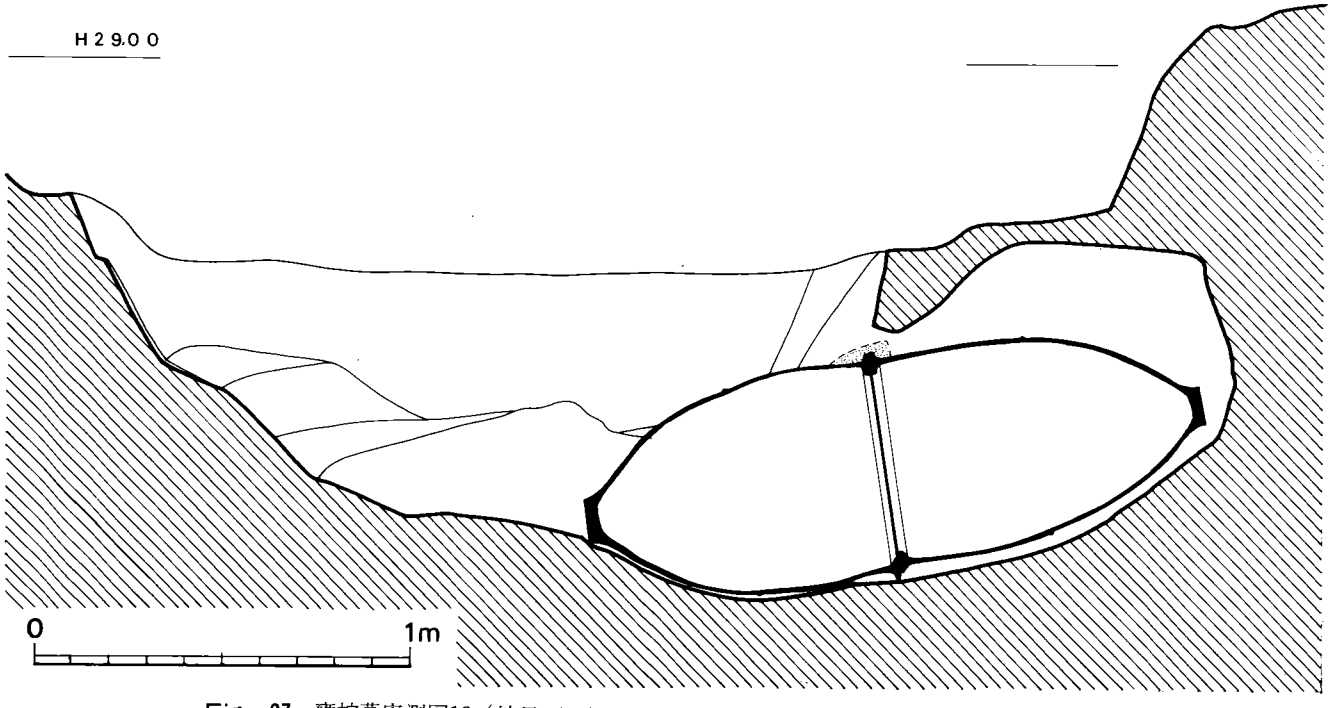


Fig. 27 甕棺墓実測図12（縮尺1/20）

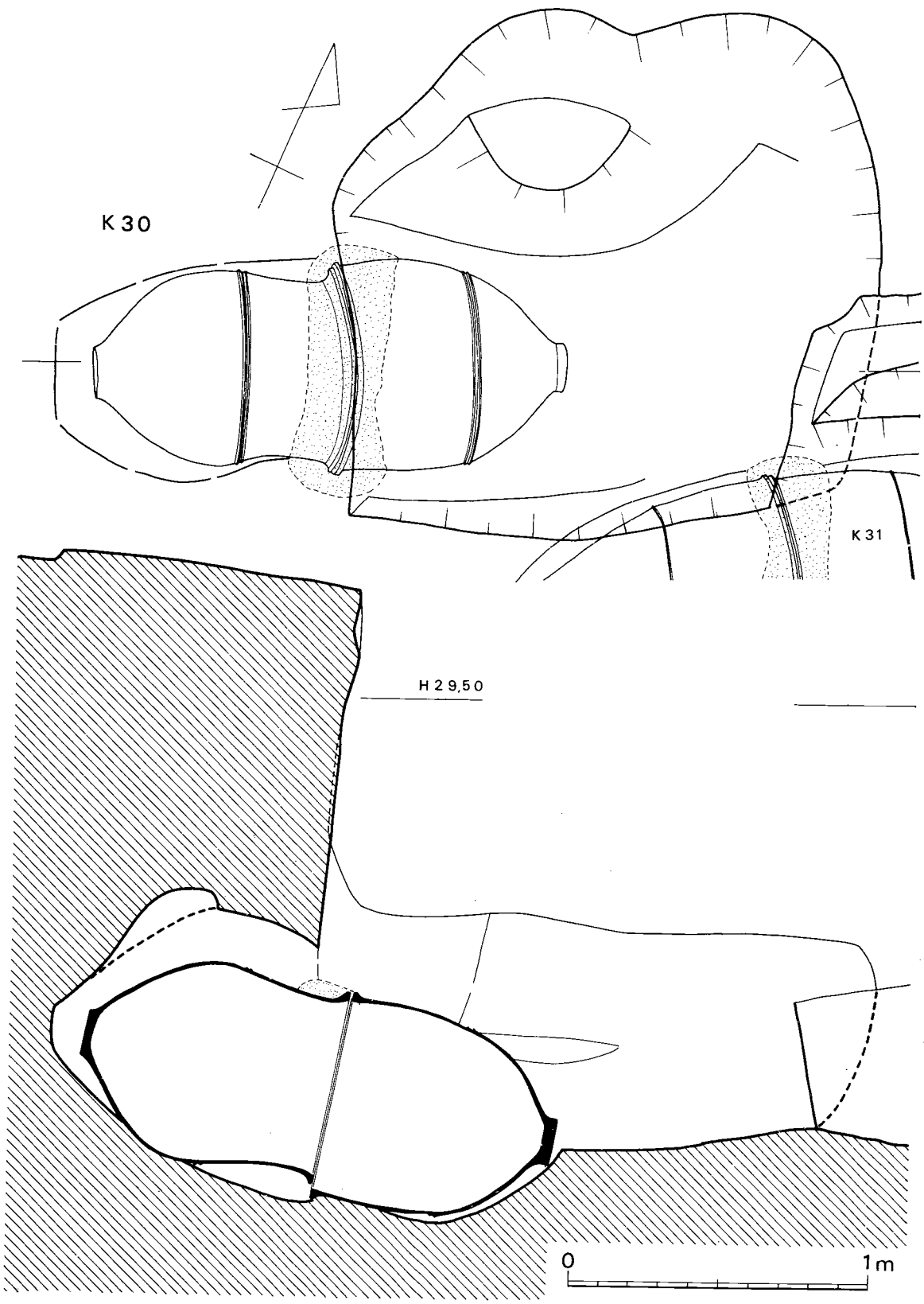


Fig. 26 甕棺墓実測図11（縮尺1/20）

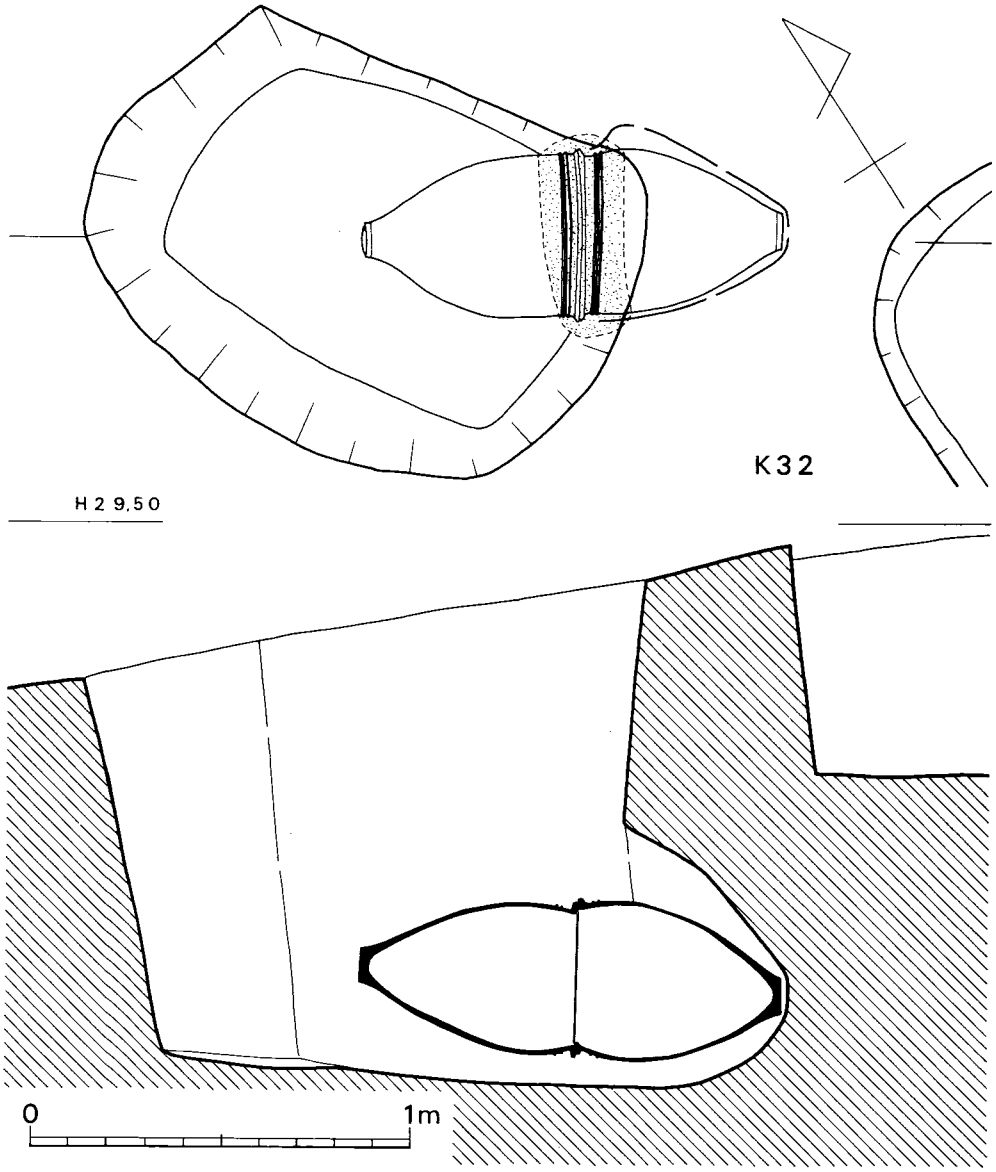


Fig. 28 甕棺墓実測図13（縮尺1/20）

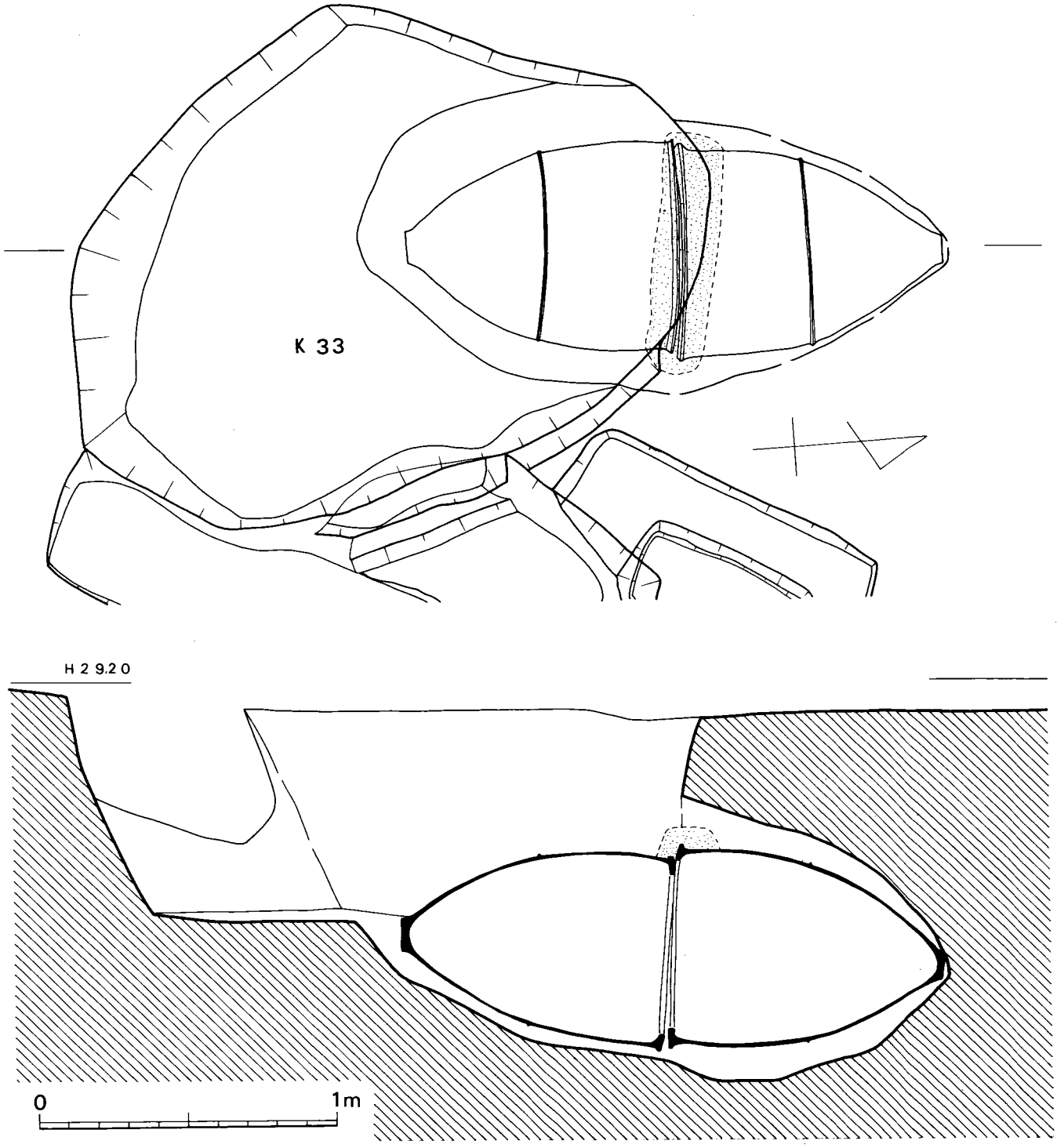


Fig. 29　甕棺墓実測図14（縮尺1/20）

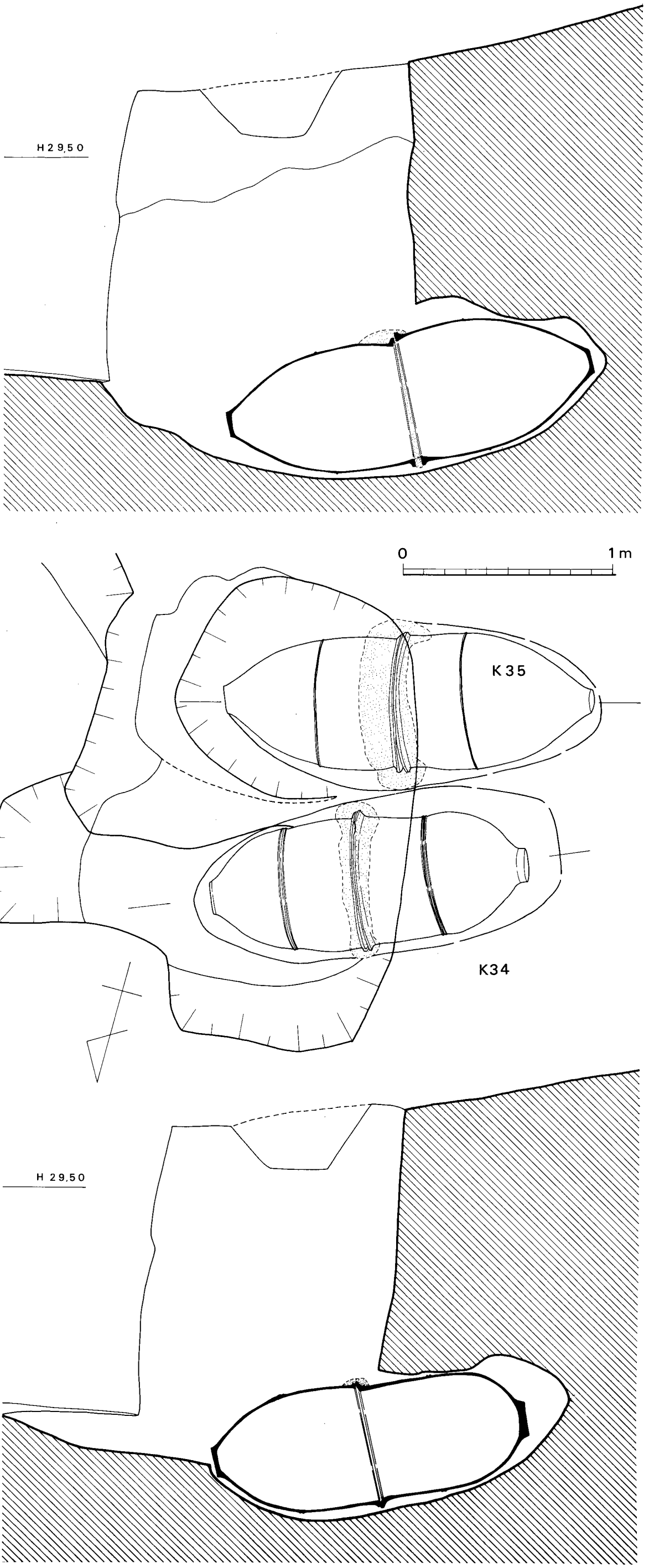


Fig. 31 甕棺墓実測図16（縮尺1/20）

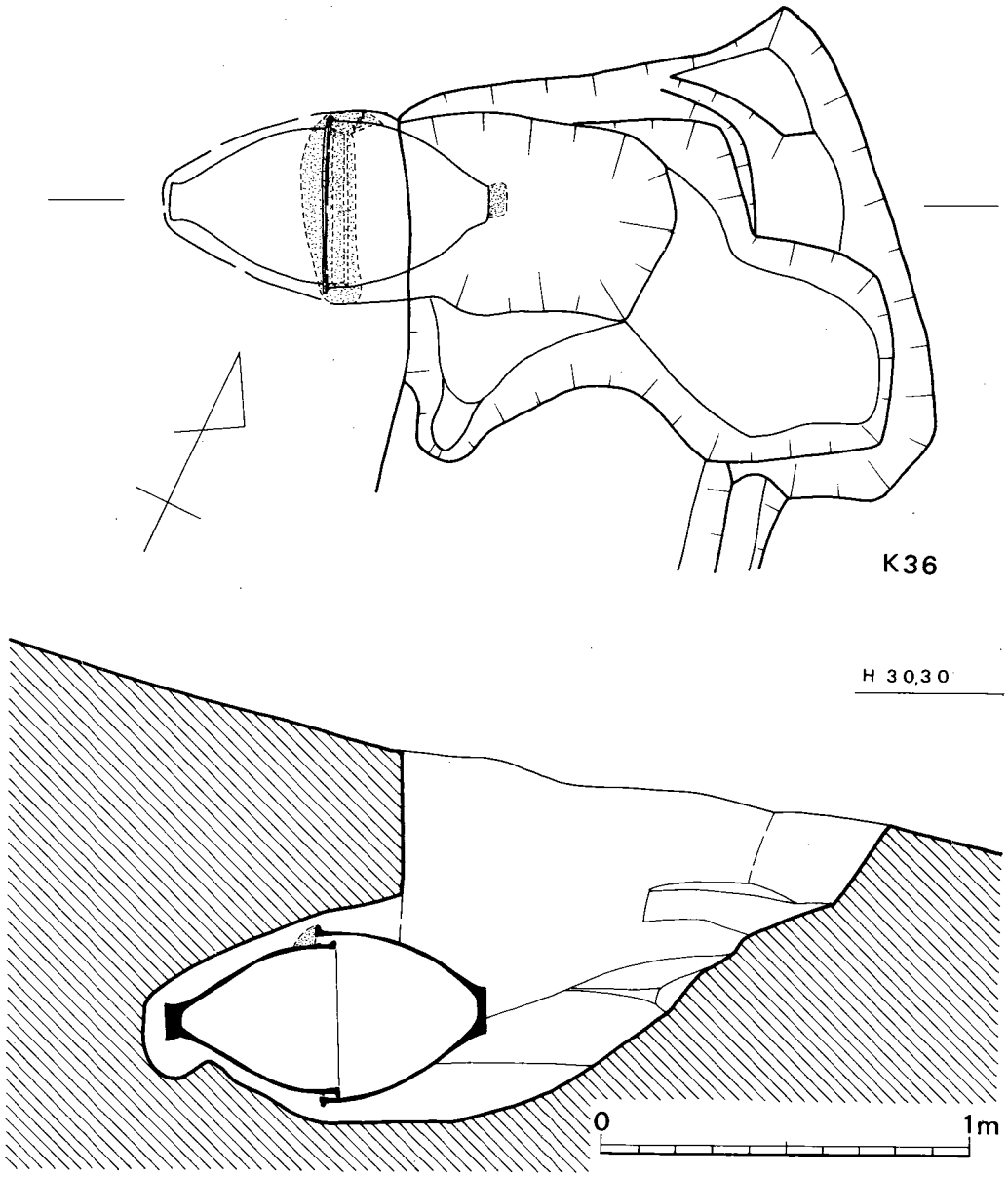
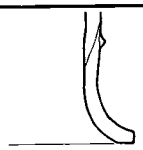
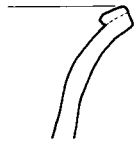
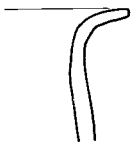
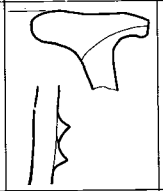
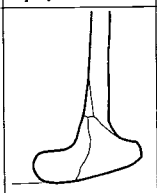
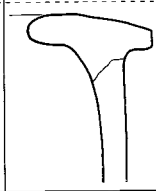
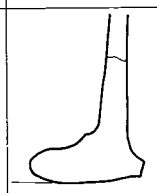
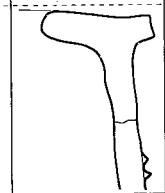
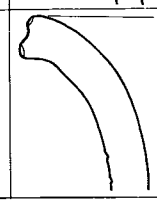
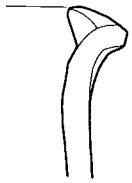
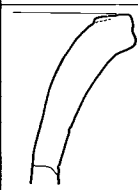
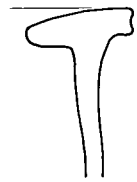


Fig. 30 甕棺墓実測図15（縮尺1/20）

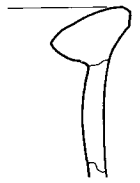
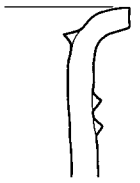
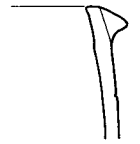
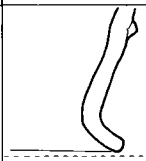
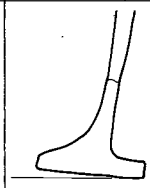
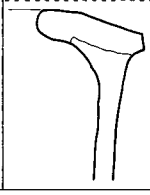
Tab. 4　北牟田甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
上	KIc 併行期		如意形口縁を呈し、口縁下には三角凸帯１条を貼付する。凸帯下にはハケ目の後施れた設計線と思われる沈線がある。器表は風化いちぢるしいが、凸帯下に残るハケ目から本来はハケ目調整であったと思われる。淡灰黄色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は軟質。	○日常容器の転用と思われる。
K１ 下	KIc 併行期		口縁内側に粘土帯を貼付し、頸・肩の接合部には三角凸帯１条をめぐらす。器表は風化いちぢるしく調整観察不能。頸部内面には指圧痕が認められる。淡赤褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は軟質で不良。器表の一部に黒色顔料の塗布が認められる。	○壺 ○胴下半に煤の付着が認められるので日常容器の転用と思われる。 ○黒塗りの痕跡あり。
K2	KIc 併行期		日常容器の大形壺を転用したものと思われる。器形はよく前期の特徴を示す。肩部に三角凸帯１条を貼付する。器表の風化はいちぢるしいが、口縁下の内外に部分的にハケ目がみられ、調整はハケ目→ナデと思われる。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質で不良。	○壺 ○日常容器の転用と思われる。
K4	KIIb		口縁は内外に発達し、やや外側に低く傾斜する。胴部凸帯は一見造り１条見かけ２条にみえるが、下の凸帯の上部に一部重ねて上の凸帯をつくる。この種は３遺跡でこれのみである。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ。器壁は11㎜前後でやや分厚い。色調は白味の濃い黄白色。胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。	
上 K5	KIIb		口縁は外に低く傾斜するが、胴上半はすぼまる。胴部凸帯は造り１条見かけ２条。内面の調整は擦過→ナデ。器表は化粧土→ナデ。器壁は10㎜前後でやや分厚い。内外ともに丹塗りの痕跡あり。器表の地肌は暗黄緑色、内面は黄褐色。胎土には砂粒多し。焼成は良。胴上半部に小黒斑あり。	○丹塗りの痕跡あり。 ○凸帯上方の化粧土下に布が封じ込められている。ナデに使用したものか。
下	KIIb		口縁は外に低く傾斜するが、胴上半はすぼまる。胴部凸帯は造り１条見かけ２条。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。器表はやや明るい黄褐色を呈し、内面はやや白っぽい。胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり良好。底部近くから凸帯上部にかけて黒斑あり。	
上 K6	KIIb		口縁はわずかに外に低く傾斜し、内側に大きく発達する。胴上半はすぼまる。胴部には三角凸帯１条。底部はわずかに上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は黄ナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり良好。胴下半に黒斑あり。口縁内側から器表の全面に黒色顔料塗布の痕跡あり。	○口縁内側から器表全面に黒塗りの痕跡。
下	KIIb		口縁は内側に発達し、わずかに外に低い。口縁下に細い三角凸帯２条を貼付し、山形凸帯にみせる。胴部は三角凸帯２条で、上方の凸帯下に設計沈線あり。器壁は５～６㎜ときわめて薄い。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。内面上部に黒斑。	○口縁内側から器表全面に黒塗りの痕跡。
K7 上	KIc		口縁は外反し、口縁端の上下に刻目を付す。口縁下に３条の沈線、胴のほぼ中位に三角凸帯１条。底部は上げ底。器壁はかなり分厚く、13㎜平均である。内面の調整は擦過→ナデ（一見ミガキ風にみえる）。器表はハケ→ナデ。口縁内部から口唇部及び凸帯部は横ナデ。暗茶褐色。胎土には砂粒を含む。焼成は軟質。胴中央に黒斑。	○内外ともに黒塗りの痕跡。

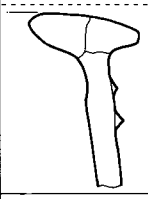
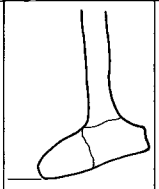
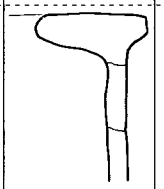
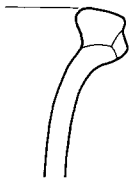
Tab. 4　北牟田甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
K10	KIIa		KIc的な口縁形態を示すが、全体の器形、造り１条見かけ２条の胴部凸帯、口縁に刻目がないこと等、KIIa式に古い要素が残ったもので、筑後北部・肥前に若干見られるものである。内面の調整は擦過→ナデ、器表はハケ目→ナデ、凸帯には斜方向のハケ目がある。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質で不良。	○地方色
上 K11	KIIa		口縁はあまり発達せず、わずかに内に低く傾斜する。胴部には三角凸帯１条。内面の調整は丁寧なナデ、口縁・凸帯部は横ナデ、器表は風化いちぢるしく観察不能。暗茶色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質である。	
下 K11	KIIa		口縁は17㎜内に低く傾斜し、あまり発達していない。胴部には三角凸帯１条。凸帯下には設計沈線が施される。内面の調整はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ、器表は風化いちぢるしく観察不能。暗茶褐色を呈し、胎土には少量の砂粒を含む。焼成は硬く、良好。	
K12	KIIa		口縁はあまり発達せず、わずかに外に低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴部には造り１条見かけ２条の凸帯を貼付する。調整はナデ。黄褐色を呈す。胎土には砂粒をほとんど混ぜず、焼成は軟質で不良。口縁部及び口縁下に黒塗りの痕跡が認められる。	○口縁部・口縁下に黒塗りの痕跡
K13	KIIa		口縁は内に低く傾斜し、胴上半はすぼまる。胴部凸帯は造り１条見かけ２条。器壁は14㎜でかなり分厚い。内面の調整は擦過→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ、器表はナデ、口縁裏面には指圧痕あり。明黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質で不良。内外ともに黒色顔料塗布の痕跡あり。	○内外ともに黒塗りの痕跡あり。
K15	KIc		口縁端内側に粘土帯を貼付し、平坦面をつくる。頸部はすぼまり、壺の感じをよく残す。口縁下に２条、肩部に２条沈線をめぐらす。器壁は16㎜とかなり分厚い。口縁部は横ナデ、器表はナデ。淡黄橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は軟質で不良。器表には黒塗りの痕跡あり。	○器表には黒塗りの痕跡
北 K16	KIIb		口縁は内側に発達し、内に低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴部中位に三角凸帯１条をめぐらす。凸帯下には設計沈線あり。内面の調整は擦過→ナデ、口縁・凸帯部はナデ、器表はナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は軟質で不良。	
南 K16	KIIb		胴部凸帯が２条という点を除けば、器形の諸特徴は北甕に同じ。K16の口縁の傾斜はKIIa式に近いが、内側に大きく発達すること、凸帯の位置が胴中位にあること等の理由からKIIb式とした。内面の調整は擦過→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ、器表はナデ。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。	

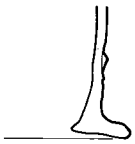
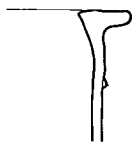
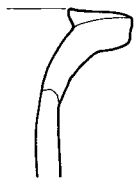
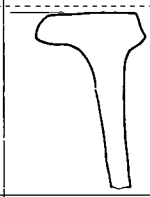
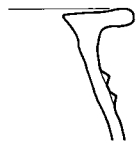
Tab. 4　北牟田甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
K17 上	KIIa		口縁はあまり発達せず、内に20㎜低く傾斜する。胴上半はすぼまる。胴部のやや上位に三角凸帯１条。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質であまりよくない。	
K18	KIIa		口縁内側に三角凸帯を貼付する。胴上半はややすぼまる。口縁下に２条、胴部に１条の三角凸帯。胴部凸帯下には設計沈線あり。器壁は10㎜前後でやや分厚い。内面の調整は擦過→ナデ。器表はハケ目（６段階）、口縁・凸帯部はハケ目をナデ消す。胴中央部に黒斑、その内面の胴上半にはさらに大きな黒斑あり。	○地方色
K19 上	KIIa 併行期		口縁部・底部を欠失し、胴部のみの残欠なので、諸特徴の観察不能。	○壺 ○日常容器の転用であろう。
K19 下	KIIa 併行期		口縁は三角口縁、刻目なし。口縁下には１条の沈線あり。内面の調整は口縁下を指おさえ、その下は指おさえ→ナデ、それより下は擦過→ナデ、器表は化粧土→細いハケ目。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。胴部には煤付着。	○胴部に煤が付着しているので、日常容器を転用したものと思われる。
K20	KIIb 併行期		胴部上半より上を欠失する。胴中央には山形凸帯１条を貼付する。底部はわずかに上げ底を呈す。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、凸帯部は横ナデ。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。底部に小黒斑あり。内外ともに黒塗りの痕跡あり。	○壺 ○内外ともに黒塗りの痕跡。 ○日常容器の転用であろう。
K22 上	KIIa 併行期		如意形口線を呈し、上半部でかなり胴が張る。口縁下に三角凸帯１条。内面の調整は口縁部が指おさえ→ハケ、その下が指おさえ→ナデ、下半は擦過→ナデ、器表は風化著しいが、底部にハケ目が残るのでハケ目と思われる。茶黄色、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質。	○胴下半部に煤が付着しており、日常容器を転用したものと思われる。
K22 下	KIc 併行期		頸部より上を欠失。肩部には三角凸帯２条。胴部はやや扁球形。底部は上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表はヘラミガキ、凸帯部は横ナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。器表は一部に丹塗りの痕跡、その上を内外ともに黒塗りの痕跡。	○壺 ○本来丹塗り土器。 ○その上を内外ともに黒塗り。 ○日常容器の転用であろう。
K23 上	KIIb		口縁は内外ともに発達し、やや内に低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴中央部に三角凸帯１条。底部は上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。暗黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。口縁下の内外・器表の各所に黒塗りの痕跡が認められる。	○黒塗りの痕跡あり。
K23 下	KIIc		口縁は内側に大きく発達し、外に低く傾斜する。胴上半はやや外方に開く。胴中央に三角凸帯１条。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。赤褐色を呈するいわゆる赤焼土器である。胎土には砂粒を含む。焼成は軟質。底部および内面胴中央部に黒斑あり。	

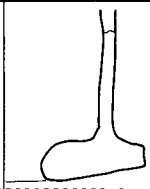
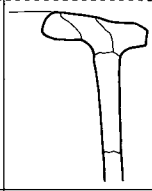
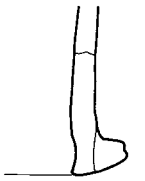
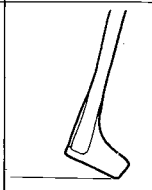
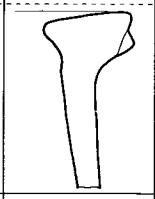
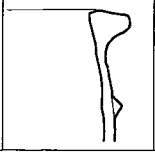
Tab. 4　北牟田甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
上 K24	KⅢa		口縁はほぼ平坦で、外側にやや発達している。口縁下は２条の三角凸帯をめぐらす。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部及び底部は横ナデ。口縁下には指圧痕あり。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質。	○鉢
下	KⅢa		外に低く傾斜するＴ字口縁。口縁下には三角凸帯２条、胴部にも三角凸帯２条。胴上半はややすぼまる。器壁は８～12㎜とやや分厚い。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。底部より胴上部にかけて大黒斑あり。	
上 K26	KⅡc		口縁は内側に大きく発達し、外に低く傾斜する。胴上半はやや外方に開く。胴部のやや下位に三角凸帯１条。底部は上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表はハケ→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。暗黄褐色を呈するが、口縁から約20㎝の部分が幅約50㎝で一部赤褐色（赤焼）を呈す。胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。	○口縁部に黒塗りの痕跡。 ○口縁から約20㎝の部分に幅約50㎝程の粘土のつぎたし部あり。
下	KⅡc		口縁は内側に大きく発達し、外に低く傾斜する。胴上半はわずかに外方に開き、胴部のやや下位に三角凸帯１条を貼付する。底部はわずかに上げ底。内外ともにナデ調整、口縁・凸帯部は横ナデ。赤味を帯びた黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良。口縁部及び胴中央部の内面に黒斑あり。	
上 K27	KⅡa 併行期		口縁は内に低く傾斜する。凸帯なし。底部は上げ底。内面の調整は⅓上半部を指おさえ→細いハケ→ナデ、⅔下半を擦過→ナデ、つぎ目には指圧痕がよく残る。器表はハケ目（５段階）で、口縁端には指圧痕が残る。器表にはつぎ目がよくわかる部分あり。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成軟質。黒斑は両側にあり。	○日常容器の転用と思われる。
下	KⅡa 併行期		口縁はKIc式の要素を残す。凸帯なし、底部は安定が悪いため一部に粘土を貼り、安定をよくする。内面口縁下は粗いハケ→ナデ、他は擦過→ナデ、底部近くに長８㎝、３本単位で沈線状の痕跡あり（工具痕か）。器表は粗いハケ目（４段階）。底部は下→上、口縁下は上→下。暗黄色。胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。	○底部に安定をよくするための粘土の貼付けがあり、日常容器の転用と思われる。
上 K28	KⅡc 併行期		胴上半部から上を打ち欠。胴部凸帯は造り１条見かけ２条。底部はわずかに上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表はヘラミガキと思われる、凸帯部は横ナデ。暗茶褐色を呈し、胎土には小砂粒を多く含む。焼成はやや軟質。	○壺
下	KⅡc 併行期		胴部上半より上を打ち欠。胴部凸帯は山形凸帯。凸帯下には２条の設計沈線が施されるが、部分的には１条のところもある。底部は上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表はハケ→ヘラミガキ、凸帯部は横ナデ。茶褐色を呈し、胎土には小砂粒を含む。焼成は硬く良好。	○壺 ○器表は黒塗りの痕跡あり、とくに上甕の覆った部分は明瞭。

Tab. 4　北牟田甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
上 K29	KIIc 併行期		やや内に低く傾斜する逆L字口縁。口縁下には沈線1条、三角凸帯1条。胴部最大径はやや上位にある。底部は上げ底。内面の調整は指おさえ→ナデ、器表はハケ目、口縁から凸帯部までは横ナデ。明るい茶黄色を呈し、胎土には大小の砂粒を含む。焼成はやや硬めで良。	○日常容器の転用と思われる。
下	KIIc 併行期		口縁はほぼ平坦な逆L字状。口縁下に三角凸帯1条。底部は上げ底。内面の調整はナデ、器表はハケ目、口縁から凸帯までは横ナデ。明るい茶褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成は硬く良好。	○日常容器の転用と思われる。
上 K30	KIIa		口縁はKIc 式的要素を残す。胴部凸帯は造り1条見かけ2条と思われる。器壁は10～11㎜とやや厚い。内面の調整は擦過→ナデ、器表はハケ目（5段階）、口縁・凸帯部は横ナデ。胴上半の中央付近は縦粘土板の接合の可能性あり。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴中央に黒斑、その内面にも小黒斑あり。	○地方色。 ○水ぬき孔あり（外→内へ） ○器表に丹塗りの痕跡あり。 ○内面は黒塗りの痕跡あり。
下	KIIa		器形はKIc式的要素を残す。口縁内側は粘土帯を貼付。頸部はすぼまり、胴部には三角凸帯2条。内外ともにハケ目→擦過→ナデで一見ミガキ風に見える。底部、内面の口縁下にはハケ目が残る。口縁・凸帯部は黄ナデ。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質なれど良。本来は丹塗り、その上を内外ともに黒塗り。	○地方色。 ○水ぬき孔あり（外→内へ） ○丹塗り土器の上を内外ともに黒塗り。
上 K31	KIIb		口縁部は内側に発達し、外に低く傾斜する。胴上半はほぼ直立する。胴部中位に三角凸帯1条。底部はわずかに上げ底。内面の調査は擦過→ナデ、器表は底部にハケ目が残るのでハケ→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。胴下半の内面に黒斑。口縁内側から器表にかけて黒塗りの痕跡、とくに口縁部がよく残る。	○口縁内側から器表にかけて黒塗りの痕跡あり。
下	KIIb		口縁は内側に発達し、ほぼ平坦。胴上半はすぼまり、胴部のほぼ中位に三角凸帯1条。内面の調整は擦過→ナデ、器表はハケ→ナデ（底部にハケ目が残る）、口縁・凸帯部は横ナデ。暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴下半及び胴中央部の内面に黒斑あり。口縁内側から器表にかけて黒塗りの痕跡。	○口縁内側から器表にかけて黒塗りの痕跡あり。
上 K32	KIIb 併行期		口縁は内に低く傾斜する逆L字状。口縁には三角凸帯2条。胴部最大径はかなり上位にある。底部は上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表はハケ目、口縁から凸帯までは横ナデ。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。	○日常容器の転用と思われる。
下	KIIb 併行期		口縁は内に低く傾斜する逆L字状。口縁下には三角凸帯2条。胴部最大径は胴上位にある。底部はややひきしまり、若干上げ底。内面の調整はナデ、器表はハケ目なるも剝落いちぢるしい。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。二次的火熱の痕跡あり。	○二次的火熱による赤変部があるので、日常容器の転用と思われる。

Tab. 4　北牟田甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
上 K33	KIIb		口縁は内側に発達し、外に低く傾斜する。胴上半はすぼまる。胴部のほぼ中位に三角凸帯１条。内面の調整は擦過⟶ナデ、器表は底部にハケ目が残存するのでハケ⟶ナデ。赤味を帯びた暗黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。凸帯上部から底部にかけて黒斑、反対側の胴上半に小黒斑あり。	○口縁部に黒塗りの痕跡がわずかに残る。
下	KIIb		口縁は内側に発達し、外に低く傾斜する。ほぼ胴中位に三角凸帯１条。内面は擦過⟶ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。暗黄橙色を呈し、胎土には小砂粒を含む。焼成はやや軟質。凸帯上下及び胴下半に上黒斑、胴上半の内面に大黒斑あり。口縁部にわずかに黒塗りの痕跡が残る。	○口縁部に黒塗りの痕跡がわずかに残る。
上 K34	KIIa		口縁は外側に粘土帯を貼付した三角口縁の変形。胴部には三角凸帯２条。底部は若干上げ底。内面の調整は擦過⟶ナデ（一見ミガキ風）、長約40*mm*の工具痕と思われる痕跡あり、器表は５段階の粗いハケ⟶ナデであるがハケ目はよく残る。内面の工具痕と同様のものが見られるが長さが異る。暗黄色・砂粒を含む。焼成は軟質。	○地方色 ○口縁下より凸帯下位及び反対側には細長い黒斑。 ○内外ともに黒塗り、とくに内にはよく残る。
下	KIIa		口縁は外反し、内側には三角凸帯を貼付する。胴部凸帯は造り１条見かけ２条。底部は大きく分厚くＫＩ期の要素を残す。内面の調整は擦過⟶ナデ（一見ミガキ風）、器表はハケ⟶ナデ（底部にハケ目が残る）。器壁は８～10*mm*とやや厚い。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成良。凸帯上部から底部近くにかけ黒斑。	○地方色 ○水ぬき孔あり（外→内へ） ○内面黒塗りの痕跡あり。又、頭部があったと思われる部分に赤色顔料付着。
上 K35	KIIa		口縁は内に低く傾斜する逆Ｌ字状。胴上半はすぼまり、胴部には三角凸帯１条。内面の調整は擦過⟶ナデ、器表は風化いちぢるしく不明。黄褐色を呈し、胎土には少黒の砂粒を含む。焼成不良。	
下	KIIa		口縁は内に低く傾斜し、胴上半はすぼまる。胴上位に三角凸帯１条。底部はわずかに上げ底。内面の調整は擦過⟶ナデ、器表はハケ⟶ナデ、胴下半はハケ目がよく残る。赤褐色を呈し（赤焼土器）、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質、胴下半に小さな黒斑あり。内外ともに黒塗りの痕跡あり。	○内外ともに黒塗りの痕跡あり。
上 K36	KIIa 併行期		口縁はあまり発達していない逆Ｌ字状。凸帯なし。底部は上げ底。内面の接合部付近にはよく指圧痕が残る。その上をナデ、口縁下は指おさえ⟶ミガキ。器表はハケ目、口縁には指圧痕が残る。暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。焼成はやや軟質。	○鉢。 ○日常容器の転用と思われる。
下	KIIa 併行期		口縁は三角口縁。口縁下には三角凸帯１条。底部は細くひきしまり、上げ底。内面の調整は口縁下を指おさえ⟶擦過、他は擦過、器表はハケ目、口縁・凸帯部は横ナデ。明るい黄褐色を呈し、胎土には小砂粒を少量含む。焼成はやや硬く良。胴部には煤が付着する。	○胴部にススが付着するので日常容器の転用と思われる。

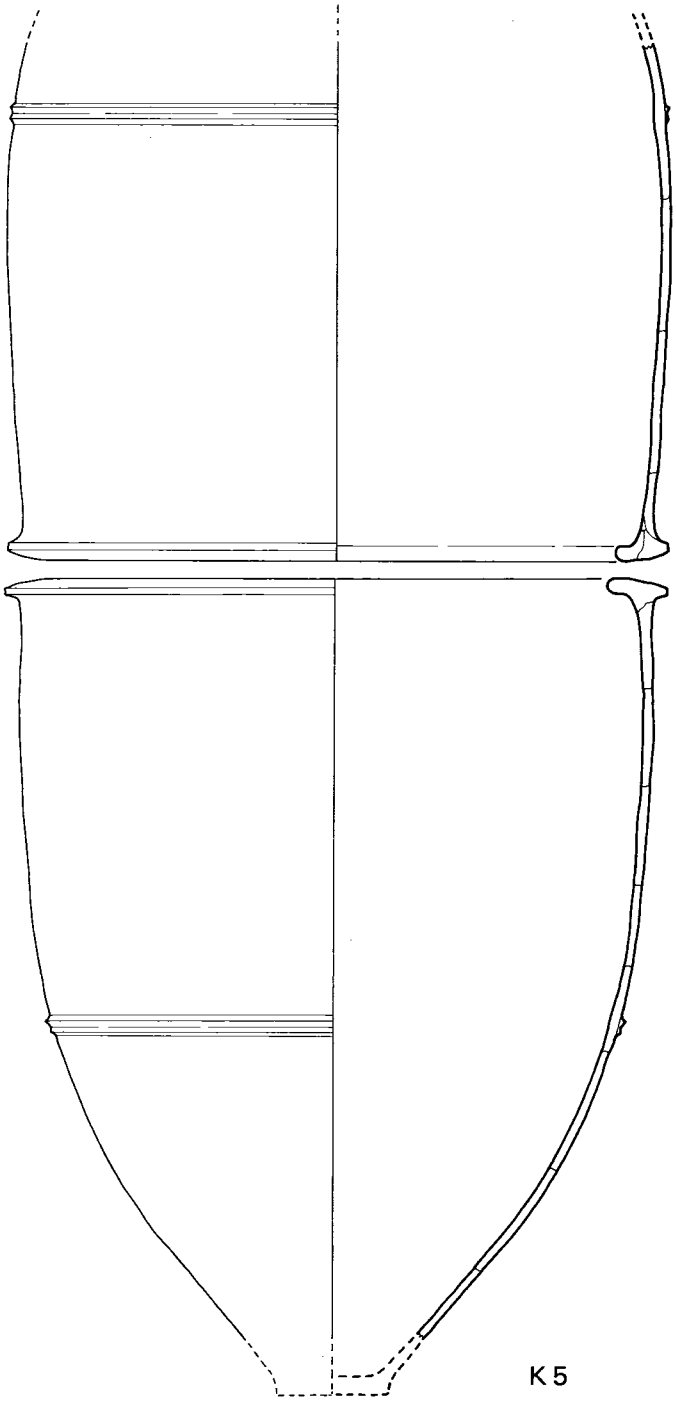
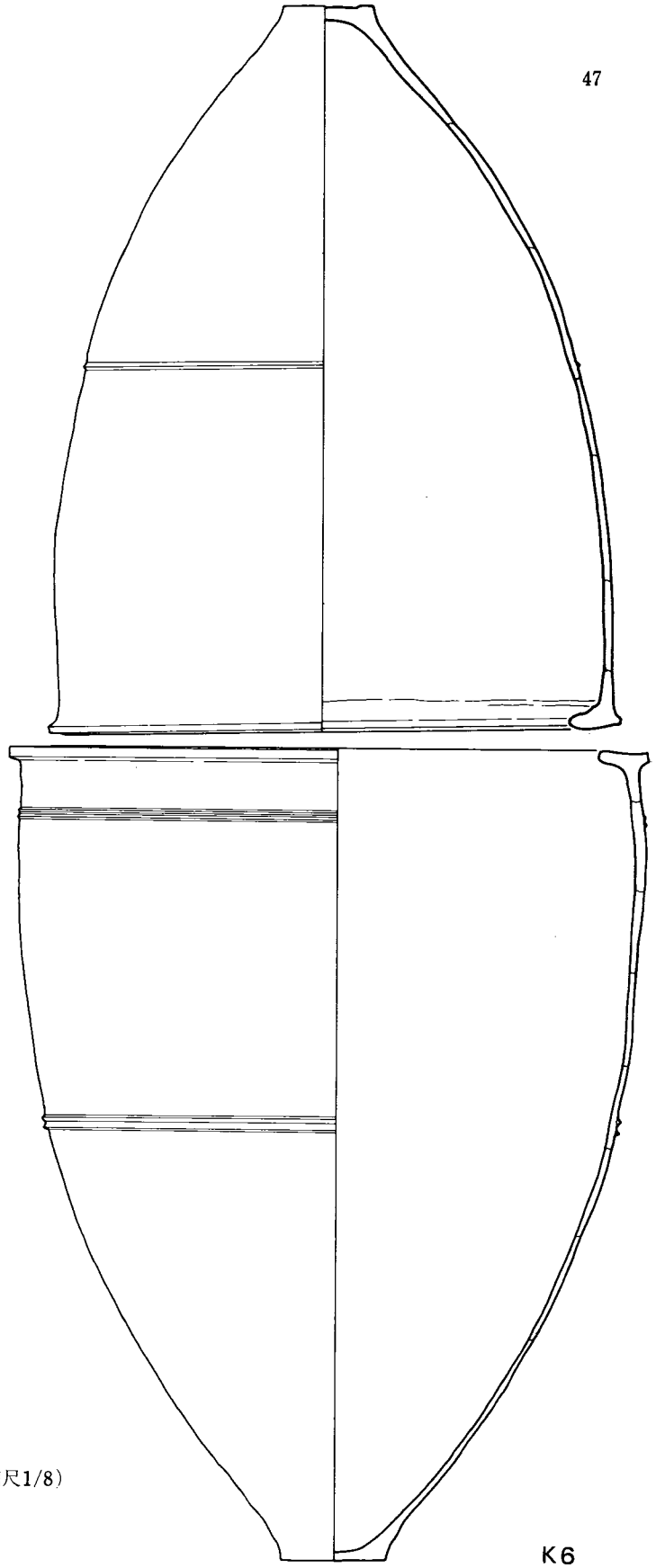


Fig. 32 甕棺墓実測図1（縮尺1/8）

北牟田　K６　上

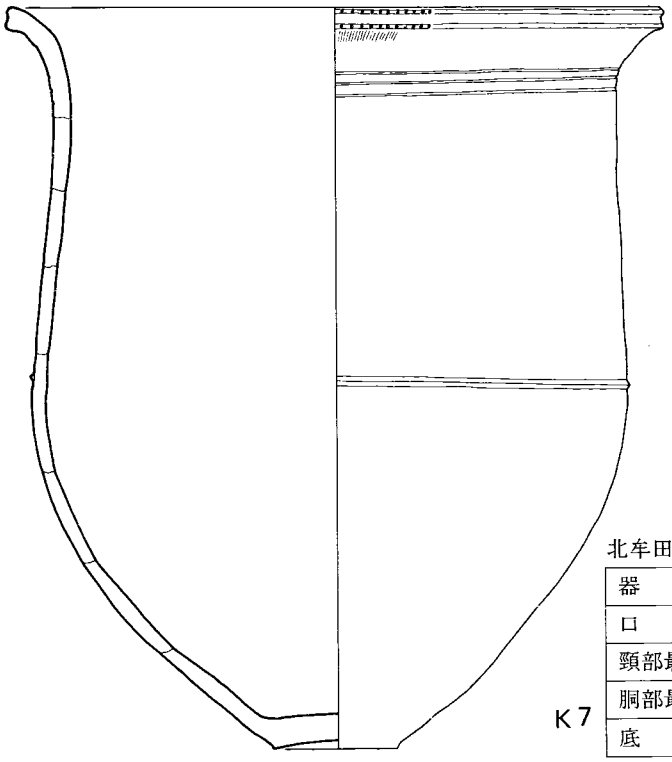
器高	85.4cm
口径	66.5cm
口縁内径	54.8cm
胴部最大径	
底径	10.6cm



北牟田　K６　下

器高	95.4cm
口径	74.4cm
口縁内径	62.5cm
胴部最大径	
底径	12.1cm

Fig. 33　甕棺実測図２（縮尺1/8）



北牟田　K７　上

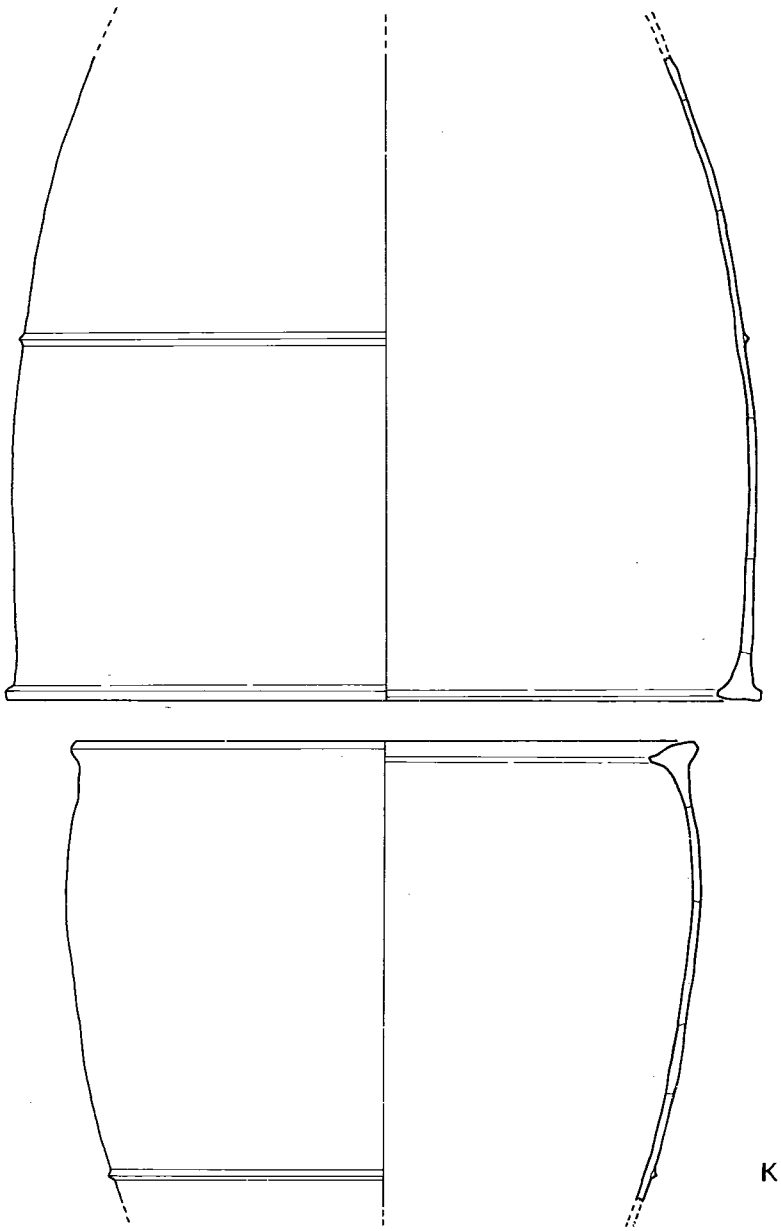
器高	78.2cm
口径	68.5cm
頸部最小径	55.3cm
胴部最大径	62.1cm
底径	12.8cm

K７

Fig. 34　甕棺実測図３（縮尺1/8）

北牟田　K11　上

器高	
口径	78.8cm
口縁内径	69.2cm
胴部最大径	79.4cm
底径	

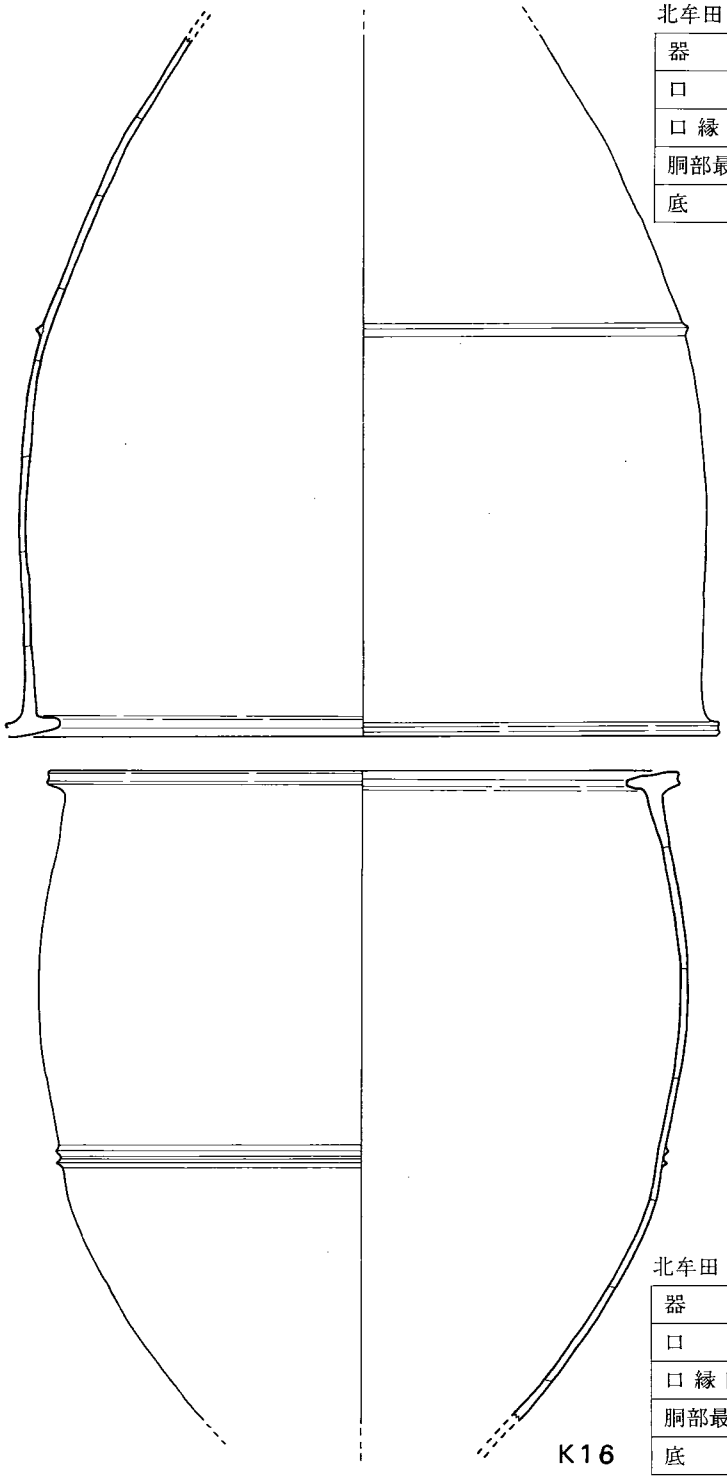


K11

北牟田　K11　下

器高	
口径	65.4cm
口縁内径	55.2cm
胴部最大径	63.2cm
底径	

Fig. 35　甕棺実測図4（縮尺1/8）



北牟田　K16　北

器高	
口径	74.8cm
口縁内径	63.2cm
胴部最大径	73.0cm
底径	

北牟田　K16　南

器高	
口径	66.2cm
口縁内径	55.2cm
胴部最大径	68.2cm
底径	

Fig. 36　甕棺実測図5（縮尺1/8）

北牟田　K23　上

器高	64.8cm
口径	46.0cm
口縁内径	58.2cm
胴部最大径	55.9cm
底径	9.0cm

北牟田　K23　下

器高	89.6cm
口径	64.8cm
口縁内径	53.2cm
胴部最大径	
底径	9.4cm

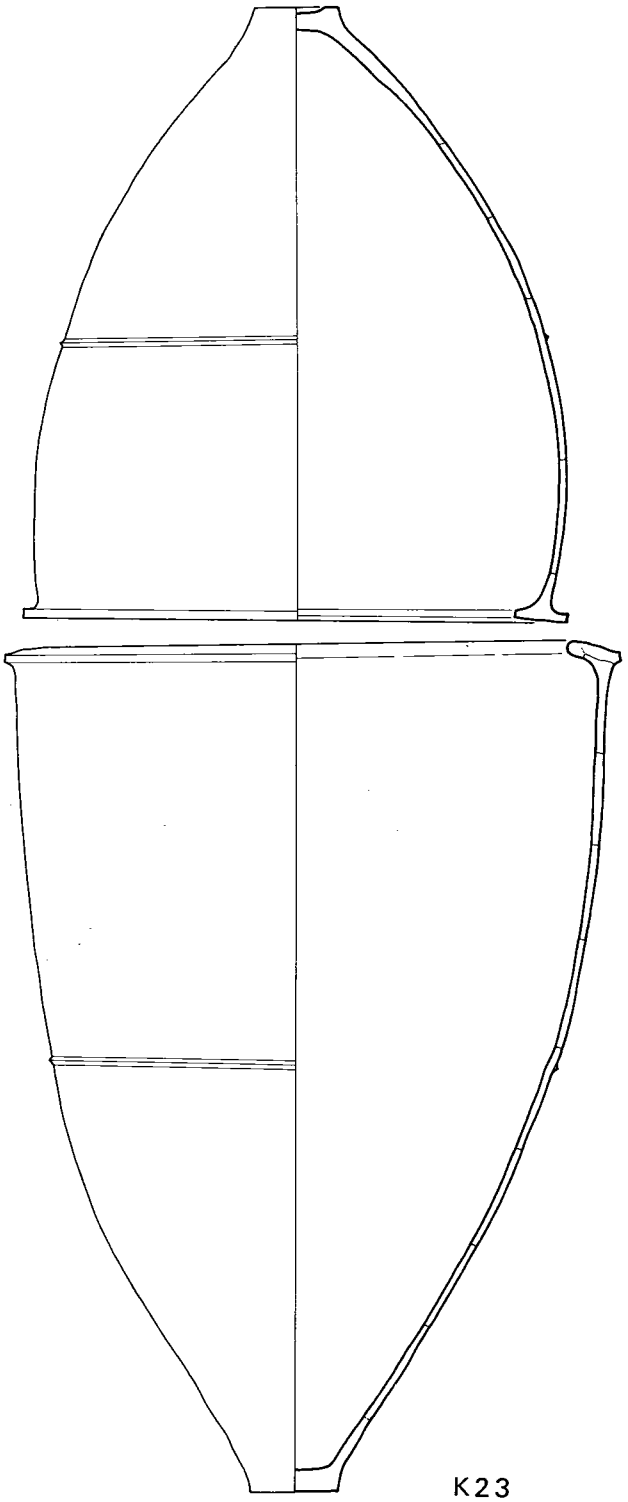
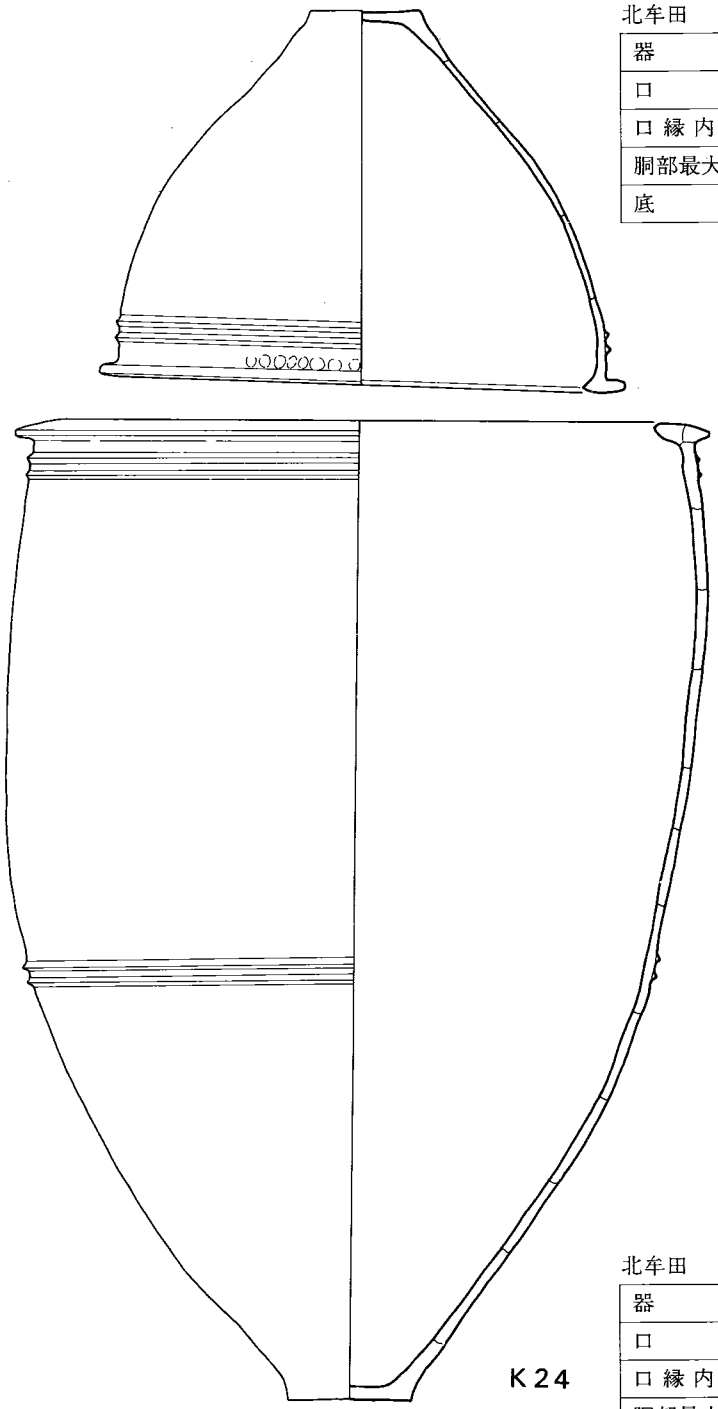


Fig. 37　甕棺実測図6（縮尺1/8）



北牟田　K24　上

器高	40.0cm
口径	56.2cm
口縁内径	47.0cm
胴部最大径	
底径	11.5cm

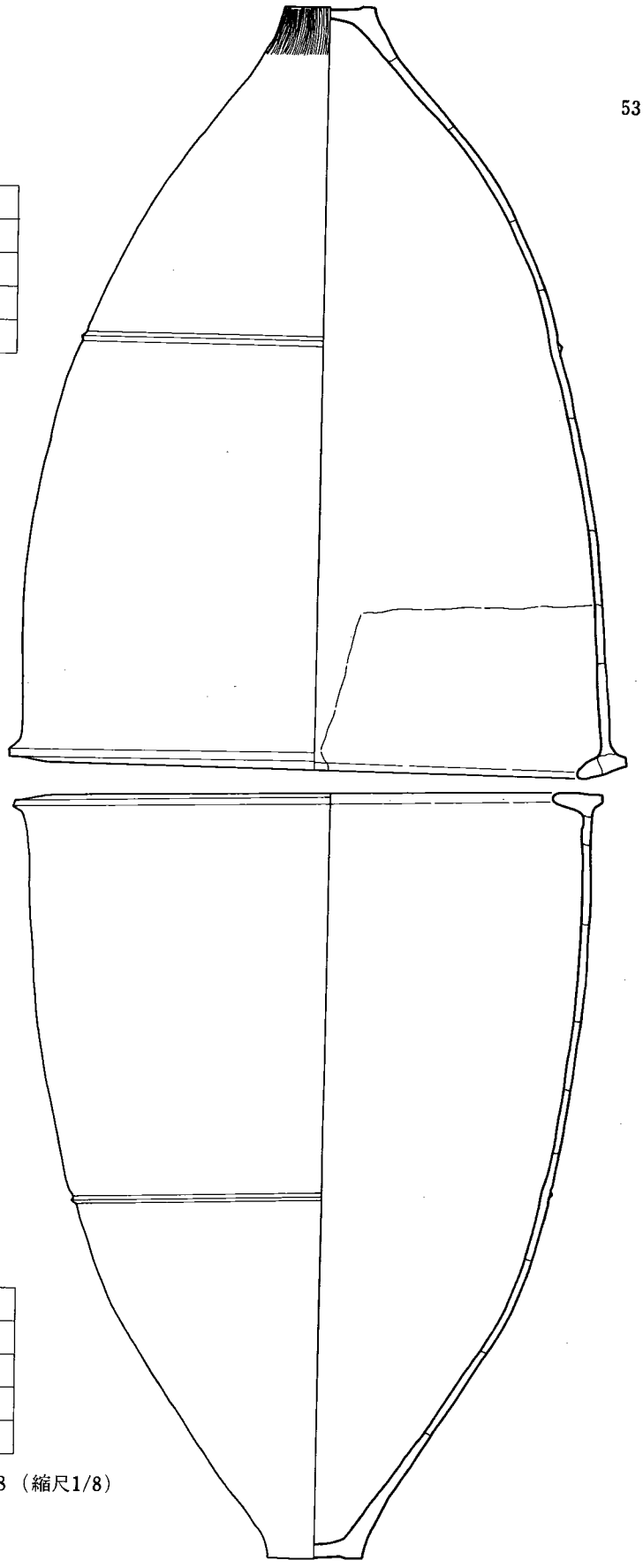
北牟田　K24　下

器高	103.6cm
口径	73.4cm
口縁内径	61.4cm
胴部最大径	73.4cm
底径	13cm

Fig. 38　甕棺実測図7（縮尺1/8）

北牟田　K26　上

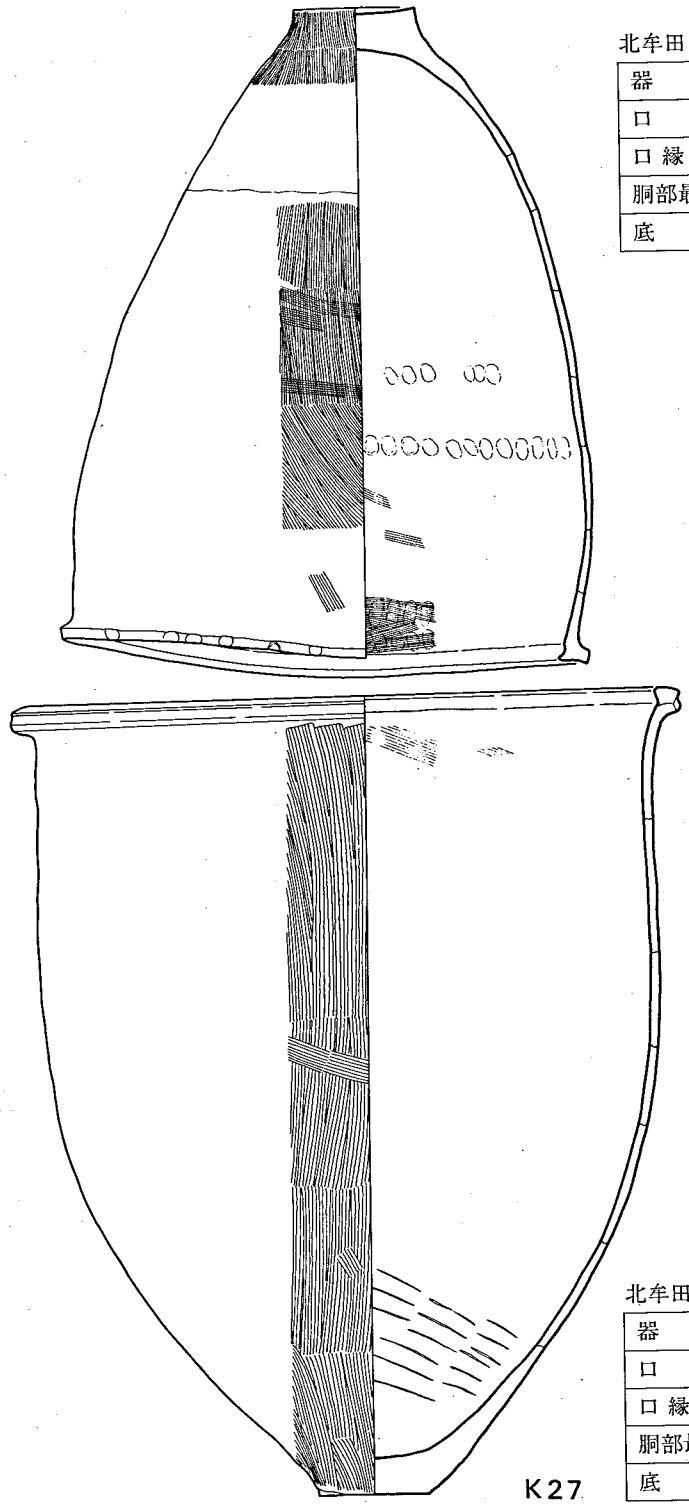
器高	92.0cm
口径	73.4cm
口縁内径	61.2cm
胴部最大径	
底径	10.6cm



北牟田　K26　下

器高	92.3cm
口径	69.6cm
口縁内径	56.8cm
胴部最大径	
底径	11.0cm

Fig. 39　甕棺実測図8（縮尺1/8）



北牟田　K27　上

器高	70.8cm
口径	55.3cm
口縁内径	48.7cm
胴部最大径	54.2cm
底径	12.8cm

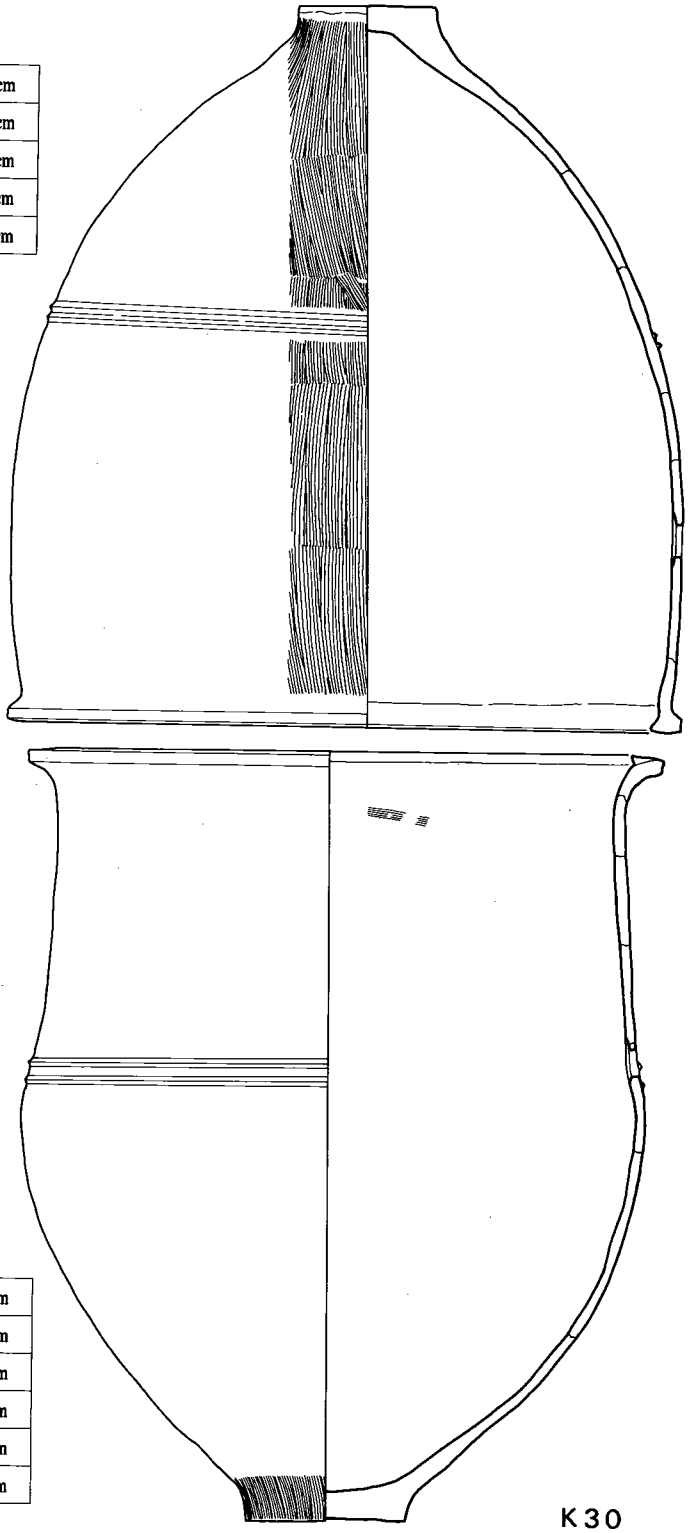
北牟田　K27　下

器高	85.2cm
口径	69.9cm
口縁内径	64.4cm
胴部最大径	64.9cm
底径	11.6cm

Fig. 40　甕棺実測図9（縮尺1/8）

北牟田　ＫＫ30　上

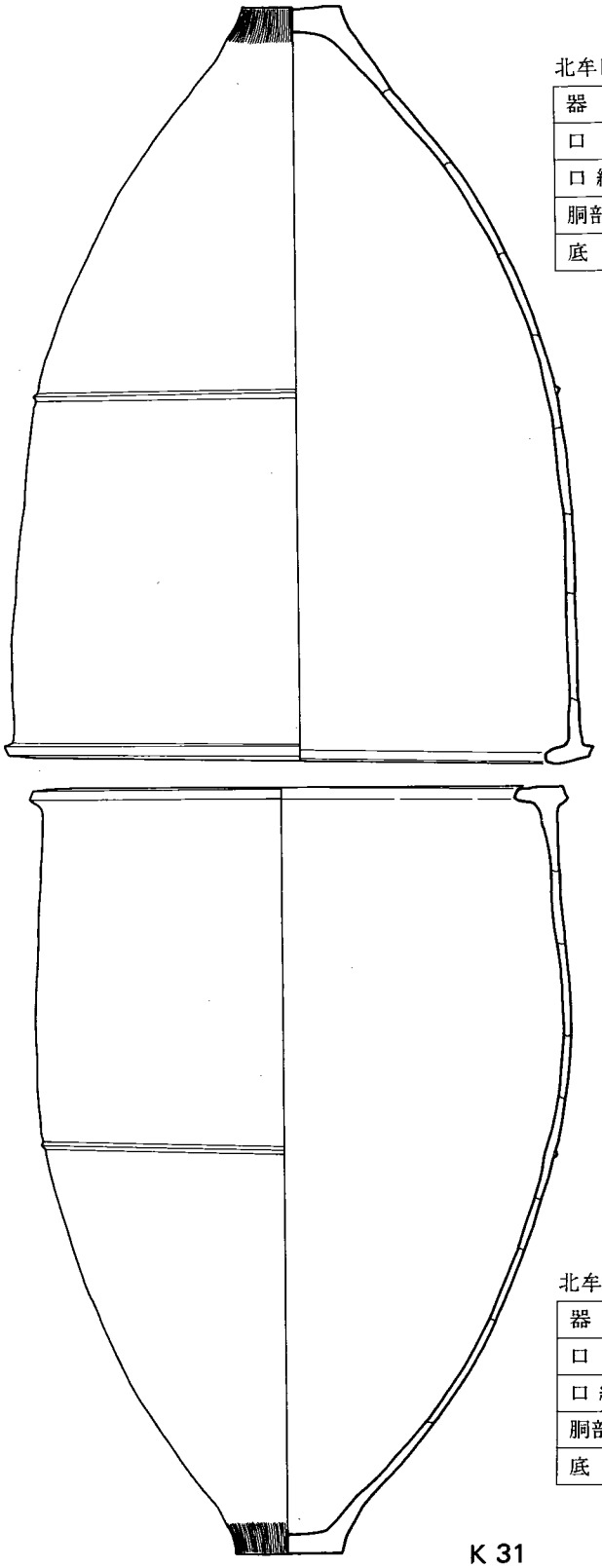
器　　高	77.1cm
口　　径	70.3cm
口縁内径	64.1cm
胴部最大径	70.3cm
底　　径	14.0cm



北牟田　　K30　下

器　　高	81.9cm
口　　径	66.5cm
口縁内径	59.9cm
胴部最大径	65.3cm
底　　径	16.7cm
頸部最小径	57.0cm

Fig. 41　甕棺実測図10（縮尺1/8）



北牟田　K31　上

器高	82.6cm
口径	62.4cm
口縁内径	53.4cm
胴部最大径	
底径	10.6cm

北牟田　K31　下

器高	83.5cm
口径	57～63cm
口縁内径	46.5～54cm
胴部最大径	
底径	11.6cm

K 31

Fig. 42　甕棺実測図11（縮尺1/8）

北牟田　K33　上

器高	93.9cm
口径	67.8cm
口縁内径	56.3cm
胴部最大径	65.2cm
底径	9.0cm

北牟田　K33　下

器高	92.4cm
口径	68.4cm
口縁内径	56.6cm
胴部最大径	66.0cm
底径	9.4cm

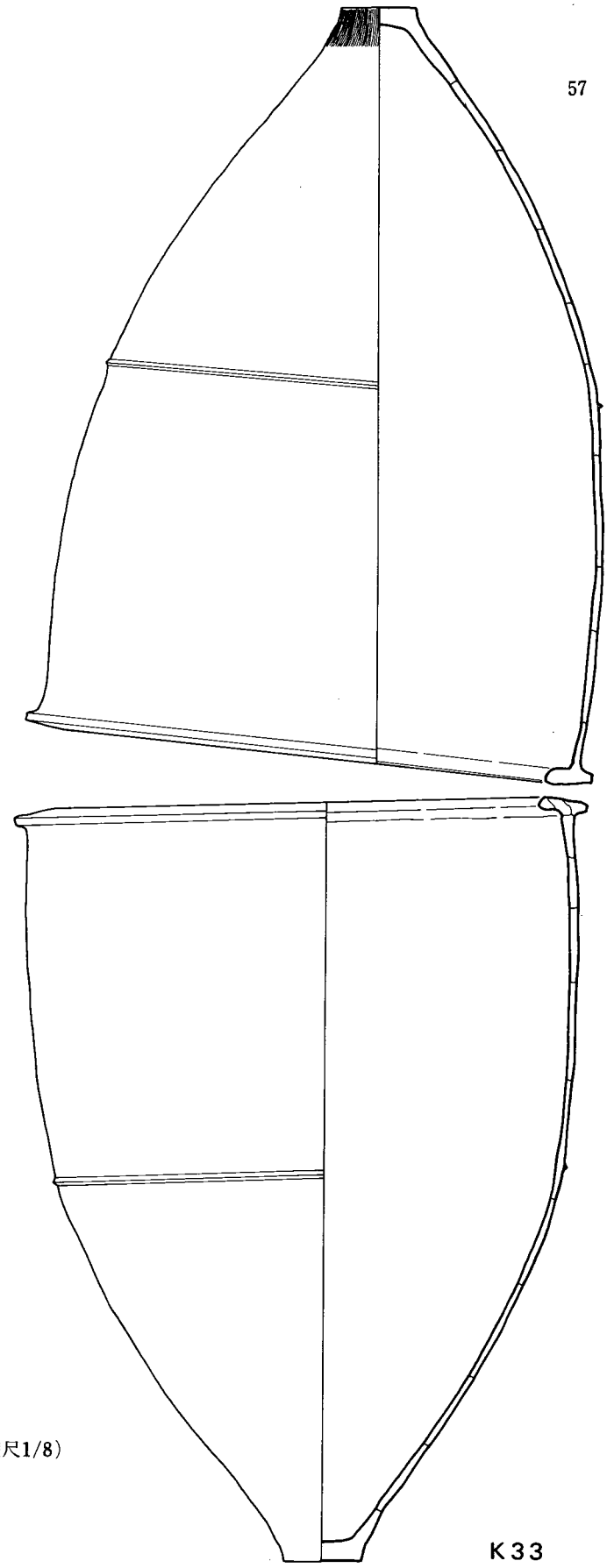
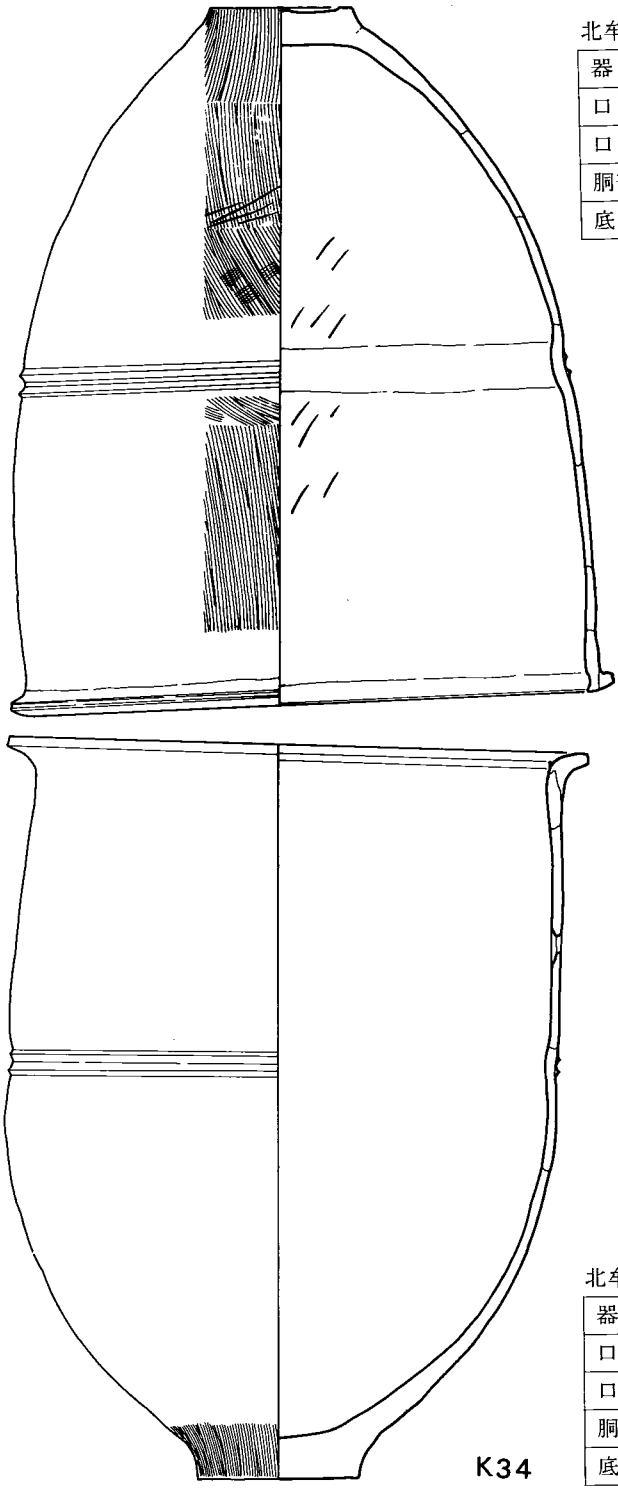


Fig. 43　甕棺実測図12（縮尺1/8）



北牟田　K34　上

器高	75.0cm
口径	63.5cm
口縁内径	58.0cm
胴部最大径	
底径	14.9cm

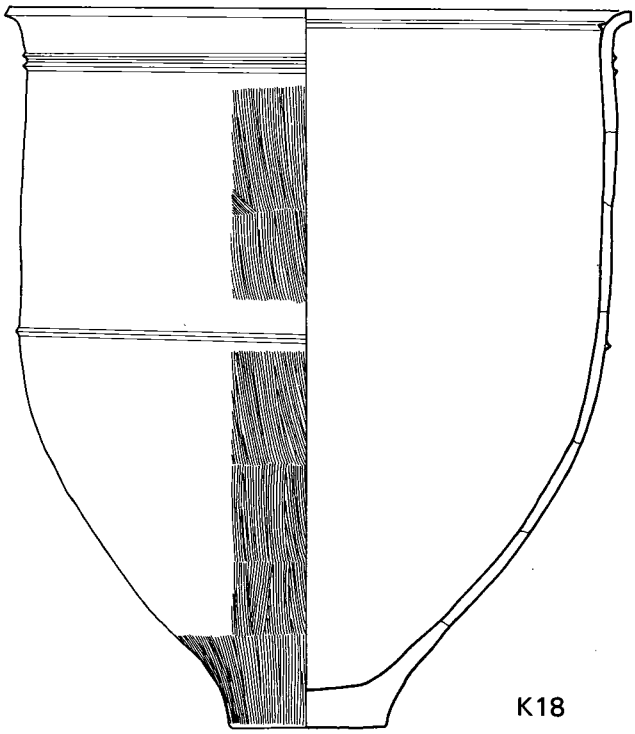
北牟田　K34　下

器高	78.6cm
口径	60.7cm
口縁内径	
胴部最大径	57.7cm
底径	16.8cm

Fig. 44　甕棺実測図13（縮尺1/8）

北牟田　K18

器高	76.4cm
口径	66.4cm
口縁内径	65.4cm
胴部最大径	62.3cm
底径	16.8cm



北牟田　K35　下

器高	88.4cm
口径	67.3cm
口縁内径	57.7cm
胴部最大径	65.7cm
底径	11.0cm

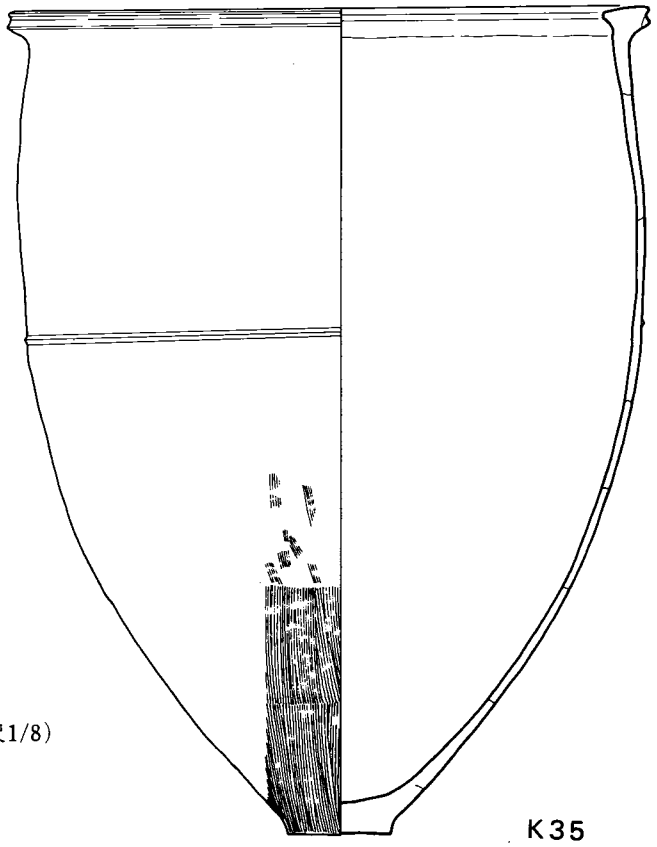
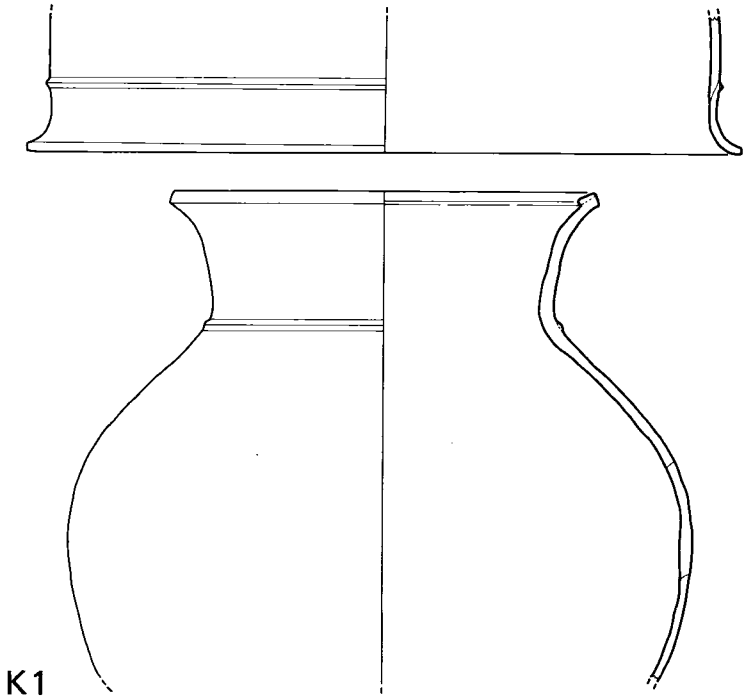


Fig. 45　甕棺実測図14（縮尺1/8）



	K 1 上	K 1 下	K 2	K19上	K19下
器　　高			42.0cm		
口　　径	56.2cm	32.9cm	34.4cm		34.2cm
口縁内径					33.3cm
胴部最大径		49.3cm	39.6cm	36.1cm	
底　　径			10.5cm		

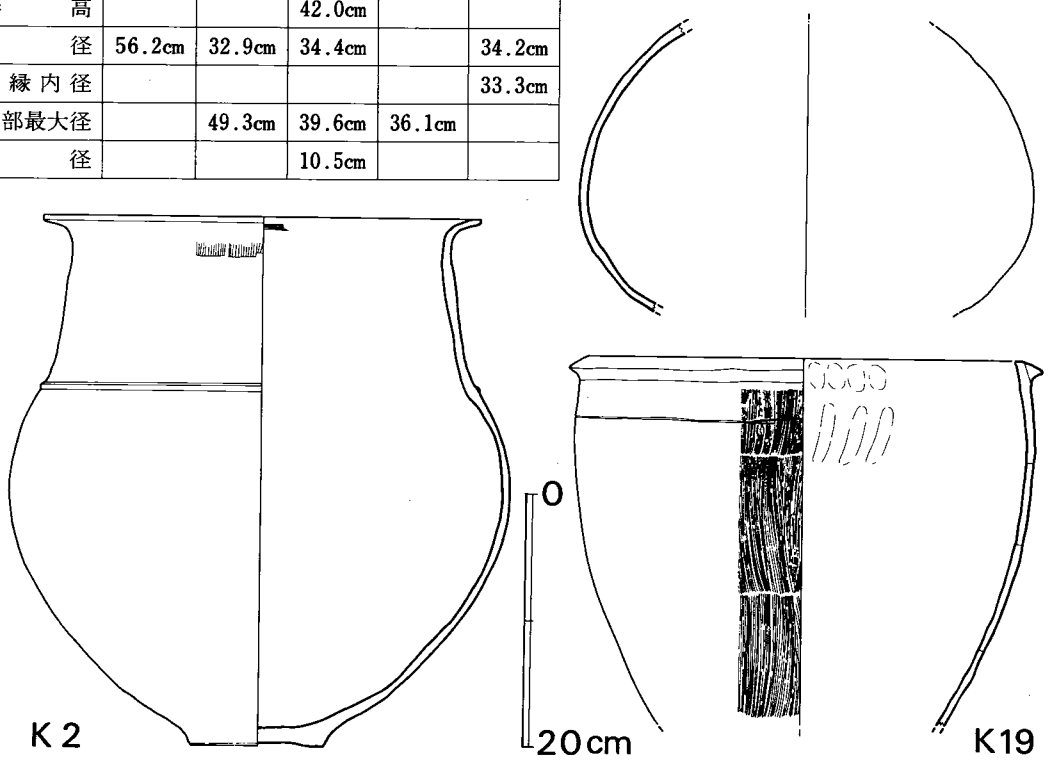
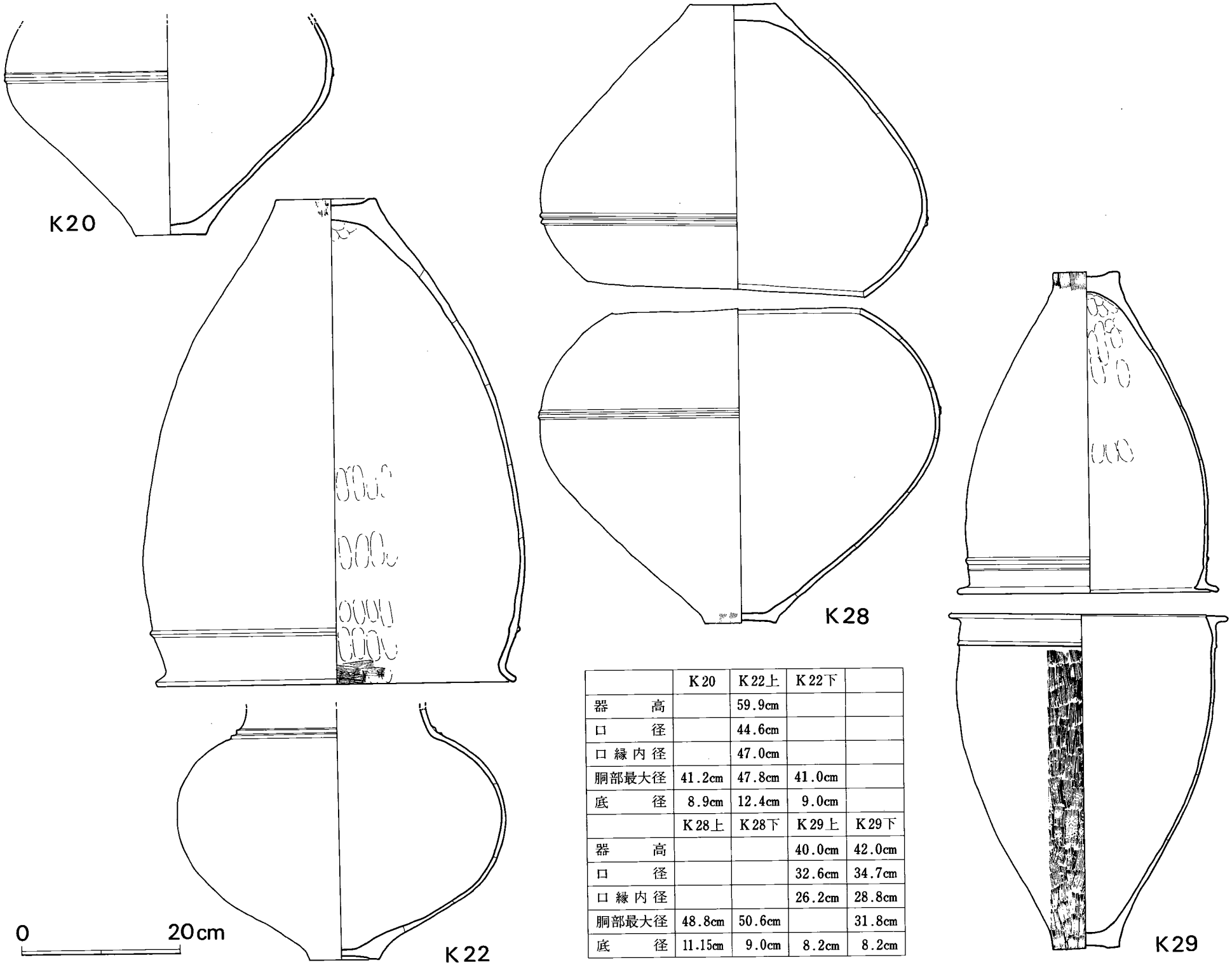
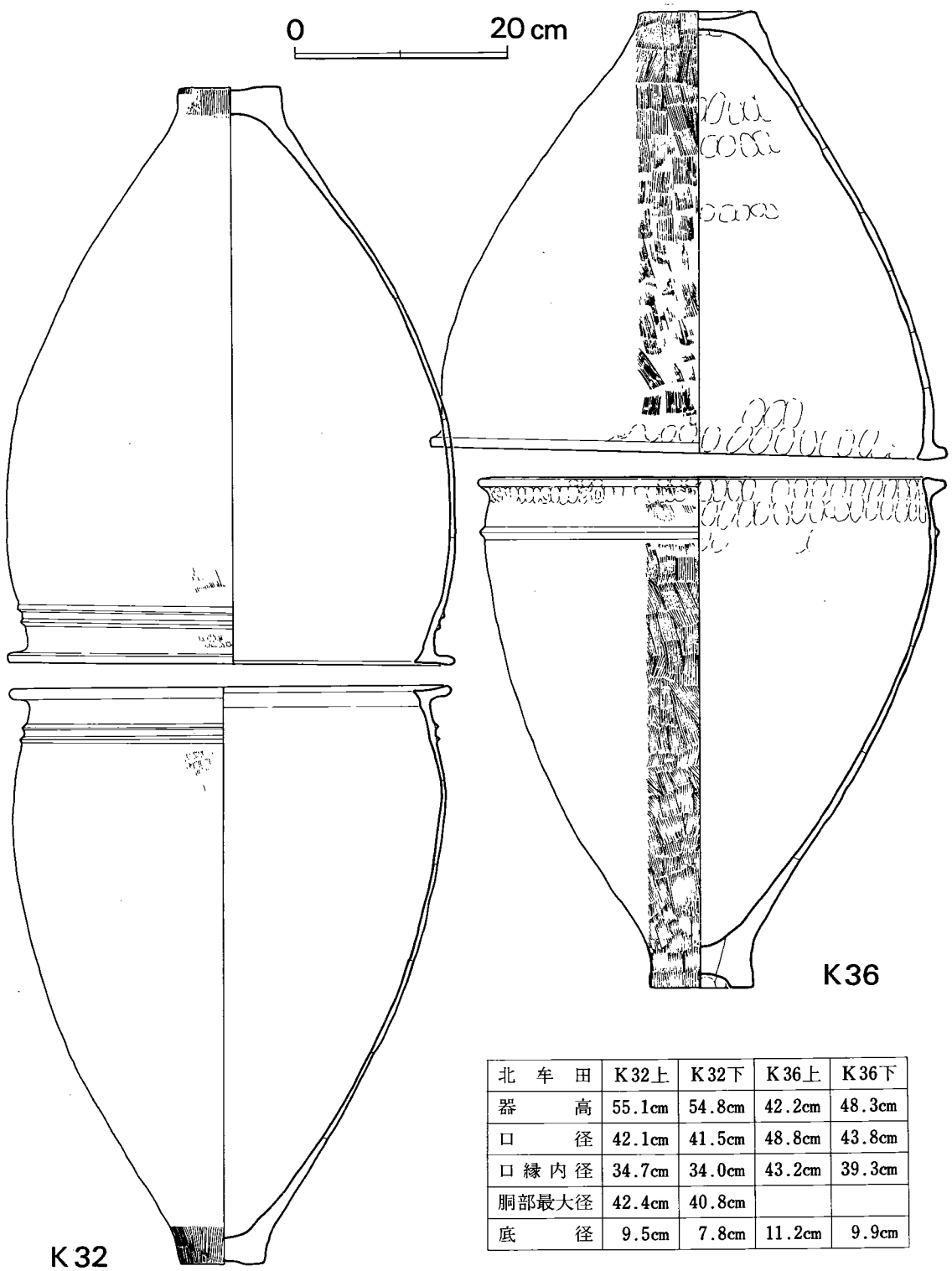


Fig. 46　甕棺実測図15（縮尺1/6）



	K20	K22上	K22下	
器高		59.9cm		
口径		44.6cm		
口縁内径		47.0cm		
胴部最大径	41.2cm	47.8cm	41.0cm	
底径	8.9cm	12.4cm	9.0cm	
	K28上	K28下	K29上	K29下
器高			40.0cm	42.0cm
口径			32.6cm	34.7cm
口縁内径			26.2cm	28.8cm
胴部最大径	48.8cm	50.6cm		31.8cm
底径	11.15cm	9.0cm	8.2cm	8.2cm

Fig. 47 甕棺実測図16（縮尺1/6）



北 牟 田	K32上	K32下	K36上	K36下
器 高	55.1cm	54.8cm	42.2cm	48.3cm
口 径	42.1cm	41.5cm	48.8cm	43.8cm
口縁内径	34.7cm	34.0cm	43.2cm	39.3cm
胴部最大径	42.4cm	40.8cm		
底 径	9.5cm	7.8cm	11.2cm	9.9cm

Fig. 48 甕棺実測図17（縮尺1/6）

II　ハサコの宮遺跡

II　ハサコの宮遺跡

はじめに

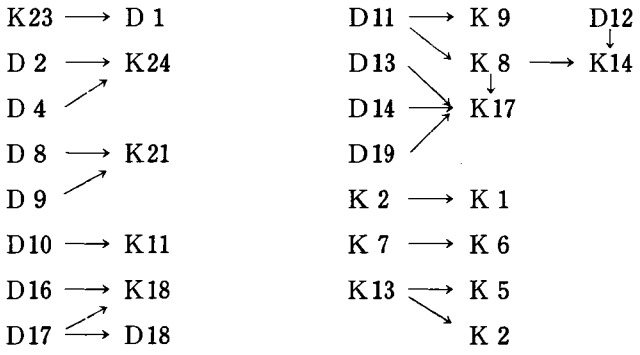
ハサコの宮遺跡は第1次～第3次にわたって調査された。第1次調査に関しては、九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告(Ⅴ)で既に報告がなされたので省略したい。

第2次調査では、弥生時代墳墓は甕棺墓2基・土壙墓・木棺墓2基が調査された。この土壙墓・木棺墓2基はいずれも甕棺墓より古い。またその1基からは、磨製石鏃1、磨製石剣片2個が出土した。

第3次調査では、予備的に山本信夫氏が甕棺墓2基を発掘した。これらの甕棺は、いずれもKⅡc式に属するが切り合い関係はK2→K1である。その後、森田勉・橋口達也が調査を引きつぎ、土壙墓・木棺墓19基、甕棺墓19基を発掘した。

ここでは第3次調査分を中心にして、第2次調査の甕棺墓2基を加えて報告したい。

第3次調査で確認した切り合い関係は次のとおりである。(古→新の関係で表示)



これらの切り合い関係は、D2・D4→K2、D8・D9→K21、D11→K8・K9等からみて土壙墓・木棺墓の主体が前期末以前にあることは明瞭である。このように土壙墓・木棺墓と甕棺墓が共存する時は、土壙墓・木棺墓が古いのが通例である。ただ、ハサコの宮遺跡では、K23→D1ときわめて稀な例ではあるが、土壙墓が甕棺を切っているものがある。K23はKⅡb式併行期の小形棺であるので、この時期まで土壙墓が一部残存したといえる。

1　土壙墓・木棺墓

土壙墓・木棺墓の分類法は北牟田遺跡の項で述べたとおりである。詳細は一覧表に付したので個々の記述は行なわないが、D4で側板の圧痕が検出されているので、それを中心にして架蓋法等についても述べたい。又D16、D17出土の磨製石剣片にもふれたい。

D4はまず隅丸方形の墓壙を掘り、棺を設置した後、裏込を行なうⅡA型式の木棺墓である。

墓壙底に両木口板用のやや広めの掘込をつくり、その内側よりに木口板を設置している。木口板は3～4cmの厚さをもつ縦板1枚を用いたものと考えられる。東壁では確認できなかったが、西壁では側板の裏の圧痕が裏込の土に残存した。側板構築はまず側板をのせる段をつくり、その上に側板をのせている。圧痕の観察では長180cm前後、幅10～15cmの征目の板を4枚用いている。厚さは木口板と同様3～4cmである。東壁では、断面からみると厚さ5cm程の一枚板を使用した可能性もある。

また、蓋の目張り粘土は最上部の側板の上端から下位約5cm、上位10～14cmにまで達する厚いものであるが、この粘土は側板の外側(裏)に密着しているので、蓋が横架されたとは考えられない。一枚板か否かの断定はできないが、10～14cm程の厚い板を縦架したと考えるのが妥当であろう。裏込の縦断面をみると蓋のせ台と考えられる部分があるので、側板、木口板だけではもちこたえられないので、木口の外側に蓋のせ台を設置したものであろう。北牟田遺跡でも、D36、D41に同様の架蓋法をもつものがある。

架蓋法は北牟田では横架、縦架、縦横に交互に重ねたようなものがあるが、今までの例ではスダレD54で幅35～45cm、長約90cmの板を5枚横架した痕跡が知られていた。これらの資料を加えて、北九州の前期を中心にして存在する木棺墓構築法の一端がうかがえよう。(1)

D16からは磨製石剣の基部が、D17からは切先が出土した。これらは両者ともに棺体を検出できなかったが、D16は木口板・側板用の掘込が北・東側に存在しているので、それから判断すると棺の中央部よりやや北側よりの西壁に近く、基部を北側にして置かれている。D17はIIC型式の木棺墓であると考えるが、切先の出土した地点はほぼ中央部で、これも棺内にあった可能性が強い。

第2次調査出土の扁平磨製石鏃は、頁岩質の石材を用い、厚さ2mm強、復原長41mmであるが先端を一部欠失する。石剣切先は2個分あり、いずれも頁岩質のものであるが、数個の小破片にわれ、1個は辛うじて復原できるほどである。1個は長29mm、厚さ8mm、他は長34mm、厚さは計測不能。

石鏃の先端が欠失し、石剣はバラバラに破損しているということは、明らかに人間を殺傷に及んだものと考えられる。まず、矢を射込み、とどめに石剣を刺したものであろう。剣が2個ということは2人で刺したものか。

D16出土の磨製石剣片は先端を欠失し、残存長95mm、関部幅31mm、茎幅22mm、厚さは剣身で6mm、茎で7mmを測るが、図示した裏面は風化のため鎬が見えなくなっているので、7mm、8mmとそれぞれ1mm程厚くなると考える。石材は頁岩質。

D17出土の磨製石剣片は切先のみで、残存長55mm、幅26.5mm、厚7mmを測る。先端はつぶれている。石材は頁岩質。

これら剣片の棺内からの出土は、切先の場合は、その大部分は副葬品ではなく、人体に刺っていた可能性が強い。ただD16の場合は同時に剣片等の副葬も行なわれていた根拠として既に論じたことがあるが、この考えは今も変っていない。

註1　穂波町教育委員会「スダレ遺跡」穂波町文化財調査報告書　第1集　1976

Tab. 5　ハサコの宮土壙墓・木棺墓一覧表

番号	方位	墓壙の規模 長(cm)	墓壙の規模 幅(cm)	棺の規模 長(cm)	棺の規模 幅(cm)	棺の規模 深(cm)	掘込の有無 木口板	掘込の有無 側板	形態	備考
D 1	S−78°−W			121		42			D	K−23→D−1
D 2	N− 9°−E		147		36	46			I C	D−2→K−24
D 3	N− 7°−E			153	26〜39	53			D	
D 4	N−13°−E	250	175	139	49	48	○	△	II A	西側板は4枚を積み重ねる D−4→K−24
D 5	N− 1°−E			126	28〜43	33			C	
D 6	S−19°−W			138	36〜43	33			C	
D 7	N−21°−E			126	21〜35	19.0			C	
D 8	S−77°−E			142	40	50			C	側板の炭化材一部残存 D−8→K−21
D 9	N− 3°−W	243		166	43	47	○	△	I A	D−9→K−21
D10	N− 6°−W	217							I C	D−10→K−11
D11	N−13°−W	(260)		143	15〜36	42			I D	D−11→K−9 K−8
D12	N−13°−W			(146)	46	25			C	D−12→K−14
D13	N−21°−W			(130)	38	38			C	木口に段をもつ D−13→K−17
D14	N−19°−W			(145)	30〜50	32.5			D	D−14→K−17
D15	S−13°−E			130	24〜38	46			I D	
D16	N−11°−W		142				ⓘ	ⓘ	II B	石剣基部出土 D−16→K−18
D17	N−23°−W								II(C)	石剣切先出土 D−17→K−18
D18	N−21°−W								C	D−17→D−18
D19	N−13°−W			133		31			C	D−19→K−17

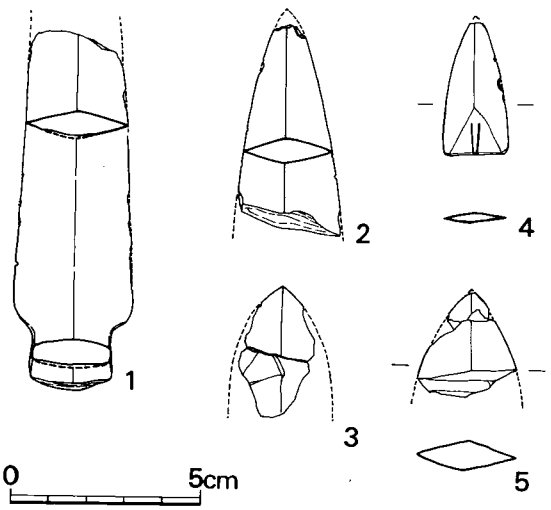


Fig. 49　ハサコの宮土壙墓・木棺墓出土石鏃・石剣
（縮尺1/2）

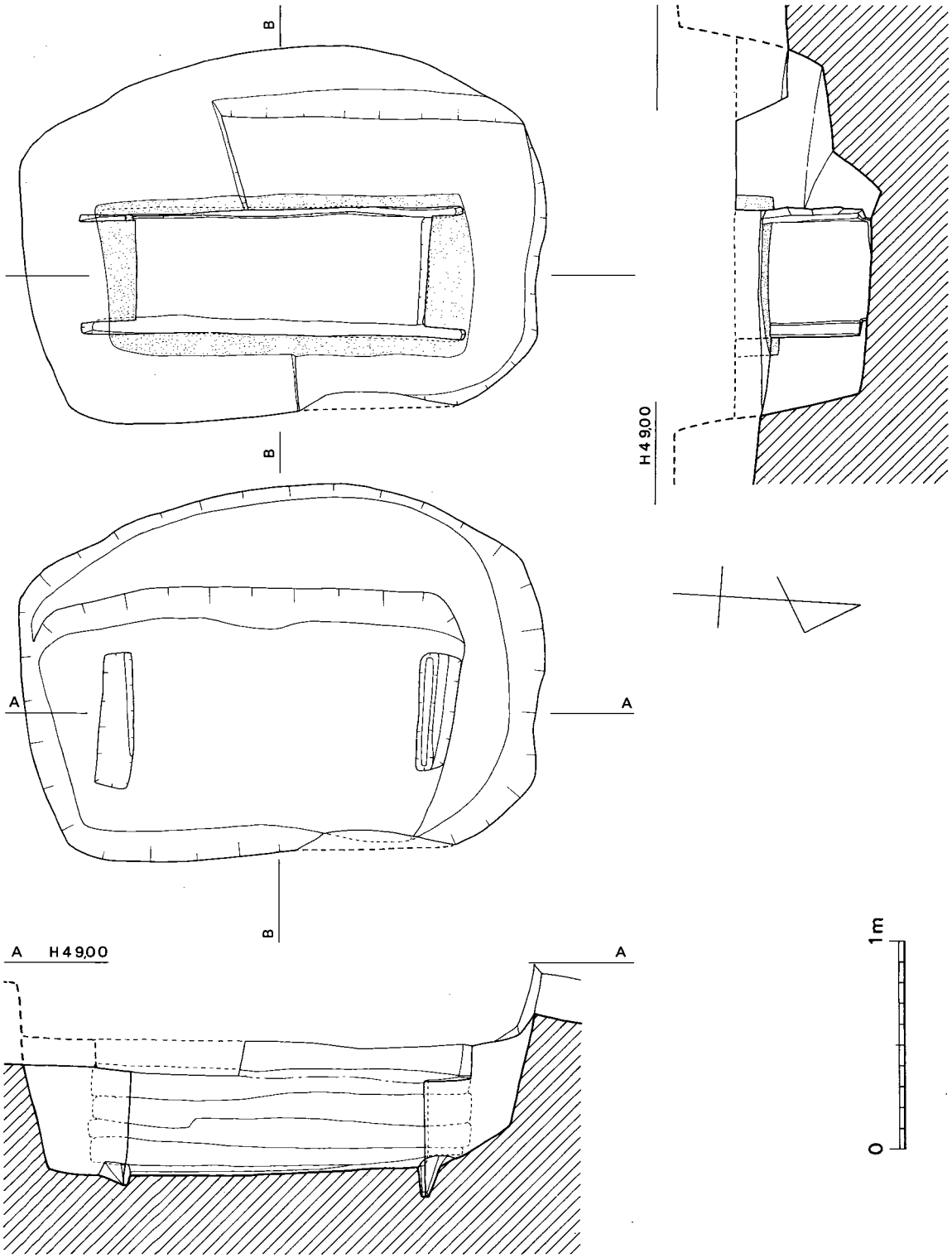


Fig. 50 木棺墓（D４）実測図（縮尺1/30）

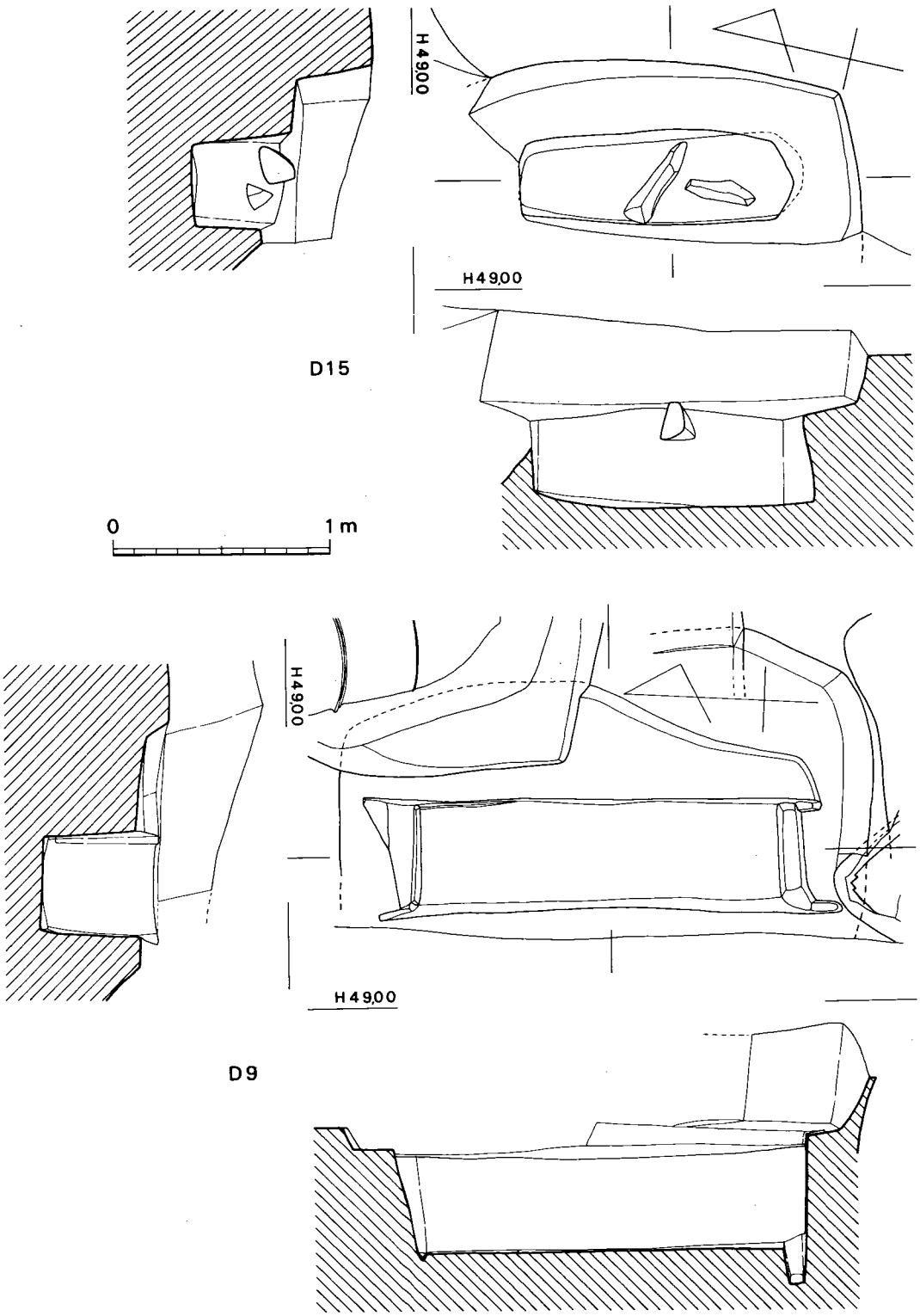


Fig. 51 土壙墓・木棺墓実測図（縮尺1/30）

2　甕棺墓および甕棺

ハサコの宮遺跡第2次、第3次調査で発掘された甕棺総数は23基、うち大形棺17基、小形棺6基である。小形棺の示す比率は27.00%と低いが、K7のように大形棺に小児（9～10才）を入れたもの、調査されてないが小形棺のぬきあとの痕跡を留めるものを入れれば30%強となり、北牟田遺跡等と同様の比率を示すものと思われる。甕棺の時期はKⅠc式からKⅡc式にわたる。KⅠc式1基（小形棺1）、KⅡa式11基（大形棺10、小形棺1）、KⅡb式6基（大形棺3、小形棺3）、KⅡc式4基（大形棺4）、不明1（小形棺）となる。

これからみるとハサコの宮の甕棺墓もKⅡa式を主体とし、その後次第に減少するといえる。又、いま一つ特記すべきことは、K6によって、K7の上甕が切られていることである。土壙墓・木棺墓では棺体を切り合うことも多いが、甕棺できわめて稀な例である。

土壙墓・木棺墓との切り合い関係は先に述べたように基本的には土壙墓・木棺墓が古く、これらは前期末以前を主体とするものであろうが、K23→D1という切り合いがあり、土壙墓・木棺墓が一部KⅡb式併行期（中期前葉）まで残存したことがうかがえる。

K8出土の人骨には腰椎・仙骨等に蓆の付着が認められたが、これは道場山の報告でも述べたように遺体を包んだ蓆が人骨に付着したものと考えている。

以下甕棺の詳細は一覧表に付す。(1)

註1　福岡県教育委員会「九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告」（ＸＸＶ）1978

Tab.6　ハサコの宮甕棺墓一覧表

番号	時期	方位	傾斜角	墓壙の規模		合せ口の方法			棺の規模		頭位	被葬者		備考
				長 cm	幅 cm	呑口	覆蓋	接口	大形	小形		性別	年令	
2次 K1	KⅡa 併行期	N-83°-W								○				
2次 K2	KⅡa	N-85°36-W	29°					○	○					
3次 K1	KⅡc	S-48°-W	(30°±2)		115			○	○		(下甕)	♀	熟年	上鉢
K2	KⅡc	S-2°-W	±0°	249	(127)			○	○		下甕	♂	熟年	
K3														欠番
K4														欠番
K5	KⅡc	S-2°-W	−4°					○	○		下甕	♂	熟年	
K6	KⅡc	S-6°-E	3°	220	116			○	○			♂	熟年	
K7	KⅡa	N-48°-W	−10°	200	117			○	○		下甕	♂♀	小児 (9-10才)	K−7→K−6
K8	KⅡa	N-13°36′-W	−1°	262	160			○	○		下甕	♂	熟年	
K9	KⅡa	N-21°-W	$\frac{-3°}{(-7°)}$	200		○ 変形			○		下甕	♂	熟年	D−11→K−9

K10	KⅡb 併行期	N-9°-W	−4°					○		○				
K11	KⅡb	N-13°-W	1°	(172)	123			○	○			♀ ?	成年	D−10→K−11
K12	KⅡ 併行期									○				小児用単棺
K13	KⅡa	N-3°30'-W	18°	238	(162)			○	○					K−13→K−5 / K−2
K14	KⅡb 併行期	N-71°30'-W		(170)	97		○ 変形			○				D−11→K−8→K−14
K15														欠番
K16	KⅡa	S-10°-E	1° (−4°)下襞	205	156	○ 変形			○					
K17	KⅡb	N-7°-W	−3°	197	149			○	○		下襞	♂	熟年	D−13・14・19 / K−8→K−17
K18	KⅡb	N-29°-E	−8°30'	173	169			○	○		下襞	♀	成年	D−16・17→K−18
K19	KⅡa	N-66°-W	−10°		206			○	○		下襞	♀	成年	
K20	KⅡa	N-60°30'-E	−2°30'	181	127			○	○		下襞	♂	成年	
K21	KⅡa	N-7°30'-W	−13°	208	160			○	○		下襞	♂	熟年	D−8 / D−9 →K21
K22	KⅡa	S-11°-E	(−11°)	221				○	○		下襞	♂♀	成年	
K23	KⅡb 併行期	S-69°-W	下襞が高い				○ 変形			○				K23→D−1
K24	KⅠc 併行期	N-4°-W	上襞が高い		103	○				○				D−4 / D−2 →L−24

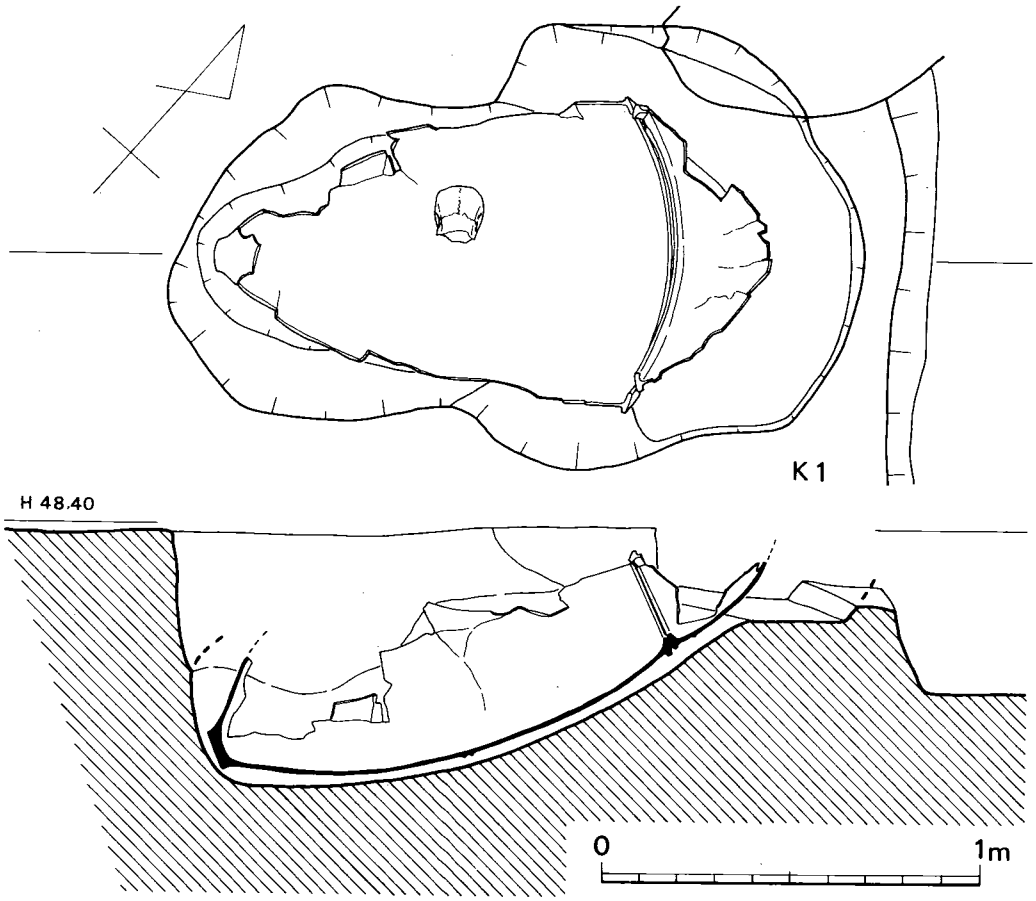


Fig. 52 甕棺墓実測図1（縮尺1/30）

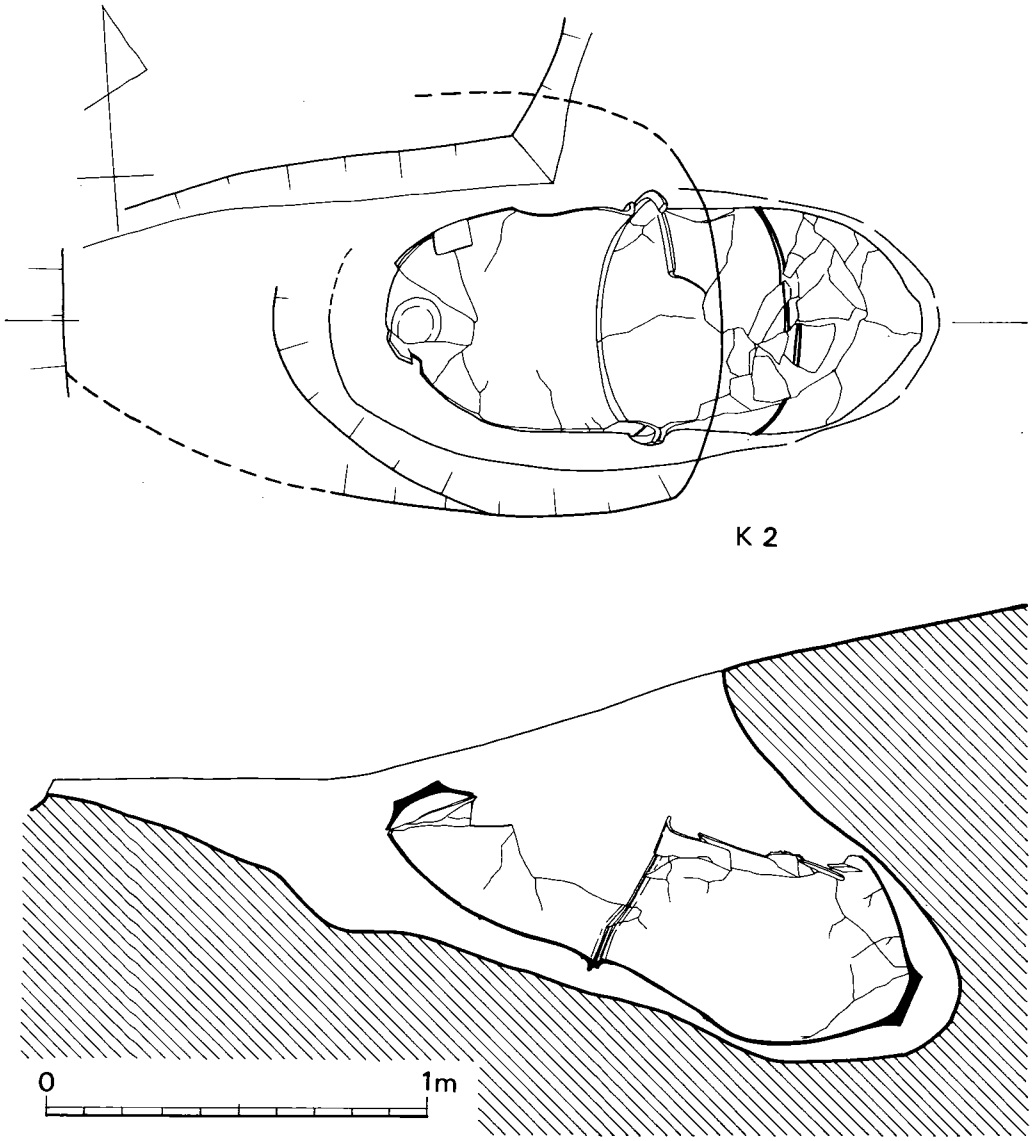


Fig. 53 甕棺墓実測図2〔第2次K 2〕(縮尺1/20)

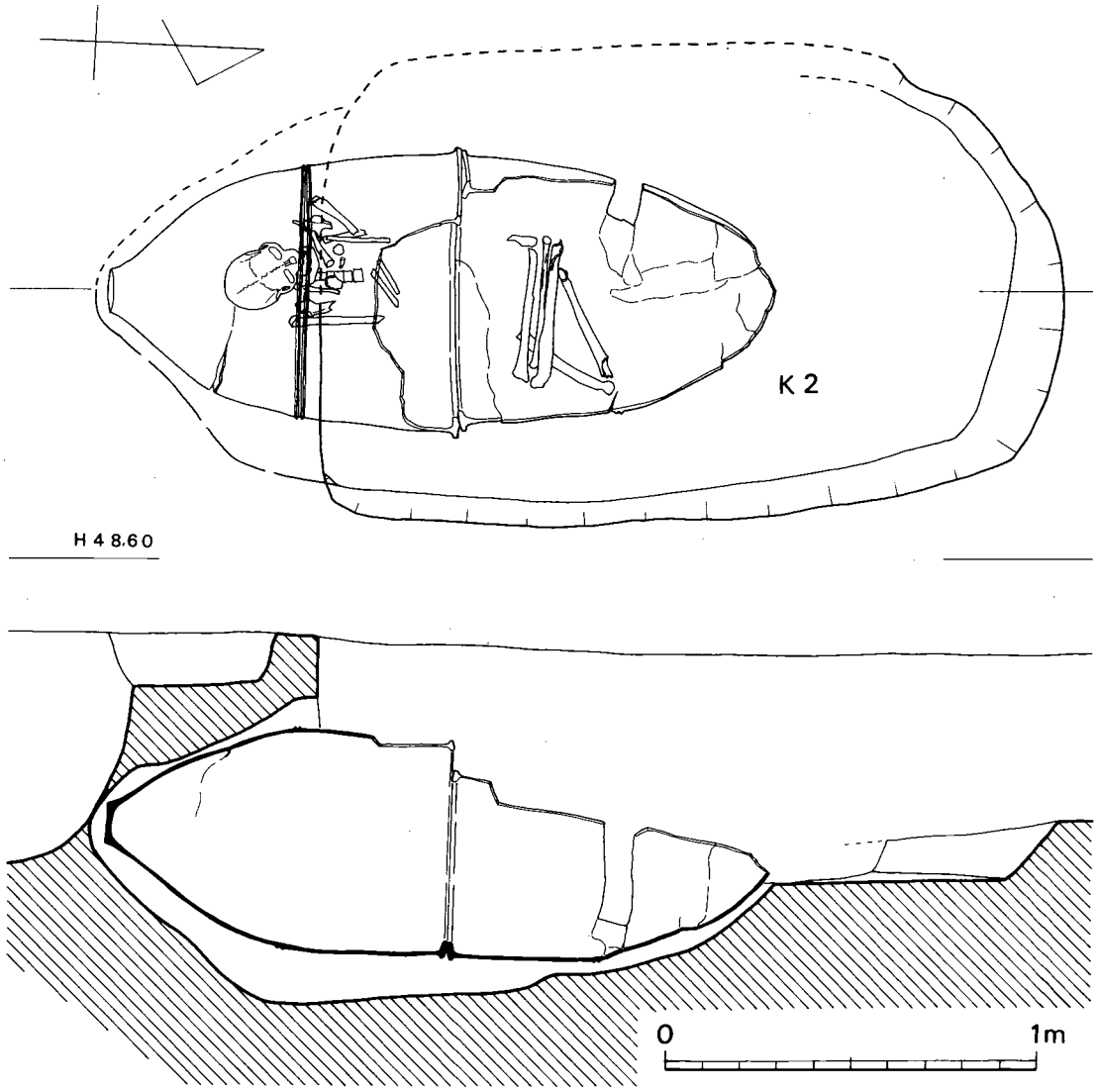


Fig. 54 甕棺墓実測図3（縮尺1/20）

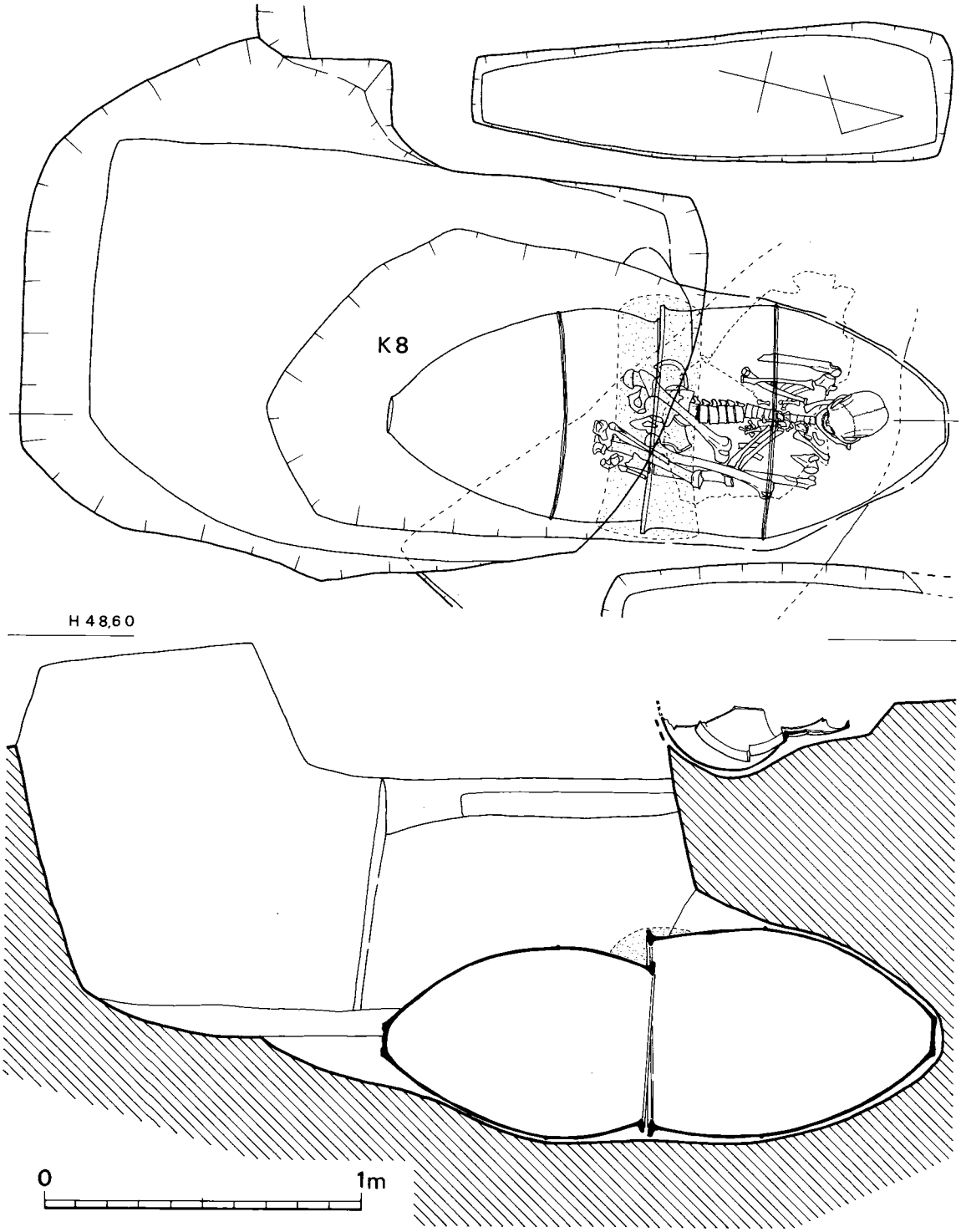


Fig. 56 甕棺墓実測図5（縮尺1/20）

H 48.60

D10

K7

K6

H 48.60

0 1m

Fig. 55 甕棺墓実測図4（縮尺1/20）

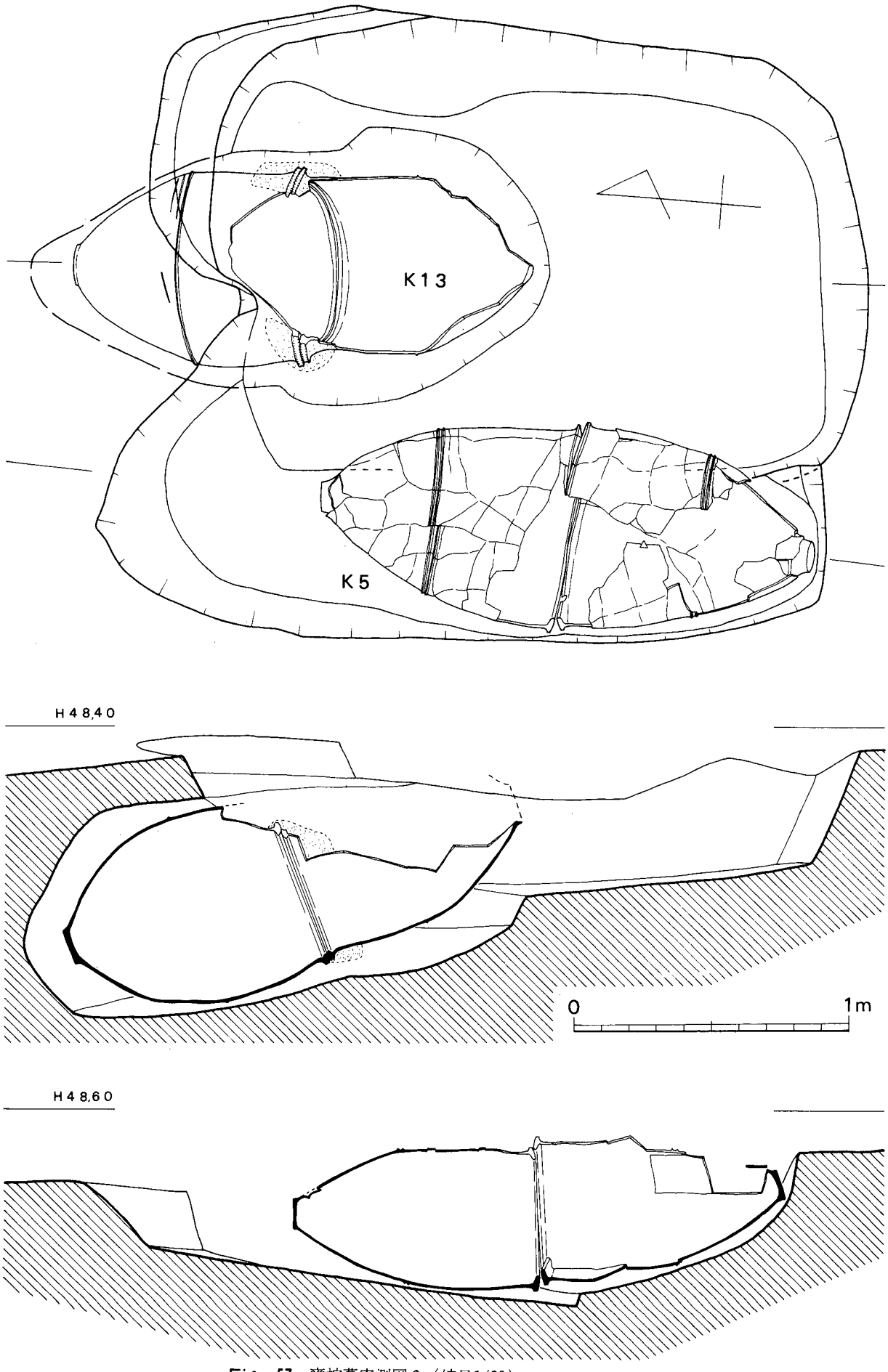


Fig. 57 甕棺墓実測図6（縮尺1/20）

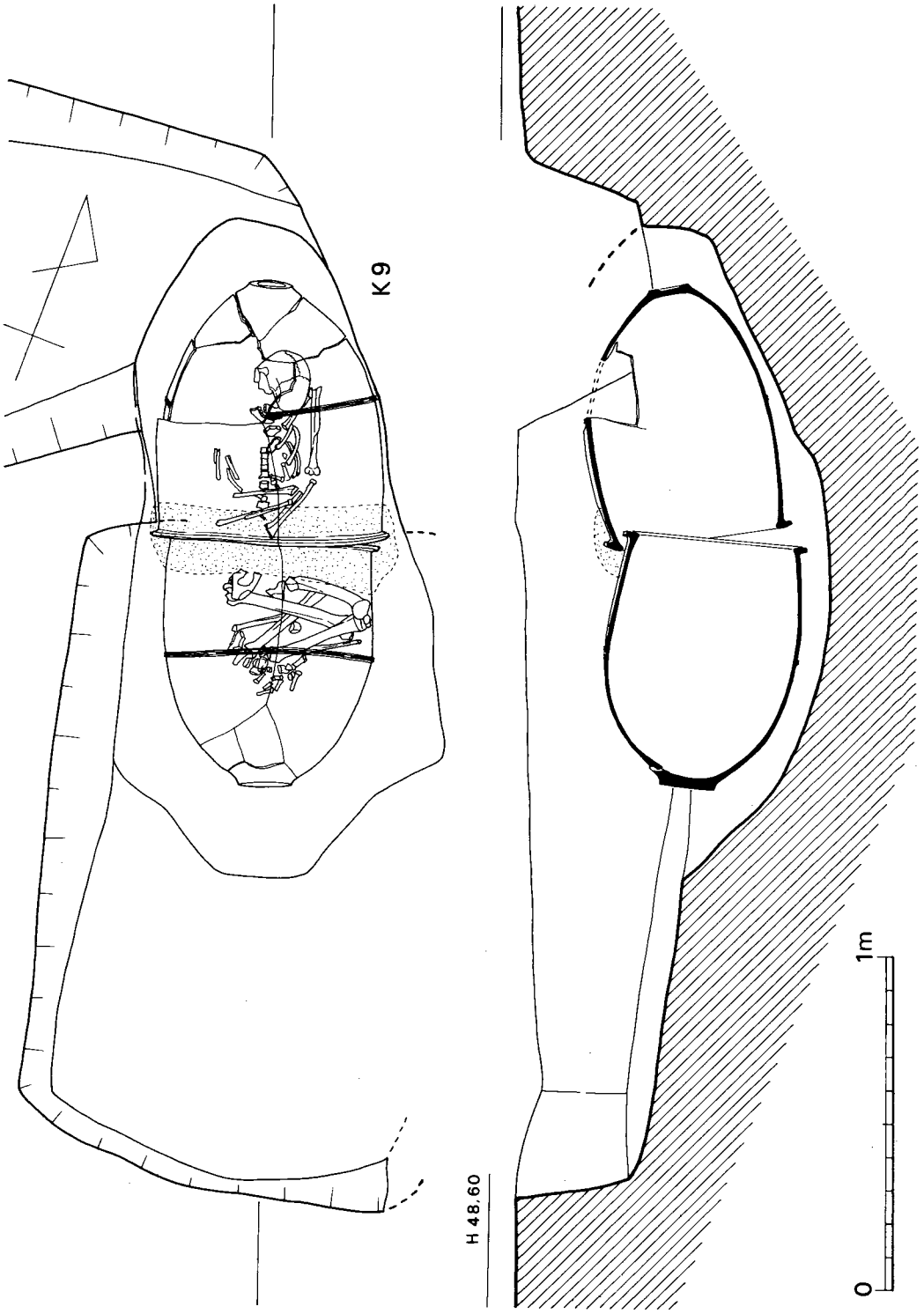


Fig. 58 甕棺墓実測図7（縮尺1/20）

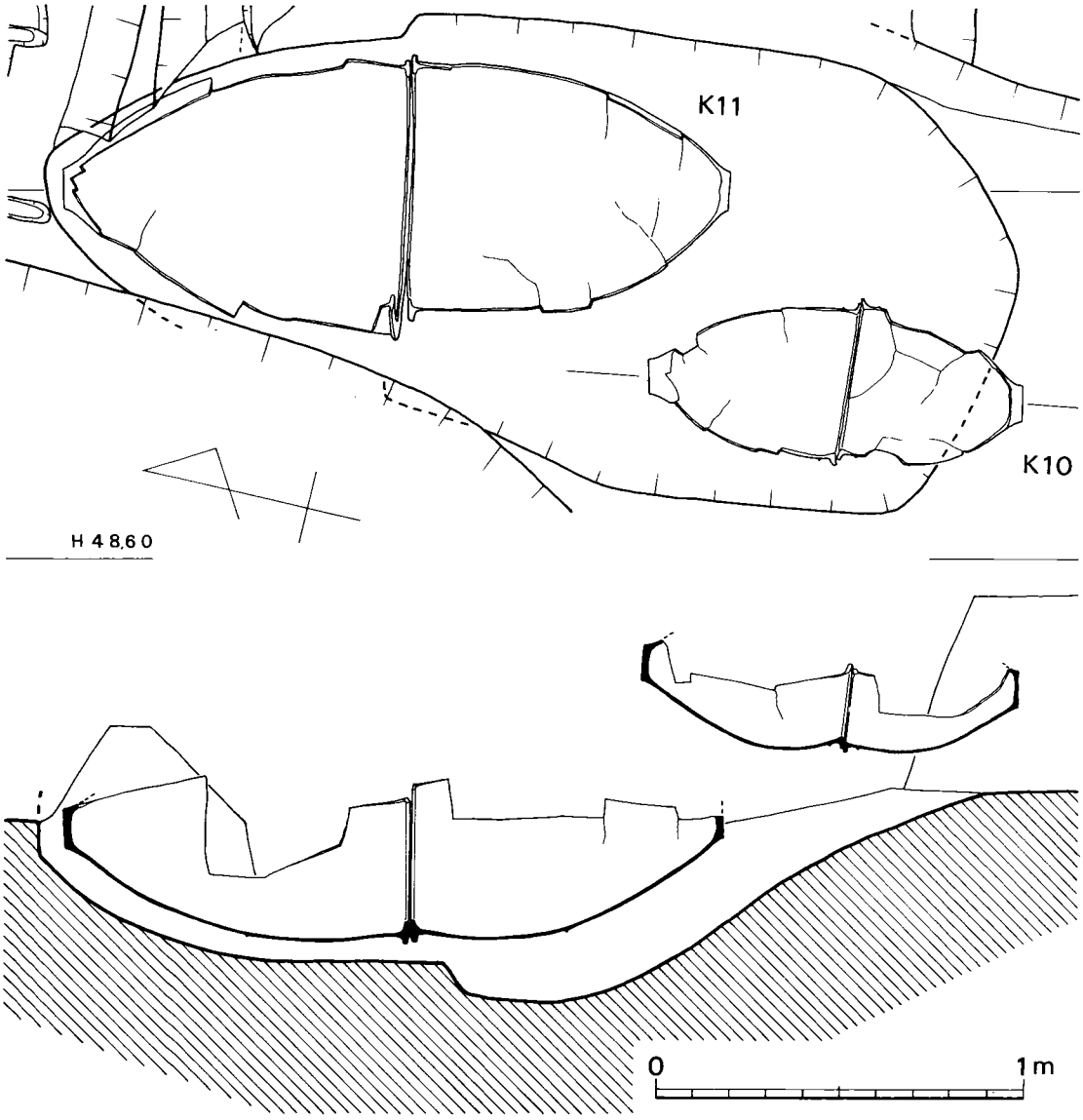


Fig. 59 甕棺墓実測図8（縮尺1/20）

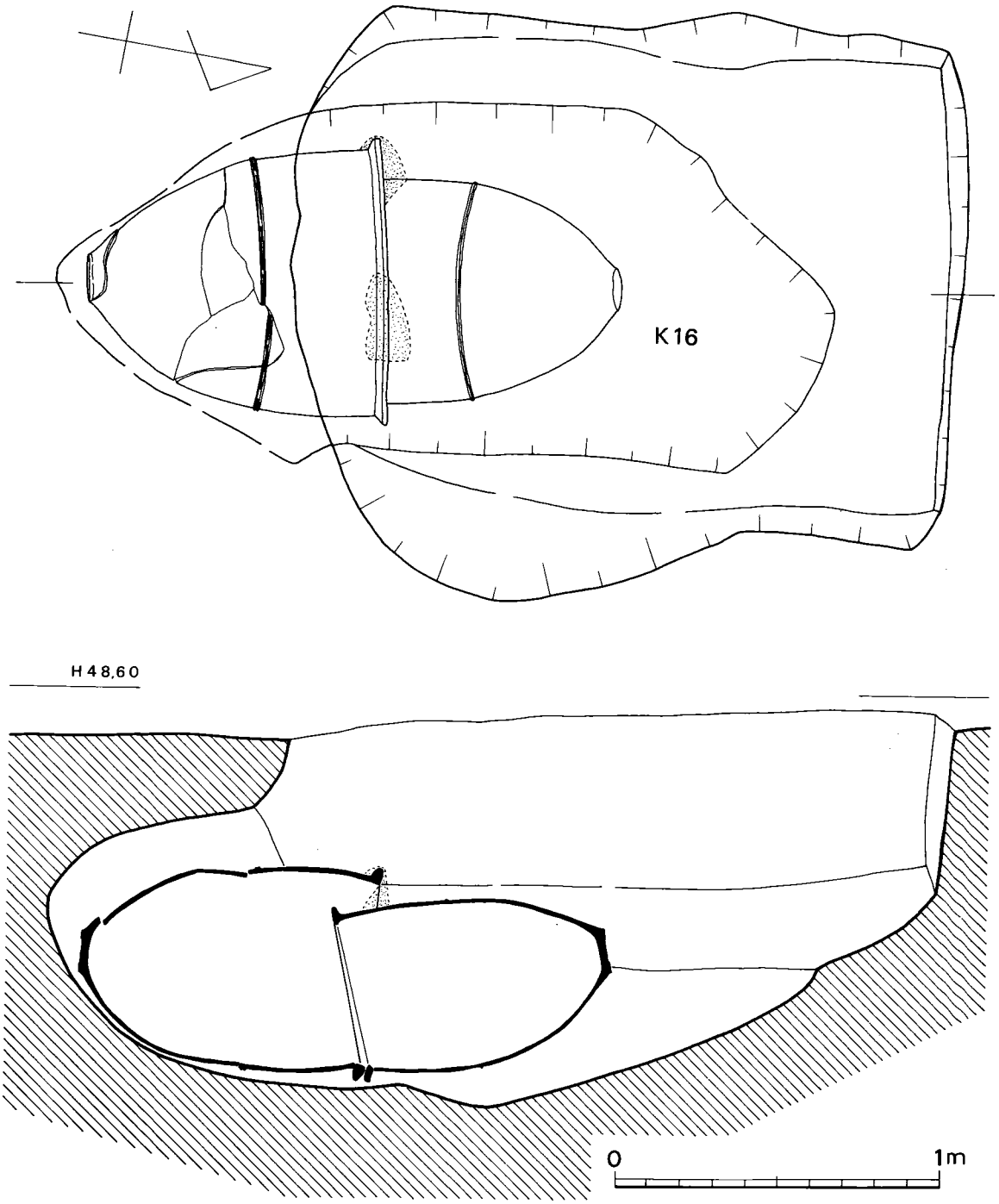


Fig. 60　甕棺墓実測図9（縮尺1/20）

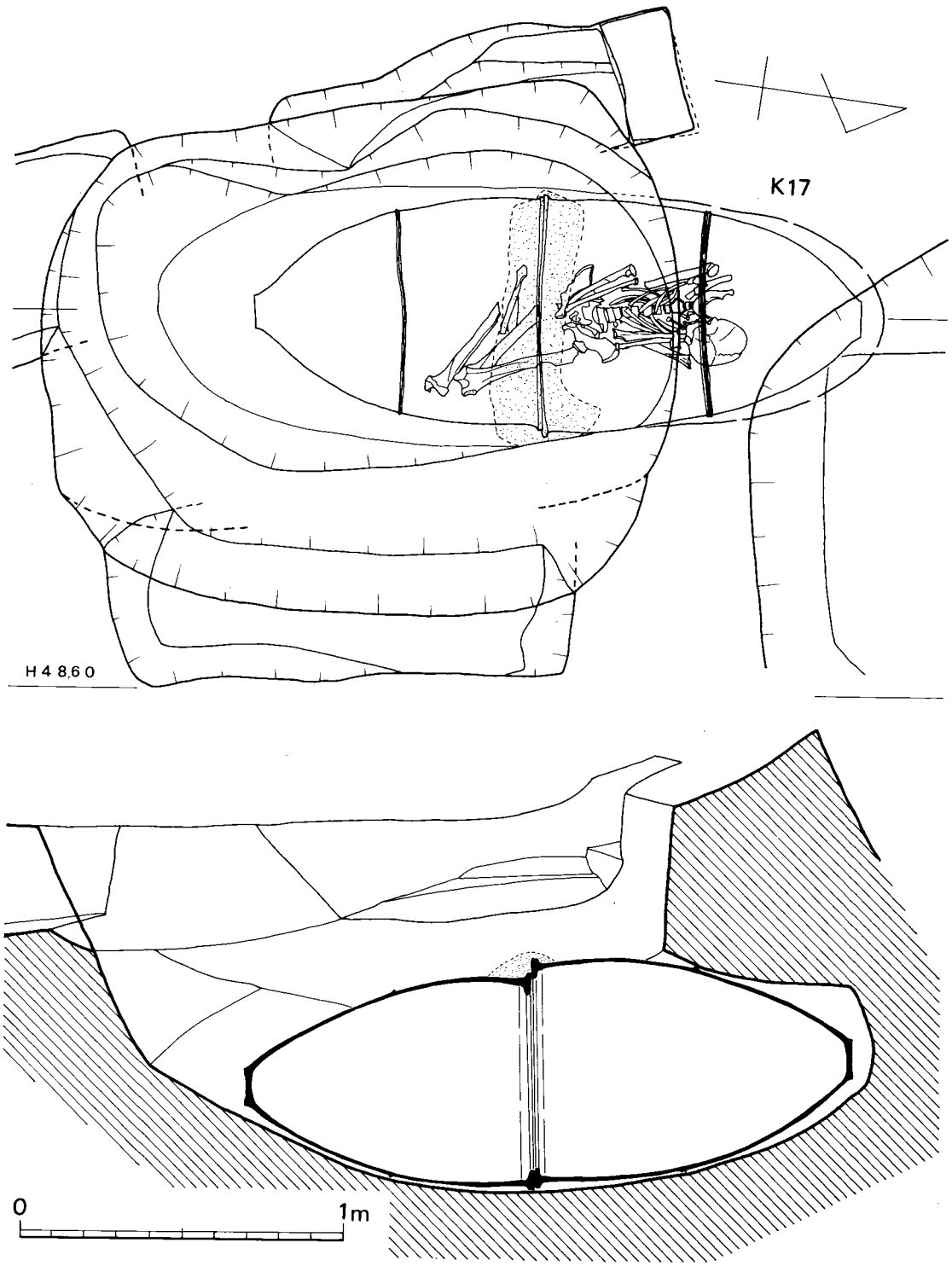


Fig. 61　甕棺墓実測図10（縮尺1/20）

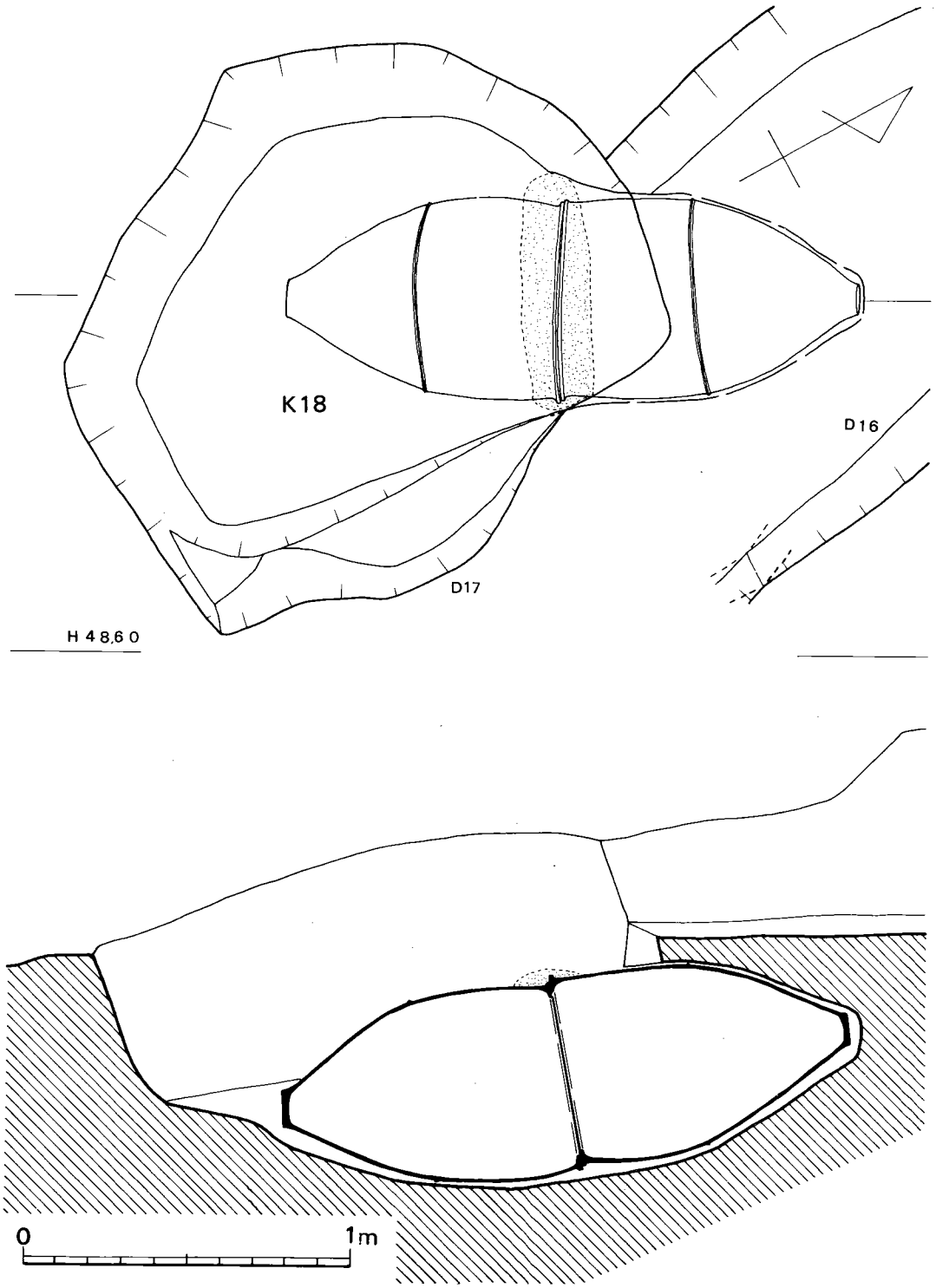


Fig. 62 甕棺墓実測図11 (縮尺1/20)

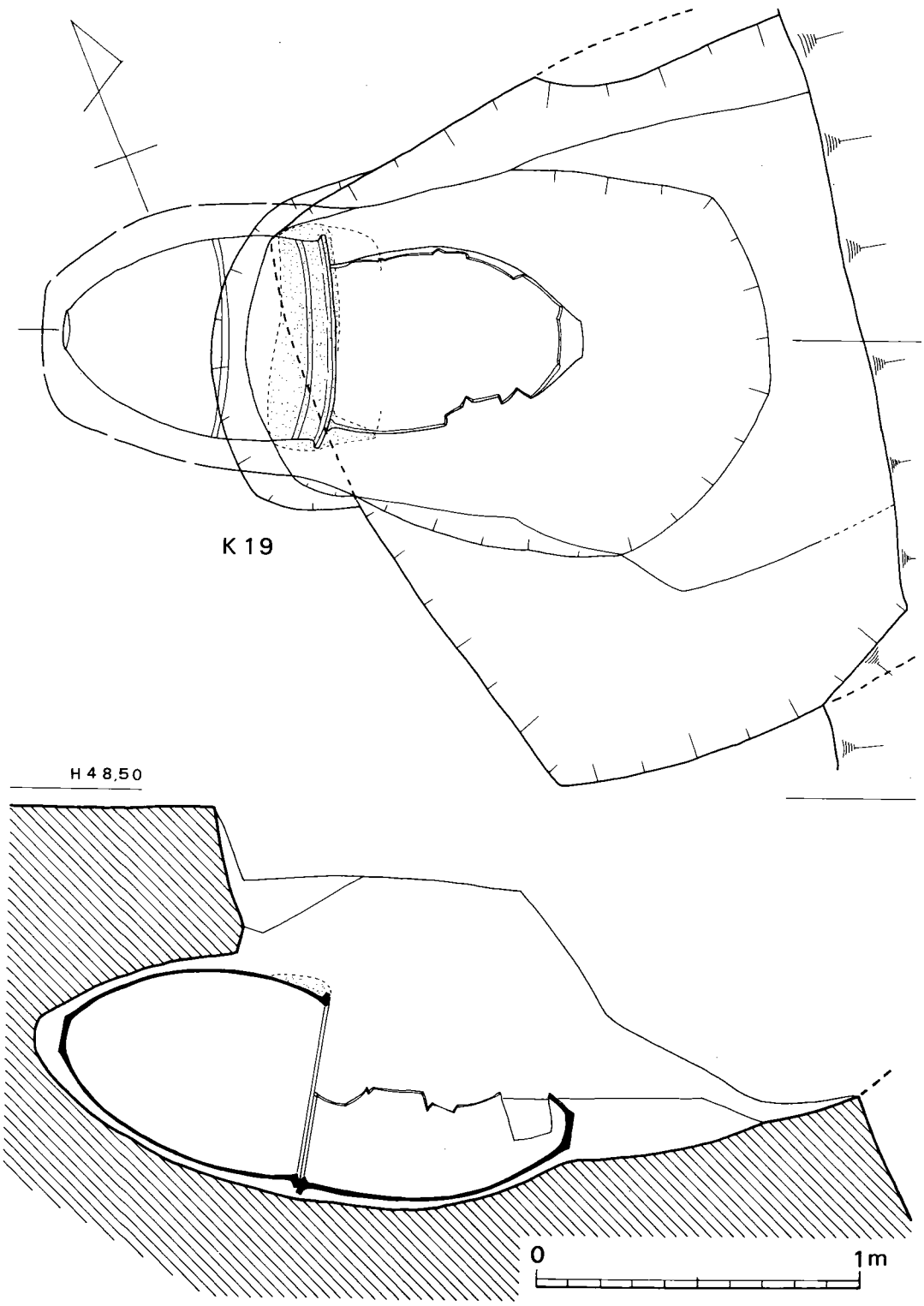


Fig. 63 甕棺墓実測図12（縮尺1/20）

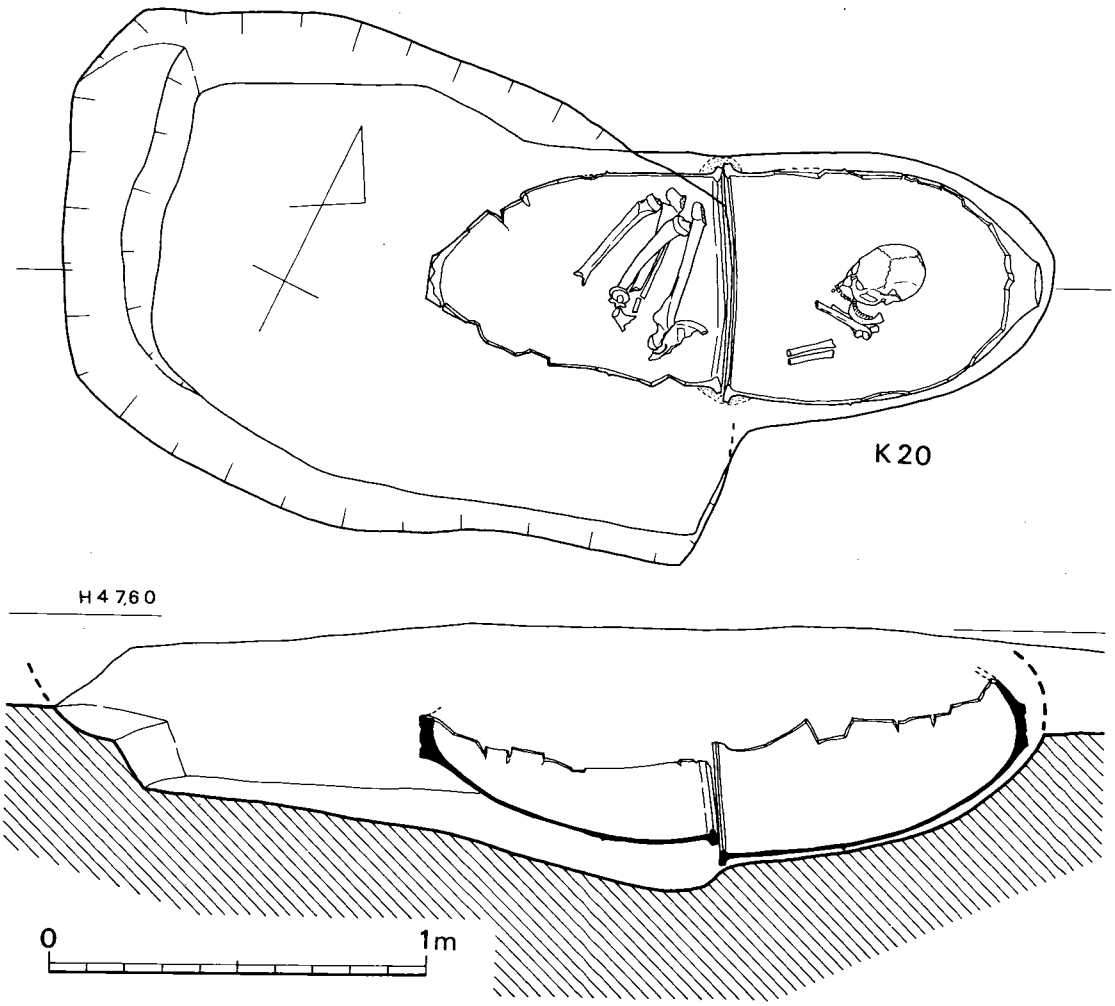


Fig. 64 甕棺墓実測図13（縮尺1/20）

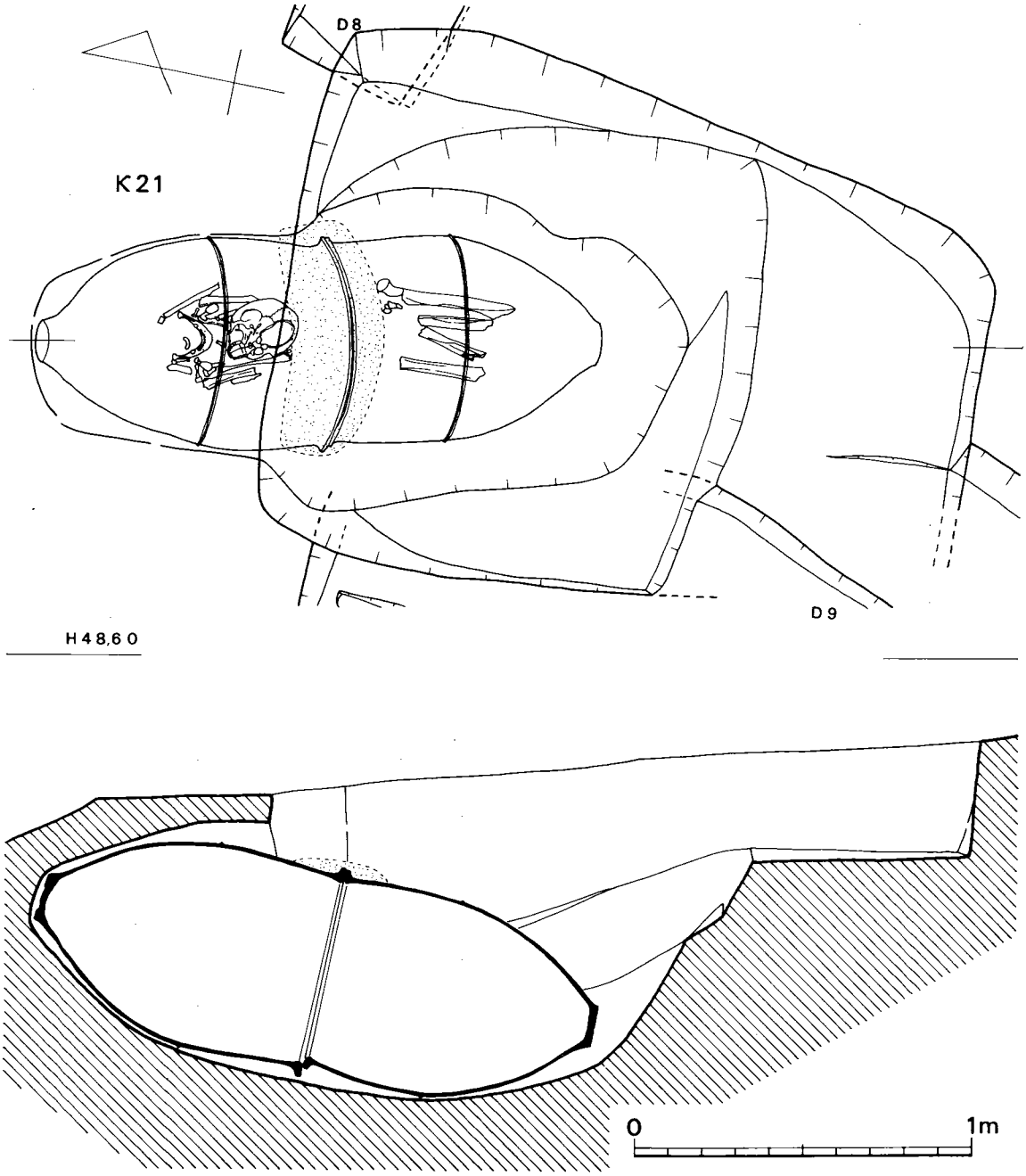


Fig. 65 甕棺墓実測図14（縮尺1/20）

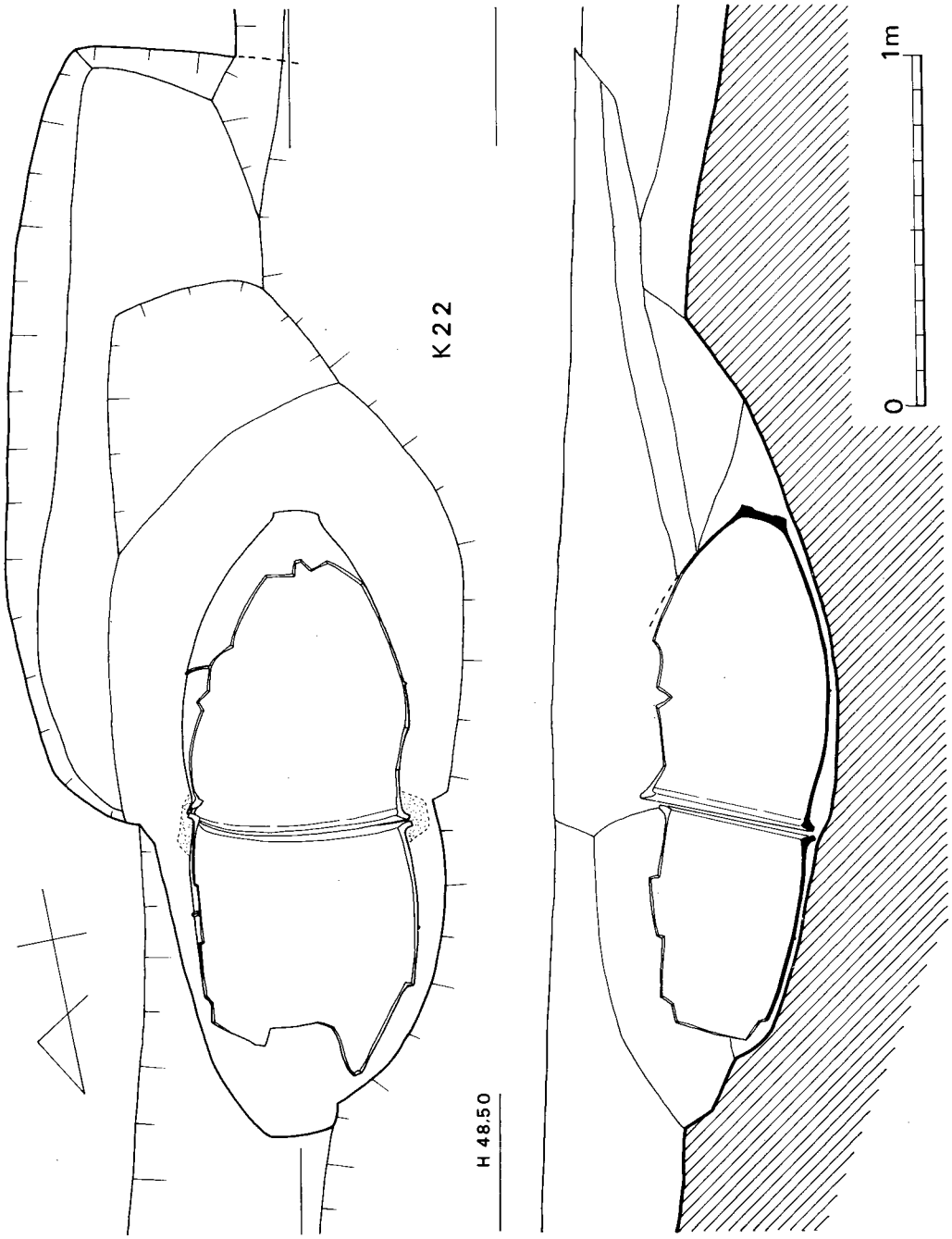
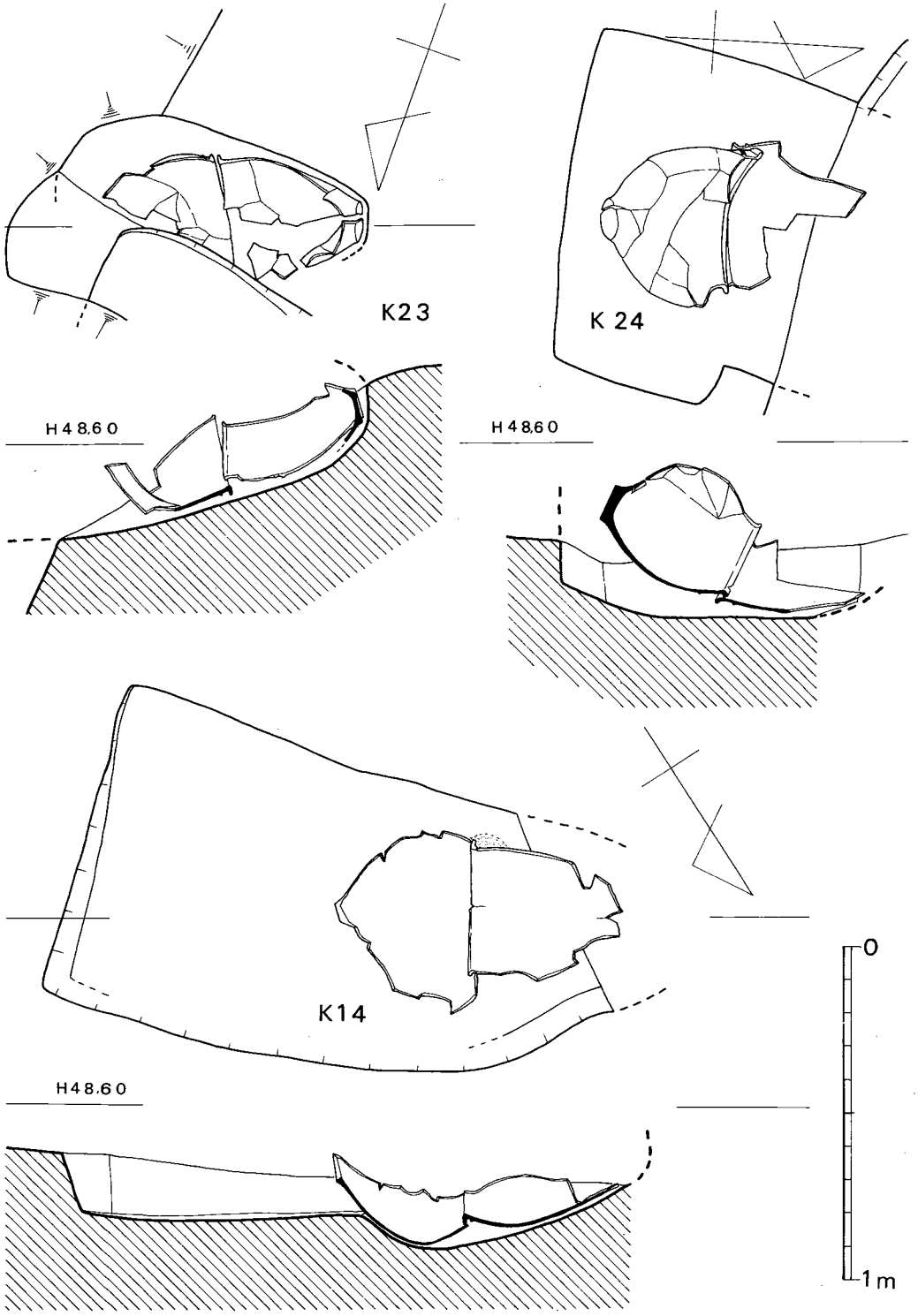
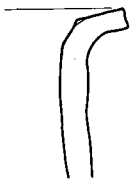
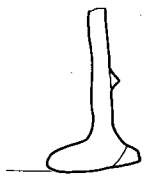
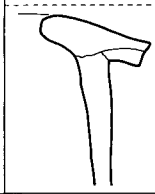
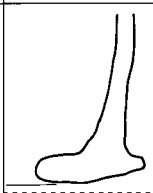
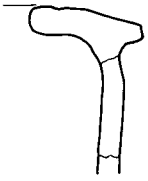


Fig. 66 甕棺墓実測図15（縮尺1/20）

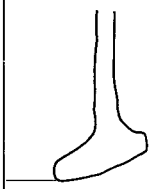
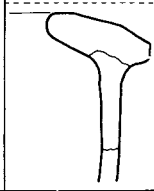
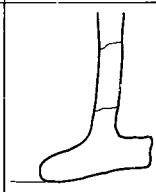
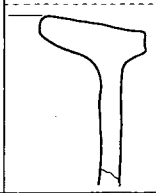
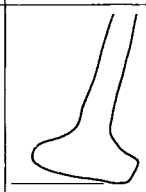
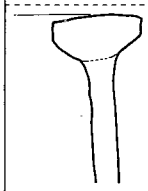
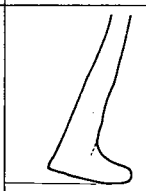
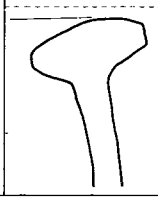


F. g. 67　甕棺墓実測図16（縮尺1/20）

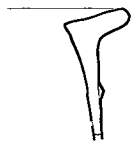
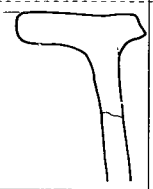
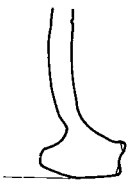
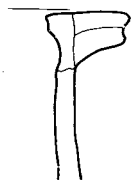
Tab. 7　ハサコの宮甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
上 2次 K1	KIIa 併行期		三角口縁を呈し、口縁下には三角凸帯1条。内面の調整は丁寧なナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。明るい黄褐色を呈し、胎土には小砂粒を含む。焼成はやや軟質。	○鉢 ○日常容器の転用と思われる。
下	KIIa 併行期		頸部より上を打ち欠く。肩部には三角凸帯1条。底部はわずかに上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、底部には指圧痕あり。器表はハケ→ミガキ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。	○壺 ○口縁打欠 ○日常常器の転用と思われる。
上 2次 K2	KIIa		外反する口縁の内側に三角凸帯をつくる。口縁下及び胴部に三角凸帯1条。胴上半はずぼまる。内面の調整はハケ→ミガキ、器表は胴下半ばハケ目（ナデなし）、上半はハケ→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴中央部に大黒斑と、反対側の胴凸帯より上部に小黒斑あり。	○地方色 ○内面及び胴上半部に黒塗りの痕跡。
下	KIIa		外反する口縁の内側に三角凸帯1条を貼付。胴上半はすぼまる。胴部凸帯は造り1条見かけ2条、底部はわずかに上げ底。内面の調整は口縁下を横方向の粗いハケ、それより下は擦過→ナデ。器表はハケ→ナデ（底部に若干ハケ目が残る）。赤味を帯びた黄褐色、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。胴上半部に黒斑あり。	○地方色 ○内面及び器表底部付近に、黒塗りの痕跡。 ○水ぬき孔あり（外→内へ）
上 K1	KIIc		口縁は内側に発達し，外に低く傾斜する。口縁下に三角凸帯1条。調整は内外ともにナデ。暗黄色を呈し，胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。	○鉢
下	KIIc		口縁は内外に発達し、外に低く傾斜する。胴上半はややすぼまる。胴部のやや上位に三角凸第2条、底部はわずかに上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴上半と反対側の胴下半に黒斑あり。	
上 K2	KIIc		口縁は内側に発達し、外に低く傾斜する。胴上半はやや開きぎみ。胴部中位に造り1条見かけ2条の凸帯。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯・底部は横ナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。	○口縁内側から器表にかけて黒塗りの痕跡。
下	KIIc		口縁は内側に発達し、外に低く傾斜する。胴上半は開く。胴部中位に三角凸帯2条。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴上半及び反対側の下半に大黒斑と、他に小黒斑が数ケ所にある。	

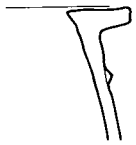
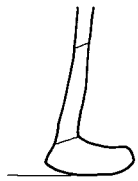
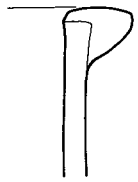
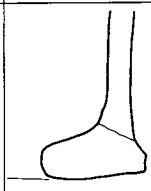
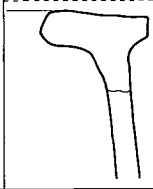
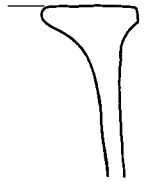
Tab. 7　ハサコの宮甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
上 K5	KIIc		口縁は内側に発達し，外に低く傾斜する。胴上半は外方に開き、胴部のやや下位に三角凸帯２条。調整は内外ともにナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。淡黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。底部に黒斑あり。	
下 K5	KIIc		口縁は内側に発達し、外にかなり低く傾斜する。胴上半は外方に開く。胴部のやや下位に三角凸帯２条。内面の調整は縦方向の擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。底部黒斑、凸帯より上部に小黒斑２つ。	
上 K6	KIIc		口縁は内側に発達し、外に低く傾斜する。胴上半はやや開きぎみ。胴部のやや下位に造り１条見かけ２条の凸帯底部はわずかに上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表は化粧土→ハケ（底部にのこる）→ナデ。暗黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬質。口縁・底部及び胴上半に小黒斑あり。	
下 K6	KIIc		口縁は内側に発達し、外に低く傾斜する。胴上半はやや外方に開きぎみ。胴部のやや下位に造り１条見かけ２条の凸帯。内面の調整はナデ、器表はハケ（底部にのこる）→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬。胴下半に黒斑。口縁部に黒塗りの痕跡、内面にその際の雫がたれた痕跡あり。	○口縁部に黒塗りの痕跡、内面にはしずくのあとあり。
上 K7	KIIa		口縁は内に低く傾斜するT字状。胴上半はすぼまり、胴部の上位に三角凸帯１条、底部は上げ底。内面の調整は一見ミガキ風を呈するが、擦過痕と思われる。器表はハケ（底部に残る）→ナデ。赤味を帯びた黄褐色、胎土には砂粒を含む。焼成硬。胴下半に黒斑、胴下半及び口縁下に縦粘土板を接合したと思われる部分あり。	
下 K7	KIIa		口縁はまだ発達しないT字状でわずかに内に低い。胴上半はすぼまり、胴部のやや上位に三角凸帯１条。内面の調整は擦過→ナデ、器表は化粧土→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴下半部に黒斑あり。	
上 K8	KIIa		口縁は内に低く傾斜する逆L字状。胴上半は大きくすぼまり、胴上位に三角凸帯１条。凸帯下には設計沈線あり。底部はわずかに上げ底。内外ともに一見ミガキ風を呈するが、擦過→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。口縁から凸帯下におよぶ黒斑あり。	
下 K8	KIIa		口縁部は内に低く傾斜するT字状。胴上半はすぼまり、胴部のやや上位に三角凸帯１条、凸帯下には設計沈線あり、内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ。黄橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴上半及び反対側の胴下半に黒斑あり。	

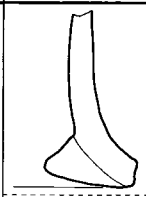
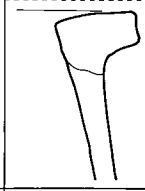
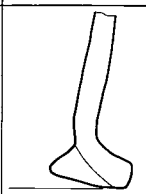
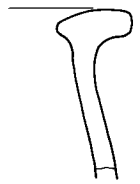
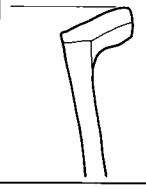
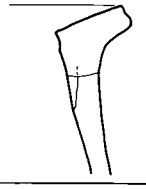
Tab. 7　ハサコの宮甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
上 K9	KIIa		口縁はほぼ平坦な逆L字状を呈するが、造りは三角口縁と同じ。胴上半はすぼまる。胴部凸帯は造り1条見かけ2条、凸帯下には設計沈線あり。底部は大きく分厚く、古い要素を残し、わずかに上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表は化粧土⟶ミガキか。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成やや軟質。胴上半に黒斑。	○地方色
下	KIIa		口縁は三角口縁。胴上半はすぼまる。胴部凸帯は造り1条見かけ2条、凸帯下には設計沈線あり。底部の特徴は上甕に同じ。内面の調整は擦過⟶ナデ、器表は化粧土⟶ハケ目⟶ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質で不良。胴上半から底部にかけて大黒斑あり。	○地方色
南 K10	KIIb 併行期		口縁は内に低く傾斜する逆L字状。口縁下には三角凸帯1条。胴部最大径は上位にある。底部はややしまる。内面の調整はナデ、器表はハケ目であるが剝落いちぢるしい、口縁・凸帯部は横ナデ。淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質。	○日常容器の転用と思われる。
北	KIIb 併行期		口縁は内に低く傾斜する逆L字状。口縁下には三角凸帯1条。胴部最大径は上位にある。底部はしまりわずかに上げ底。内面の調整は底部が指おさえ、他はナデ、器表はハケ目。茶褐色を呈し、胎土には大粒の砂粒を含む。焼成はやや硬く良。底部に黒斑あり。	○日常容器の転用と思われる。
上 K11	KIIb		口縁は内外に発達したほぼ平坦なT字状を呈す。胴上半はすぼまり、ほぼ胴部中位に三角凸帯1条、凸帯下には設計沈線あり。内外ともにナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良。底部に黒斑あり。	
下	KIIb		口縁はほぼ平坦で、内側に大きく発達している。胴上半はすぼまり、胴部のほぼ中位に三角凸帯1条。内面の調整は2/3下半を粗いハケ⟶ナデ、1/3上半はナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴上半に黒斑あり。	
K12	KII b～c 併行期		上半部を欠失する。器壁はきわめてうすい。内面の調整は底部が指おさえ、他の部分はナデ、器表はハケ目。暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質で不良。胴部に二次的火熱による赤変、及び煤付着。	○小児用単棺 ○胴部に煤が付着するので日常容器の転用と思われる。
上 K13	KIIa		口縁、口縁の刻目、胴上半の縦・横の沈線等にKIc式的要素を残しているが、全体の器形（特に胴上半の曲線）胴部に三角凸帯を貼付するところ等、KIIa式に共通する。内面の調整はナデ、器表は化粧土⟶ナデ。茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質で不良。	
下	KIIa		上甕に比較すると全体の器形（特に胴上半の曲線）はKIc式的要素をもつ。しかし胴上半の縦沈線が乱雑になり、細く痕跡的であり、又胴部凸帯をもつ点等からKIIa式とした。内外ともにナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。赤味を帯びた茶褐色、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。口縁から胴下半及び反対側の凸帯上下に黒斑あり。	

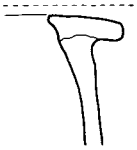
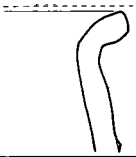
Tab. 7　ハサコの宮甕棺一覧表

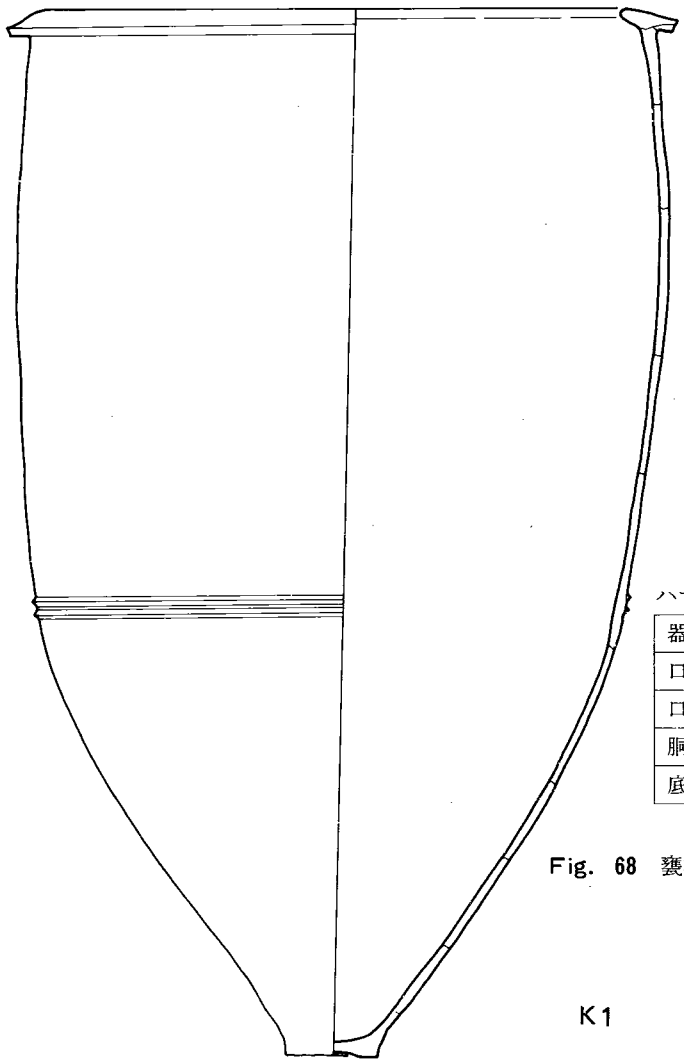
番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
上	KIIa 併行期		胴上半部より上を打ち欠く。底部は大半を欠失するが若干上げ底気味である。内面の調整はナデ、器表は風化いちぢるしく不明。茶褐色を呈し、胎土には小砂粒を含む。焼成は軟質。胴部に二次的加熱による赤変部あり。	○壺 ○頸部打欠 ○日常容器の転用
K14 下	KIIb 併行期		わずかに内に低く傾斜する逆L字状。口縁下に三角凸帯1条。胴部中央よりやや上位に最大径あり。底部はしまり上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、底部には指圧痕あり、器表はハケ、口縁から凸帯部は横ナデ。淡灰黄色。胎土には砂粒を含む。焼成は軟質。胴上半に黒斑。	○胴部に煤が付着するので日常容器の転用
上	KIIa		口縁はわずかに内に低く傾斜する逆L字状。胴上半はすぼまり、胴部には三角凸帯1条。底部はわずかに上げ底。内面の調整は擦過→ナデ（一見ミガキ風）、器表はハケ→ナデ、（凸帯下にハケ目あり）、口縁・凸帯部は横ナデ。口縁裏面は指おさえ。灰黄色を呈し、胎土には小砂粒を含む。焼成は軟質。	
K16 下	KIIa		口縁は典型的な三角口縁。胴上半はややすぼまる。胴部には造り1条見かけ2条の凸帯、凸帯の上下に設計沈線あり。内外ともに擦過→ナデ（一見ミガキ風）。やや黄のつよい灰黄色。胎土には砂粒を含む。焼成は軟質で不良。胴上半のほぼ半分に黒斑あり。胴部に部分的に丹の痕跡あり。	○地方色 ○部分的に丹の痕跡あり。
上	KIIb		口縁は内側に発達し、わずかに外に低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴部中位に三角凸帯1条をめぐらす。底部はわずかに上げ底。調整は内外ともにナデ。口縁・凸帯部は横ナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。器表半面の各所に黒斑あり。	○内面口縁下から器表にかけて黒塗りの痕跡。
K17 下	KIIb		口縁は内側に発達し、外にわずかに低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴部中位に造り1条見かけ2条の凸帯あり。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。赤味を帯びた茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。器表口縁下に黒斑あり。内面口縁下から器表にかけ黒塗りの痕跡あり。	
上	KIIb		口縁は内側に発達し、わずかに外に低く傾斜する。口縁下はややすぼまり、胴部中位に三角凸帯1条を貼付する。底部は細くひきしまり、わずかに上げ底を呈する。口縁・凸帯部は横ナデ。	
K18 下	KIIb		口縁は内側に発達し、わずかに外に低く傾斜する。口縁下はややすぼまり、胴中央よりやや上位に三角凸帯1条を貼付する。底部は細くひきしまり、わずかに上げ底を呈する。内面の調整は幅広く細いハケ目（擦過）、器表はハケ目の痕跡等なし、内面上部に黒塗の痕跡あり。	○内面上部に黒塗りの痕跡あり。

Tab. 7　ハサコ　宮甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
上 K19	KIIa		口縁はあまり発達せず、内に低く傾斜する。胴上半はすぼまる、胴部には三角凸帯１条。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。赤味を帯びた黄褐色、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。	
下	KIIa		口縁は低く傾斜する逆Ｌ字状。胴上半はすぼまる。口縁下に２条、胴部に２条及び一周しない１条の沈線あり。内面の調整は擦過―→ナデ。器表は擦過―→ナデ（一見ミガキ風）口縁部は横ナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴上半と反対側の胴下半部に黒斑あり。	
上 K20	KIIa		口縁はあまり発達せず、内に低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴部には三角凸帯１条。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。暗黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。	
下	KIIa		口縁はあまり発達せず、内に低く傾斜する。胴部上半はすぼまり、胴部上位に三角凸帯１条。底部は上げ底。内面の調整は擦過―→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。赤味を帯びた黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。器壁厚は８～９*mm*とやや厚い。胴下半に黒斑あり。	
上 K21	KIIa		口縁はまだ発達しない逆Ｌ字状で内に低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴部の上位に三角凸帯１条。内面の調整は擦過―→ナデ（一見ミガキ風）、器表はハケ―→ナデ（胴下半に部分的に細いハケ目が残存）。赤味を帯びた黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴下半に大黒斑、反対側の胴上半に小黒斑あり。	
下	KIIa		口縁はまだ発達しない逆Ｌ字状で、内に低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴部の上位に三角凸帯１条。底部はわずかに上げ底。内面は擦過―→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴下半に黒斑、反対側の胴上半に小黒斑。	
上 K22	KIIa		口縁はあまり発達せず、内に低く傾斜するＴ字状。胴上半はすぼまり、胴部の上位に三角凸帯１条、凸帯より下位に設計沈線と思われるものがあるが一周せず。内面の調整は擦過―→ナデ、器表はハケ―→ナデ（ハケ目は見られないが、ハケ目工具の痕跡が認められる）。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。	○内外ともに黒塗りの痕跡あり。
下	KIIa		口縁は発達せず、内に低く傾斜する逆Ｌ字状。胴上半はすぼまり、胴部の上位に三角凸帯１条。凸帯下には設計沈線あり。底部は欠失。内面の調整は擦過―→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。灰黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。器表に黒塗りの痕跡あり。	○器表に黒塗りの痕跡あり。

Tab. 7　ハサコの宮甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
上 K23	KIIb 併行期		わずかに内に低く傾斜する逆L字状を呈す。口縁下には三角凸帯1条。胴部最大径は胴部のやや上位にある。内外ともにナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。赤味を帯びた暗黄色、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。胴上半に二次的火熱を受けた赤変部あり。	○深鉢。 ○二次的火熱を受けた赤変部があるので、日常容器の転用と思われる。
下	KIIb 併行期		口縁は外に低く傾斜する逆L字状。口縁部には刻目。胴上半はすぼまり、胴部上位に山形凸帯あり。底部はわずかに上げ底。内外ともに擦過→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。口縁内側から器表にかけて黒塗りの痕跡。	○口縁内側から器表にかけて黒塗りの痕跡あり。
上 K24	KIc 併行期		口縁は外反し、口縁下に三角凸帯1条。胴部最大径は胴部上位にある。底部は欠失。内面の口縁下には指圧痕あり、他は風化いちじるしく観察不能、器表はハケ目。暗黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は軟質。胴部最大径より下に煤付着。	○胴部に煤の付着がみられるので、日常容器の転用と思われる。
下	KIc 併行期		口縁は外反し、口縁下には三角凸帯下1条。胴部最大径は胴部の上位にあり、底部はわずかに上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表はタタキ→ハケ（底部にタタキ痕あり）、口縁・凸帯部は横ナデ。暗黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。底部近くに黒斑。	○深鉢。



ハサコの宮　K1　下

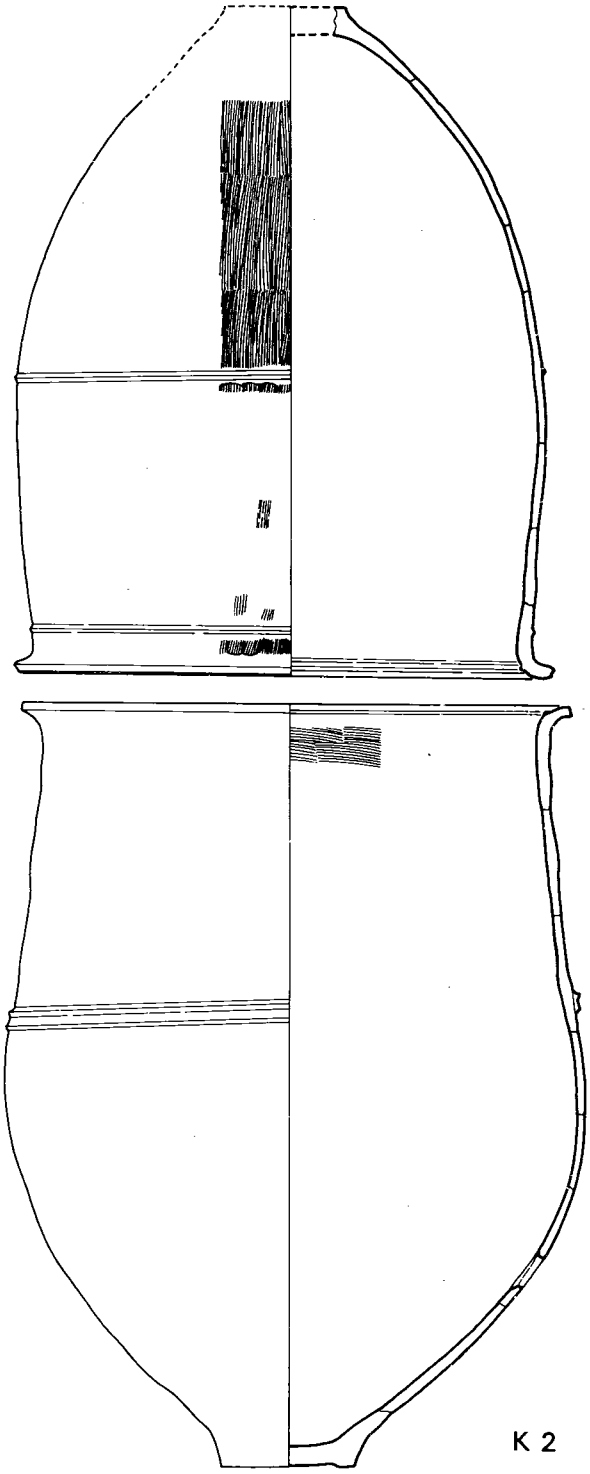
器高	110.9cm
口径	70.3cm
口縁内径	59.3cm
胴部最大径	68.4cm
底径	9.8cm

Fig. 68　甕棺実測図1（縮尺1/8）

K1

ハサコの宮　第２次
Ｋ２　上

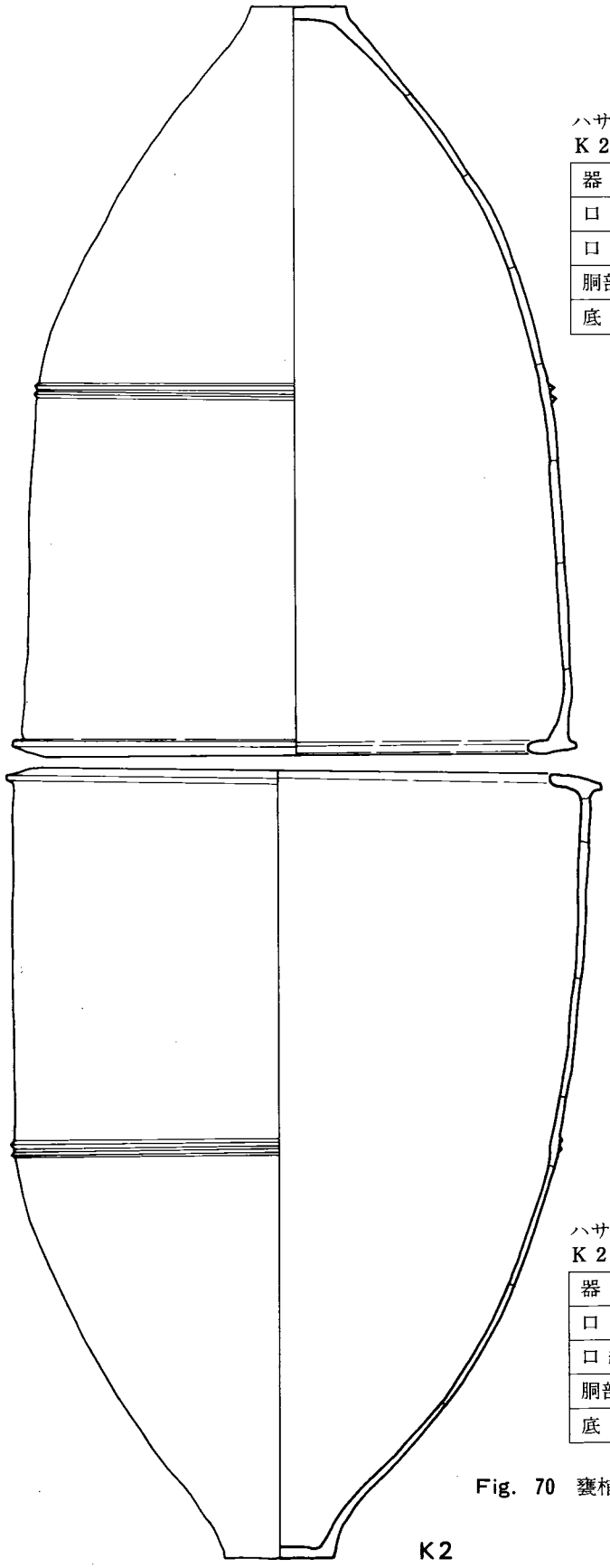
器　　高	71.0cm
口　　径	56.0cm
頸部最小径	69.1cm
胴部最大径	55.4cm
底　　径	



ハサコの宮　第２次
Ｋ２　下

器　　高	80.7cm
口　　径	57.3cm
頸部最小径	50.5cm
胴部最大径	60.7cm
底　　径	14.0cm

Fig. 69 甕棺実測図２〔第２次Ｋ２〕（縮尺1/8）



ハサコの宮　第２次
Ｋ２　上

器　　高	87.3cm
口　　径	65.8cm
口縁内径	53.2cm
胴部最大径	
底　　径	11.2cm

ハサコの宮　第２次
Ｋ２　下

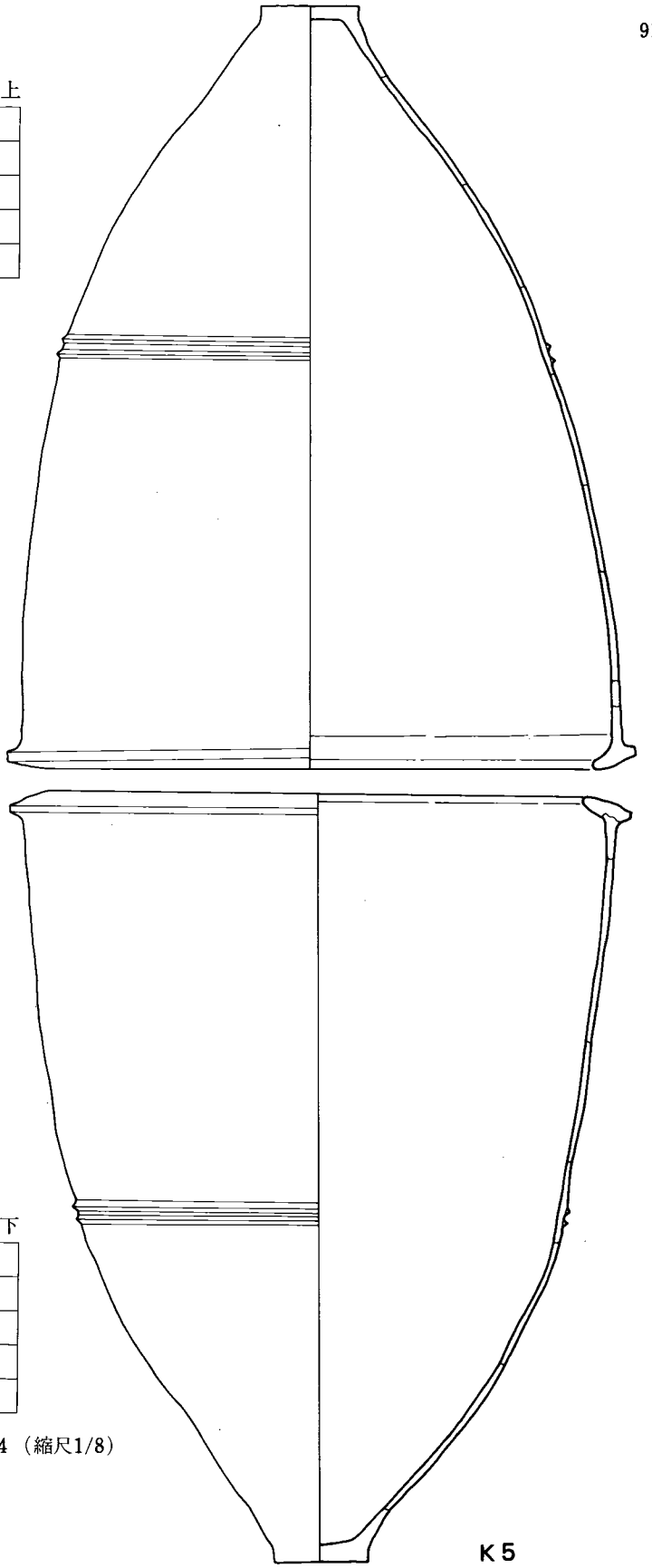
器　　高	92.7cm
口　　径	69.1cm
口縁内径	58.5cm
胴部最大径	
底　　径	12.7cm

Fig. 70　甕棺実測図３（縮尺1/8）

K2

ハサコの宮　K 5　上

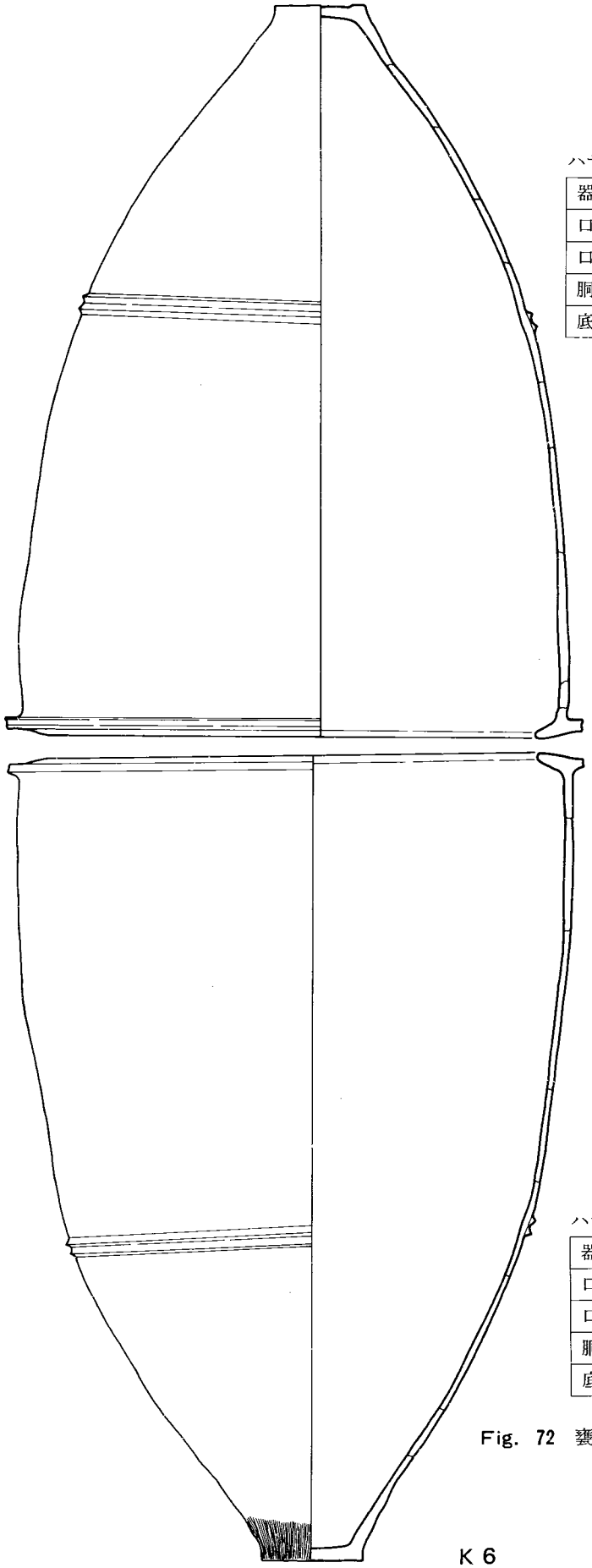
器　　高	88.8cm
口　　径	72.5cm
口 縁 内 径	63.0cm
胴部最大径	
底　　径	11.3cm



ハサコの宮　K 5　下

器　　高	90.0cm
口　　径	71.6cm
口 縁 内 径	68.0cm
胴部最大径	
底　　径	10.8cm

Fig. 71　甕棺実測図4（縮尺1/8）



ハサコの宮　K 6　上

器高	91.4cm
口径	71.4cm
口縁内径	59.6cm
胴部最大径	
底径	11.3cm

ハサコの宮　K 6　下

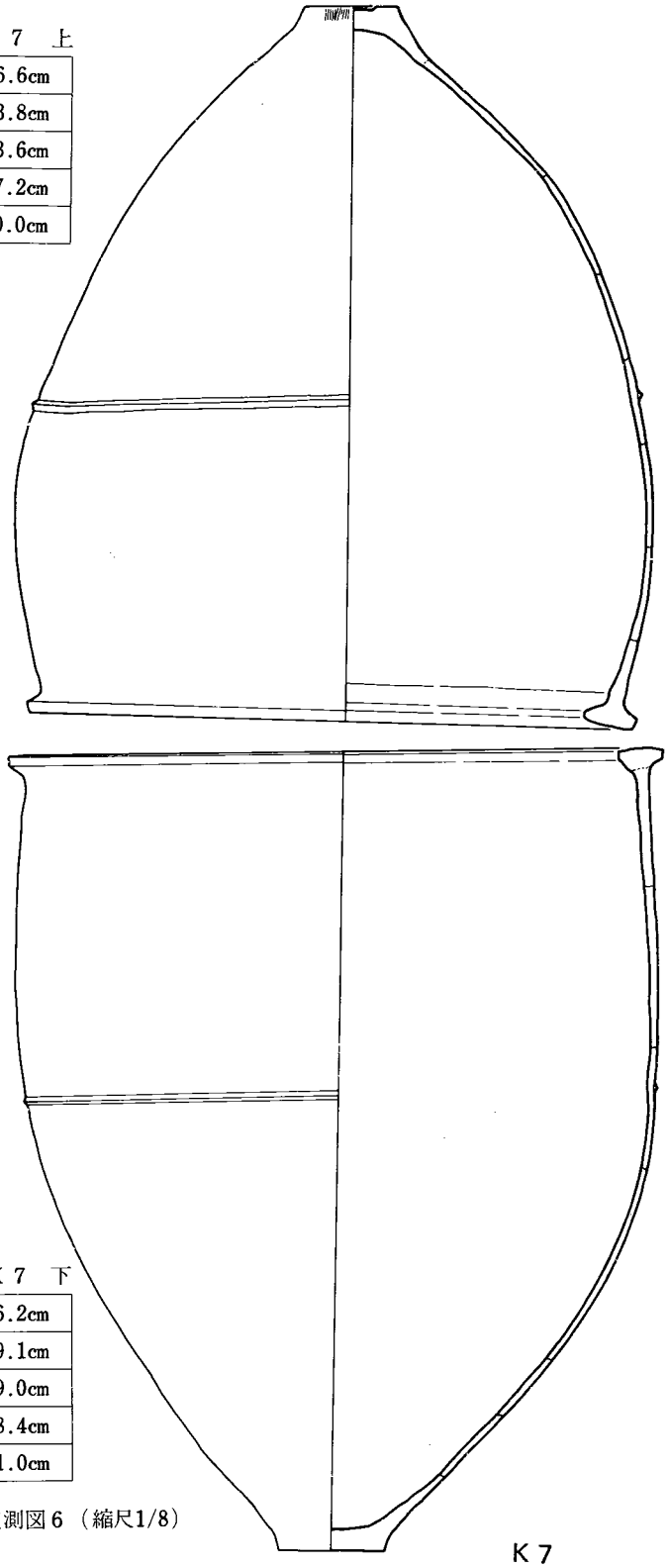
器高	101.0cm
口径	71.0cm
口縁内径	60.3cm
胴部最大径	
底径	12.5cm

Fig. 72　甕棺実測図5（縮尺1/8）

K 6

ハサコの宮　K 7　上

器高	76.6cm
口径	63.8cm
口縁内径	53.6cm
胴部最大径	67.2cm
底径	10.0cm

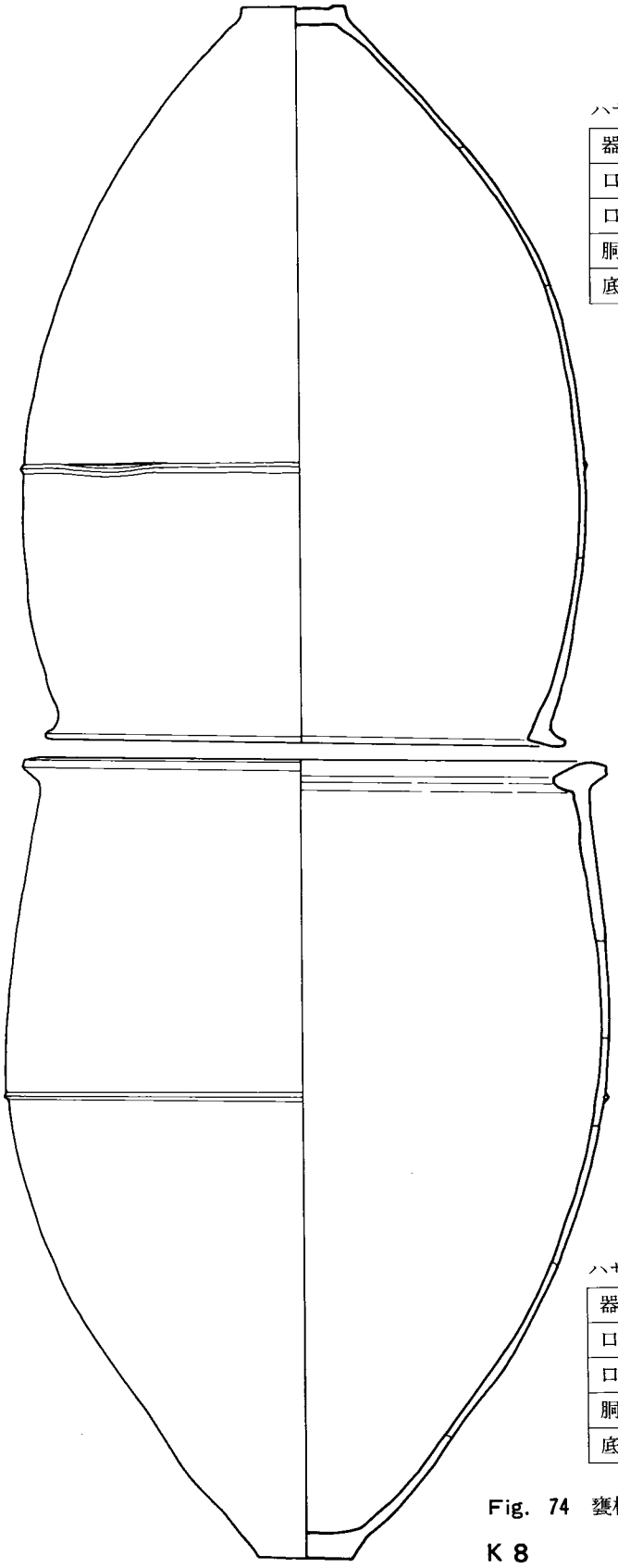


ハサコの宮　K 7　下

器高	86.2cm
口径	69.1cm
口縁内径	59.0cm
胴部最大径	68.4cm
底径	11.0cm

K 7

Fig. 73　甕棺実測図6（縮尺1/8）



ハサコの宮　K８　上

器　　高	83.9cm
口　　径	58.9cm
口縁内径	50.0cm
胴部最大径	63.7cm
底　　径	11.7cm

ハサコの宮　K８　下

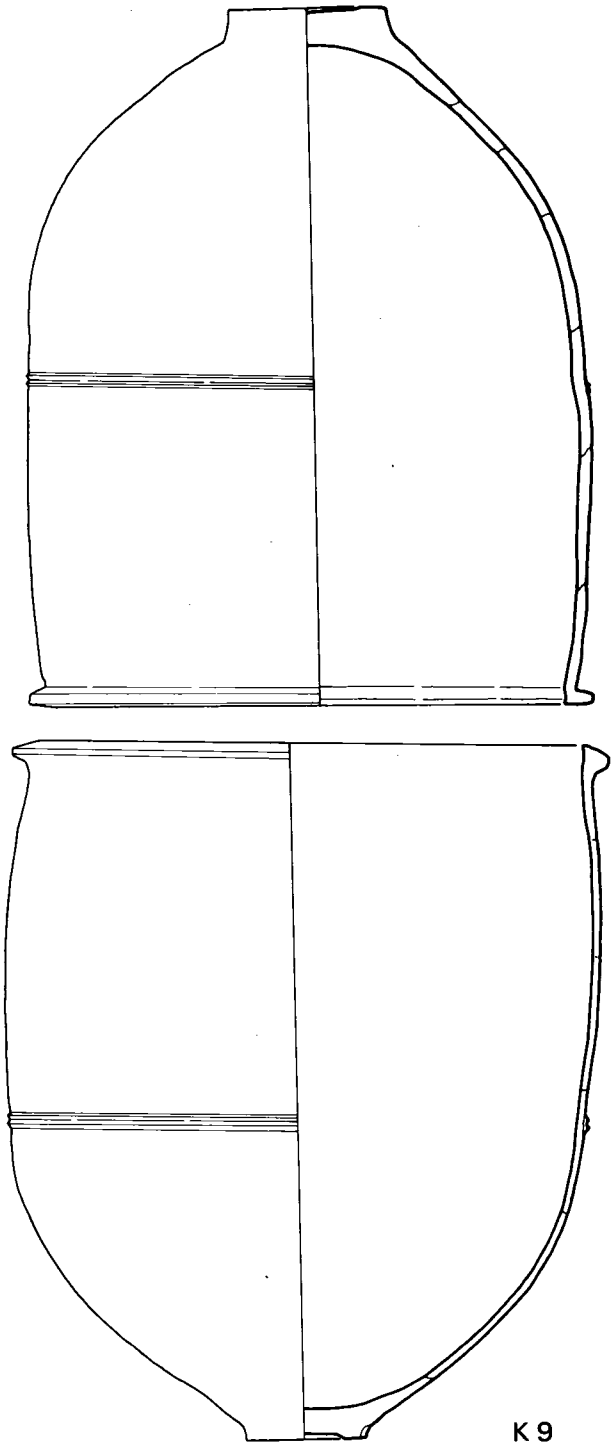
器　　高	91.5cm
口　　径	66～72cm
口縁内径	54.0cm
胴部最大径	68.3cm
底　　径	10.2cm

Fig. 74　甕棺実測図７（縮尺1/8）

K８

ハサコの宮　K９　上

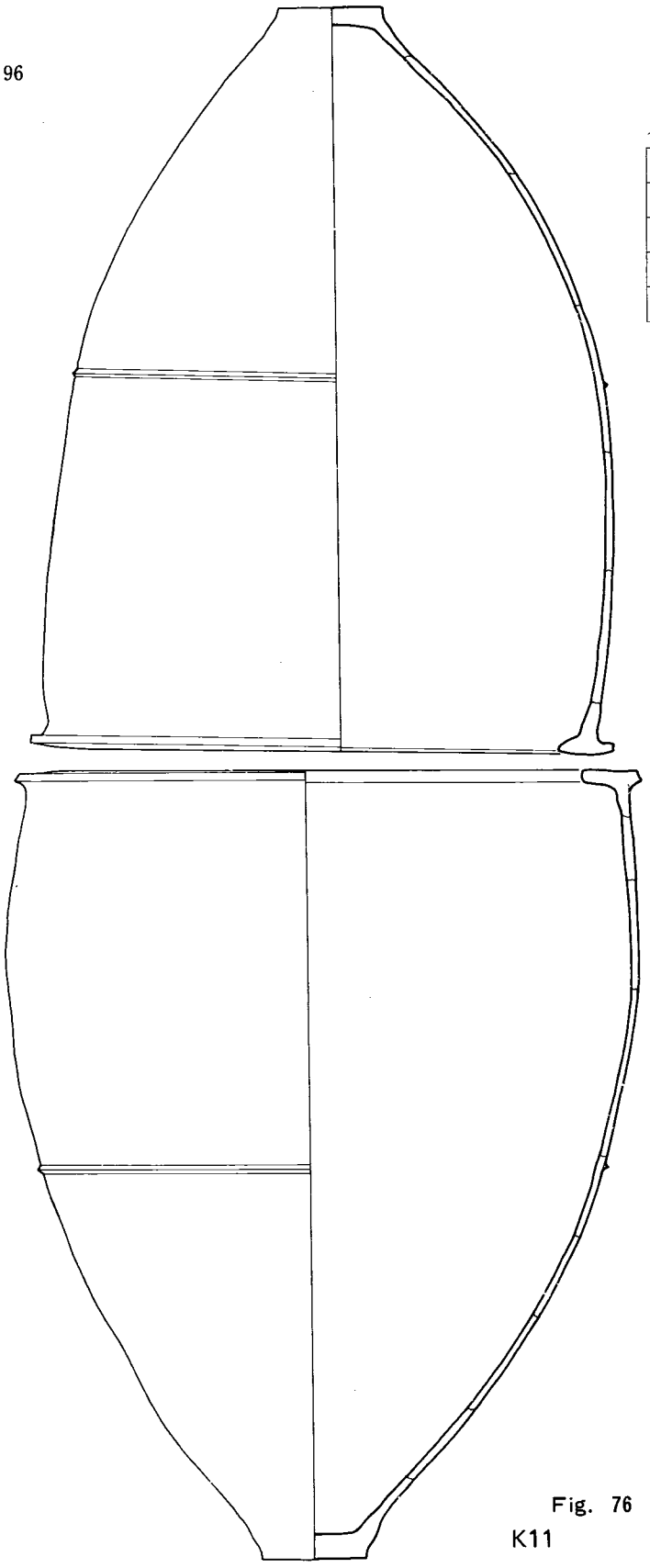
器　　高	74.0cm
口　　径	59.3cm
口縁内径	53.3cm
胴部最大径	59.3cm
底　　径	16.6cm



ハサコの宮　K９　下

器　　高	74.2cm
口　　径	62.8cm
口縁内径	56.7cm
胴部最大径	62.6cm
底　　径	12.6cm

Fig. 75　甕棺実測図８（縮尺1/8）



ハサコの宮　K11　上

器高	86.4cm
口径	66.6cm
口縁内径	53.6cm
胴部最大径	64.6cm
底径	12.0cm

ハサコの宮　K11　下

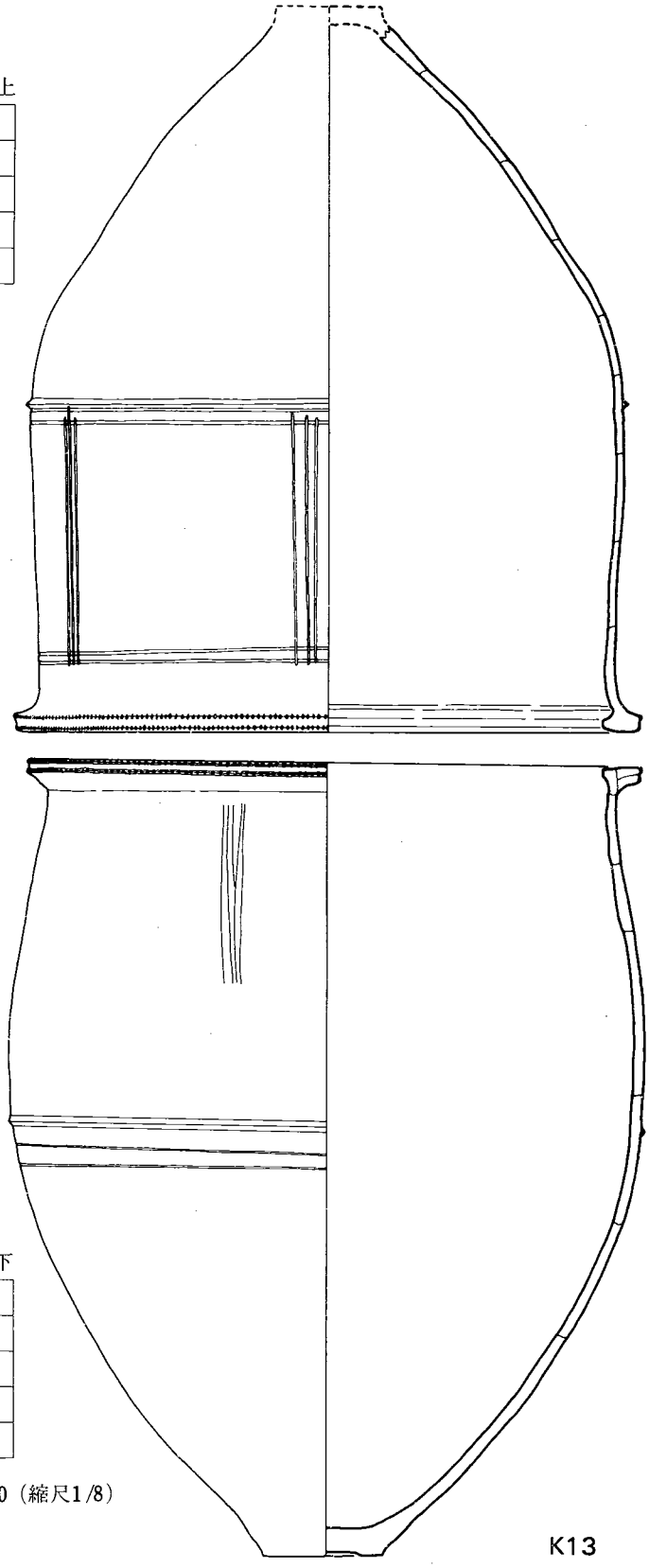
器高	91.0cm
口径	70.3cm
口縁内径	59.0cm
胴部最大径	72.0cm
底径	11.8cm

Fig. 76　甕棺実測図9（縮尺8/1）

K11

ハサコの宮　K13　上

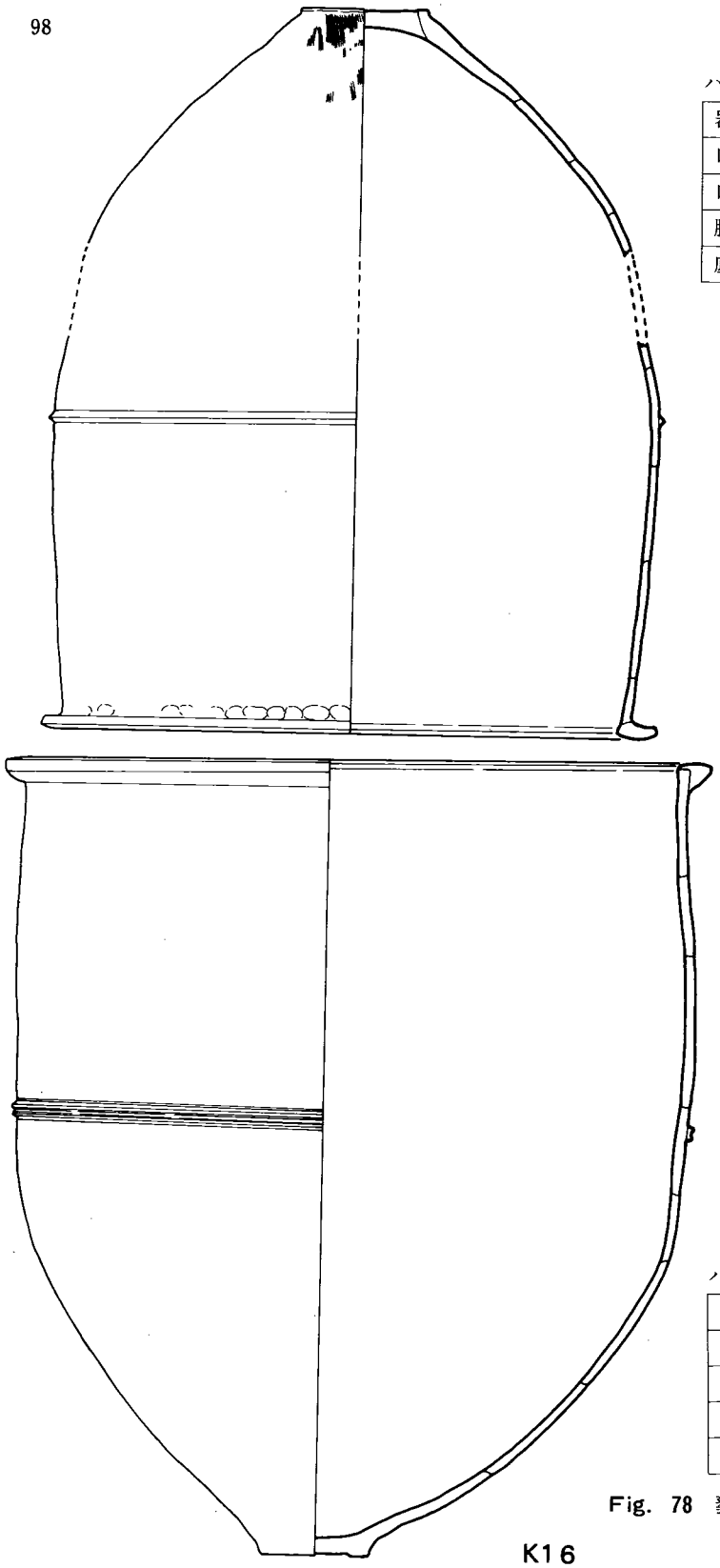
器　　高	
口　　径	69.6cm
口縁内径	60.8cm
胴部最大径	65.7cm
底　　径	



ハサコの宮　K13　下

器　　高	89.0cm
口　　径	68.3cm
口縁内径	58.9cm
胴部最大径	70.3cm
底　　径	13.1cm

Fig. 77　甕棺実測図10（縮尺1/8）



ハサコの宮　K16　上

器高	
口径	65.0cm
口縁内径	55.0cm
胴部最大径	63.6cm
底径	13.8cm

ハサコの宮　K16　下

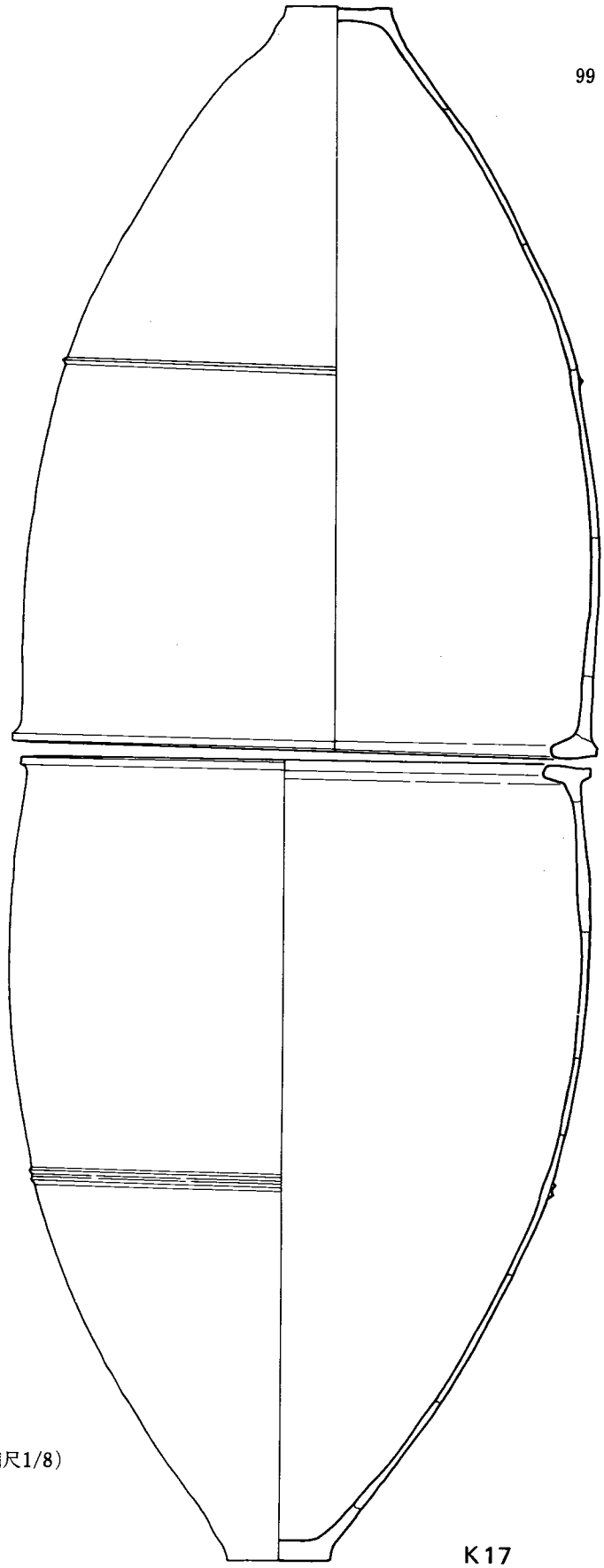
器高	88.5cm
口径	77.8cm
口縁内径	70.9cm
胴部最大径	74.3cm
底径	11.8cm

Fig. 78　甕棺実測図11（縮尺1/8）

K16

ハサコの宮　K17　上

器　　高	89.6cm
口　　径	69.3cm
口縁内径	58.2cm
胴部最大径	67.7cm
底　　径	12.6cm

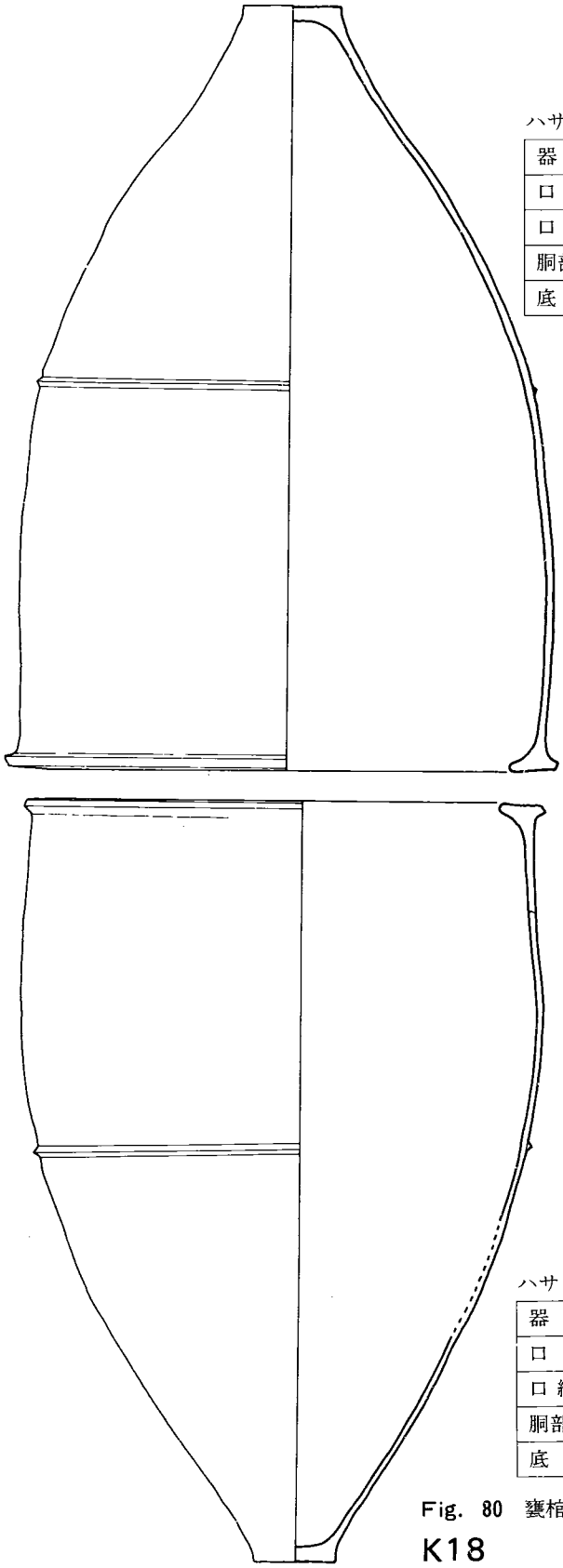


K17

ハサコの宮　K17　下

器　高高	95.8cm
口　　径	67.4cm
口縁内径	55.8cm
胴部最大径	68.6cm
底　　径	12.0cm

Fig. 79　甕棺実測図12（縮尺1/8）



ハサコの宮　K18　上

器高	86.4cm
口径	61.8cm
口縁内径	51.4cm
胴部最大径	60.3cm
底径	11.0cm

ハサコの宮　K18　下

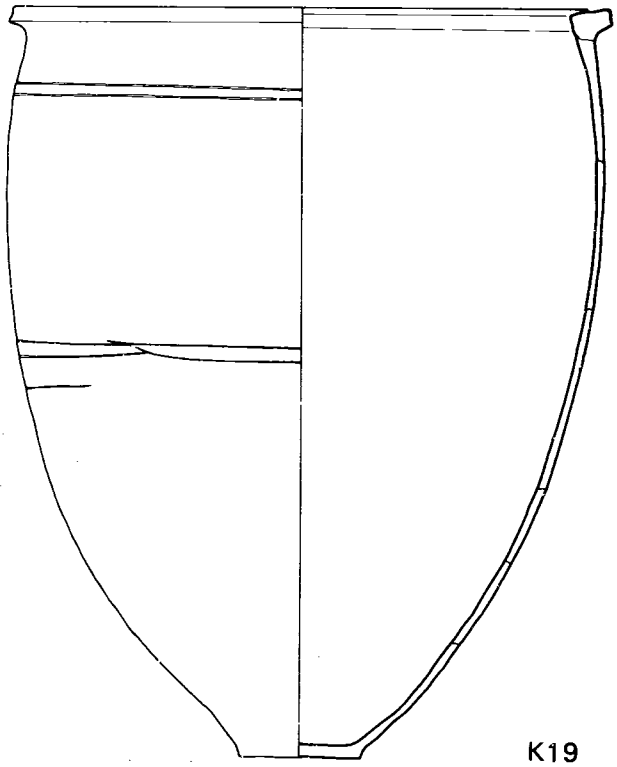
器高	85.8cm
口径	58.4cm
口縁内径	49.0cm
胴部最大径	59.0cm
底径	9.0cm

Fig. 80　甕棺実測図13（縮尺1/8）

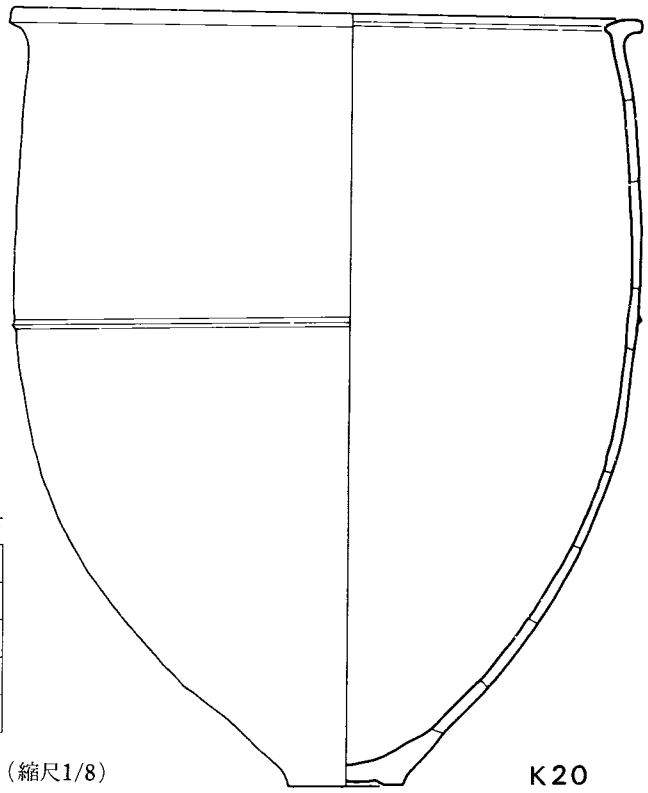
K18

ハサコの宮　K19　下

器高	79.3cm
口径	62.7cm
口縁内径	54.5cm
胴部最大径	62.5cm
底径	12.7cm



K19

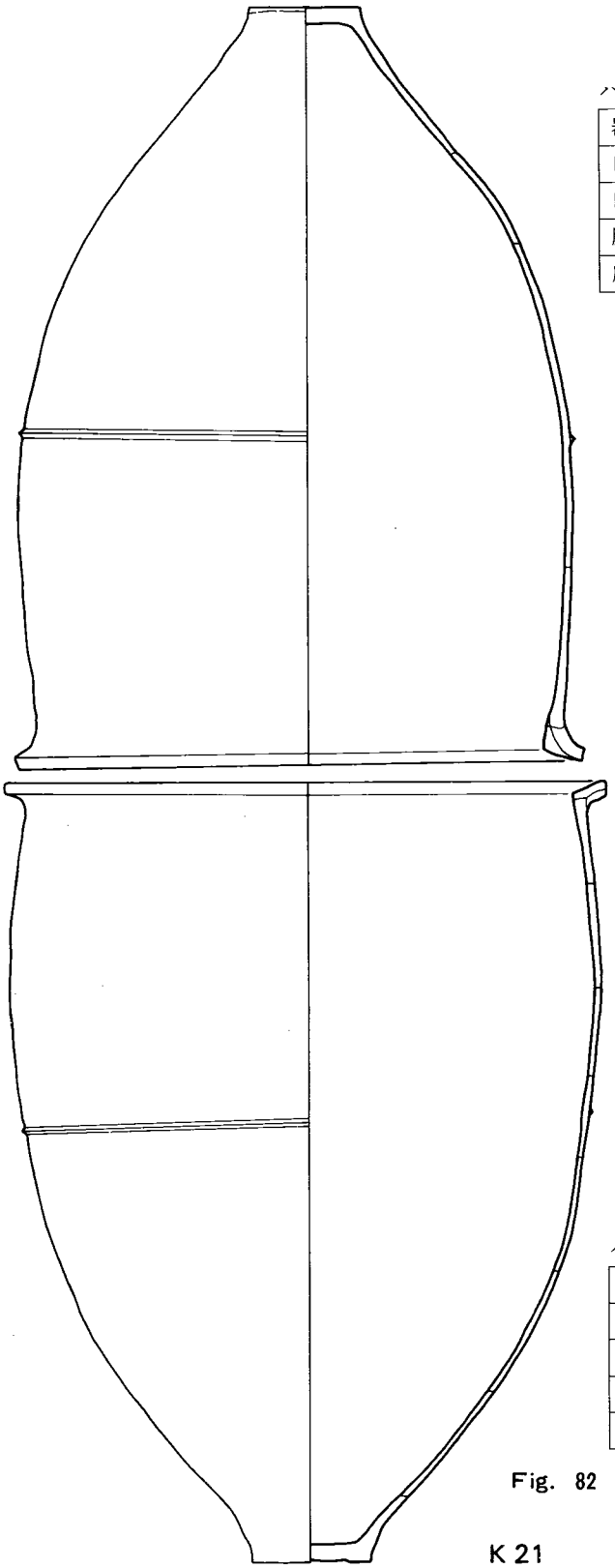


K20

ハサコの宮　K20　下

器高	81.6cm
口径	66.2cm
口縁内径	58.5cm
胴部最大径	65.8cm
底径	12.0cm

Fig. 81　甕棺実測図14（縮尺1/8）



ハサコの宮　K21　上

器高	83.0cm
口径	61.2cm
口縁内径	52.5cm
胴部最大径	60.0cm
底径	12.0cm

ハサコの宮　K21　下

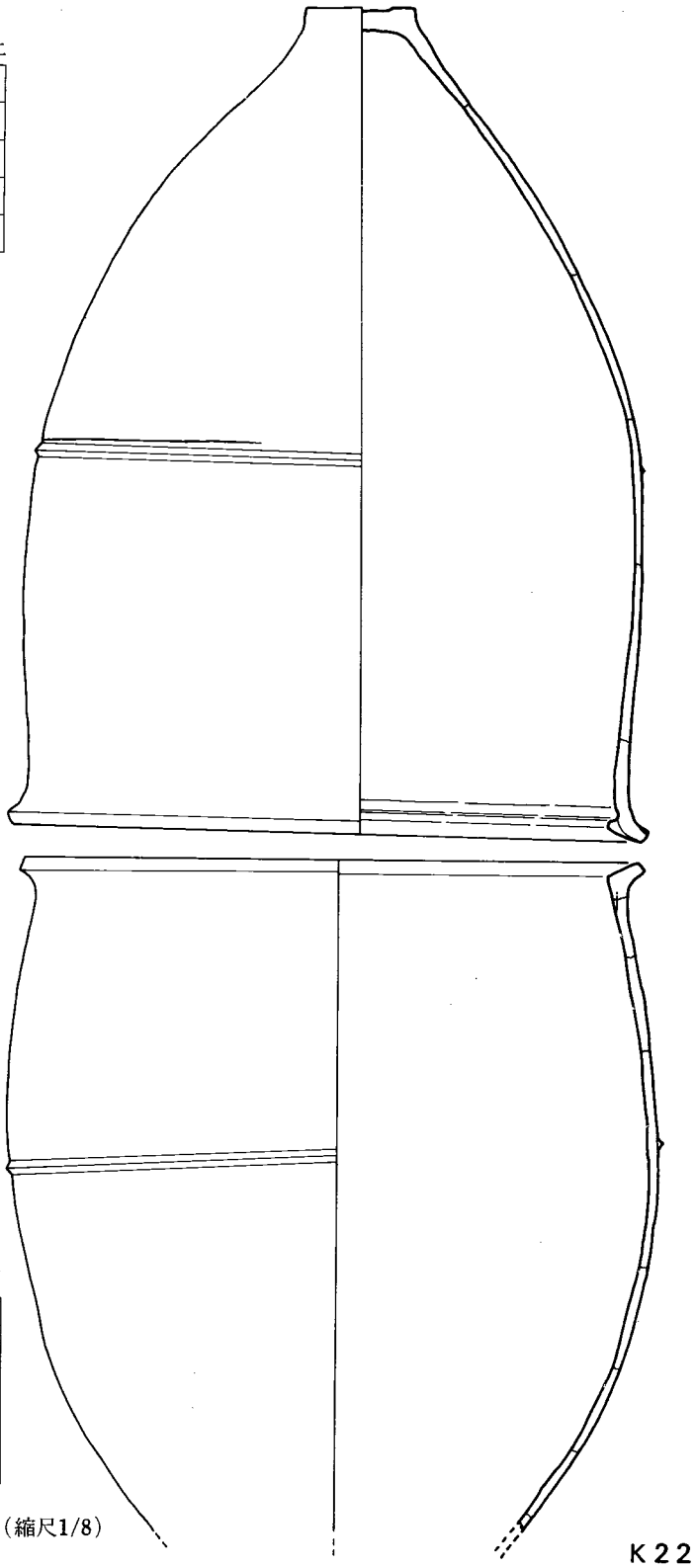
器高	85.2cm
口径	65.2cm
口縁内径	57.0cm
胴部最大径	64.0cm
底径	13.0cm

Fig. 82　甕棺実測図15（縮尺1/8）

K 21

ハサコの宮　K22　上

器高	88.8cm
口径	67.2cm
口縁内径	59.7cm
胴部最大径	65.7cm
底径	(11.5cm)

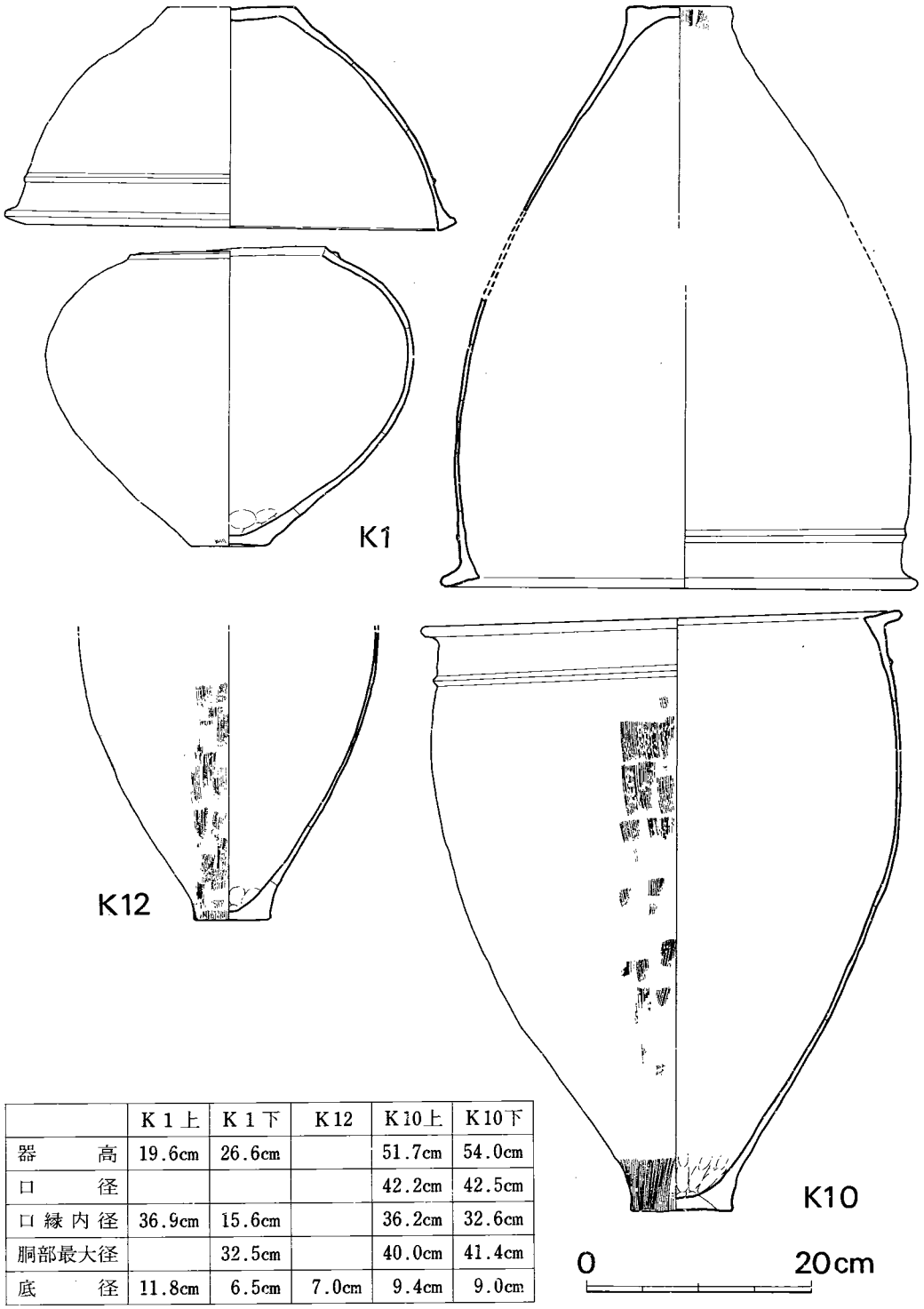


K22

ハサコの宮　K22　下

器高	
口径	56.4cm
口縁内径	66.0cm
胴部最大径	69.0cm
底径	

Fig. 83　甕棺実測図16（縮尺1/8）



	K1上	K1下	K12	K10上	K10下
器高	19.6cm	26.6cm		51.7cm	54.0cm
口径				42.2cm	42.5cm
口縁内径	36.9cm	15.6cm		36.2cm	32.6cm
胴部最大径		32.5cm		40.0cm	41.4cm
底径	11.8cm	6.5cm	7.0cm	9.4cm	9.0cm

Fig. 84 甕棺実測図17（縮尺1/8）

ハサコの宮	K14上	K14下	K23上	K23下	K24下
器　　高		53.0cm	(38.0cm)	41.8cm	43.2cm
口　　径		39.6cm	(46.7cm)	41.2cm	45.4cm
口縁内径		32.6cm	(38.7cm)	33.5cm	40.8cm
胴部最大径	53.0cm	39.7cm	(49.0cm)	39.8cm	46.1cm
底　　径		9.8cm		9.8cm	11.0cm

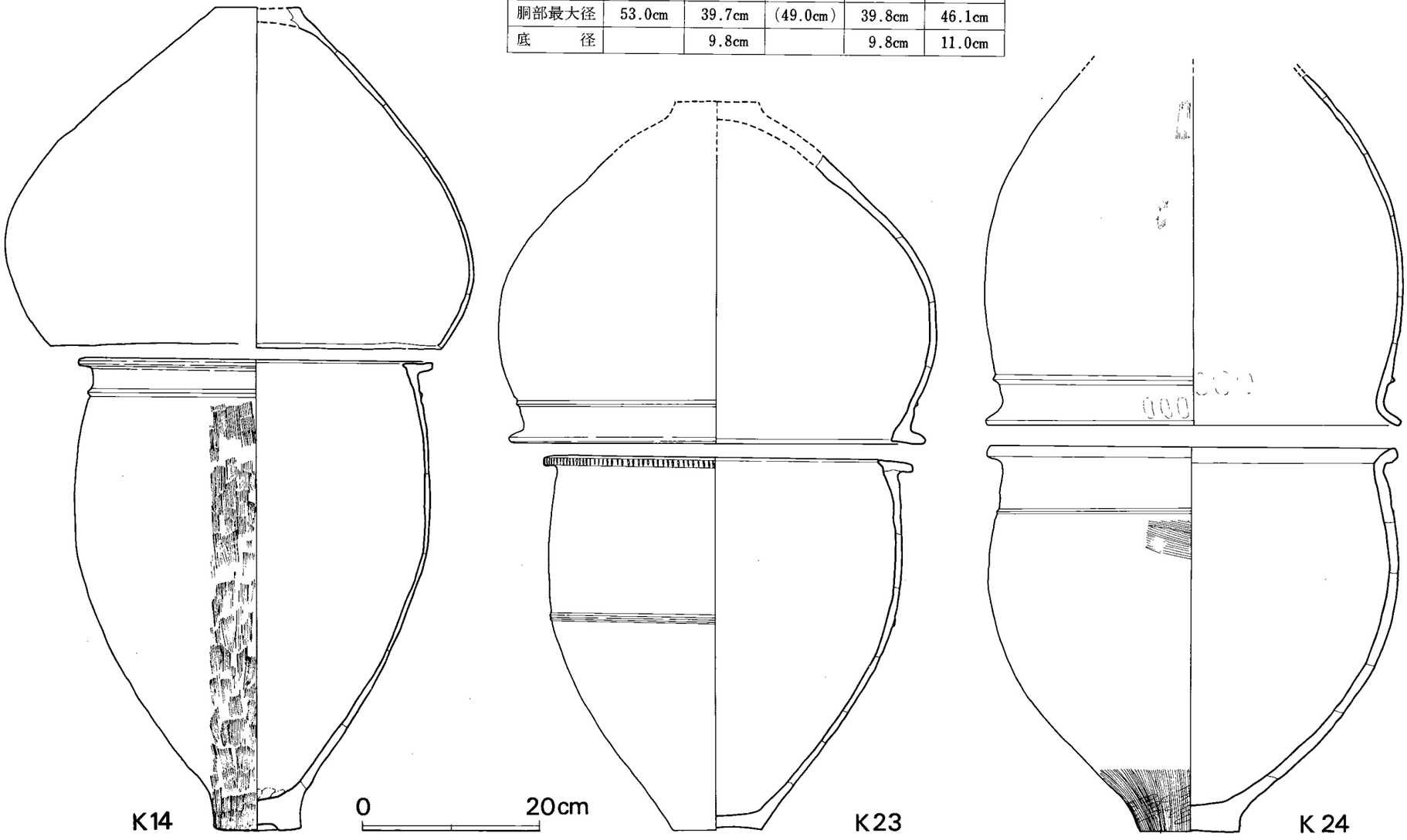


Fig. 85　甕棺実測図18（縮尺1/6）

3．ハサコの宮人骨

人骨については永井昌文教授の同定をいただいた。

Tab. 8　ハサコの宮人骨一覧表

番号	性	年令	保存状態	推定身長(cm)	頭形示表	風習的抜歯	備考
K 1	♀	熟年	◐		———	——	赤色顔料付着
K 2	♂	熟年	△	≧ 166.1	74.2	無	
K 5	♂	熟年	◐	———	77.8	無	
K 6	♂	少児	◐	163.5	———	無	
K 7	⚥	熟年	◐	———	———	無	9～10才
K 8	♂	熟年	△	159.6	71.3	無	
K 9	♂	熟年	○	166.1	80.4	無	赤色顔料付着
K11	♀	成年	◐	———	———	——	
K17	♂	熟年	△	164.0	74.5	無	赤色顔料附着
K18	♀	成年	△	150.1	———	無	赤色顔料附着
K19	♀	成年	◐	———	81.9	不明	歯槽萎縮
K20	♂	成年	△	160.2	中頭型の如し	無	
K21	♂	熟年	◐	166.1	77.4	無	
K22	⚥	成年	◐	———	———	——	

凡例：保存状態　○ 良好　△ 不良　◐ 部分的残存
性　⚥ 性別不明
年令　成人とは20才以上なるも成年・熟年・老年の区別不明なものを指す。

III　正　原　遺　跡

III 正 原 遺 跡

はじめに

正原遺跡は小郡市三沢正原1910番地に所在する甕棺墳墓群である。ここに地主の宮崎盛宏農園が温室を拡張することになり、工事用の道をつくった際、甕棺が発見され（K1）、人骨も出土した。これを契機として県教育委員会文化課に連絡があり、人骨も存在することから、文化課から九州大学医学部解剖学教室第2講座永井昌文教授に調査への協力が依頼された。

調査は県教育委員会文化課技師前川威洋(故人)が担当者となり、九州大学医学部教授永井昌文、九州大学医学部助手(当時)北条暉幸、同(当時)橋口達也が参加して、1971年5月15日～5月20日まで行なわれた。付近はKIIa式を主体とする甕棺墓地と考えられるが、開墾、温室等の工事で遺跡の主体部はかつて破壊されたと考えられる。今回の発掘区は、遺跡の北端にあたる小地域である。

1．甕棺墓および甕棺

すでに破壊されていたK1は、とりあげられまとめられていた甕棺と人骨を採集したのみで、調査したのは、5基の甕棺である。

6基中KIIa式5基、KIIb式1基で、KIIa式を主体とする甕棺墓群の一部であることがうかがえた。小形棺がないのは、すでに削平され、上部がとんでいるものと考えられる。標高が不明であるが、担当者が故人となった今、たしかめようがない。付近は、39m等高線があるので、ほぼそのくらいと考えていただきたい。

以下詳細は一覧表に付す。

Tab. 9　正原甕棺墓一覧表

番号	時期	方位	傾斜角	墓壙の規模		合せ口の方法			頭位	被葬者		備考
				長 cm	幅 cm	呑口	覆蓋	接口		性別	年令	
K－1	KIIa									♂	成年	調査前に破壊さる
K－2	KIIa	N－88°－W	－7°	144	124			○	下甕	♂	熟年	
K－3	KIIb	S－44°－W						○		♂♀	成人	
K－4	KIIa	N－96°－E	－9°	(250)	157			○	下甕	♂	成年	
K－5	KIIa	N－80°－W	－9°30′	239	128			○	〃	♂	熟年	
K－6	KIIa	N－2°－E	－10°	235	139			○	〃	♀	成年	上甕に水ぬき孔あり

※　方位は頭位に合わす。傾斜角の－は下甕が高位にあることを示す。

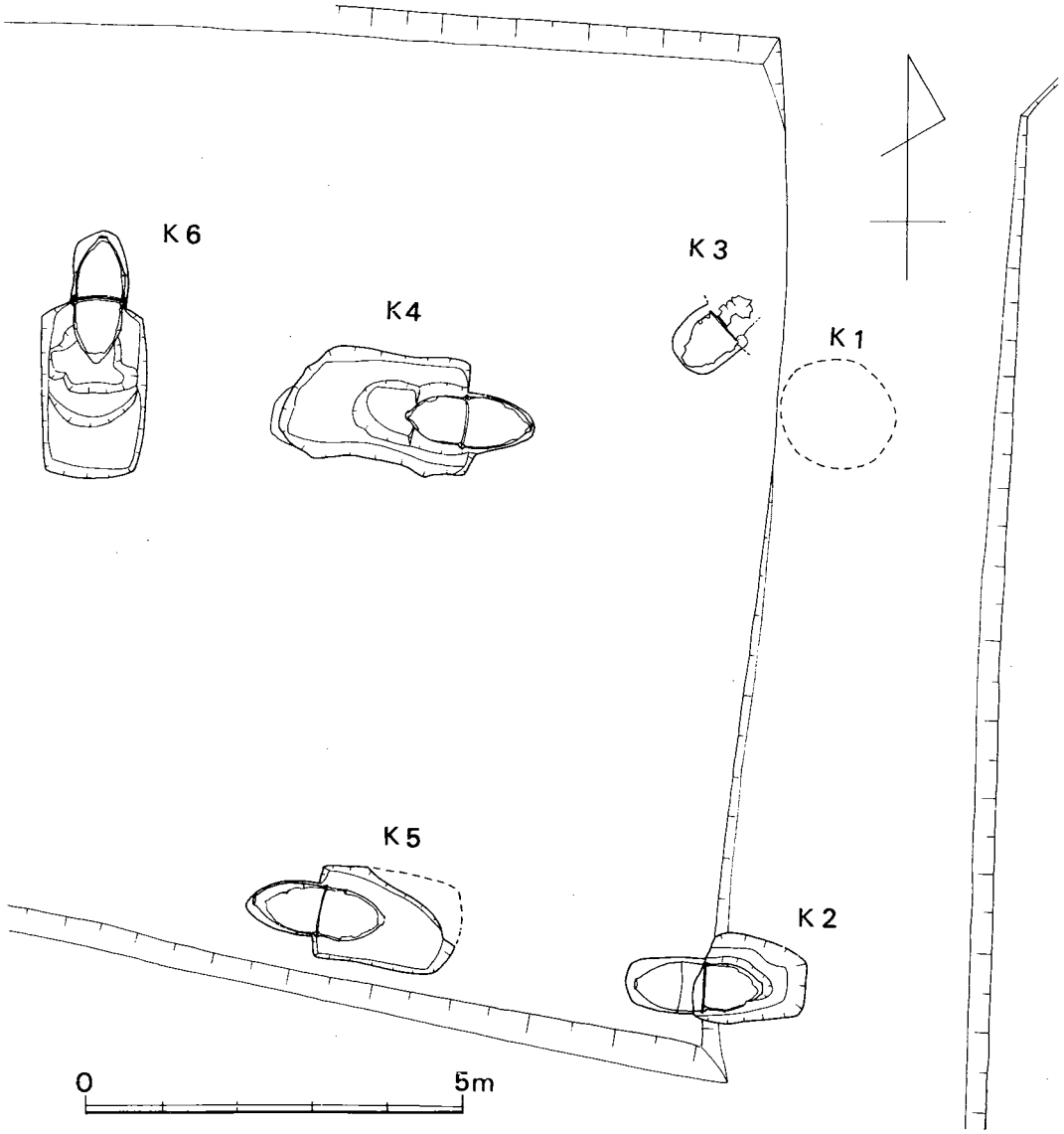


Fig. 86 正原甕棺配置図（縮尺1/100）

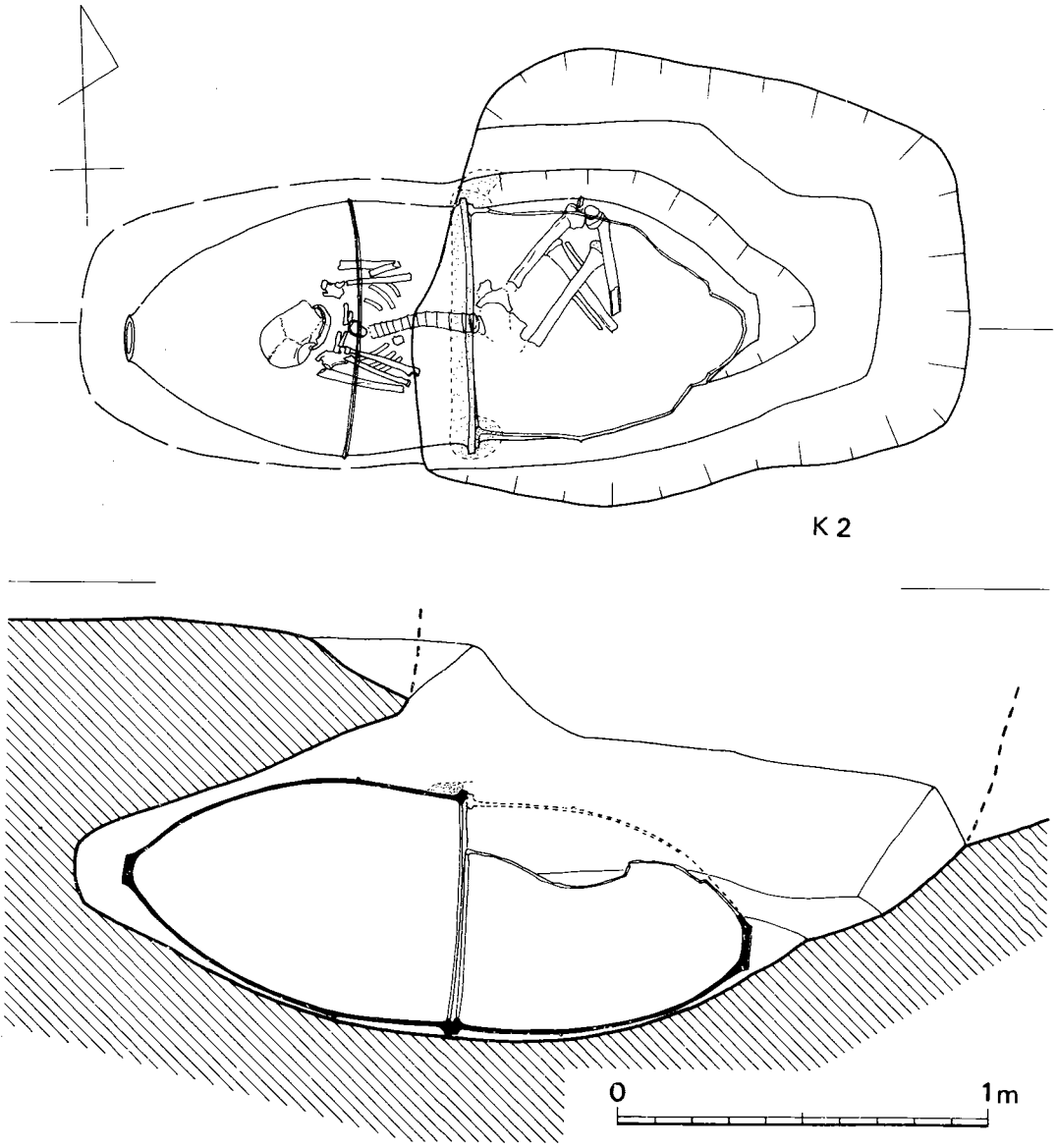


Fig. 87　甕棺墓実測図１（縮尺1/20）

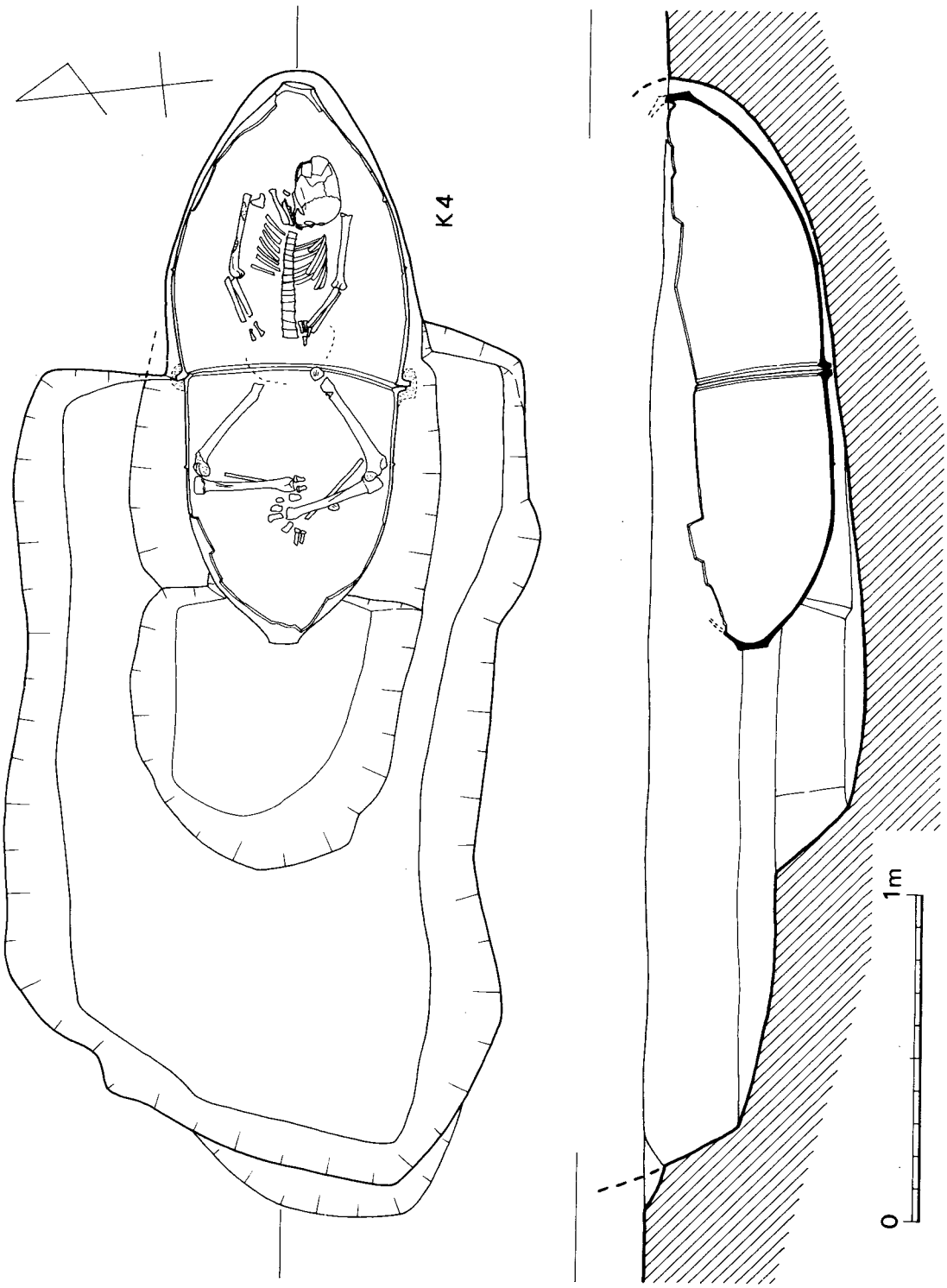


Fig. 88 甕棺墓実測図2（縮尺1/20）

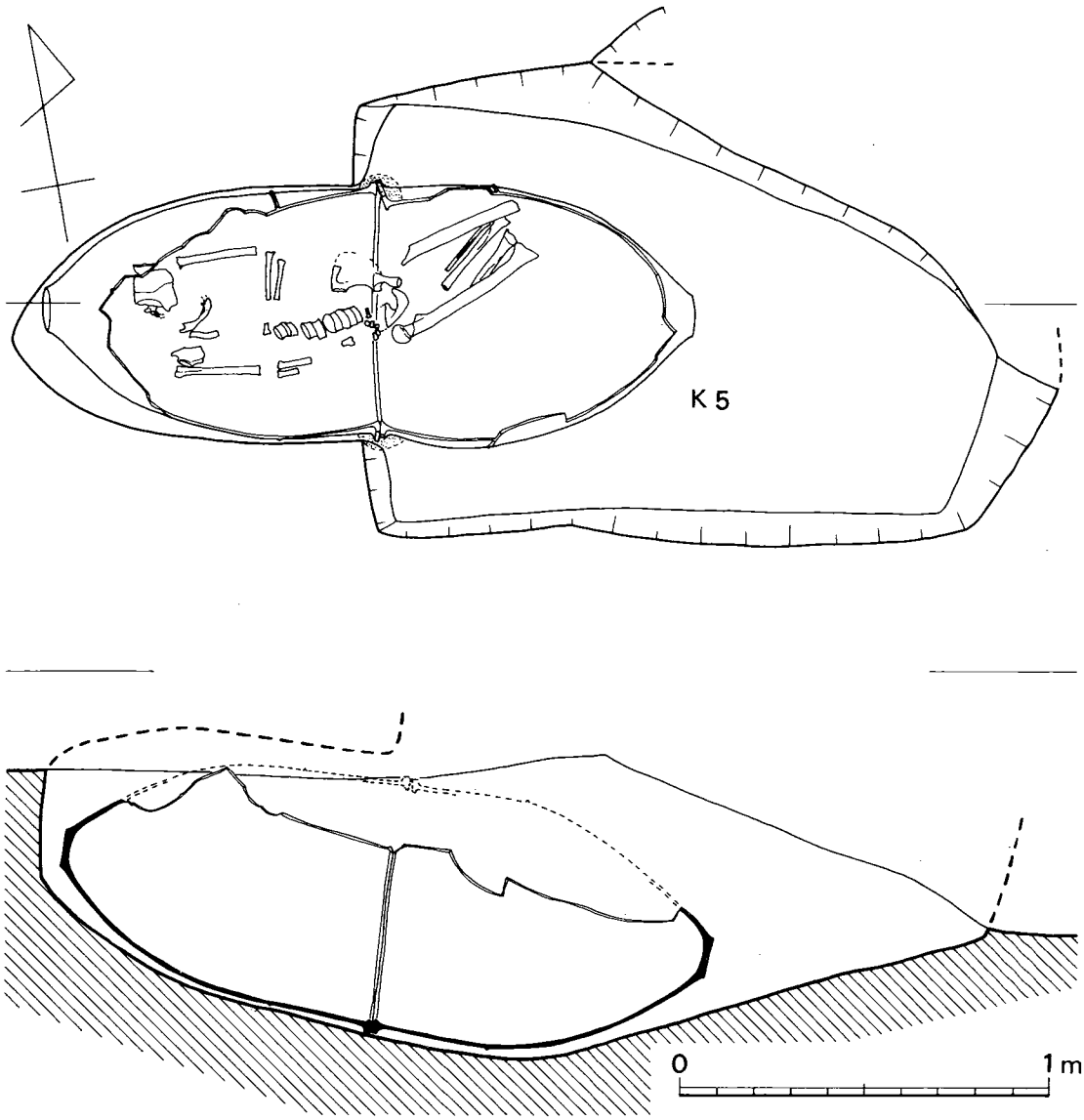


Fig. 89　甕棺墓実測図3（縮尺1/20）

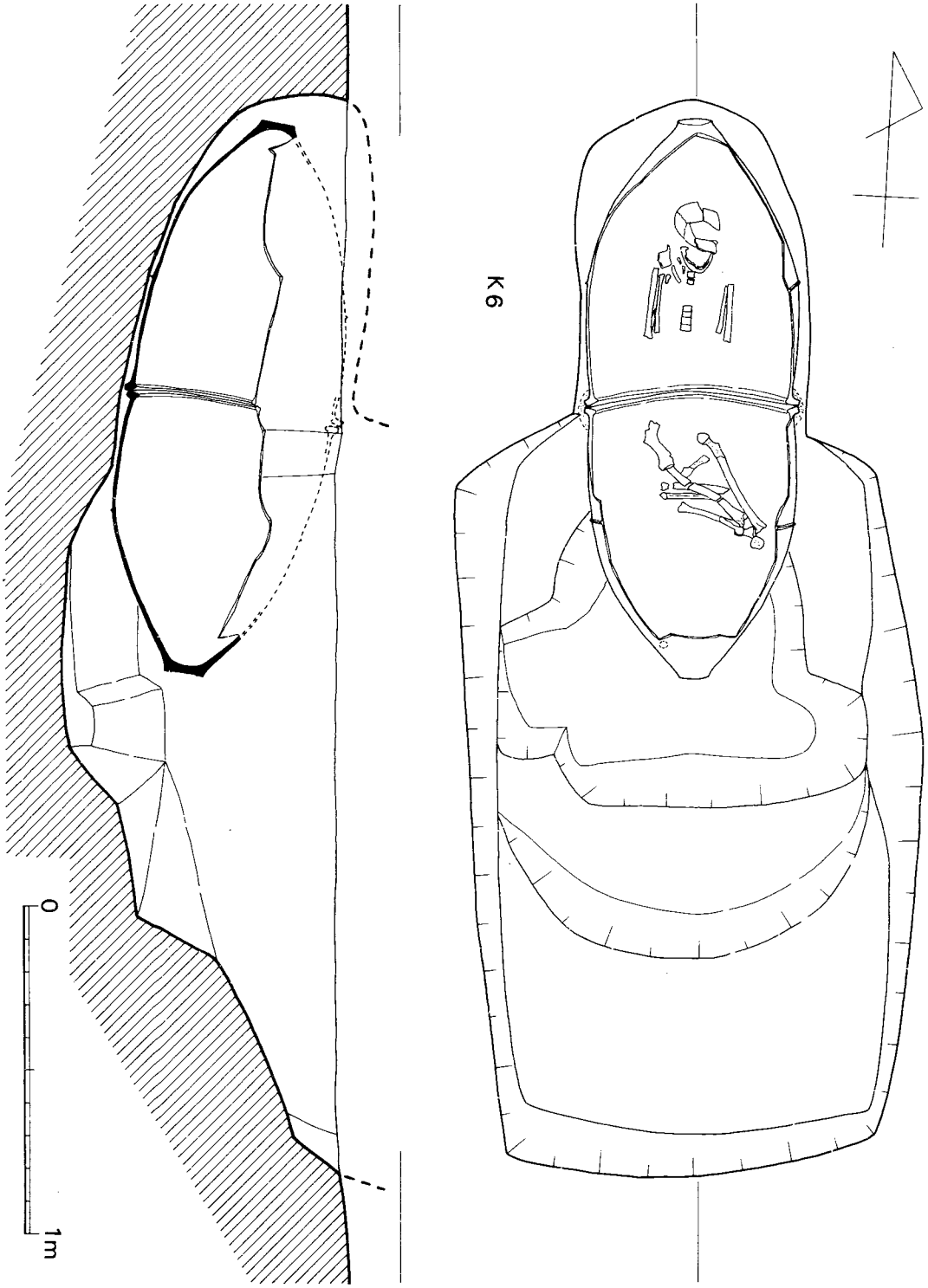
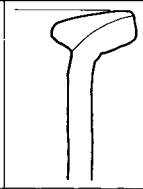
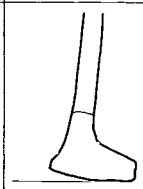
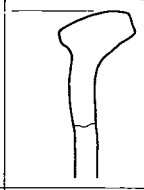
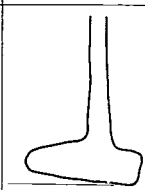
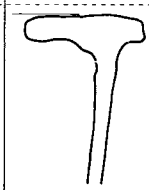
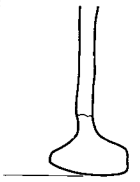
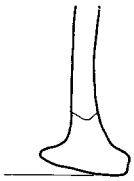
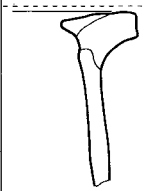
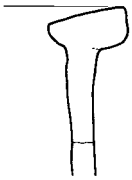


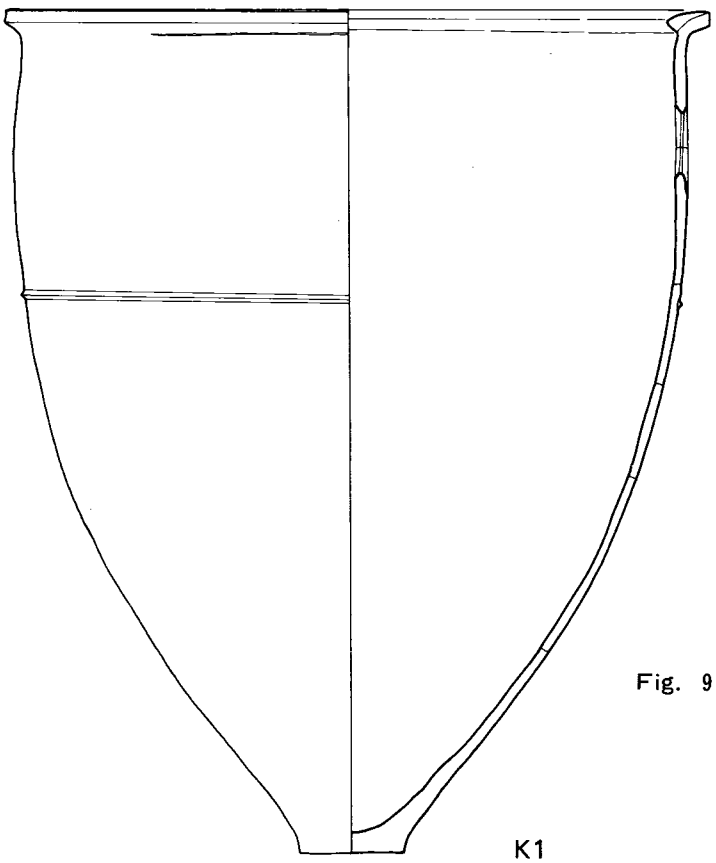
Fig. 90 甕棺墓実測図4（縮尺1/20）

Tab. 10　正原甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
K1	KIIa		口縁はあまり発達せず、内に低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴上位に三角凸帯1条。口縁下には一周しない沈線上のものあり。内面の調整は擦過→ナデ、器表はハケ→ナデ（底部にハケ目が残存）、口縁・凸帯部は横ナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。凸帯の上・下に小黒斑あり。	○水ぬき孔あり（内→外へ） ○口縁内側から器表にかけて里塗りの痕跡あり。 ○口縁部に丹の痕跡が部分的に認められる。
K2 上	KIIa		口縁はあまり発達せず、内に低く傾斜する逆L字状。胴上半はすぼまり、胴上位に三角凸帯1条。底部は上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬くしまり、良好。口縁内側から器表にかけて黒色顔料塗布の痕跡あり。	○口縁内側から器表にかけて黒塗りの痕跡あり。
K2 下	KIIa		口縁は内に低く傾斜し、胴上半はすぼまる。胴上位に三角凸帯1条、凸帯下には設計沈線あり、部分的にはみ出る。底部は上げ底。胴上半には1ヶ所のみKIc式にみられる縦沈線の退化したものがある。内面の調整は擦過→ナデ、器表はハケ→ナデ（底部に粗いハケ目残存）。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。	○口縁内側から器表にかけて黒塗りの痕跡あり。
K3 上	KIIb		口縁部はやや内に低く傾斜し、かつ内側に大きく発達している。胴上半はほぼ直立ぎみ。胴部には三角凸帯1条。凸帯の上下に設計沈線2条を施す。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ。明るい黄褐色を呈し、胎土には小砂粒を含む。焼成は硬く良好。	○口縁内側から器表にかけて黒塗りの痕跡あり。
K3 下	KIIb		口縁は平坦で、内側に大きく発達する。胴上半は若干開きぎみ。胴部には三角凸帯1条、凸帯下位に設計沈線がみられる（部分的には凸帯下にかくれる）。内面の調整は擦過→ナデ、器表はナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成はやや軟質。	○器表に黒塗りの痕跡。
K4 上	KIIa		やや内に低く傾斜するT字口縁。胴上半はすぼまり、胴上位に三角凸帯1条、凸帯下に設計沈線あり。内面の調整は擦過→ナデ、器表は口縁下にタタキ痕が認められ、タタキ→（ハケ）→ナデと考える。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。凸帯上部から底部近くにかけて大きな黒斑あり。	
K4 下	KIIa		内に低く傾斜する逆L字状口縁。胴上半はすぼまり、胴上位に三角凸帯1条をめぐらす。内面の調整は擦過→ナデ、器表は底部にハケ目が残るのでハケ→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。胴上半及び下半に黒斑あり。口縁平坦面から器表にかけて黒塗りの痕跡あり。	○口縁から器表にかけ黒塗りの痕跡。

Tab.10　正原甕棺一覧表

番号	時期	口縁の形態	特徴	備考・その他
上 K5	KIIa		口縁は内に低く傾斜するT字状。胴上半はすぼまり、胴上位に三角凸帯1条。底部はわずかに上げ底を呈す。内面の調整は擦過→ナデ、器表は底部にハケ目が残るのでハケ→ナデ。口縁・凸帯部は横ナデ。暗黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。凸帯上下の内外に黒斑がみられる。	○器表に黒塗りの痕跡。
下	KIIa		口縁はまだ発達せず、内に低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴上位に三角凸帯1条。底部は上げ底を呈す。内面の調整は擦過→ナデ、器表は底部にハケ目が残るのでハケ→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。やや赤味を帯びた黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。	○口縁から器表にかけて黒塗りの痕跡。
上 K6	KIIa		口縁はまだ殆んど発達していないが、内に低く傾斜するT字状といえる。胴上半はすぼまり、胴上位に三角凸帯1条、凸帯下には上下2条の設計沈線あり。底部はわずかに上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表は細いハケ→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。暗黄色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。大黒斑あり。	○水ぬき孔あり（内→外へ） ○内外ともに黒塗りの痕跡。
下	KIIa		口縁はまだあまり発達せず、内に低く傾斜する。胴上半はすぼまり、胴上位に三角凸帯1条。凸帯下には設計沈線あり、底部は若干上げ底。内面の調整は擦過→ナデ、器表はハケ→ナデ、口縁・凸帯部は横ナデ。淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は硬く良好。口縁下から底部にかけて大黒斑あり。	○内外ともに黒塗りの痕跡。



K1

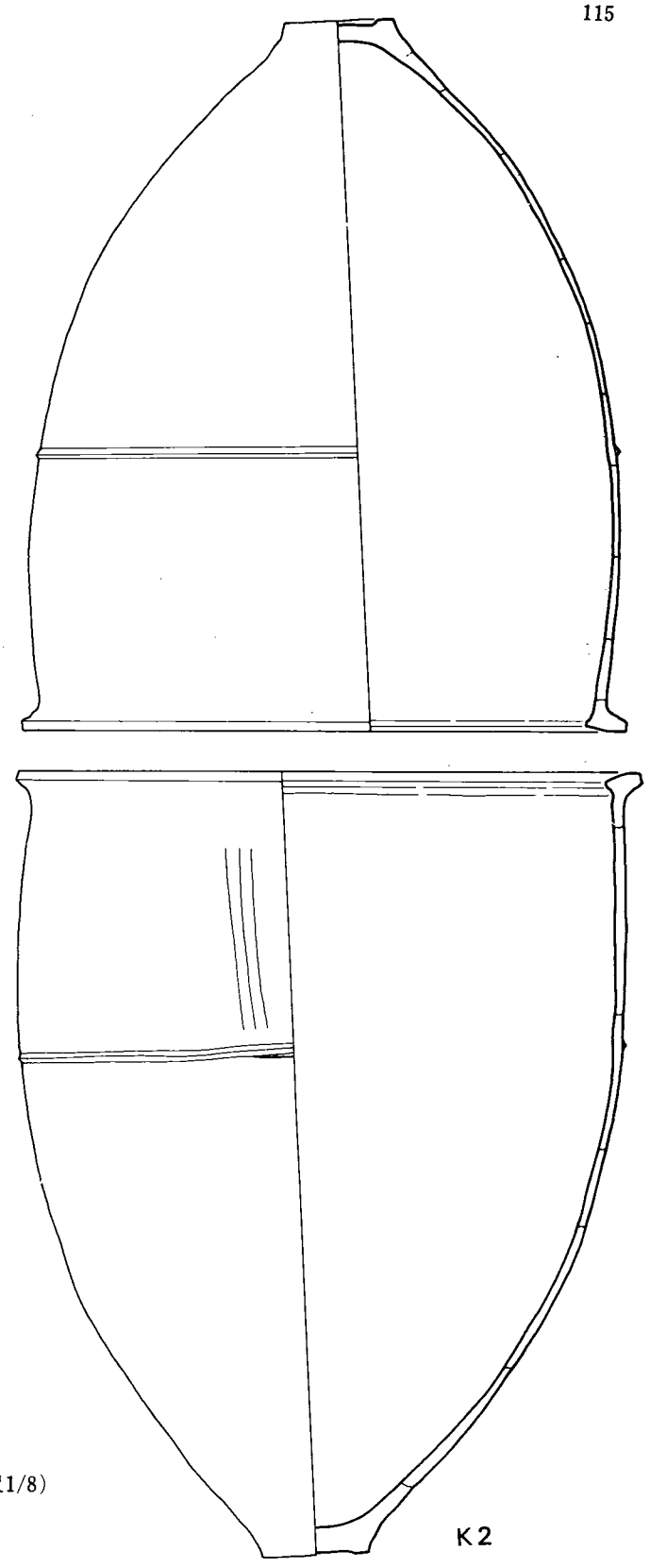
正原　K1

器高	89.9cm
口径	73.3cm
口縁内径	65 0cm
胴部最大径	70.2cm
底径	10.8cm

Fig. 91　甕棺実測図1（縮尺1/8）

正原　K２　上

器　　高	81.6cm
口　　径	67.5cm
口縁内径	58.3cm
胴部最大径	65.6cm
底　　径	12.2cm



正原　K２　下

器　　高	89.2cm
口　　径	69.3cm
口縁内径	61.6cm
胴部最大径	67.7cm
底　　径	12.0cm

Fig. 92　甕棺実測図２（縮尺1/8）

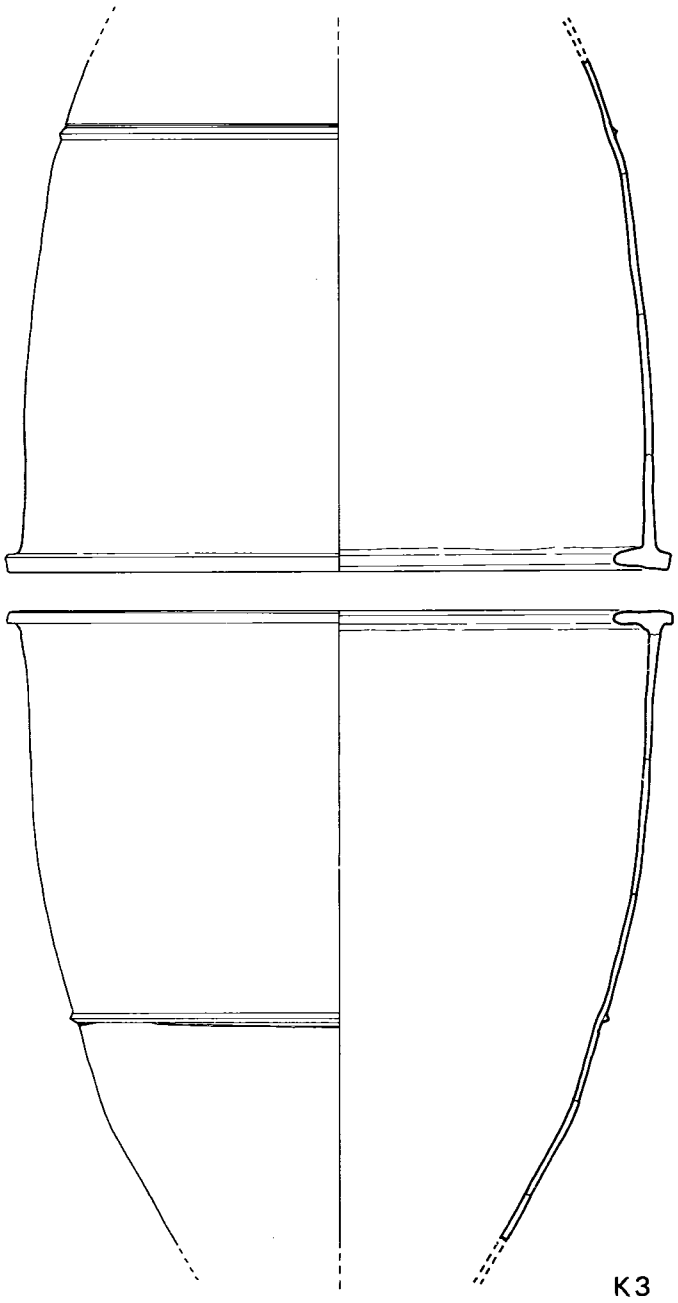
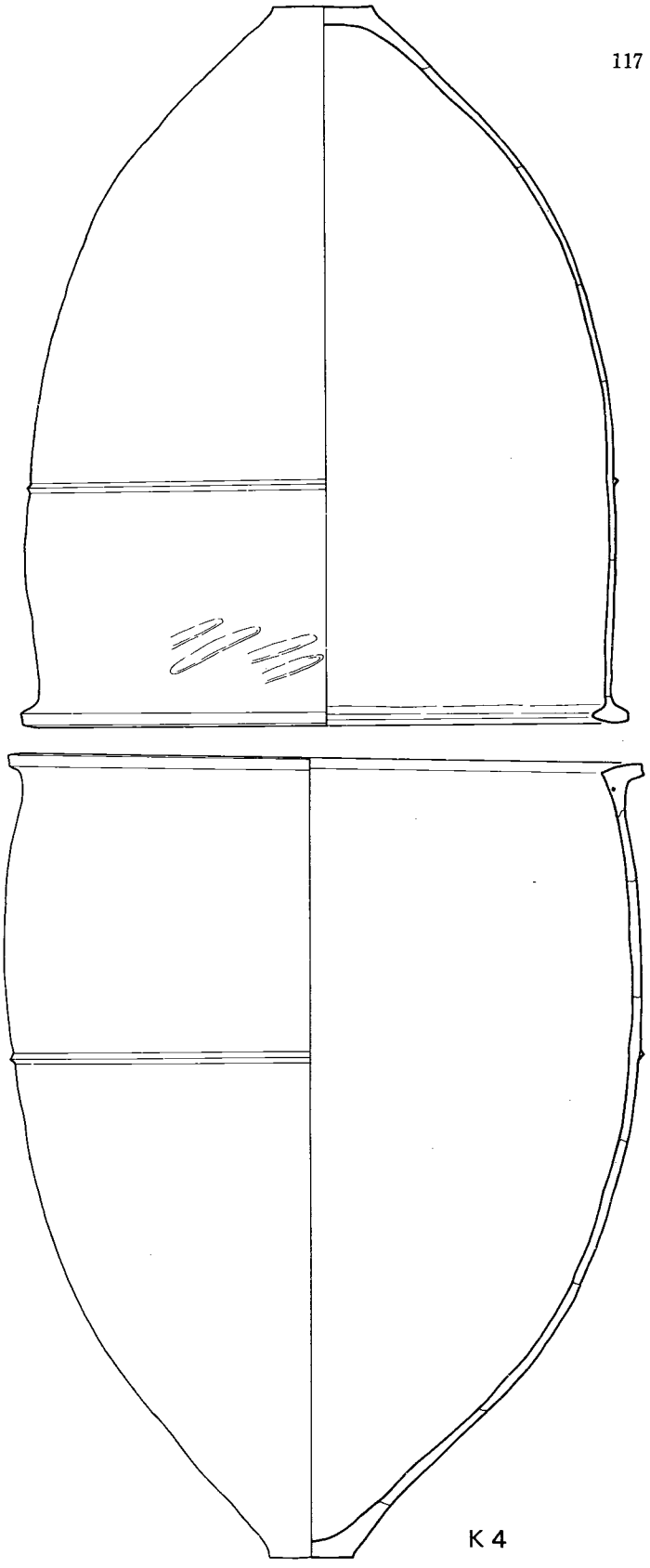


Fig. 93 甕棺実測図3（縮尺1/8）

正原　K 4　上

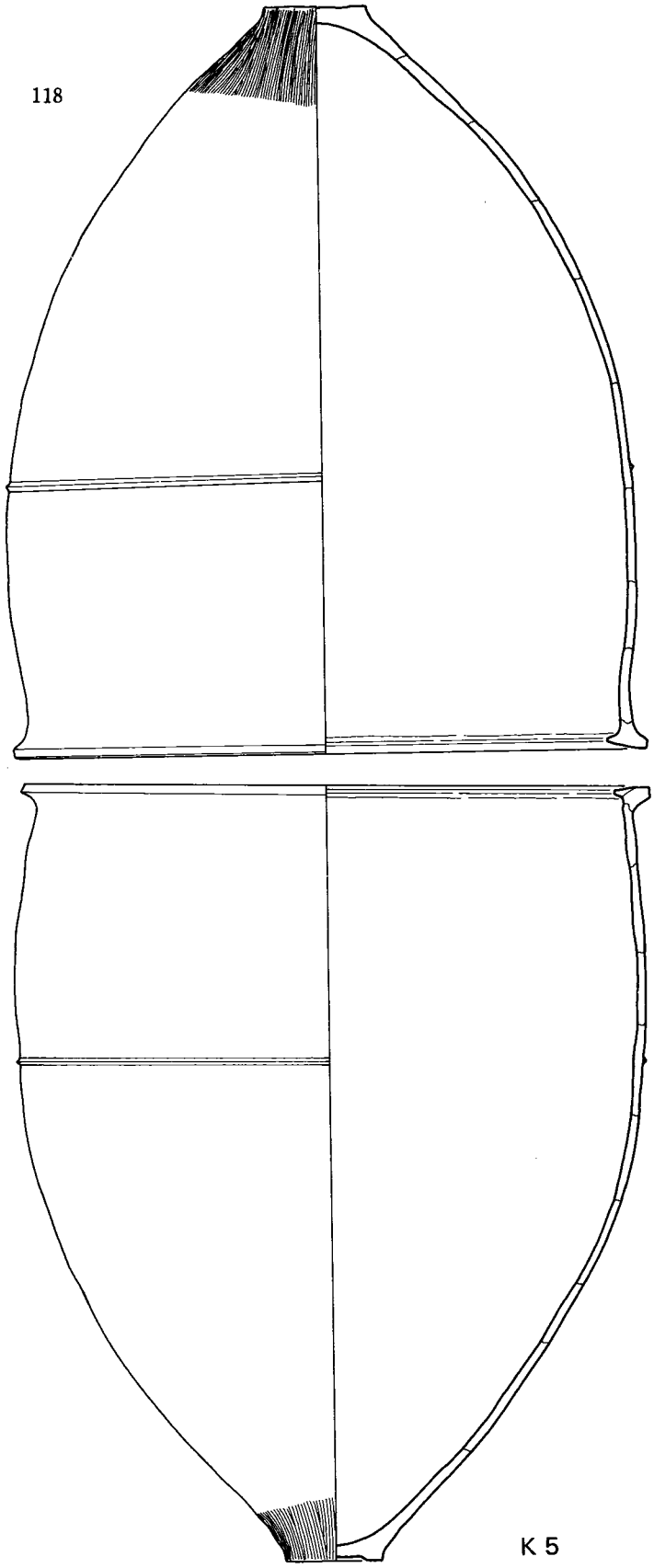
器　高	82.5cm
口　径	68.4cm
口縁内径	59.8cm
胴部最大径	66.5cm
底　径	11.3cm



正原　K 4　下

器　高	92.2cm
口　径	71.5cm
口縁内径	62.3cm
胴部最大径	71.8cm
底　径	9.7cm

Fig. 94　甕棺実測図4（縮尺1/8）



正原　K 5　上

器高	86.5cm
口径	72.0cm
口縁内径	62.8cm
胴部最大径	71.3cm
底径	11.7cm

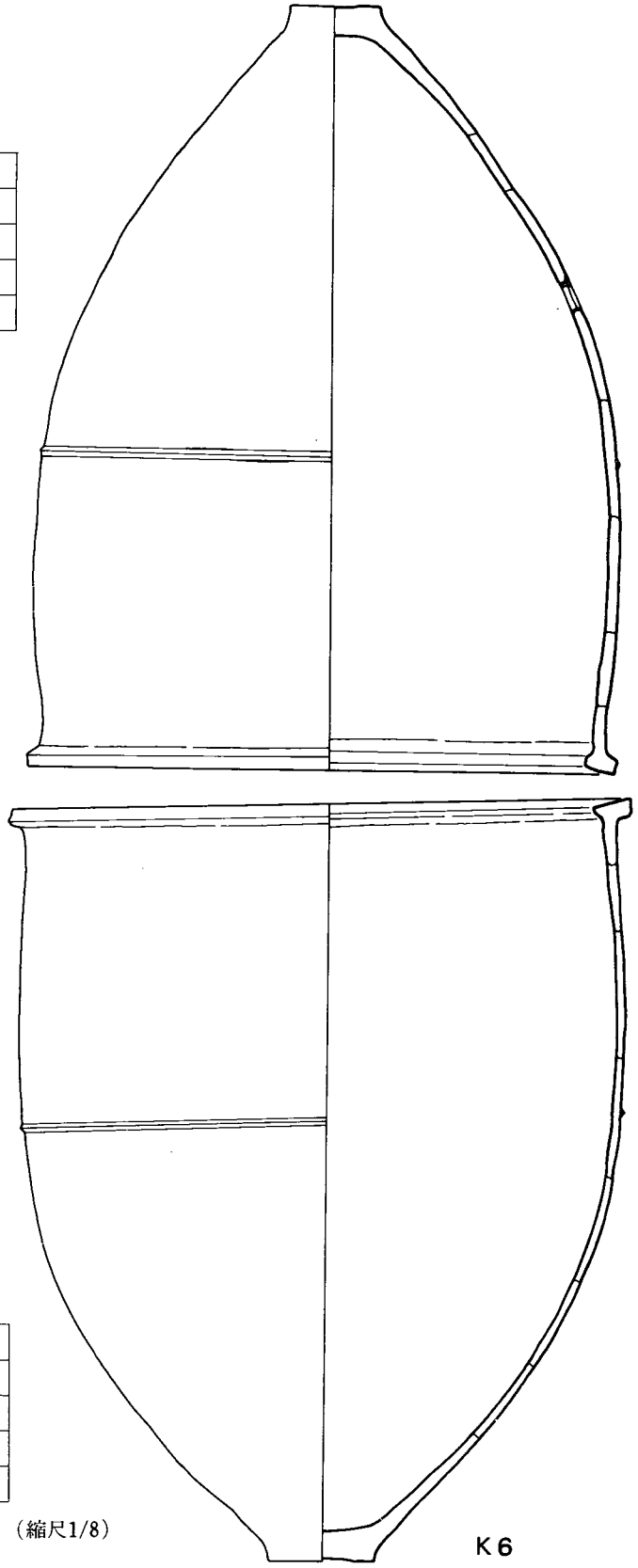
正原　K 5　下

器高	90.2cm
口径	71.1cm
口縁内径	62.8cm
胴部最大径	71.8cm
底径	11.0cm

Fig. 95　甕棺実測図5（縮尺1/8）

正原　K 6　上

器　　高	86.1cm
口　　径	65.3cm
口 縁 内 径	58.7cm
胴部最大径	65.5cm
底　　径	10.0cm



正原　K 6　下

器　　高	85.9cm
口　　径	68.7cm
口 縁 内 径	60.4cm
胴部最大径	67.3cm
底　　径	12.0cm

Fig. 96　甕棺実測図6（縮尺1/8）

2．正原人骨

人骨については、永井昌文教授の同定をいただいた。

Tab. 11 正原人骨一覧表

番号	性	年令	保存状態	推定身長(cm)	頭形示数	風習的抜歯	備考
K 1	♂	成年	△	160.8	76.6	無	赤色顔料附着
K 2	♂	熟年	○	157.8	79.2	無	
K 3	⚥	成人	◐	———	———	——	赤色顔料附着
K 4	♂	成年	○	157.8	79.9	無	
K 5	♂	熟年	△	161.4	———	無	
K 6	♀	成年	△	150.6	———	無	

凡例：保存状態　○ 良好　△ 不良　◐ 部分的残存
性　⚥ 性別不明
年令　成人とは20才以上なるも成年・熟年・老年の区別不明なものを指す。

Ⅳ　考　　察

Ⅳ 考　察

1　甕棺埋葬の傾斜角について

この問題についてはかつて簡単に論じたことがあるが、中期前半の甕棺は下甕が高位にあり、頭位を下甕に取ることが多いことから、当時は甕棺の上下[1]の認定に混乱を生じていた。まだ一部にこのようなことがみうけられるので、再度この問題についてふれたい。

1962年に行なわれた須玖岡本遺跡の調査以前は甕棺の墓壙がほとんど注意されず、甕棺の本体のみを発掘していた。この時点では、甕棺自体[2]の高低のみで、上甕・下甕が決定されるのが通例であった。須玖岡本の調査以来、墓壙も発掘されるようになり、甕棺墓の埋葬法は、一般的には、方形又は長方形の竪壙を掘り、その一端に甕棺のはいる程の横壙を掘り、甕棺を入れ、遺体を納棺して、蓋をするということが判明した。したがって、横壙に入れるものが、高位にあったとしても、あくまで下甕であることは歴然としている。

このことを確認した上で、北牟田・ハサコの宮・正原の各遺跡の甕棺埋葬の傾斜角をみ、次に各時期における埋葬角の変遷を見てみよう。

上記遺跡ではＫⅠｃ式における好資料はない。ＫⅡａ式以後はTab. 12に図示したとおりである。ＫⅡａ式では−10°前後を中心にして、−1°〜−5°が多く、一部1〜2°のものがあり、さらに18°、29°のものが存在する。ここで1°のものはハサコの宮K16で変形呑口の合せ口で、下甕だけの傾斜角をとると−4°である。2°の2基はいずれも小形棺である。18°、29°のものは、18°がハサコの宮K13で、ＫⅠ式の古い要素を残したＫⅡａ式の甕棺で、29°がハサコの宮第2次Ｋ2で、筑前・筑後・肥前の三国境のこの地域にみられる地方色強い甕棺である。したがって大勢は−10°前後を中心にしてほぼ下甕が高位にあるといえる。

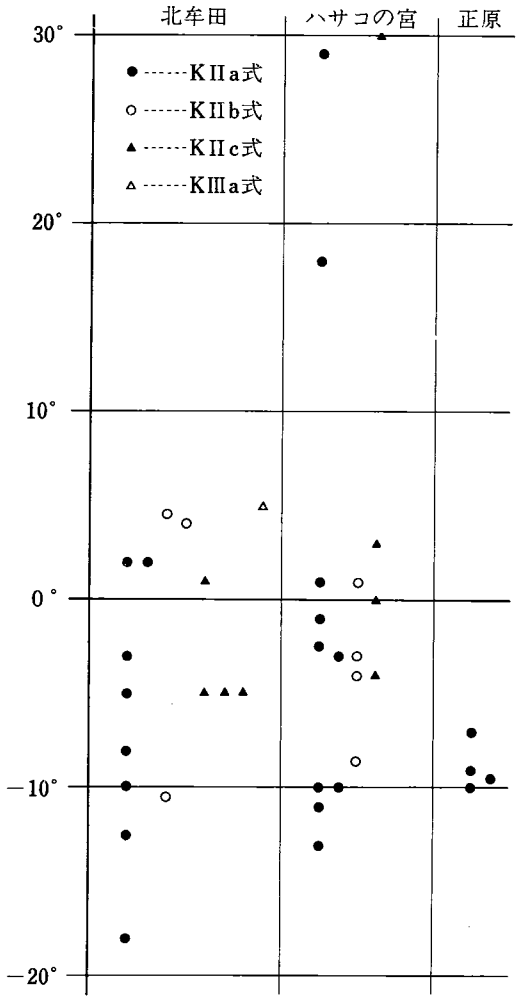
ＫⅡｂ式では−3°、−8°30′、−11°のものと、1°、4°、4°30′のものに分かれる。ここでは、4°30′のものが小形棺であるが、ほぼ下甕が高位にあるものが多く、一部はほぼ水平ながら、下甕の低いものも存在する。

ＫⅡc式では、−5°と0°〜3°のところに分かれる。この時期でもやはり下甕が高いものと、ほぼ水平ながら下甕が低いものが存在する。

以上はほぼ他の遺跡でも一般的な傾向といえるが、次に各時期にわたって概観してみよう。

まずＫⅠａ式では剣塚遺跡がある。剣塚遺跡の甕棺[3]はＫⅠａ式を主体として一部ＫⅠｂ式のものが含まれるが、その傾斜角は26°〜53°で35°〜45°のものが最も多い。

Tab. 12　甕棺の傾斜角一覧表



Tab. 13　金隈遺跡のKⅡa～KⅡc式甕棺の埋葬傾斜角

時　期	番　号	傾斜角
KⅡa式	K　30	−5°
KⅡb式	K　23	29°
	K　29	−4°
	K　35	3°
	K　43	3°
	K　65	1°
	K　72	8°
	K　83	−3°
	K　89	0°
KⅡc式	K　12	15.5°
	K　61	5°
	K　74	0°
	K　85	1°

KⅡb式では、中・寺尾遺跡の甕棺墓があげられる(4)。中・寺尾遺跡第2次調査で発掘した甕棺はKⅠb式の単純としてとらえてよい。ここでの傾斜角は15°～54°で25°～45°のものが最も多い。ところが、金隈K103では−12°で下甕が高く、頭位も下甕にあり(5)、この頃から一部は逆転する傾向が生じ始めている。

KⅠc式では金隈K95、K102、K123を例にとると、それぞれ5°、17°、0°と(5)傾斜角がゆるやかになり、逆転するきざしが見られる。

KⅡa式～KⅡc式は先にみたとおりであるが、金隈の大形棺を例にとってみると、Tab. 13のようになり、KⅡa式では下甕が高く、KⅡb式では下甕が高いものもあるが、ほぼ水平で下甕がやや低いという傾向がみられる。KⅡc式でもほぼ水平で、下甕がやや低いという傾向がみられる。

KIIc式をさらに永岡遺跡でみると、ほぼ水平ではあるが、下甕がやや低く、頭位は下甕にある。(6)

KIIIa式になると金隈ではK1——8°、K13——9°、K32——22°、K125——17°と次第に下甕が低くなる傾向にある。諸岡遺跡を例にとると、K2——14.5°、K3——9.5°、K8——11°、K9——21°、K19——18°、K21——3°、(7)K24——6°、K25——9.5°、K26——9.5°、K28——4°、K29——21°、K30——4.5°、K33——25°、K43——6°で、やや水平に近いものから、20～25°の傾斜を示し、下甕が低くなる傾向にある。頭位はK19、K29が上甕に、K43が下甕にあり、頭位もこの時点でやや水平に近いものは下甕にあるが、次第に下甕が低くなるにつれて逆転していくものと思う。

KIIIb式以降になると、道場山の例からみてもわかるように、30°～45°の傾斜をもつものが最も多く、頭位は当然のこととして上甕にあるが、あまりに(8)傾斜角の急なものは、頭骨をはじめ上半身が下甕に落ち、埋葬時の原状を保つものは少ない。

以上各時期の甕棺埋葬の傾斜角および頭位をみてきたが、直立、倒立の甕棺の多い唐津地方をのぞけば、北九州でのほぼ一般的な傾向といえる。したがって、この埋葬の傾斜角がある程度の時間差をあらわしており、水平な甕棺からは青銅利器が、傾斜のきついものからは鉄製利器が出土すると、かつていわれていた現象も首肯できるのである。

註1. 橋口達也・折尾学「小児骨に伴ったゴホウラ製貝輪」九州考古学47　1973

2. 福岡県教育委員会「福岡県須玖・岡本遺跡調査概報」1963

3. 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」(XXIX) 1978

4. 大野城市教育委員会「中・寺尾遺跡」大野城市文化財調査報告書　第1集 1977

5. 福岡市教育委員会「金隈遺跡第二次調査概報」1971

6. 福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第5集 1977

7. 福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」I 1974

8. 福岡県教育委員会「「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」(XXV) 1978

2　甕棺黒塗りの風習について

この問題については、井上裕弘氏がすでに論じており[1]、重なる点もあると考えるが、重要な問題と考えるので、観察の所見を述べたい。

問題の発端は、那珂川町宗石遺跡出土の甕棺の復原作業中に、岩瀬正信氏が甕棺に黒色顔料を塗彩したものに注意された。この甕棺はKIIc式の甕棺で、口縁下を縞状に、他の部分は全面を塗彩したものであり、きわめて明瞭である。この時点で私自身はきわめて特殊な事例であろうと考えていた。ところが、甕棺実測中にハサコの宮K6下の内面に、黒色顔料塗彩時の雫のたれたものがあるのを発見し、それを仔細に観察すると、口縁部に明らかに宗石と同様の黒色部分があり、黒塗りと断定した。したがって、それ以前に実測したものはみのがしているが、その後実測したもの、特に北牟田・正原遺跡出土の甕棺はこの点も注意して観察した。その結果は、甕棺一覧表の備考欄に特記しているが、いま黒色顔料塗彩の可能性のあるものを列記すると次のようになる。

北牟田　K1下、K6上下、K12、K13、K15、K20、K22下、K23上、K26上、K28下、K30上下、K33上下、K34上下、K35下

ハサコの宮　第2次K2上下、K2上、K6下、K17上、K18下、K22上下、K23下

正　原　K1、K2上下、K3上下、K4下、K5上下、K6上下

以上からみると、正原の場合はすべての甕棺に、北牟田でも約半数の甕棺に黒色顔料塗彩の痕跡がある。又、北牟田K1下は日常容器の壺を転用したもので、胴下半に煤の付着がみられ、さらにその上を黒塗りしている。又、北牟田K22下、K30下は丹塗りの上から黒塗りされたとみられる。北牟田K30上は器表は丹塗り、内面は黒塗りである。正原K1は、口縁内面より器表にかけて黒塗りの痕跡が認められるが、口縁の一部に丹塗りの痕跡もみられる。

ここでいう黒塗りの黒色顔料とは如何なるものか。これは、焼成時にできる「黒斑」および日常容器に付着する「煤」とは明らかに異なり、時には光沢をもったものもある。理化学的分析を行なっていないが、油煙等を膠等でといだものではないかと考えている。

また、黒塗りの部分を仔細に観察すると、刷毛目、ナデ等の調整時の痕跡が他の部分に比較して明瞭に残っている。したがって器表が風化し、剝落した部分ではその痕跡はわからないが、保存状態良好な部分に痕跡が残っているといえる。このような黒っぽい部分は今まで、甕棺に付着した木根のしみ等と考え、明らかにみのがしていた。これから考えると、甕棺の大半にはこのような黒色部分があり、これが黒色顔料を塗彩した痕跡である可能性が大きい。井上氏が指摘するようにかなり広範囲にわたる一般的風習であったと考えられる。

甕棺は黒く塗り、遺体の頭部付近は赤色顔料を塗布する。又供献用土器の大部分は丹塗り土器であり、この「赤」と「黒」が葬送の際に特別な意味がこめられたことは明らかであろう。

註1.　井上裕弘「甕棺を黒く塗る風習」福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第9集　1978所収

3　甕棺製作技術について

はじめに

甕棺製作技術については、佐原真氏による熊本県下益城郡城南町宮地山出土の黒髪式土器の小形棺（この小形棺とは道場山で分類した小形棺の意味）で、胴部凸帯のないものによる考察[1]、高島忠平氏による立岩遺跡出土の甕棺を中心にした考察[2]、橋口による道場山遺跡出土甕棺についての若干の考察[3]、井上裕弘氏による門田遺跡出土甕棺を中心とした考察[4]等がある。

佐原氏は「土器の話」の一連の論攷[5]の中で、土器づくりの基礎的作業をふまえた上で、直接的には、粘土帯の幅、粘土帯のつみあげ法[6]、刷毛目の観察、ヨコナデの方向等を問題にして、詳細に製作論を調じている。

高島氏は、素地作り、成形、調整、焼成にわたり、一連の工程をくわしく論じている。

橋口は、日常容器の大形器を甕棺に転用した小形棺には胴部凸帯がないこと、同様の大きさの棺専用甕には胴部凸帯があることを問題にし、胴部凸帯が補強であるという説に疑義を呈し、運搬の用に供するものとし、又粘土帯の幅も広いものがあり、又縦粘土板を接合する技法が存在することをいい、甕棺製作技術にはタタキ技法が存在することを主張し、又刷毛はそれを掻き消すための用途が主であることを述べている。

井上氏は、胎土、成形、調整、焼成・色調を問題にし、特に焼成・色調の異なる2タイプの甕棺を中心として、工人集団把握への試みも行なっている。

甕棺製作技術には直接ふれてはいないが、横山浩一氏の刷毛目工具の研究[7]も、この問題について有意義なものといえる。

これらの研究を参考にしつつ甕棺製作技術についての若干の所見を述べてみたい。

1）成形段階における諸問題

a）粘土帯の幅

北牟田、ハサコの宮、正原遺跡出土の大形棺で、接合部を観察して得た粘土帯の幅はTab. 14に示すとおりであるが、底部近くは不明な点もあるので、不明瞭なものには（　）を付した。底部はさらに細かく接合部が出ると思われるが、その点は諒承されたい。

粘土帯の幅については佐原氏は平均6.6*cm*、高島氏は8*cm*前後、井上氏は6～14*cm*で6～8

Tab.14　粘土帯の幅一覧表

粘土帯 / 番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	凸帯の位置
北牟田	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm				
K 5 下		9.5	12	13.5	9.5	8.5	10.5	10.5	9	口縁			下端
K 6 上	(8.5)	(9)	17.5	16.5	9.5	15	11		口縁				上端
K 6 下	(8)	(11)	12	13.5	11	10	11	11	10.5		口縁		中位
K 7 上	(5)	(10.5)	12.5	10.5	12.5	9.5	8	7.5	12.5				中位
K 18	(6.5)	(6)	13	11	14.5	11	8	13					上～中
K 23 上	(7)	(11.5)	9.5	9.5	17.5	12		口縁					中位
K 23 下	8.5	11.5	10	11.5	11.5	10	10	9.5	口縁				上･下に交又
K 24 下	7	12	9	10.5	10	12	8	6 6.5	10.5	8.5	7	口縁	中～下
K 26 上	6.5	10.5	12.5	9	15.2	13.5	9	7	11	口縁			中～下
K 26 下	(7.5)	(9.5)	12	12	12	7.5	8	12	9.5	3.5	口縁		上～中
K 27 上	(7.5)	(11)	6.5	9	9.5	7.5	9	6.7	7				
K 27 下	(9)	(11)	13	13	8.5	10	14.2	12	口縁				
K 30 上	3	8.4	11.5	12	14	7.5	21.5	7.5					上端
K 31 下	(5.5)	(12)	13	8.5	6	11.3	7	10	8		口縁		中位
K 33 上	3.5	6	10	11	9.5	8	11	13.5	8	11		口縁	上～中
K 33 上	6.5	10	10	12.5	11	14.5	12	9	6	5	口縁		下端
K 34 上	2.5	16	11	12.5	15	11	7	6.5					下端
K 35 下	6	12	14.5	11.5	10	11	8.5	13		口縁			上端
ハサコの宮 第2次K2上	10.5	18.5	7.5	11	9	8.5	8						中位
〃 下	7	16	14	8	9	12.5	11	11					上･下に交又
K 1 下	5.5	8.5	11.5	9.5	15.5	18.5	12.5	15.5	11	8	口縁		下端
K 2 上	5	7.5	11.5	12.5	11.5	11.5	12.5	12.5		口縁			中～下
K 5 下	4.4	18.5	16	14.5	8	14	16	5	口縁				下端
K 5 上	9	15.5	13.5	10.5	13.5	10	13	3		口縁			上端
K 6 下	6.5	(12)	(10)	15.5	9.5	14	(10)	(11.5)	5	口縁			下端
K 6 上	8	10	10	9	15.5	8	13	16	3.5	口縁			中～下
K 7 下	(6.5)	(8)	7	18.5	12.5	11.5	20	8.5		口縁			中位
K 5 上	6.5	12.5	20	8.5	9.5	11	10		口縁				中位
K 5 下	10.5	9	8	23	13	17	13	口縁					上端
〃 反対側	8	14.5	15	13	13	20	6	口縁					下端
K 9 上	(7)	(5.5)	7	8	12.5	13	14	13					中位

粘土帯 / 番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	凸帯の位置
	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm	cm				
K 11 上	6.5	18	17	17	13.5	15		口 縁					中 位
K 11 下	10.5	10.5	13	10.5	10	12.5	7	12.5	7.5		口 縁		上 端
K 13 上		6.5	13.5	10.5	10	7	8.5	10	9.5		口 縁		下 端
K 13 下				14.5	14.5	18.5	7.5	7.5	口 縁				上 端
K 16 下	(5.5)	(10)	14.5	16.5	7	10	17	9	11.5	口 縁			上 端
K 17 上	4	10	19	16	20	16.5	8	口 縁					下 端
K 17 下	7	16	17.5	18	9.5	15	15.5		口 縁				中 位
K 19 下	5	11	10.5	9.5	20	15.5	13	口 縁					
K 20 下	7	7	8.5	9	8.5	13	6.5	11.5	8.5		口 縁		中 位
K 21	8	15	15	(13)	9	10	10.5	9.5	口 縁				中 位
K 22 上	5.5	7	16	17.5	8	9	11.5	12	10				下 端
正原K1	(7.5)	(18.5)	20.5	10	(11)	14.5	14	口 縁					上 端
K 2 上	4.5	5.5	10	13.5	8	8	8	10	9.5	6.5	口 縁		上 端
K 2 下	9	17.5	17.5	9	15	(11)	10	口 縁					上 端
K 4 上	9.5	15.5	15	11.5	10	10	15.5		口 縁				下 端
K 4 下	7.5	15	17.5	17.5	16.5	13.5	8		口 縁				中 位
K 5 上	7.5	11	11.5	10	12.5	12	11	7.5	8.5	口 縁			上 端
K 5 下	(7.5)	(8.5)	15.5	8	10.5	10	10.5	10.5	7	口 縁			中 位
K 6 上	(8.5)	(9.5)	7.5	12.5	13.5	13.5	13	8.5		口 縁			中 位
K 6 下	(6)	(12)	10	11	12	13.5	14	7.5		口 縁			中 位

*cm*のものが最も多いとしている。道場山の場合においても、今回の場合にも私の観察では必ずしも8*cm*前後というところに落ちつかない。8*cm*前後とする根底には、粘土帯を積みあげる際の粘土紐の径を考慮している面もあるのではないかと考える。

b）粘土帯の積み上げ

粘土帯の積み上げについては殆んどが1本の粘土紐を考えているのであろう。したがって粘土帯の幅が8*cm*前後、6～8*cm*となるのであろうが、私の観察によると幅広いものが多い。この際幅広いものでも、その中間に凹部が存在するが、私は凹部が必ずしも接合部とは考えていない。

北牟田K26上にみられるように、この甕棺の他の部分は黄褐色を呈しているが、口縁下の2つの粘土帯にわたって、横長約50*cm*の赤褐色を呈する部分がある。これは、粘土が不足し、他

の粘土を使用した結果によると考えられる。

他の甕棺でも接合部を横に追っていくと、必ずしも直線的でなく、段ちがいを呈する部分(┐└)もある。又、復原中に観察すると普通、接合面に生じる擬口縁と呼ばれるものと同様の接合部が縦方向に現われるものもある( )。1周すると当然そのような部分が1ヶ所はあると考えるが、これは必ずしも1ヶ所ではない。したがって、私は横長50*cm*程の横粘土板を4～5枚使用し、1段を形成するものと考える。

この横板継ぎ積み上げ技法ともいうべきものを甕棺成形法の基本とするが、たまに縦粘土板を継ぎ合わせたと思われる部分も存在する。

例えば、北牟田K30上は、凸帯の貼付された粘土帯より2段上（下から8番目）が、縦粘土板を継ぎあわせたものと考えられる。縦長は平均的に21*cm*、上位の横幅、11、12、11、12、14.5、15、14*cm*、下位の横幅は10、11.5、11、12、17、11、18*cm*を測る。ハサコの宮K7上は下から3番目の粘土帯にそれと思われる部分がある。縦長は20*cm*前後、横幅は9、9.5、11.5、7.3*cm*を測る。

以上のように甕棺の成形は、横長50*cm*程の横粘土板を継ぎ合せていく方法を基本とするが、KII期の甕棺のなかに、稀少ではあるが、部分的に縦粘土板を継ぎ合せていく手法も存在する。

c）成形の段階について

成形の段階については佐原氏の黒髪式甕棺の刷毛目の観察から得た所見では、全体の形を仕上げたのち、一気に全面に刷毛目調整したものとされる。

井上氏は刷毛目調整とナデ調整を観察し、5～6段階の工程を経ているとする。

甕棺は本来、ハケ目をナデ消しているので、観察は困難であるが、今回、ハケ目の残るものから観察すると、ほぼ井上氏と同様の結論を得た。

例えば、北牟田K18は6段階に分かれ、[8]接合部よりやや下位でハケ目の不連続部が認められるので、底部から成形し、上位を成形したのちハケ目調整を加えている。北牟田K27は、上・下甕ともに日常容器を転用したものと考えるが、上甕は6段階、下甕は4段階で、底部から成形していくものと考える。下甕は、底部のハケ目は下⟶上へ、口縁下のハケ目は上⟶下へ施されている。北牟田K30上・K34上はともに5段階にわかれる。

以上の例からすると成形段階は4～6段階に分かれ、ハケ目は接合部よりやや下位で不連続部が認められるので、底部から口縁へと成形されていったことがわかる。

d）凸帯の位置について

ここでいう凸帯の位置は、粘土帯のいずれの部分に存在するかを問題にする。

凸帯の存在する粘土帯についてはTab. 14にゴチックで表わした。KIII期以後の甕棺については、粘土帯の上端に近いところに長大な凸帯を貼付するものが圧倒的である。しかし北牟田、ハサコの宮、正原のKII期を中心とする甕棺の観察の所見では、粘土帯の上端に位置するもの、中位に位置するもの、下端に位置するもの、上・下粘土帯にわたって交叉するものがある。

甕棺の胴部凸帯は、はやいものでKIb式に出現しているが、KI期の段階では凸帯を付すものは主体でなく、甕棺が壺の大形化したものから出現したという、出自の問題からいっても、壺の肩部にあたる部分に段を形成し、又は沈線を施すものが主体である。

KIIa式以後になって、基本的には胴部凸帯を貼付するといえる。したがって、この時点ではKI期の甕棺の肩の段・沈線の位置にあたる、胴部上位に凸帯が貼付され、補強という点では積極性は認められず、装飾的観が強い。凸帯下にある、凸帯貼付の設計線とおぼしき沈線も前段階からの延長上にあるものと解される。

KII期全般を通じてみて、凸帯の位置は粘土帯の上端にのみ存在するとはいえず、補強という面からの積極的なところは、認め難い。また、北牟田K27上のような日常容器の大甕を転用したと思われるものには、胴部凸帯はない。この点は強調しておきたい。

KIII期、とくにKIIIb式以後になり、凸帯が長大化し、かつ粘土帯の上端に位置することは高島氏の主張するように補強面の積極的意義があるということは論理的でもあり、必ずしも否定はしない。しかしながら、先に述べたように、私の注意したのは、煤の付着、又は二次的加熱による赤変部を示す、日常容器の大形甕を転用した60～70*cm*代の甕棺に胴部凸帯がなく、同様の大きさのもので、煤の付着、二次的加熱による赤変部を認められないもの、いいかえると棺専用としてつくられたものには胴部凸帯が存在するということである。単純に成形段階におけるひび割れを防ぐための補強であれば、日常容器の大形甕にも凸帯を付すのは当然であろう。このような観点から胴部凸帯は、運搬の用に供するという意見を提出したのである。

e）再びタタキ技法の存在について

北牟田、ハサコの宮、正原遺跡の甕棺で、明瞭なタタキ痕を認めたものは、ハサコの宮K24下、正原K4上の2つである（Fig. 85・94）。

ハサコの宮K24下はKIc式併行期、つまり前期末の日常容器を転用した甕の底部付近にタタキ痕が残存する。長35*mm*、幅3*mm*の小形のタタキ痕で、何本で1単位になるかは不明。正原K4上はKIIa式の大形棺で、口縁下にタタキ痕が認められる。長約150*mm*、幅13*mm*で、

3～4本を1単位とするようである。この大きなタタキ痕については既に道場山の報告で数例をあげ、写真も掲載したが、それとほぼ同様のものである。いま、さらに吉ヶ浦K60の口縁下内面に残存する同様のタタキ痕[9]の拓影を示しておこう。吉ヶ浦K60はKⅢc式の甕棺で、タタキ痕の長は約100*mm*、幅9～10*mm*で、4本を1単位とする大形棺に通有の大きさのものである。このタタキの工具原体が如何なるものであるかは現在のところ思いおよばないが、これは大形棺発生時から存在することは明瞭であり[9]、日常容器にも筑紫野市剣塚の貯蔵穴より出土した、板付Ⅱ式の甕にタタキ痕が認められ、今回もハサコの宮K24下で前期末に、日常容器を転用したものに、タタキ痕が存在すること[10]を追認した。

このようなタタキ技法の存在によって、大形棺を成形していく技術が可能であったことを再度、強調する

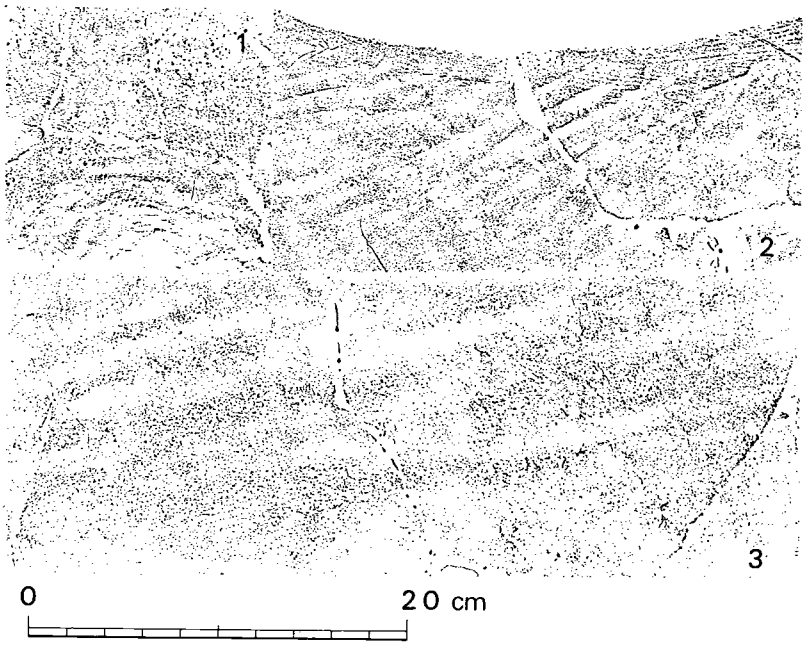


Fig. 97　タタキ痕拓影（縮尺1/4）

1ハサコの宮K24下　2吉ヶ浦K60
3正原K4上

2　調整段階の所見

甕棺は普通、タタキ痕をハケ目で掻き消し、さらにハケ目をナデ消すので、ハケ目以前の調整を詳細に観察するのは困難な面もある。

タタキ技法自体は成形段階におけるものであり、これを掻き消すためにいわゆるハケ目が施される。器表と内面のハケ目を観察すると、工具が明らかに異なるものが多い。

まず器表のハケ目はナデ消す際に底部付近のナデが不充分であるため、底部付近に若干残存する場合がある。それによると、器表に残るハケ目は目が細かいものが多く、横山氏の研究を参考にすると、スギ等の針葉樹である可能性が強い。(1)

内面を掻いている工具の幅は25～35*mm*のもので、板の木口を用いており、明らかにハケ目工具の一種であることはまちがいない。幅広の目を呈するが、樹種の決定は私にはできない。しかしながら器表のハケ目に比べ、より強烈に器面を引掻いた観が強いので、これを「擦過」と呼び、器表に残るハケ目と区別した。適切な表現であるか否かはわからないが、今後樹種の決定をも合せ、諸先学の御高配をたまわりたい。

KII期の甕棺はきわめてうすく、5～8*mm*程度のものが多い、これは器表よりも、内面を重点に引掻き、器面を整えているためと考えられる。

又、北牟田K7、K30下、K34上下、ハサコの宮第2次K2上、K7上、K9上、K16上下、K19下、K21上等にはミガキではないが、一見ミガキに見える調整法が存在する。これらの甕棺は、KIc式1基があるが、他のものはすべてKIIa式で、古い要素を残すもの、又は地方色を示すものが多い。したがって前期的要素が残ったものとして把握できるが、これも観察の結果によると、内面に残る幅広の目を呈する工具で擦過した後、丁寧なナデを行なったものではないかと考えている。

最終的仕上げはナデによる調整が行なわれ、この段階で、タタキ・ハケ目等の痕跡はほぼナデ消され、底部付近に部分的にハケ目が残存するものがある程度である。

この傾向は基本的にはKIV期まで引き継がれている。

註1　福岡県教育委員会「九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告」（XXV）1978

2　佐原真「土器の話」10　考古学研究75　1973.1

3　高島忠平「III・甕棺の製作技術」福岡県飯塚市立岩遺蹟調査会編『立岩遺蹟』1977　所収

4　1に同じ

5　井上裕弘「甕棺製作技術と工人集団把握への試論」　福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』9. 1978

6　佐原真「土器の話」1～12　考古学研究64～80　1970. 3 ～1974. 3

7　横山浩一「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」九州文化史研究所紀要23．1978

8　しかし、これは佐原氏の観察に疑問を呈するものではなく、佐原氏の観察した黒髪式甕棺は先にも述べたように、小形棺であるので、大形棺と同列には論じられないと考えている。

9　1に同じ

10　福岡県教育委員会「九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告」（XXIV）下　1978

11　7に同じ

4．甕棺の編年的研究

はじめに

弥生時代の北九州には、大形甕を棺として用いた特殊な埋葬法が発達した。これは木棺、箱式石棺、土壙墓等と異なり，副葬品・供献土器等を伴わなくとも、棺自体が編年可能であるという有利な条件をもつとともに、中国・朝鮮等で製作・使用された実年代が知られている青銅器等の舶載品を副葬したものも存在し，これらの舶載品の示す年代から、甕棺の相対的編年にある程度、絶対年代を与え得るという好条件をも具備している。

古墳発生等の諸問題の解明にとって、弥生時代の占める歴史的位置はきわめて重要なものである。近年これらの問題を目的意識的に追求する試みも多くなりつつある。しかるに弥生時代の二大中心地といわれる畿内と北九州の研究者の間に、きわめて大きな年代観のずれがあって、共通の土台の上にたった討論を行なうには一定の困難な状況が存在している。このような状況をうちやぶるためには、隣接諸地域の併行関係を確定していく全国的な共同研究を行なう必要がある。しかしこれは、長期にわたることは必至であり、今後の課題とせざるを得ない。

現在まで発掘された甕棺は、莫大な量に及び、資料的にもほぼ全期間にわたって考察し得る状況になっている。幸いに、今回、甕棺墓群の報告を担当するところとなり、これを機会に、日頃考えてきた甕棺の編年的考察を行ない、年代論についての私見を述べ、諸先学の御批判をあおぎたい。

まず、ここ近年の甕棺編年の研究史を概略的に見て、問題点を整理し、本論にはいりたい。

森貞次郎氏は、1966年の段階で、甕棺墓とその年代にふれ(1)、「前述のように南鮮の支石墓社会層が木棺墓社会に接触してその水準がこれにちかくたかめられたときをもって弥生前期末中期初頭と考えるならば、中期中ごろの須玖式土器の甕棺に前漢鏡がともなうことから、中期初頭の弥生文化は紀元前108年の真番郡設置のころ、中期中ごろの弥生文化は北部九州人が直接楽浪に接触した真番郡廃止よりのちの前１世紀中葉から後半にあたるとみられはしないだろうか」とし、中期初頭をB.C 108年頃、中期中頃をB.C １世紀中葉～後葉に位置づけている。

1968年の段階では、細形銅剣の流入を考察するなかで、甕棺の編年を体系づけ、次のように分類した。(2)

伯 玄 式――前期後半
金 海 式――前 期 末
城の越式――中期初頭
汲 田 式――中期前半
須 玖 式――中期中頃
立 岩 式――中期後半
桜馬場式――後期初頭
三 津 式――後期中頃
日佐原式――後 期 末

このなかで年代論にもふれ、「かりに古式の細形銅剣によって象徴される舶載文化を第1期細形銅剣文化、新式の細形銅剣によって象徴される舶載文化を第2期細形銅剣文化とよぶと、後者が西暦前108年の楽浪郡設置の時を溯るものではないことが推定される。第1期細形銅剣文化の上限については、一応間接であるが、西暦前222年の秦始皇25年在銘の銅戈の時期よりあまり溯ることはないとみられる。わが国への舶載の時期については、朝鮮半島で製作――舶載――副葬の段階が各型式の序列の如く混乱なく行なわれ、しかもその間にあまり永い時間を要しなかったとすれば、朝鮮半島の事物で示された上限年代からあまり引き下げなくてもよいわけである。かりにこれを半世紀とやや大幅にとってみると、わが国における第1期文化の開始は西暦前170年代、その第1期文化の開始は西暦前50年代ということになる。」これは森氏の土器型式にあてはめると、前期末がB.C.170年代、中期中頃が、B.C.50年代に開始されるということになる。

以上の森貞次郎氏の研究を継承しつつ、その後の甕棺編年は行なわれているといえる。

折尾学氏は金隈遺跡の報告で次のような編年観を提示した。

金隈Ⅰa式――　K103
Ⅰb式――（金海式、前期末）　K102
Ⅱa式――（城ノ越式）　K30
Ⅱb式――（汲田式、中期前葉）K29・K43・K83・K89
Ⅲa式――（須玖式、中期中葉）K23・K61・K74
Ⅲb式――（須玖式、中期中葉）K13・K32
Ⅲ　式――（須玖式、中期中葉）K125・**K127**
Ⅳ式――（立岩式、中期後葉）　K12・K35
Ⅴ式――（桜馬場式、後期初頭）K96・K135

このなかで、Ⅲa式はⅡb式と一見したところあまり変化はなく、口縁下に凸帯はないとし、Ⅲb式は口縁下に凸帯が出現し、胴部には三角凸帯2条が付され、Ⅲc式では胴部にコ字の凸帯2条が付されるとし、a、b、cの形態が新旧を示す形態として把握されるものかどうかは大いに考察の余地を残すとしている。1971年の段階で、甕棺墓群の体系的な報告がなされたのは、この金隈遺跡のみであったといえる。一部Ⅳ式（立岩式）としたものは、橋口編年によるKⅡb式、KⅡc式の丸味をもつ甕棺、いわゆる中期前半のものをもってきたという誤ちがあるとはいえ、この段階で最もすぐれた考察の一つであり、現在でも分類の大綱はⅣ式をのぞき

ほぼ同意できる。

岡崎敬氏は同じく1971年に、次のような編年案を提示した。

Tab. 15 岡 崎 氏 編 年 表

西暦	時代区分	弥生式土器編年		土師器編年	主なる墳墓	主なる共伴遺物
	弥生時代	板付 I 式			五反田	
		〃 II 式	(伯玄式)		伯玄	
		〃 III 式	(金海式)		板付	銅剣・矛
		城ノ越式				
		須玖 I 式	(汲田式)		宇木汲田	多鈕細文鏡
		〃 II 式	(須玖式)		三雲、須玖	前漢鏡
0		〃 III 式	(立岩式)		立岩	〃
100		原ノ辻上層式	(桜馬場式)		桜馬場・井原	方格規矩四神鏡
200		弥永原				
		狐塚 I 式	(三津式)		三津永田 日佐原 宮ノ前	内行花文鏡 弥生仿製鏡
		〃 II 式	(神在式)			
300		→	→	狐塚III式		

そして次のような年代観を展開する。「三雲・須玖・立岩にみるように前漢鏡を多数副葬し方格規矩四神鏡のごとき王莽代から後漢初期にかけての鏡を共伴していないことは、この鏡が前漢代に渡来して後漢の初め以前に埋納されていたと考えるのが自然であろう。前漢代といっても、楽浪郡が現在の北鮮、平壌市の近郊におかれたのが、武帝の元封2年（前109）のことであり、これを上限とし、この三遺跡の年代は、前1世紀、おそくとも後1世紀の前半を遠く下らぬであろう」とする。次に桜馬場と井原ヤリミゾを「同時期のものとすることが可能」であり、「流雲文縁方格規矩四神鏡は王莽代より後漢代初期に盛行したもので、ここでは長宜子孫内行花文鏡がないことを注意すべき」であるとして、建武中元2年に光武帝が倭の奴国に与えた金印が、志賀島発見の「漢倭奴国王」印であるとして、この「金印にともなって鏡がおくられたことを想像」し、「この時期の鏡は当然方格規矩四神鏡であり、桜馬場、井原ヤリミゾ両遺跡の方格規矩四神鏡埋納の上限を紀元57年におき、1世紀後半、おそくとも2世紀前半を遠く下らないであろう」とする。(5) 又詳細は略すが「狐塚I・II式の時期は2世紀後半より3世紀前半にあてることも可能であろう。これにひきつづく土師器の狐塚III式も3世紀にあてることができよう」としている。

さらに岡崎氏は1977年に、立岩の鏡の年代にふれて(6)、次のような見解を示している。「立岩の鏡は洛陽焼溝漢墓第2期、中国でいう昭明鏡・日光鏡が主体であり、これは宣帝代（前74—

49）・元帝代（前49—33）のものである。立岩の鏡の埋葬の上限はここにおかれる。また立岩の鏡にはその次の段階である変形四螭鏡や王莽新代の規矩鏡を1面もまじえていないことも注意される。おそらく少くとも方格規矩四神鏡が入る直前までに副葬されたとする見方が成立する。そうすれば前1世紀後半から紀元1世紀前半にその埋葬を考えるのは妥当と考えるのである」とし、又、三雲1号棺、須玖岡本との関係にふれ、「鏡よりいえばこの埋葬および副葬の時代は時代的には3者さほどことなるところがない」としている。

小田富士雄氏は1973年に甕棺の編年にふれているが、氏独自の見解の展開はなく、それまでの編年を概観したものといえる。しかしこのなかで(7)若干年代論にふれ「いずれにせよ、わが国における朝鮮製青銅利器登場の契機は漢の楽浪郡設置（B.C.108年）に求められるであろうから、前期末から中期に移行する実年代をほぼ知ることができよう」とし、又編年論にもふれて「金海式から三津式におよぶ甕棺編年は、朝鮮系青銅利器・中国鏡・国産青銅器の組み合せや形式分類が、編年的序列を違えることなく順を追うて副葬されているという事実が主となり、これに甕棺の形式観が加えられてきたものであった。したがって、墳墓以外の遺跡から発見される土器の組みあわせを主としてつくられた土器編年よりも細分される傾向があることは否定できないところである」とする。

高島氏は1977年に甕棺の編年を行なっている。氏は「前・中・後期といった時期区分は弥生時代の文化の推移・発展の認識を目的とした(8)ものではないということである。また、この3期区分は、あくまで土器様式が基準になっていることである。したがって弥生研究における前・中・後期の枠組は、土器様式によってなされる筋合いのものである」と述べ、『しかし今日では、そうした3時期区分の研究史過程が看過され、文化要素や文化論が逆に土器様式決定の基準となるような傾向が一部にある。学史的論証過程を無視した文化論のみの「ひとりあるき」である』と一部にある傾向を批判し、「土器論の立場から甕棺の型式変化の動因を概括」している。氏の編年は森貞次郎氏の業績をふまえつつ、Ⅰ～Ⅹ式に分類している。

Ⅰ式———板付Ⅰ式——藤崎

Ⅱ式———森氏伯玄式に相当——志登K７、伯玄社K94

Ⅲ式———森氏金海式に相当———金隈K102

Ⅳ式———森氏城ノ越式に相当——城山K18、金海K１・立岩29・田代天満宮K５・K68・K74・森原１・２、葉山台K６

Ⅴ式———森氏汲田式に相当——須玖K15

Ⅵ式———森氏須玖式に相当——須玖K13・立岩K19・K33・K40

Ⅶ式———森氏立岩式に相当———立岩K10

Ⅷ式———森氏桜馬場式に相当———桜馬場Ⅲ式・丸尾台・二塚山K46

Ⅸ式———森氏三津式に相当——二塚山K76・三津K104

X式———森氏日佐原式・大神氏神在式に相当———祇園山

このなかで、特にIII、IV式の問題で「これまで、金海出土の甕棺を一括して前期末の標式的なものとして、一般にとらえてきているが、新旧の区別が必要であろう」とし、新式のものはIV式へ下げて考える見解を示している。又、X式については「いわゆる西新町式の技法と一致する。画文帯神獣鏡を副葬した福岡県祇園山の甕棺が代表例で、西新町式というべきであろうが、X式のあるものは、あるいは古墳時代のもので、土師器の可能性もある」としているところが注目される。

高倉洋彰氏は1978年に、大形甕棺の編年にふれ、——ことに型式設定の手続きの問題に関して——という副題をつけ、編年の方法的問題に言及している。氏の編年論は必ずしも土器論ではないが、きわめてユニークな見解を展開しているので、(9)主要な点を紹介する。

氏は森・折尾両氏の編年観を対比しつつ、主に城ノ越式の問題をとりあげ、金隈を例にして、「城ノ越式の大形棺が金隈遺跡でほとんどみられないことは、換言すれば、城ノ越式に一定の時間を与えた場合、連続性をもって展開するこの墓地に、中期初頭の段階で断絶が生じるという問題がそこにある」。又、宇木汲田をとりあげ「この遺跡においても城ノ越式は小児棺のみにみられた。やはり城ノ越式は形態変化のプロセスとしては存在するものの、大形甕棺の編年から除かれるべきであろう」とする。

次に「折尾編年を将来にわたって普遍性、有効性を有する編年案として評価したい」として折尾編年と森編年との対応から次のような氏の編年案を提示している。

金隈式（前期後半）——伯玄式・金海式＝金隈I式に相当
汲田式（須玖I式、中期後半）——須玖K15を標式とする
須玖式（須玖II式、中期中頃）——須玖K13を標式とする
立岩式（須玖III式、中期後半）——須玖K10を標式とする
桜馬場式（一の谷式、後期前半）——桜馬場式・三津式に相当

そして、結論的には「型式分類として、森編年は正しいと考える。そこに他の概念、この場合は時間、を持ち込むことにむしろためらいを感じる。しかし編年である以上そこには当然時間の概念が必要である。したがって前項での型式設定は、汲田式・須玖式云々とするよりもむしろ時間の尺度のメルク・マールとしての汲田期・須玖期云々と表現した方が適切かもしれない」とし、又「現状の土器編年は結果的に土器が社会を規制している」として「------（中略）、土器の編年がタイム・テーブルの役割を果す以上、前期・中期の区分には、できうれば社会的背景を求めたい。社会に土器を規制させようと考えるのである」と氏独自の見解を示している。

以上、甕棺の全期間にわたって論じたここ10数年の編年論をとりあげた。ここには、土器論としての編年論、副葬品を中心に年代論を展開した編年論、又社会に土器を規制させようとす

る見解等の諸傾向がある。しかしながらいずれにしても、森貞次郎氏の先駆的業績をふまえ、又はさけては編年論を論じられないことを示している。

いま各氏の個々の問題点については、本論で必要に応じて言及することとして、問題点を整理してみよう。

大形甕棺は、冒頭でも述べたように、埋葬専用として北九州を中心にして特殊に展開した土器である。しかしながら土器である以上は、棺専用の特殊な要素に加えて、生活用としての日常容器と対応する普遍性が認められるものと考える。したがって埋葬用甕としての甕棺のみが「墳墓以外の遺跡から発見される土器の組みあわせを主としてつくられた土器編年よりも細分される傾向がある」という点は、今まではそういう傾向があったとしても納得できない。日常容器の分類が、おくれているという反省にたつべきであろう。土器の細分にも、異論があるようであるが、いたずらな細分を行ない混乱するような傾向には反対するが、一定の細分は必要であると考える。

このような観点から、今までの成果をふまえつつ、第1に甕棺の形態論を中心にして、切合い、セット関係等も考慮しつつ、甕棺の型式分類を行ないたい。

次に、分類した甕棺と対応する、つまり併行関係にある日常容器を、甕棺に転用された小形棺および甕棺墓地の供献土器、甕棺の副葬小壺等を中心にしながら抽出し、編年を日常容器にも及ぼしたい。

次に、本来は、このようにして編年された日常容器から隣接諸地域、つまり玄海灘沿岸部、佐賀地方を中心とした、いわゆる須玖文化圏と、遠賀川流域、豊前地方との併行関係、豊前と周防との関係という形で追求し、西日本全域での併行関係を論じるべきであるが、この問題を手がけるには、時間もなく、資料的にも、未だ少なく、力量の点からも不足しているので、又最初に述べたように広域の共同研究をも必要するので、今回はこの問題は割愛したい。

最後に分類した甕棺と副葬品との関係を論じ、相対年代に絶対年代を付与する作業を行ないたい。

1）甕棺の型式分類

まず大形甕棺の型式をＫⅠ～ＫⅤ期の5期に大別する。(Kは甕棺を示す略記号として使用)。前期をＫⅠ期とし、中期を口縁下に凸帯のない時期と、口縁下凸帯出現以後の時期に二分し、前者をＫⅡ期、後者をＫⅢ期とする。明瞭な稜を有するく字口縁の出現から基本的に甕棺が終焉するまでの時期（後期前半）をＫⅣ期、基本的に甕棺葬が終焉した後、残存する甕棺と、糸島地方に特殊に展開する後期後半以後の甕棺をＫⅤ期とする。

5期に大別した甕棺を、さらにＫⅠ期をａ～ｃ、ＫⅡ期をａ～ｃ、ＫⅢ期をａ～ｃ、ＫⅣ期をａ～ｃ、ＫⅤ期をａ～ｆに細分し、計18型式を設定する。

以下順を追って説明する。

a）ＫＩ期の甕棺

ＫＩａ式（Fig. 98）

壺が大形化したものであるが、まだ80 *cm* をこえるものは殆んどなく、60～70 *cm* 代のものが多い。壺の形態を残すというよりもそのものである。口縁は外反し内側には粘土帯を貼付する。口縁端の上下、又は下端のみに刻目を施す。口縁下は段を形成し、古い要素をもつ。肩部は段をつくるか、又は沈線を付す。頸部は大きくすぼまり、前期壺に通有の内側に彎曲する曲線をもつ。胴部は上位に最大径があり、底部は大きく分厚いものが多い。器壁も分厚い。

器面調整はハケ目の後ヘラミガキを行なう。焼成はやや軟質で、灰黄色を呈するものが多い。いま図示したもののうち、剣塚Ｋ７は、報告者は剣塚の甕棺をＩ期（板付ＩＩａ式）、ＩＩ期（板付ＩＩｂ式）に分け、板付ＩＩａ式の小壺を副葬した木棺墓を切っていること、又上甕が亀ノ甲タイプの鉢であるということからＩＩ期に下げ、次のＫＩｂ式と同型式と考えている。[10] いわゆる亀ノ甲式又は亀ノ甲タイプとばれる土器が、どの時点で出現するかはきわめて興味のある問題であるが、いまは報告のとおり、この剣塚Ｋ７を甕棺墓としては次のＫＩｂ式に下るとしても、下甕に使用された大形壺はここで分類したＫＩａ式の諸特徴をそなえている。

この型式の甕棺は、福岡県筑紫野市剣塚、糸島郡前原町志登、[11] 筑紫郡那珂川町瀬戸内等にみられるが、現段階では未だ類例は少ない。

ＫＩｂ式（Fig. 99）

壺から発達した形態的特徴をよく示している。まだ60～70*cm*代のものが多いが、90*cm*をこすような大形品も出現し、次第に甕棺として定着していく傾向がみられる。

口縁は外反し、口縁内側には粘土帯を貼付し、口縁端の上下両端に刻目を施す。口縁下は段を形成せず、２～３条の沈線を施すものが多い。肩部も２～３条の沈線が施されるのが多くなるが、金隈Ｋ103、中・寺尾Ｋ４、Ｋ24上等のように三角凸帯を貼付し、刻目を施すものもある。[12] ＫＩａ式との最も大きなちがいは頸部のすぼまりが小さいこと、つまり頸部の径を大きくし、甕棺としてより合理的になってきたといえる。しかし頸部の曲線は未だ内側に彎曲しており、次のＫＩｃ式と異なる。胴部最大径は上位にあり、底部は大きく、器壁は分厚い。

器面調整はハケ目、ヘラミガキ、ナデの順で行なわれる。焼成は軟質で、色調も灰黄色を呈するものが多い。

この型式に属するものは図示したもの以外に、春日市伯玄社、[13] 宗像郡玄海町鐘崎、[14] 唐津市中原、[14] 同柏崎出土[14]の甕棺があげられる。

ＫＩｃ式（Fig. 100）

いわゆる金海式甕棺と呼称されてきたものである。壺から発達した形態的特徴を残しているが、甕とした方が適切であり、甕棺として定着したものといえる。まだ60～70*cm*代のものも

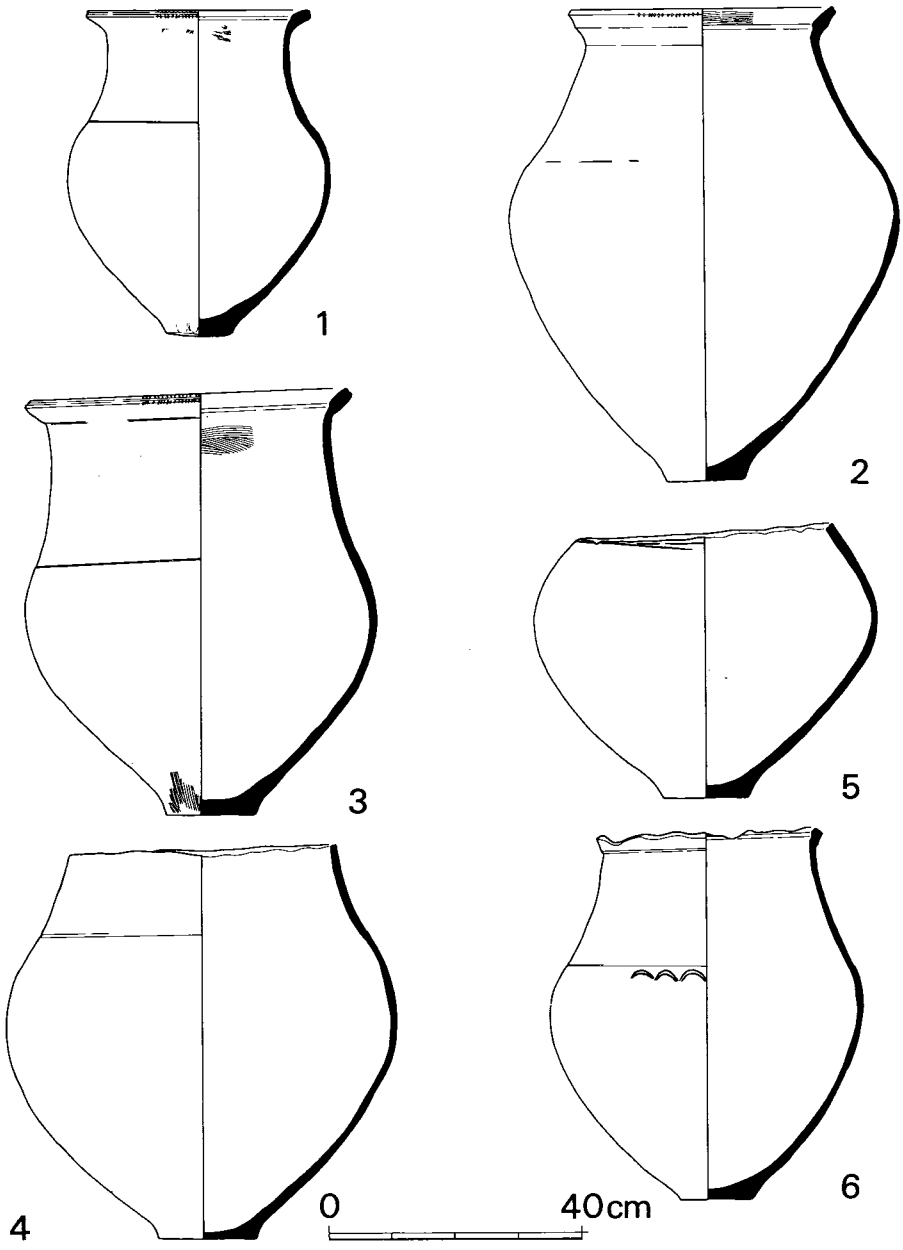


Fig. 98 ＫＩa式の甕棺（縮尺１/12）

１剣塚Ｋ７下　２剣塚Ｋ14下　３剣塚Ｋ15上
４剣塚Ｋ15下　５剣塚Ｋ16上　６剣塚Ｋ16下

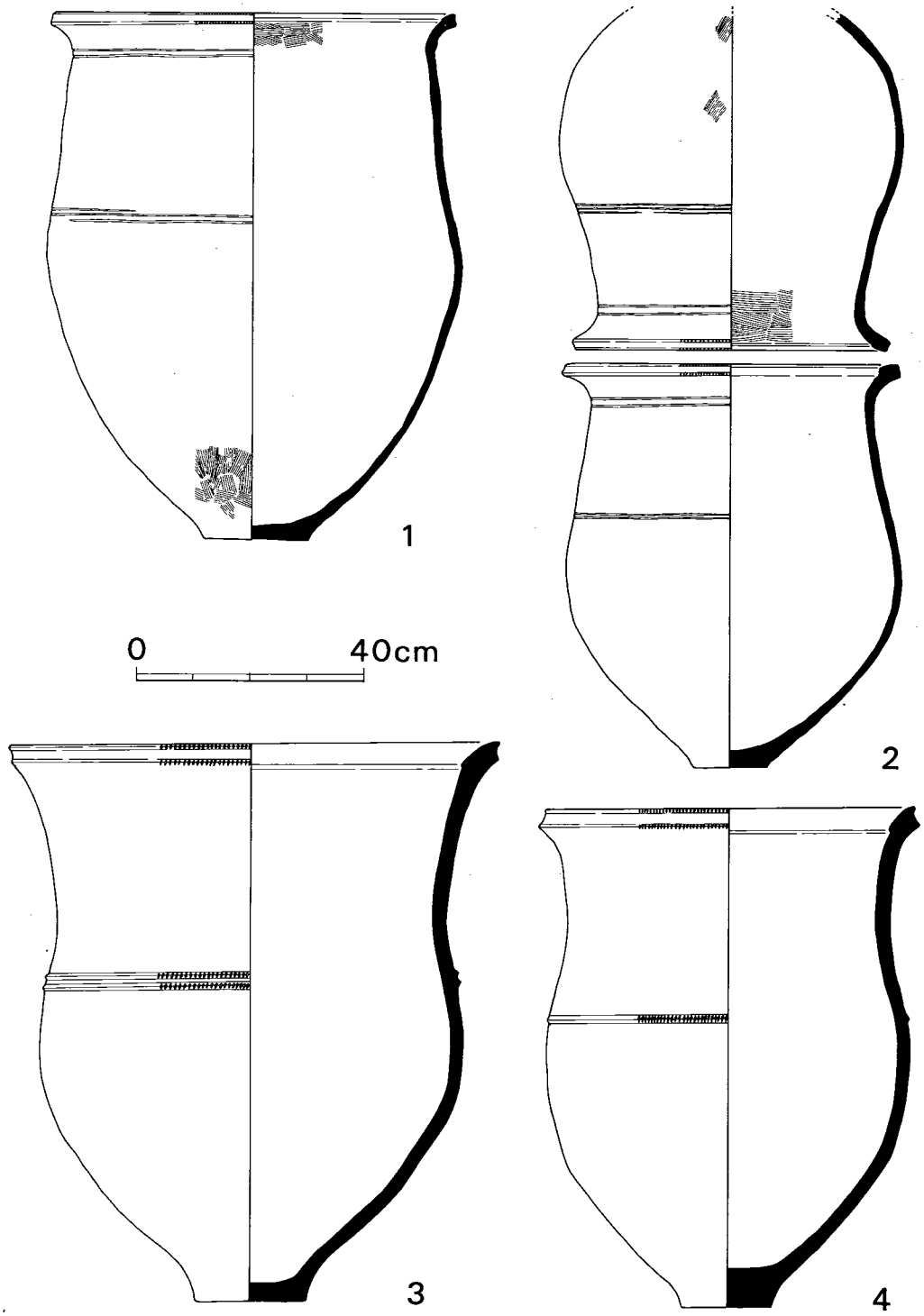


Fig. 99 ＫＩb式の甕棺（縮尺１/12）

１中・寺尾Ｋ２　２中・寺尾Ｋ17
３金隈Ｋ103下　４金隈Ｋ103上

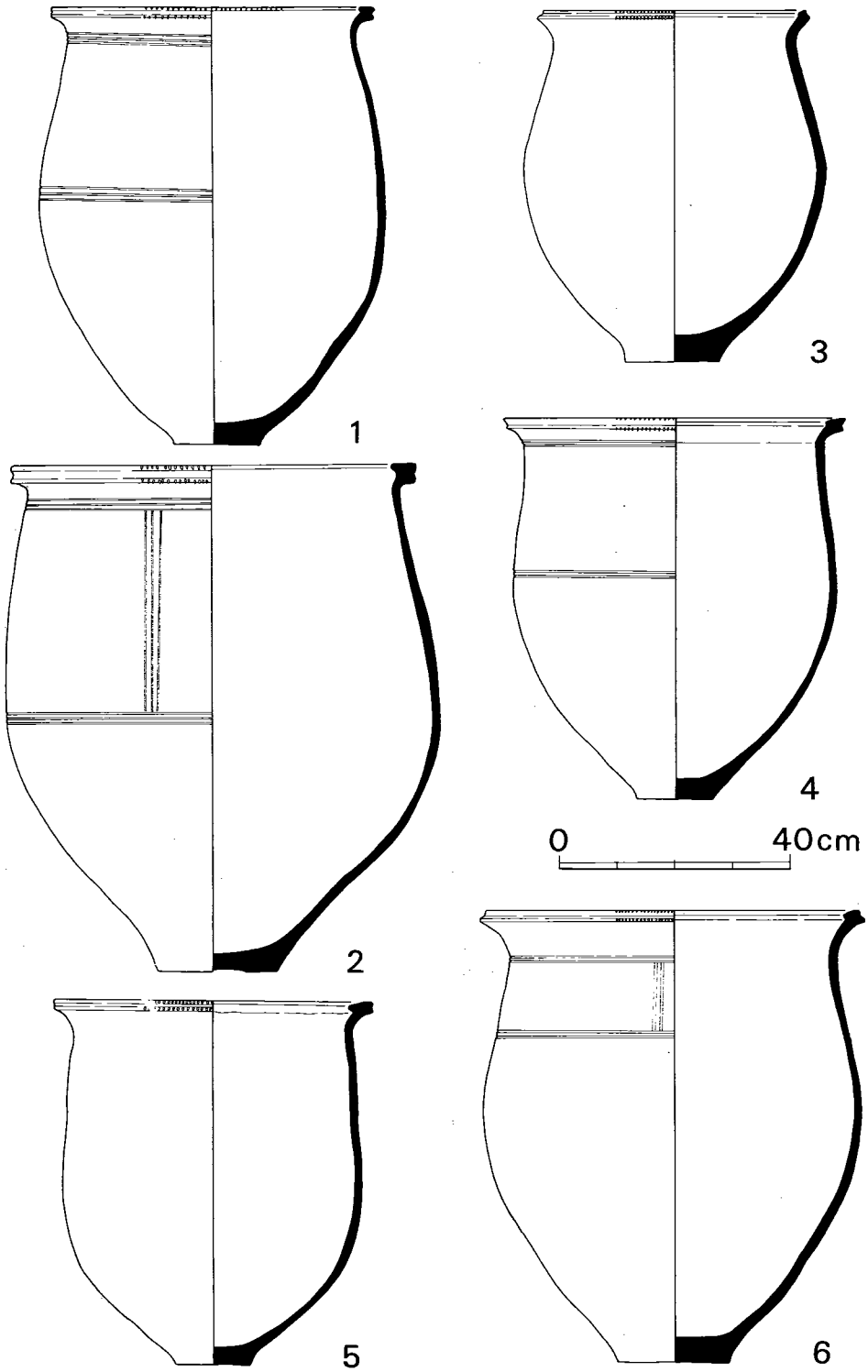


Fig. 100 ＫⅠc式の甕棺（縮尺1/12）
1福岡市飯倉　2有田Ｋ８下　3金隈Ｋ95下
4金隈Ｋ123下　5金隈Ｋ102上　6金隈Ｋ102下

あるが、80*cm*代をこえるものが多くなる。

口縁はやや内に低く傾斜し、内側というよりも上端に粘土帯を貼付し、口縁外側の上下には刻目を施す。口縁下は大きくすぼまるが、ＫＩａ、ＫＩｂ式でみられた頸部にあたる胴上半部は、外側に張り出す曲線を示し、より甕棺としては合理的になったといえる。したがって胴部最大径は胴部の中位又はやや上位にある。口縁下および前2者の肩にあたる部分に2～3条の沈線をめぐらし、又その間に縦沈線2～3条を数ヶ所施すものもある。底部は大きく、器壁は分厚い。

器面の調整は、ハケ目、ヘラミガキ、ナデが併用されている。焼成はやや軟質で、色調は灰黄色を呈するものが多い。

高島氏はこの型式(高島編年Ⅲ式)を新旧の2者に分け、新式を中期に下げて考える見解を示している。しかし甕棺の形態変遷は継起的､漸次的であって､同一型式のなかで古い要素を示すものから､[15]新しい要素を示すものがあるのは当然であり、新しい要素をもつのが、次の型式のものとセットになる例は多い。ここで図示した有田Ｋ８も上甕はＫⅡａ式である。このような現象は住居跡等でもいえることであり、何ら矛盾はない。次の城之越式の甕棺が少ないという認識から出た見解であろうと思われる。しかし後で述べるが、ＫⅡａ式の段階で、主に筑前・筑後・肥前三国境の小郡付近から佐賀にかけてこの、いわゆる〝金海くずれ〟ともいうべき、古い要素を残す中期の甕棺が存在しているのは確かである。これらに比べるとＫＩｃ式とした、いわゆる金海式甕棺は、明らかに古い要素をもっており、前期末として位置付けていいと考える。このＫＩｃ式は、甕棺分布圏のほぼ全域にみられる。

以上ＫＩ期の甕棺について述べてきたが、ＫＩａ～ＫＩｃ式に共通していえることは、それが、壺が大形化し、壺から発展した特徴をよく示し、残しているということである。次に、このことから、器面調整に壺と共通する手法、主にはヘラガキがされるということである。しかしここで、前項でもふれたが、どのような工具による器面調整であるかは現段階では決め難いが、一見ミガキにみえるがヘラミガキではない手法が存在している事を付記しておく。次に器壁が分厚く、底部が大きいということ、さらに焼成がやや軟質で、色調は灰黄色を呈するものが多いということである。

ｂ）ＫⅡ期の甕棺

ＫⅡａ式（Fig．101・102）

この型式はいわゆる城之越式甕棺と呼ばれるもので、型式としてはあるがこの型式だけでは一時期を設定できず、金海式とセットになり一時期をなすという見解や、時期的には短いという見解には根強いものがある。これはこの型式の甕棺の例が少ないこと、又この型式の甕棺を

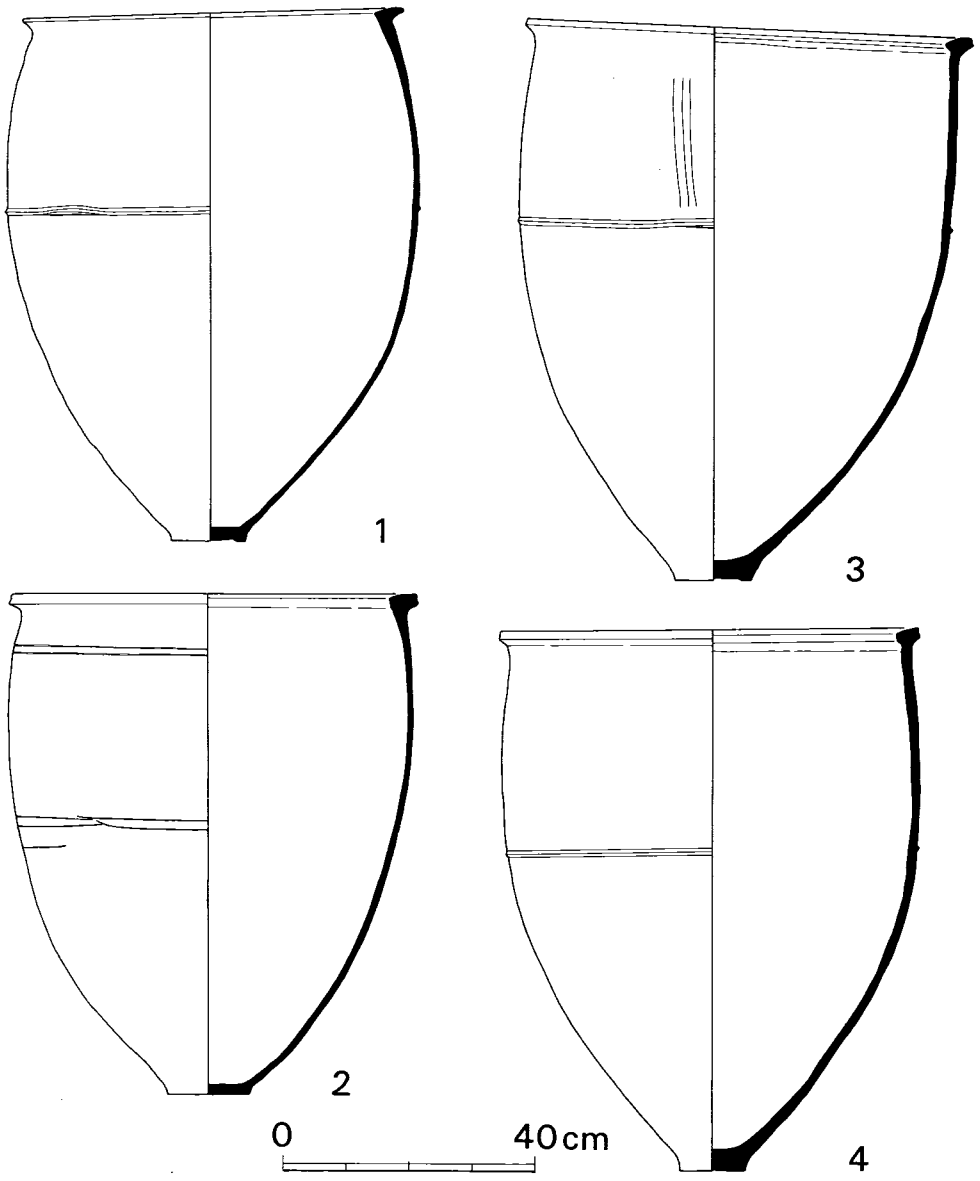


Fig. 101　K II a式の甕棺１（縮尺１/12）

１ハサコノ宮K８上　２ハサコノ宮K19下
３正原K２下　４正原K６上

分離できていないということに問題があるようである。又前期を中心にして盛行する、土壙墓・木棺墓（とくに木棺墓）が、中期前半まで存在することは確実であって、土壙墓・木棺墓と甕棺で墳墓を形成するときは、甕棺がつねに後出するということも明らかになっている。この

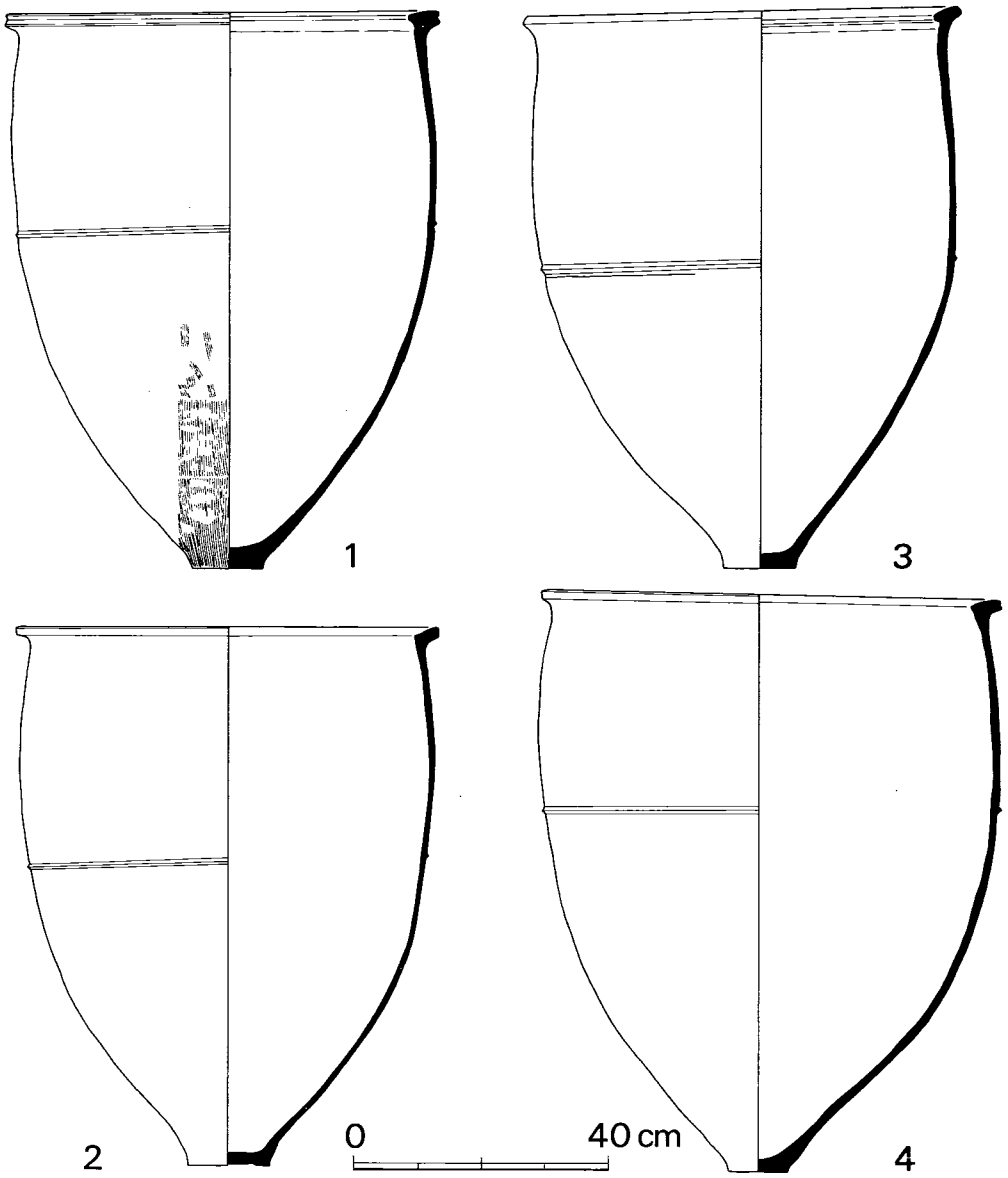


Fig. 102　K II a式の甕棺 2（縮尺 1 /12）

1 北牟田K35下　2 ハサコノ宮K21下
3 ハサコノ宮K22下　4 正原K 4 下

ようにみるならば、このK II a 式いわゆる城之越式の段階で、甕棺の絶対量が少ないということは、土壙墓・木棺墓が未だ主体を占めている場合が多いということも考慮せねばならない。私自身は以上のことからこの型式の甕棺も一時期をなすものとして、市民権を与えるべきであ

ると考えている。そのために図も多く使用し、強調したい。

口縁は内に低く傾斜し、外側への張り出しはきわめて小さい。逆L字状を呈するものが大部分であるが、内側にわずかに張り出すものもある。口縁上端に粘土帯を貼付するものが多く、KI期の手法を引き継いでいるといえる。胴上半はすぼまり、この点でもKIc式と継起的な関係にあることがうかがえる。胴部最大径は上位にあり、胴部凸帯は細いシャープな三角凸帯で、ほぼ胴部最大径を示す部位、つまり胴部上位にあり、KI期の肩の段、沈線の位置に凸帯が貼付されたことを示している。又、凸帯下に設計線とおぼしき沈線が施されているものがある。又凸帯を貼付せず、口縁下と胴部に沈線2～3条を施すもの、痕跡的にKIc式にみられた縦沈線を残すもの等も存在する。この点からもKIc式に引き続く型式であることは明瞭である。器高は80*cm*をこえるようになり、甕棺の通常の大きさを示すが、器壁はきわめて薄く5～8*mm*程で、底部はかなり小さくスマートになる。この型式で製作技術が一段と進んだことがわかる。器面調整はハケ目の後、全面をナデてハケ目をナデ消す。部分的に底部近くのみハケ目が残存するものである。この器面調整の手法は、KIV期まで基本的に引き継がれる。焼成は硬質となり、色調はやや赤味を帯びた黄褐色、赤褐色を呈するものが多くなる。

板付第I区K41[16]、飯氏馬場K3、K4[17]、唐津市萬麓・寺ノ下K35[18]等がこの型式に属するもので、今後類例を増してくると考える。

KIIa式の地方色ある甕棺（Fig. 103. 104）

KIIa式の段階では筑後・肥後北部・肥前（佐賀地方）を中心にして地方色ある甕棺が存在する。まず第1は、筑前・筑後・肥前の三国境、つまり三沢丘陵付近から肥後北部（玉名付近）にかけて分布する甕が大形化したような観をうける甕棺である（Fig. 103）。この甕棺は亀ノ甲型甕の口縁部にみられる粘土帯を口縁外側に貼付し、三角口縁を呈するものと口縁部の製作技法が一致する。しかし全形はKIIa式の典型的甕棺にほぼ共通する。胴部の凸帯は、見かけは2条の三角凸帯にみえるが、実際の造りは1条のものである（例外もあるが）。器壁は8～9*mm*と、KI期のものに比べると薄く、KIIa式の典型的な甕棺に比べるとやや厚い。底部は大きなものが多く、KI期の伝統を残しているといえる。器面調整にもヘラミガキ等の手法を残すものもあり、この点にも古い要素を残しているといえる。

次に、分布圏はかなりせまく、小郡周辺を中心に分布する甕棺がある（Fig. 104－1）。これは、外反する口縁の内側に細いシャープな三角凸帯を貼付するが、その変化したタイプもある（Fig. 104－2）。胴上半はすぼまり、壺の形態的特徴を残している。胴部最大径は胴下位にある。壺の肩部にあたる部分の、胴部のやや上位に見かけ2条造り1条の凸帯を貼付するものが多い。器壁は7～9*mm*とKIIa式の典型的なものに比べてやや厚く、底部は大きい。器面の調整には前者と同様の古い要素を残している。

次に、いわゆる金海式くずれともいうべきもので、ハサコの宮K13のように、口縁には刻目

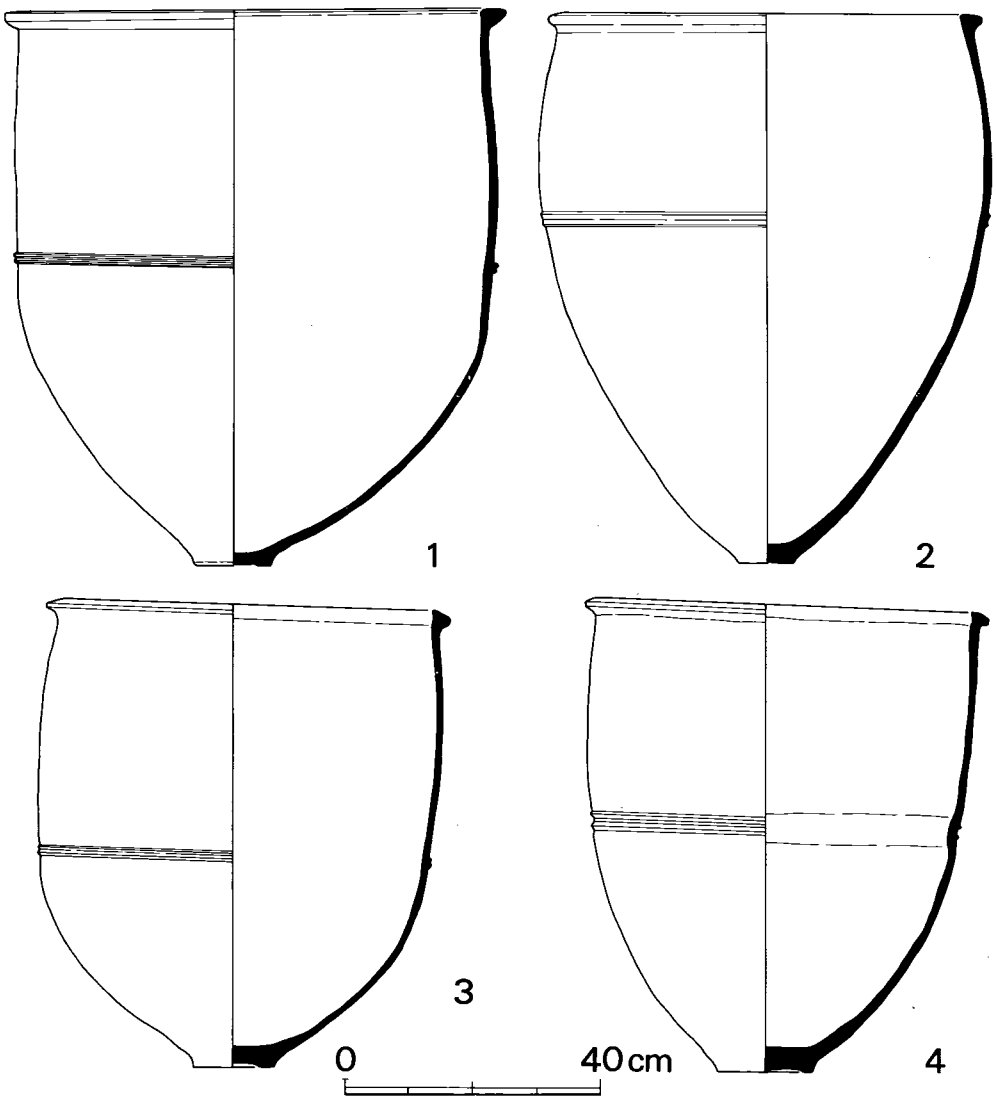


Fig. 103 KIIa式の地方色ある甕棺1（縮尺1/12）

1ハサコの宮K16下　2熊本県年の神
3ハサコの宮K9下　4北牟田K34上

を施し、横沈線、縦沈線も残したりして、KIc式に近い特徴をもつが、全体の器形がKIIa式の典型的なものに近く、胴部凸帯を付したりするもの、又は北牟田K27下のように、口縁には刻目を付さず、沈線、凸帯のないもの、三津永田出土甕棺（Fig.104－3）のように、口縁下に沈線を施すもの等がある。しかしこれらはいずれも、器形のうえからいっても、他の特徴から

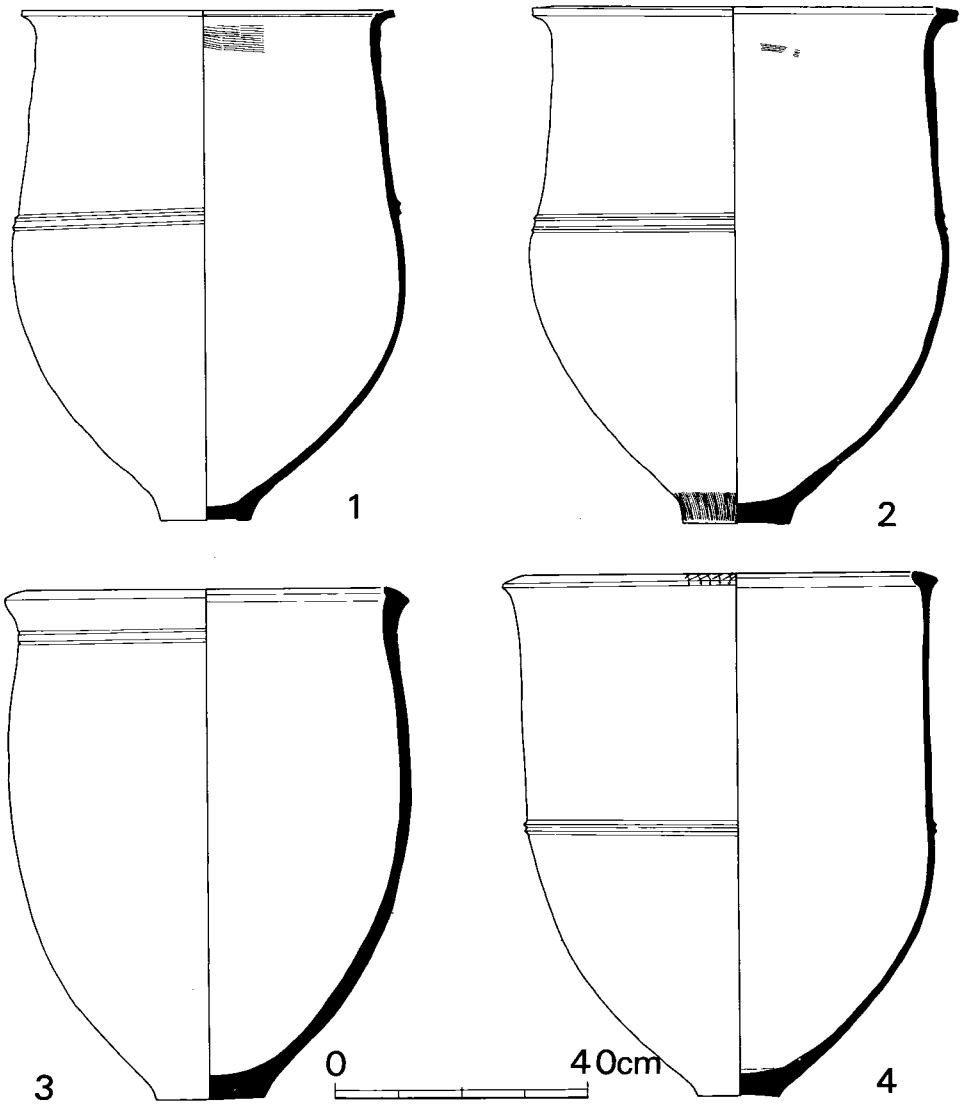


Fig. 104　K II a式の地方色ある甕棺２（縮尺１/12）

１ハサコの宮第２次K２下　２北牟田K30下
３三津・永田　４羽山台支石墓下甕

いっても、セット関係からいっても、K I c式より後出的で、K II a式に併行する時期のものと考える。

次に、筑後南部・肥後北部に分布する甕棺があげられる(Fig.104－４)。いま羽山台支石墓下の甕棺を図示したが、この甕棺の口縁はやや外に低く傾斜し、外にはほとんど発達せず、内側に(19)

張り出す。口縁平坦面にはX状の連続文を、外側には刻目を施す。胴上半はややすぼまり、胴部のほぼ中位に見かけ2条造り1条の凸帯を貼付する。器壁はやや薄めであるが、焼成はきわめて軟質である。

KIIb式の甕棺（Fig. 105）

口縁はほぼ平坦となり、外側には未だほとんど発達しないが、内側に大きく張り出す傾向が生じる。典型的なものは上記のとおりであるが、一部はまだ内に低く傾斜するものから、次第に平坦になり、また外に低く傾斜して次のKIIc式に近いものまである。これは同一型式内での漸次的形態変遷ととらえられよう。口縁下はややすぼまり、KIIa式に近く、次のKIIc式と区別できる。胴部には細いシャープな三角凸帯、稀に見かけ2条造り1条の凸帯をほぼ中位に貼付する。この凸帯の位置も、KIIa式よりは下位、KIIc式よりは上位にあり区別できる。凸帯下には設計線と考えられる沈線を付すものがある。器壁は5～8*mm*ときわめて薄く、底部は小さくスマートである。器面の調整はハケ目の後、全面をナデてハケ目をナデ消すが、底部近くにはハケ目が残存するものもある。焼成は硬質で、色調はやや赤味を帯びた黄褐色、赤褐色を呈するものが多い。

図示したものの他、春日市門田の甕棺の主体をなすもの[20]、春日市門田辻田A群K1[21]、佐賀県切通K4[22]等がこの型式に属する。

KIIc式の甕棺（Fig. 106）

口縁は内側に大きく張り出し、外側への発達はまだなく、外に低く傾斜する。口縁下のすぼまりはなく、胴上半は外側に開き気味のものを典型とするが、ハサコの宮K1下のように、口縁外側もやや発達し、口縁下がややすぼまり、口縁下凸帯を付すと次のKIIIa式に近い形態を示すものもある（Fig. 105－3）。同一型式内の形態的変遷を示すものとして、この型式にいれた。胴部凸帯は下位にあり、細い三角凸帯1条、及び2条を貼付する。2条のものが後出的なものと考えられる。この型式でも凸帯下に沈線がみられるものもある。器壁は前2者と同様5～8*mm*ときわめて薄く、底部も細くスマートである。焼成は硬質で、赤味を帯びた黄褐色、赤褐色を呈するものが多いが、KIII期以降のものと同様、黄白色・淡黄色を呈するものも出現している。

筑紫野市永岡遺跡の甕棺を代表例とする[23]。

以上KII期の甕棺について述べたが、KIIa～KIIc式甕棺に共通していることは、口縁下に凸帯を付さないこと（きわめて稀に例外はある）。次に器壁がきわめて薄く、底部が細くスマートになり、かつ器高80*cm*以上で、甕棺の通常の大きさをもつこと、やや赤味を帯びた黄褐色、赤褐色を呈し、焼成が硬質であること、器面調整が、ハケ目の後ナデてハケ目をナデ消す、甕棺に独特な手法が発生していること等があげられる。

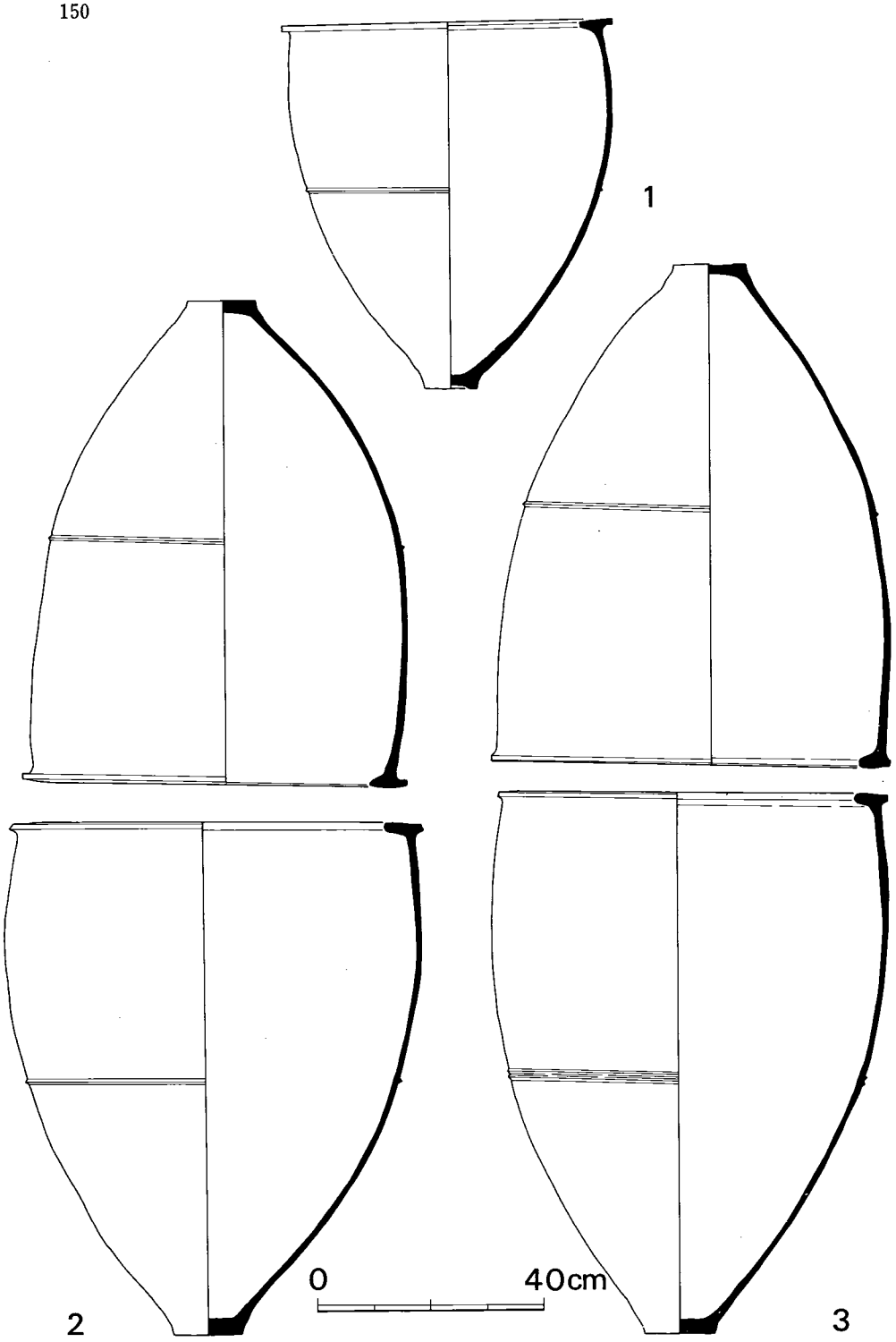


Fig. 105 K IIb式の甕棺（縮尺１/12）

１北牟田K23上　２ハサコの宮K11　３ハサコの宮K17下

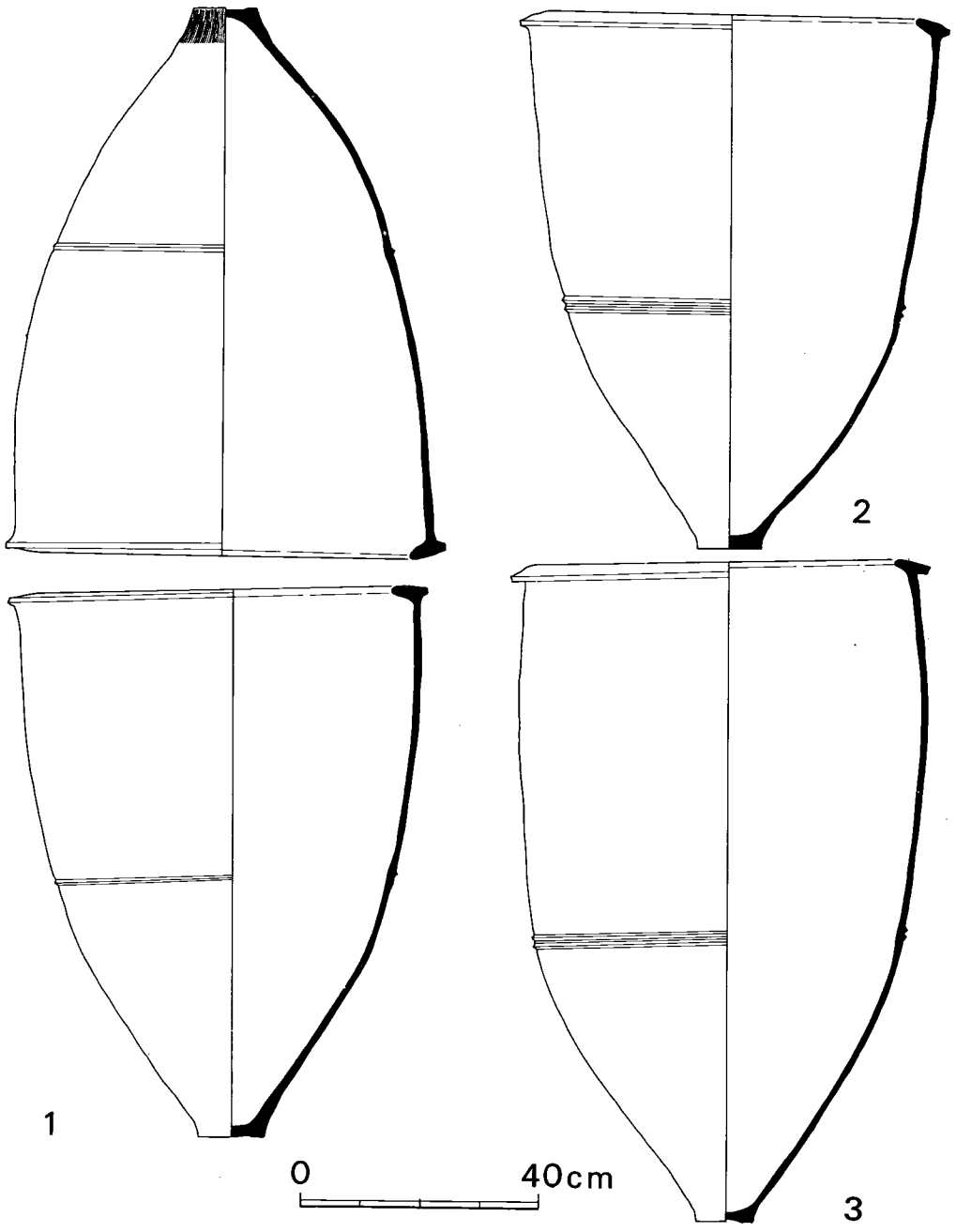


Fig. 106　KIIc式の甕棺（縮尺１/12）

１北牟田K26　２ハサコの宮K５下　３ハサコの宮K１下

以上のことからKⅡa式の段階で甕棺製作技術に一定の発展があったことがわかる。

以上あげた甕棺とは他に、とくにKⅡb式からKⅢa式に非常に丸味を帯びた甕棺の一系列があるが、これについては後述する。

C）KⅢ期の甕棺

KⅢa式の甕棺（Fig. 107）

KⅡc式の基本的形態を踏襲しながら口縁下に凸帯を付すもの、内外に口縁が発達し、いわゆるT字形を呈し、外に低く、傾斜する口縁をもち、口縁下がややすぼまり、口縁下に凸帯を付すもの、口縁は外側に発達し、外に低く傾斜するもので、胴上半はほぼ直立し、口縁下に凸帯を付すもの等がある。口縁下凸帯は三角凸帯1条を基本とするが、2条のもの、コ字形のもの等がある。胴部凸帯はやや下位に2条を貼付する。胴部凸帯は三角凸帯が古く、コ字形凸帯が後出のものである。いま紙幅の関係で3基の甕棺しか図示できなかったが、図示したものは、この型式の典型的なものではあるが、やや古い要素をもつものといえる。これらの他に、例えば門田K41[24]、宝台K8[25]、折尾氏分類の金隈KⅢc式にあげられた金隈K127[26]のように胴上半部はほぼ直立するか、又は口縁下がすぼまる傾向があり、口縁はほぼ平坦で、胴部凸帯がコ字形を呈し、次のKⅢb式に近い形態を示すもの等もこの型式の範疇として、同一型式内での形態変遷としてとらえたい。

甕棺は大形化したものが多く、器高100*cm*をこえるものも多くなる。これにつれて上甕に鉢、壺、又は甕の胴上半を打ち欠いたもの等が使用される。とくに上甕に使用される鉢は、口縁が外に低く傾斜し、口縁下に三角凸帯1～2条を付す。

この型式の甕棺は器壁がやや厚くなり10*mm*前後のものが多い。器面の調整はハケ目の後ナデて、ハケ目をナデ消す手法は共通している。焼成は硬質で、色調は淡黄色・黄白色を呈するものが多く[27]、この段階でさらに甕棺製作技術がすすんだことを示している。

KⅡb式～KⅢa式における丸味を帯びた甕棺の一系列について（Fig. 108）

KⅡb式からKⅢa式にかけて、口縁の形態、凸帯の位置、形態、器面調整の手法等は各型式の典型的なものに共通する要素をもちながら、全体に非常に丸味をもつ甕棺の系列がある。板付第1区K5[28]は口縁が内に傾斜し、古い要素を示すが、永岡K19とほぼ同様のものであり、これらがKⅡb式のものと考える。門田K27、K41上、K58下も同型式のものである。

二塚山ⅡK59の他に、板付第1区K18、春日市高辻K30[29]、常松K7[30]等がKⅡc式の丸味を帯びた甕棺としてあげられる。

原K121、K134の他に、門田K30がKⅢa式の丸味を帯びた甕棺である。鹿児島県高橋下小

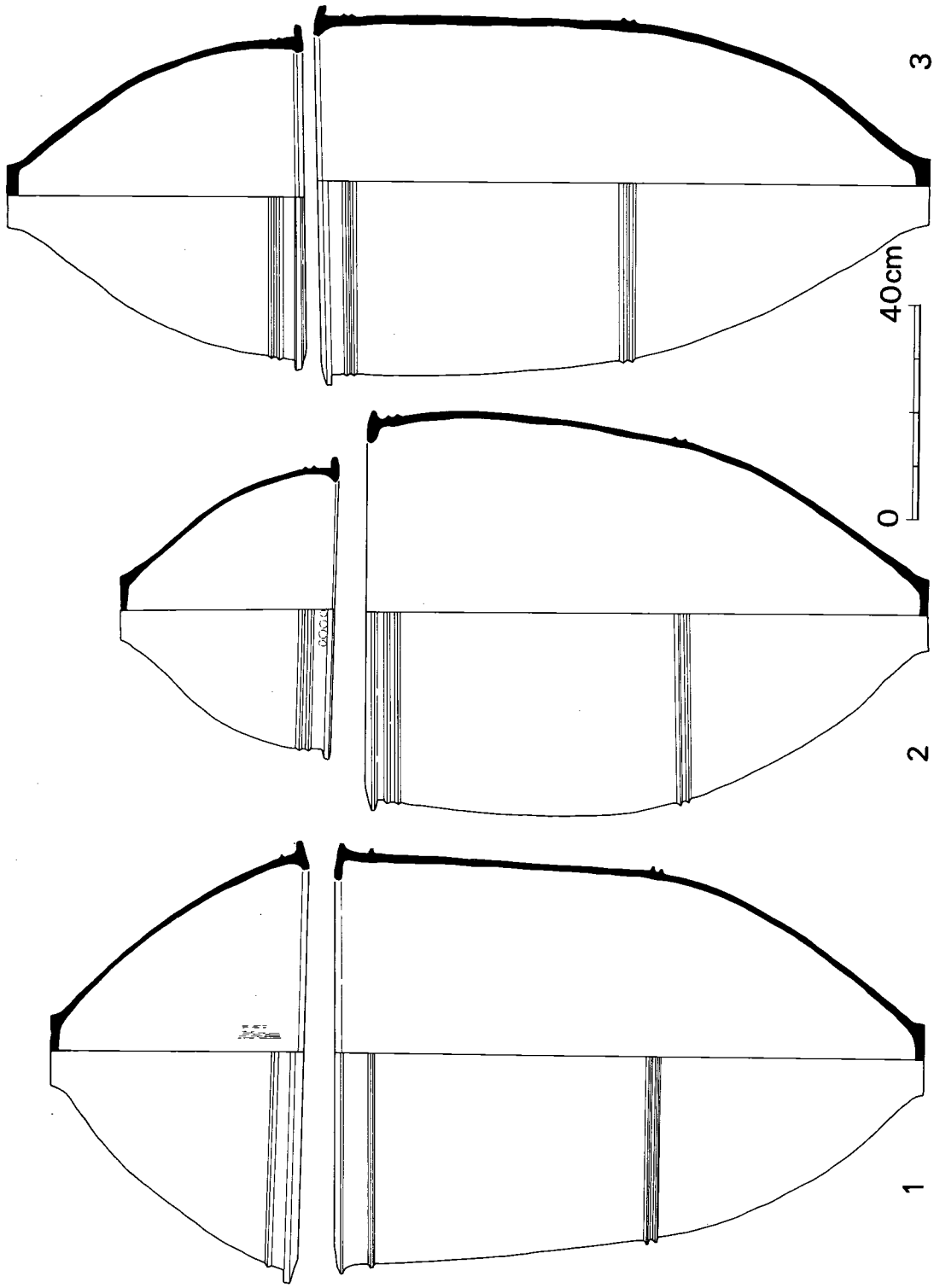


Fig. 107 KⅢa式の甕棺（縮尺1/12）

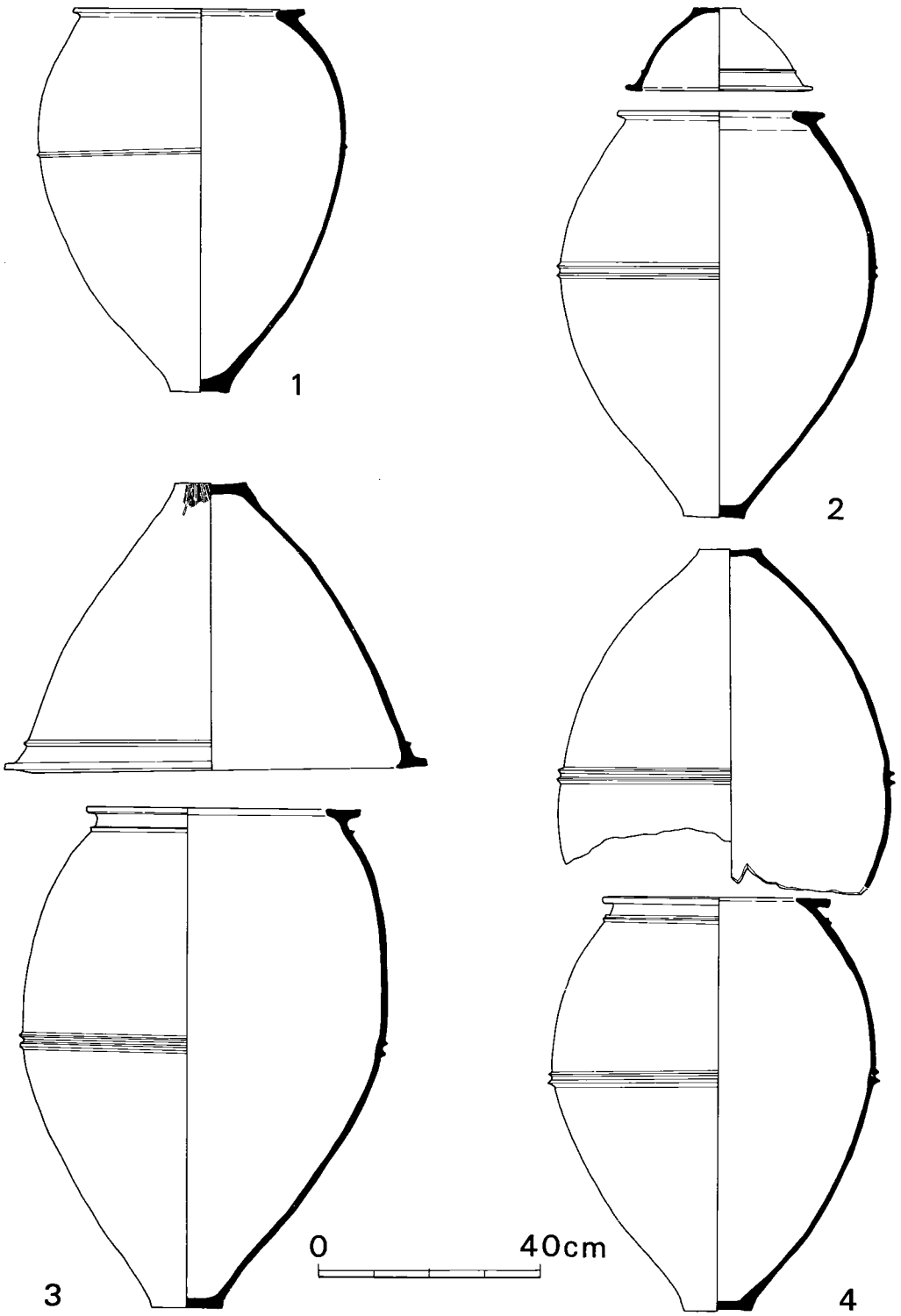


Fig. 108 KIIb～KIIIa式の丸味を帯びた甕棺（縮尺1/12）

1永岡K19（KIIIb式） 2二塚山IIK59（KIIc式）
3原K134（KIIIa式） 4原K121（KIIIa式）

路遺跡で諸岡型のゴホウラ製貝輪2個を右腕に着装した人骨を伴った甕棺もこの型式に属する。[31]

以上KⅡb式からKⅢa式にわたって、例数は少ないが、全体に丸味を帯びる甕棺の系列があることを述べたが、この甕棺の分布は、甕棺分布圏の全域にわたっている。

KⅢb式の甕棺（Fig. 109）

口縁はわずかに内に低く傾斜し、T字状又は逆L字状を呈するが、いずれかというと逆L字状のものが多い。KⅢa式のものは胴上半がほぼ直立するのに比べ、この型式は口縁下ですぼまり、全体にやや丸味をもつようになってくる。口縁下凸帯は大部分は三角凸帯であるが、たまにコ字形のものもある。胴部凸帯はコ字形のシャープなもので、やや下方に垂れ気味の傾向が生じている。2条を貼付するのが普通である。器壁は10*mm*前後の厚さのものが多い。器面調整はハケ目の後、ナデてハケ目をナデ消す手法は変らない。焼成は硬質で、淡黄色、黄白色を呈するものが多い。

この型式になって、石蓋又は木蓋の単棺が出現する。

KⅢc式の甕棺（Fig. 110）

外見上の基本形はKⅢb式とそうたいして変わらない。しかし道場山遺跡の報告で分類したように、1．口縁が12～13*mm*以上内に低く傾斜するもの、2．外に10*mm*程低く傾斜するもの、[32] 3．全体に丸味を帯び、口縁はく字状に呈するが、傾斜はまだ弱く、内部に稜をつくらないもの等があげられる。このようにKⅢb式と外観には大きな差異は認められないが、口縁部は逆L字口縁からく字口縁へと変化していく過渡的様相を示し、胴部凸帯に、KⅣ期に多い、1条凸帯、あるいはだれた三角凸帯が出現し、全体としては中期から後期への過渡的様相を示す。したがってKⅢb式ではKⅣa式とのセットはみられないが、KⅢc式のものはKⅣa式のものとセット関係をなすものが多い。

図示したもの以外に、立岩K10等はこの型式の代表例であると考えられる。[33]

以上KⅢ期の甕棺について述べたが、この時期が甕棺葬の最も盛行した時期といえる。KⅢa式で甕棺もさらに大形化し、焼成等もよくなり、甕棺製作技術にさらに一段の飛躍があったことが認められる。

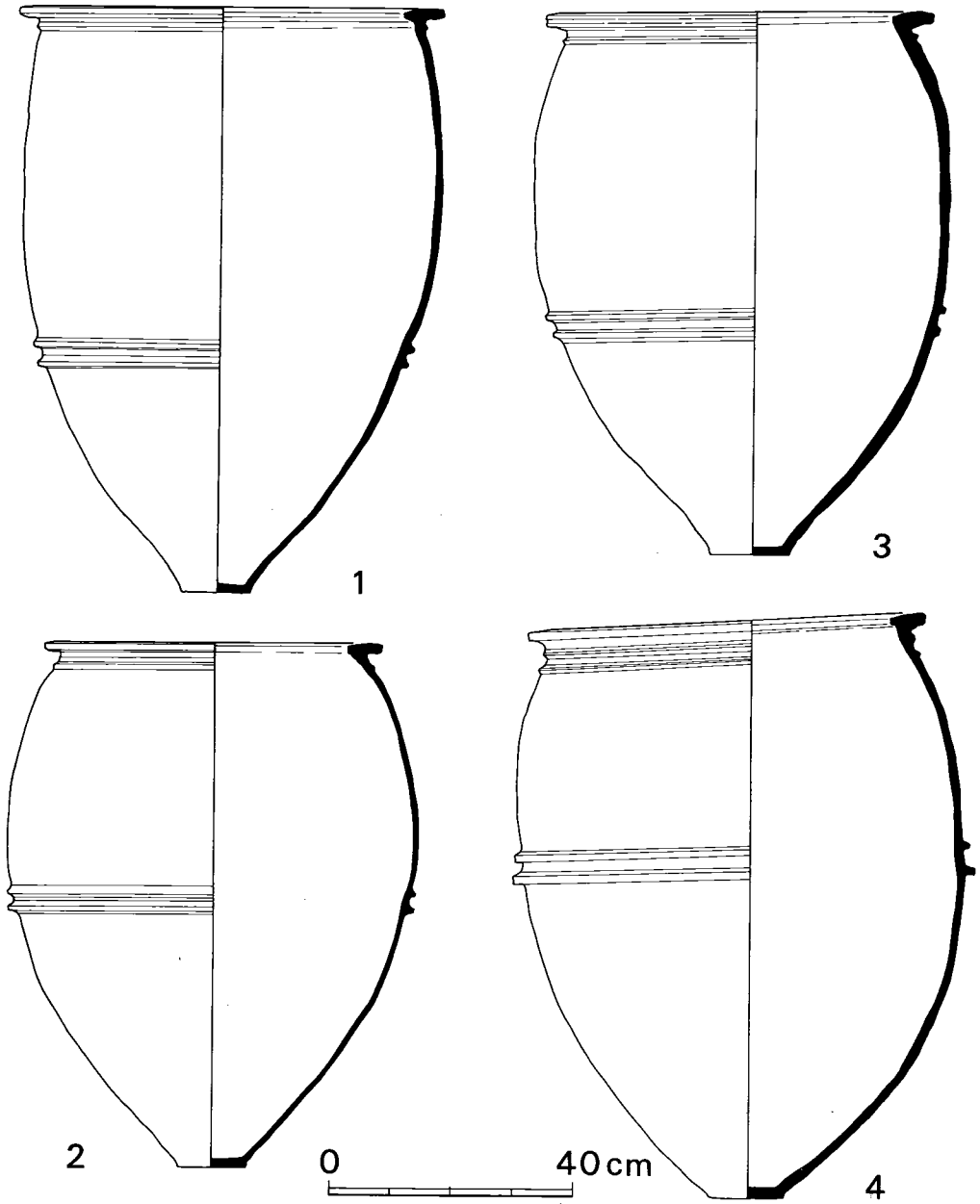


Fig. 109 KIIIb式の甕棺（縮尺1/12）

1道場山K21下　2道場山K48下
3道場山K60下　4道場山K71下

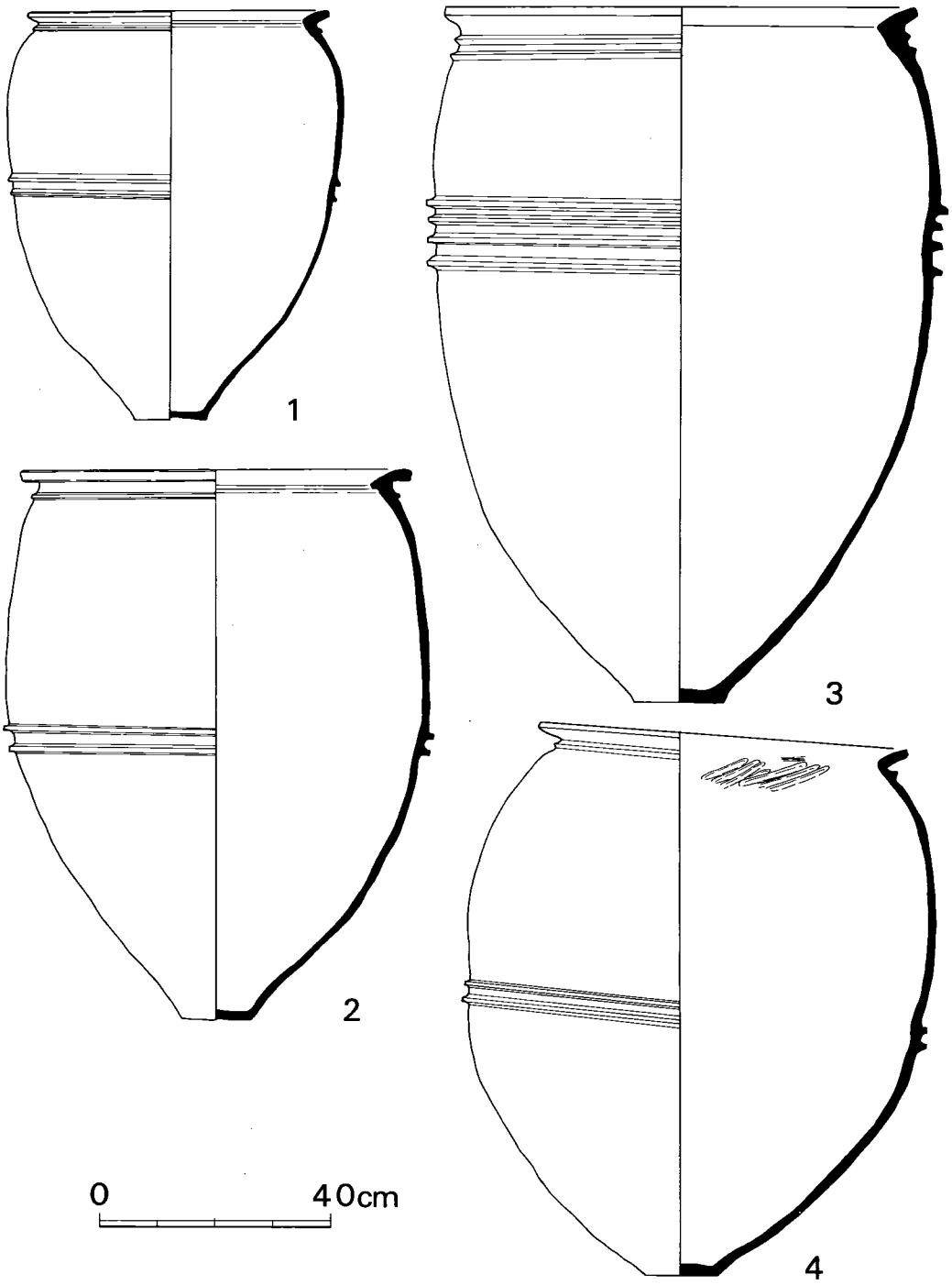


Fig. 110 KⅢc式の甕棺（縮尺１/12）

１道場山K63下　２道場山K26下
３門田K24下　４吉ヶ浦K60

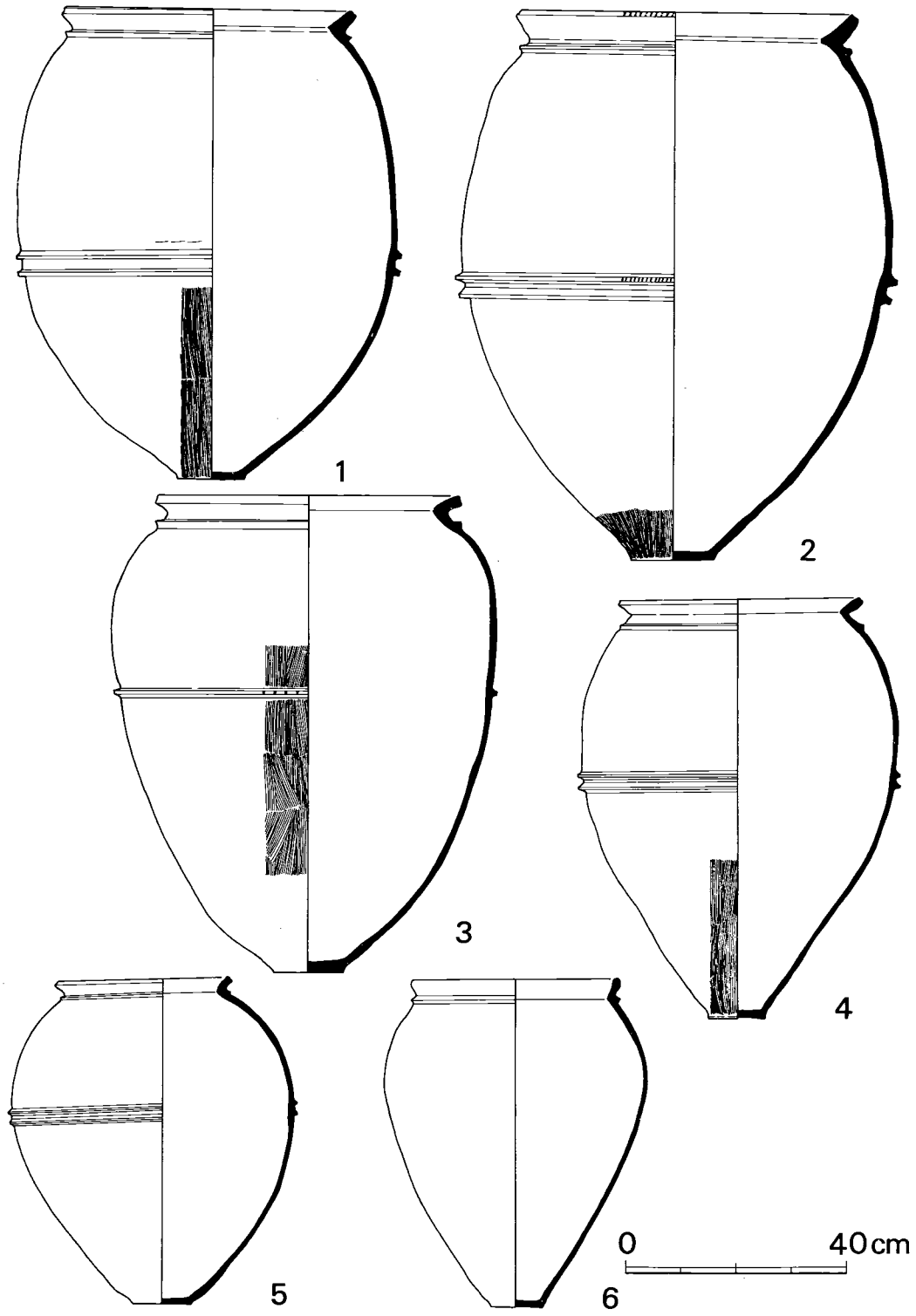


Fig. 111 KⅣa式の甕棺（縮尺1/12）

1吉ヶ浦　2吉ヶ浦K28下　3道場山K15下
4道場山K96下　5道場山K53下　6道場山K73下

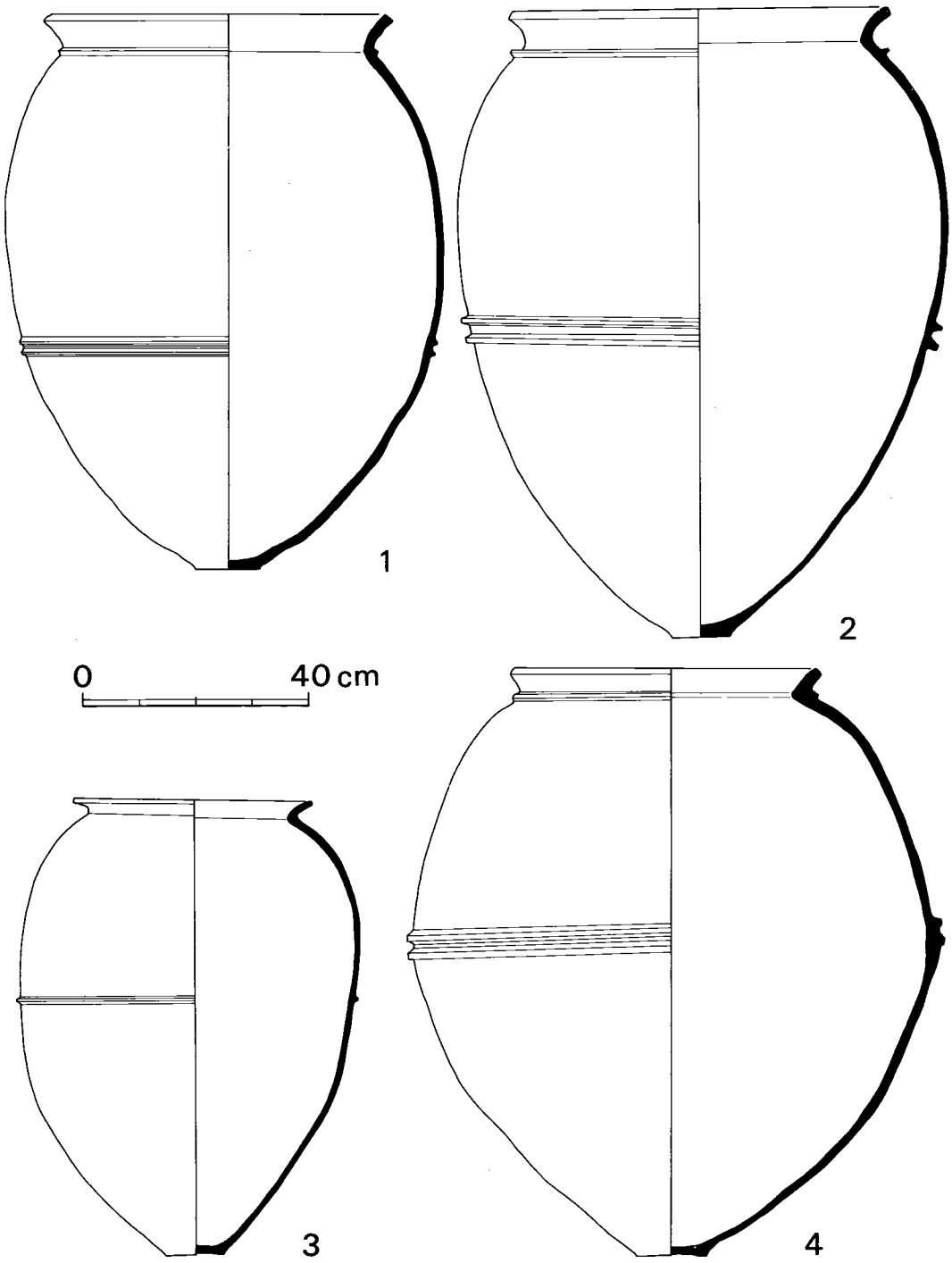


Fig. 112 KⅣb式の甕棺（縮尺1/12）

1 道場山K46下　2 二塚山ⅡK76下
3 二塚山ⅡK46上　4 二塚山ⅡK46下

d） KⅣ期の甕棺

KⅣa式の甕棺（Fig. 111）

KⅣa式の甕棺は、全体として丸味を帯び、器形は卵形を呈し、頸部はしまる。口縁は外反し、く字状を呈し、口縁内部は稜をつくる。口縁下凸帯は頸部もしくは頸部近くに貼付するものが多く、胴部凸帯はまだシャープなコ字形をなすものがあるが、全体としてはだれており、又は三角形に近いもの、刻目等を施すものがあり、凸帯1条のものがかなり多くなる。器面調整はハケ目の後ナデてハケ目を消す手法は、これまでと同様である。

口縁形態から1・逆L字口縁の傾斜がきつくなり、く字となったもの、2．やや丸味をもちながら口縁内部の稜を有すもの、3．口縁が内彎するもの（Fig. 111－6）等があるが、3は甕棺専用として製作されたものではなく、日常容器の大形甕を転用したもので、胴部凸帯をもたない。蓋として使用されることが多い。

KⅣb式の甕棺（Fig. 112）

KⅣb式の甕棺の口縁は、やや丸味をもちながらく字を呈し、傾斜がきつくなり、長大化する傾向にあり、器形も丸味が強くなる。口縁下凸帯はKⅣa式同様頸部にあるかまたは頸部に近いところに位置する。胴部凸帯も前者同様である。図示したもののうち、二塚山ⅡK46は、この型式ではやや古い要素をもち、道場山K46、二塚山ⅡK76が後出的と考える。道場山K46、二塚山ⅡK76の口縁は口縁端が肥大化する傾向がみられる。道場山K46の器面調整は、KⅣa式までのものと同様であるが、二塚山の両者はハケ目調整がよく残っているようである。

図示したもの以外に、三津永田K102[34]もこの型式と考える。

この時期で福岡地方では基本的に甕棺葬が終焉し、甕棺の絶対量もきわめて少ない。佐賀地方では、まだ若干のこり、次のKⅣc式で終焉するようである。

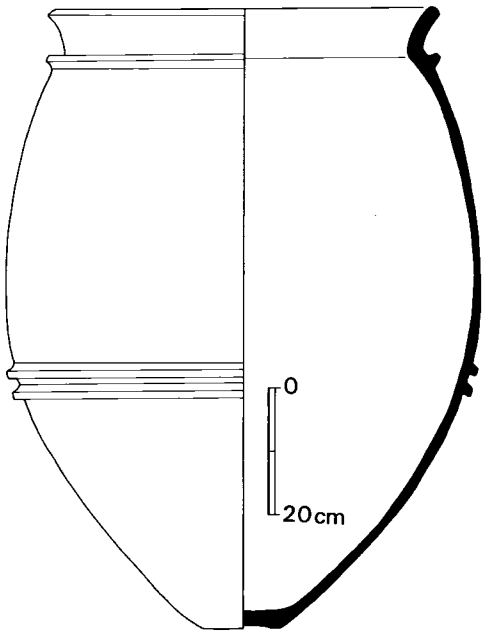


Fig. 113 KⅣc式の甕棺（縮尺1/12）
三津永田K104

KⅣc式の甕棺（Fig. 113）

いわゆる三津式と呼ばれてきたもので、三津永田K104[34]を代表例とする。口縁はやや丸味をもって外反し、傾斜はきつい。口縁下の

凸帯は上向きのコ字形を呈し、胴部にはやや下位に下向きのコ字形を呈する2条の凸帯が貼付されている。底部はやや上げ底を呈するが、ややしまりなく、KV期へと連なる要素が認められる。

この型式の甕棺は佐賀地方でもほとんど類例がなく、佐賀地方ではこの型式で甕棺葬が基本的に終焉するといえる。

以上KIV期の甕棺について述べたが、この時期は北九州に特殊に展開した甕棺葬が終焉する傾向が生じ、基本的に終焉する時期といえる。甕棺葬の終焉傾向はすでにKIIIc式で始まるといえる。というのは、KIIIc式になると日常容器の大形甕を転用した甕棺、または、それを蓋つまり上甕として使用されることがにわかに増大する。この傾向はKIV期になって急速に進行しKIVa式の段階ではまだ一定量の甕棺がみられるが、KIVb、KIVc式になると、きわめて数も少くなり、福岡地方ではKIVb式に、佐賀地方ではKIVc式に基本的に甕棺葬が終焉する。

e）KV期の甕棺

甕棺が基本的に終焉した後、残存する甕棺と、糸島地方に特殊に展開した甕棺および祇園山1号墳裾部外周1号甕棺をKV期としてとりあげる。

とくに糸島地方に特殊に展開した甕棺を中心として、併行すると思われる日常容器の大甕を転用した甕棺との関係を論じ、祇園山K1の相対的編年観をも考察したい。

冒頭でもふれたように、埋葬専用に製作された甕棺も、土器である以上は、日常容器と軌を一にする要素はあると考える。したがって甕棺葬が基本的に終焉した後糸島地方に特殊に展開した甕棺と、日常容器を転用した甕棺は基本的には祖形を同じくしながら、共通する要素をもつと同時に、埋葬専用としての独特の要素を合せもつことは当然である。

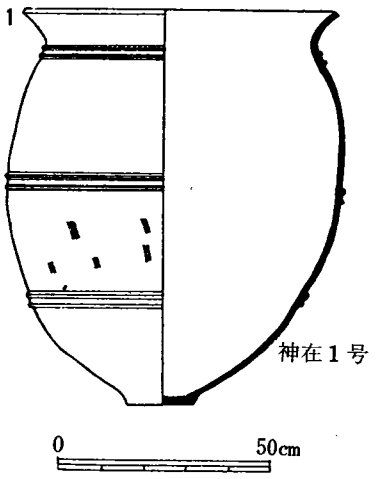


Fig. 114 KVa式の甕棺
（大神邦博 1968より）

糸島地方の後期後半以後の甕棺については、故大神邦博氏のすぐれた業績があり[35]、これを参考にしつつ各型式について述べる。

KVa式の甕棺（Fig. 114）

大神氏は糸島地方の後期甕棺を神在式と福井式に分類し、考察している。そのなかで、神在K2→神在K1→神在K5の順に形態変遷し、前後関係があるとする。そして福井式の典型は同氏論文掲載図5（福

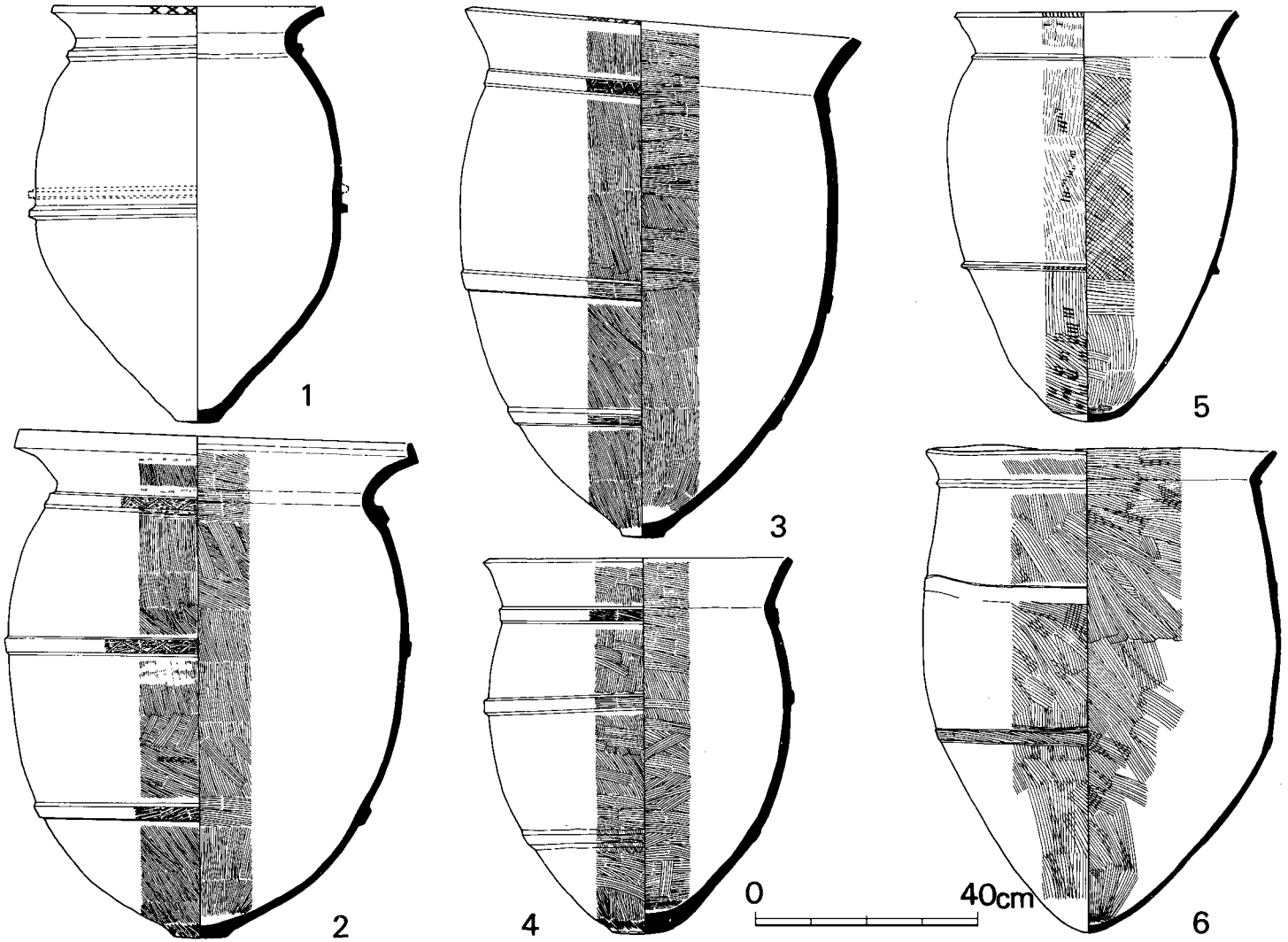


Fig. 115 ＫⅤ期の甕棺（縮尺１/12）

１神在Ｋ２（KVb式） ２志登（KVc式） ３飯氏馬場Ｋ９（KVc式）

井)、6（長石)、7（福井）であるとし、同4（吉井ケ浜）は福井式に入れながら、神在式から福井式への過渡的な要素を幾分もったものとみなしてよいとしている。

私の観察したところによると、これらの甕棺で、はっきりした平底を呈するものは神在K1であり、他はいずれも、やや丸底化の傾向が生じている。したがって大神氏の提示した神在K2→神在K1→神在K5の前後関係は神在K1→神在K2とし、神在K5を含めて、福井式とされたものは同型式であると認定した。

上記の理由から神在K1をKV期の最古型式としてKV*a*式として設定する。

神在K1は、やや丸味をもって外反し、長大なく字口縁を呈する。頸部、胴中位、胴下位に各2条の幅広の凸帯を貼付する。頸部凸帯の上位のものは⋀⋀形の連続文が、下位のものにはX状の連続文が施されている。底部はさきにものべたようにしっかりした平底である。器面調整はハケ目の後、ハケ目をナデ消す、甕棺に伝統的な手法が認められる。

KIVc式とした三津永田K104との前後関係については、微妙な点があるが、神在K1は頸部凸帯に付された⋀⋀形、X状の連続文が、後期後半にみられるものであることから、やはり後出的なものと考える。

KIVb式の甕棺（Eig. 115－1）

神在K2を標式とする。

口縁は長大なもので、大きく外反する。頸部はしまり、胴部は卵形を呈する。底部はやや丸底化の傾向が生じ、底部の稜は3*mm*程底部中心より上にある。頸部に1条、胴中位に2条(1条は欠失している。)の幅広のコ字形凸帯を貼付する。口縁端にはX状の刻目がヘラ施文される。器面の調整は丁寧にナデが行なわれ、ハケ目の残存は認められない。器壁はかなり分厚い。焼成は硬質で、赤褐色を呈する。

KVc式の甕棺（Fig. 115－2．3）

図示した福岡市飯氏馬場K9（飯氏馬場は旧糸島郡に属す)、糸島郡前原町志登以外に、大神氏の福井式としたもの、又神在K5も底部の形態からいってこの型式にはいる。

前原町志登出土の甕棺はやや丸味を帯びつつ口縁の端部にさらにやや内向きの口縁をつくる。いわゆる袋状口縁壺を意識したものといえる。頸部のやや下位、胴部中央よりやや上位、胴部下位に幅広の扁平な凸帯を各1条貼付する。胴部は丸味を帯びた卵形を呈する。底部はやや丸底化の傾向を生じており、底部の稜は4～5*mm*上っている。器壁は9～10*mm*平均の厚さである。器面は10*mm*につき5～6本のハケ目で内外ともに調整するが、器表口縁下、および胴中位の凸帯下位は一部ナデ調整が施される。頸部凸帯はタタキ→ナデの後、∧形の刻目をハケ目工具で施文。胴中位の凸帯はタタキ→X状の連続文がハケ目工具で、胴下位の凸帯はタタキ痕をそのまま残す。又底部にもタタキ痕が残存する（Fig. 116)。焼成は硬質で赤褐色を呈する。

飯氏馬場K9は外反する長大なく字口縁を呈する。頸部のわずか下、胴部のほぼ中位、胴下

位の3ヶ所に幅広の扁平な凸帯を貼付する。胴部は卵形を呈し、底部はややしっかりしているが、径7.4*cm*と小さく、やや丸底化の傾向が生じ、底部の稜は3～4*mm*程上っている。口縁端にはX状の連続文を、頸部凸帯にはX形の刻目をハケ目工具で右⟶左の順で施文している。器面調整は内外ともに、同一工具でハケ目が全面に施される。ハケ目幅は10*mm*につき6～7本。器表の胴上半のハケ目は上⟶下へ施されている（Fig. 116－2）。焼成は硬質で赤褐色を呈する。

上記二者と大神氏が福井式としたもの、又神在K5は、凸帯の数が多いもの等があるが、基本的特徴、とくに底部の形態がほぼ同一であるので同一型式と認定した。

KVd式の甕棺（Fig. 115－4．5）

この型式の甕棺として、糸島郡前原町三雲堺I－13区K1を標式とする。

基本的特徴は上記KVc式とほぼ同一といえるが、底部の丸底化がかなり進行している。底部の稜は4～10*mm*と上っているが、まだ稜は明瞭に認められる。器壁は13～14*mm*ときわめて分厚い。器壁調整は内外ともに同一工具でハケ目が施される、ハケ目幅は10*mm*につき4～5本。頸部凸帯はタタキ痕をそのまま残し、胴中位及び下位の凸帯はタタキ⟶ハケ目、底部にもタタキ痕が認められる。胴上半のハケ目は上⟶下へ、横方向のものは左⟶右へ施されている（Fig. 116）。焼成は硬質で、赤褐色を呈する。

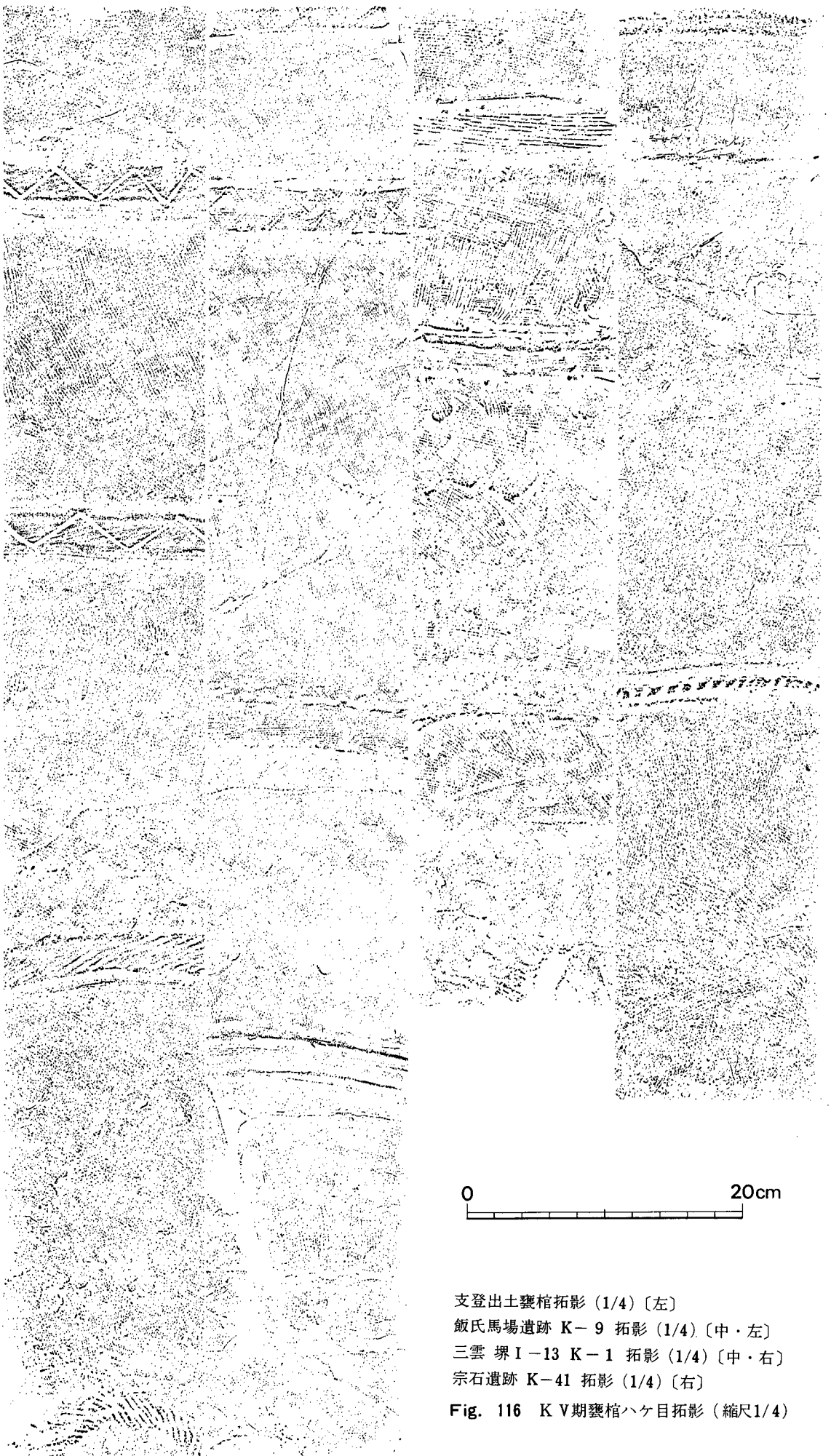
この型式と同時期と考えられる日常容器を転用した甕棺に、筑紫郡那珂川町宗石K41があげられる。口縁は長く、やや丸味をもち外反し、く字状を呈する。頸部に三角凸帯を、胴中央よりやや下位にコ字形凸帯1条を貼付する。胴部は卵形を呈し、底部は丸底化の傾向が明瞭であるが、底部の稜は明瞭で、稜は13*mm*程上っている。器面調整は、器表の口縁から胴部凸帯までは、タタキ⟶粗いハケ目（10*mm*につき3本）⟶ナデ、胴下半はタタキ⟶ハケ目、底部はハケ目⟶ナデ。内面の調整は、口縁部をハケ目⟶ナデ、胴上半は斜方向のハケ目が交叉し下半は横・縦方向に整然としたハケ目が施されている。口唇部、胴部凸帯には櫛歯状工具で刺突したと思われる刻目を施文する（Fig. 116）。焼成は硬質で黄白色を呈する。

上記堺の甕棺と同時期であるとした根拠は、特に底部が丸底化の傾向が進行しながら未だ稜を明瞭に残すという、共通要素があげられることである。

KVe式の甕棺（Fig. 134）

この型式の甕棺は、埋葬専用の大形棺は現在のところ不明であるが、祇園山K1とをつなぐために、将来出土することを予期して設定しておく。この型式と同一時期と考える日常容器を転用した甕棺には福岡市今宿（旧糸島郡に属する）出土の甕棺があげられる。

口縁は外反し、長く、口唇部で肥大する。頸部に三角凸帯及び胴部下位にコ字形凸帯1条を貼付する。胴部は卵形を呈するが、胴下半のしまりがない。基本形は上記の宗石K41とほぼ同様といえるが、最も異なるところの一つは、底部の丸底化がさらに進行し、ほぼ丸底ともいえ



支登出土甕棺拓影（1/4）〔左〕
飯氏馬場遺跡 K－9 拓影（1/4）〔中・左〕
三雲 堺Ⅰ－13 K－1 拓影（1/4）〔中・右〕
宗石遺跡 K－41 拓影（1/4）〔右〕

Fig. 116 K Ⅴ期甕棺ハケ目拓影（縮尺1/4）

る形態を示しながら、不明瞭ではあるが底部の稜が認められることである。器面調整はタタキ→ハケ目を基調とし、タタキ痕の凹部が深いために、ハケ目で掻き消されていない部分もある。又上記宗石K41と異なるもう一つの重要な点は、胴下半の底部近くをヘラ削りしていることである。内面の調整はハケ目、ハケ目幅は10*mm*につき6本。口唇部にはハケ目工具でX状の連続文を左→右へ施文し、頸部凸帯は同じくハケ目工具で刻目を、胴部凸帯は別の工具によって刻目が施文されている。焼成は硬質で黄白色を呈する。

この日常容器を転用した甕棺に示された特徴から今後発見されるであろう埋葬専用の甕棺は、多分底部近くをヘラ削りするということは祇園山K1からみてもなかろうが、底部の形態に特徴が現われると考える。つまり、丸底化がかなり進行するが、不明瞭ながら、未だ稜を認め得るような底部をもつ甕棺が予想される。

KVf式の甕棺（Fig. 115－6）

祇園山1号墳裾部外周K1を標式とする。

口縁は外反し、く字を呈するが、KVd式までのものに比較するとやや短かくなっている。胴部は卵形を呈し、底部は完全な丸底を呈する。頸部に三角凸帯を、胴上位に幅広の扁平な、やや痕跡的な凸帯を貼付している。上甕の凸帯は下甕に比べてややしっかりしているが、ほぼ器形は同一である。器面調整は内外ともに粗いハケ目が施される。タタキ痕は認められない。焼成は硬質で、色調は赤褐色を呈する。

この甕棺は祇園山1号墳より新しいものであり、明らかに古墳時代に属するものである。しかし、形態的特徴は、頸部の凸帯が三角であるという点[36]を除けば、いままで述べてきたKVc、KVd式に分類した糸島地方の大形甕棺にきわめて類似する。又、器面調整の粗いハケ目、焼成、色調等もきわめて親縁関係にあることを示している。糸島地方との直接的関係があるか否かは現時点で速断はできないが、間接的にではあれ、関係があることは、確実といえよう。

又、石山勲氏が述べるように、この後は、甕棺葬は、複合口縁の大形壺を使用した壺棺葬へ転化しており、この甕棺が、後期後半以後残存した甕棺専用大形甕形土器の最終末の時期に位置付けられることは確実である。

以上KV期の甕棺について、主に糸島地方に特殊に展開する甕棺を中心としながら、これらの甕棺と古墳発生の時点をおさえるに好資料といえる祇園山1号墳裾部外周K1との関係について、その形態、手法等が共通し、何らかの関係をもつことを述べ祇園山K1と、現在知られている甕棺との間には、埋葬専用大形甕としては1型式存在するであろうとの予測についてふれた。この問題は日常容器との関係において再度考察したい。

f）まとめ

甕棺の型式をＫＩ～ＫＶ期の５期に大別し、それぞれをＫＩ～ＫⅣ期については、ａ～ｃ、ＫＶ期についてはａ～ｆに細分し、計18型式に分類し、それぞれについてその形態的特徴についてふれてきた。いま提示した編年案に対する各氏の編年案との対照について若干ふれておこう。（Tab.16　参照）

	橋口	森	折尾	岡崎	高島	高倉	大神
前期	ＫＩａ式	伯玄式	金隈Ｉａ式	伯玄式	Ⅰ式（板付Ⅰ式）	金隈式	
	ＫＩｂ式				Ⅱ式（伯玄式）		
	ＫＩｃ式	金海式	金隈Ⅰｂ式	金海式	Ⅲ式（金海式）		
中期前半	ＫⅡａ式	城の越式	金隈Ⅱａ式		Ⅳ式（城ノ越式）		
	ＫⅡｂ式		金隈Ⅱｂ式				
	ＫⅡｃ式	汲田式	金隈Ⅲａ式	汲田式	Ⅴ式（汲田式）	汲田式	
中期後半	ＫⅢａ式	須玖式	金隈Ⅲｂ・Ⅲｃ式	須玖式	Ⅵ式（須玖式）	須玖式	
	ＫⅡｂ式	立岩式	（金隈Ⅳ式）	立岩式	Ⅶ式（立岩式）	立岩式	
	ＫⅢｃ式						
後期後半	ＫⅣａ式	桜馬場式	金隈Ⅴ式	桜馬場式	Ⅷ式（桜馬場式）	桜馬場式	
	ＫⅣｂ式				Ⅸ式（三津式）		
	ＫⅣｃ式	三津式					
後期後半以後	ＫⅤａ式	日佐原式		三津式 神在式	Ⅹ式（日佐原式）		神在式 福井式
	ＫⅤｂ式						
	ＫⅤｃ式						
	ＫⅤｄ式						
	（ＫⅤｅ式）						
	ＫⅤｆ式						

Tab.16　各編年案対照表

森氏のいわれる伯玄式、高島氏のⅡ式（伯玄式に相当）は、報告書が概報のみで、実測図等の掲載がなく、実体不明な点があるが、いずれもＫＩａ式をもいれて考えているようである。しかしながら伯玄社では、ＫＩａ式に相当するものは若干あるらしいが、主体をなすものは、中・寺尾出土の甕棺と同型式のもの、つまり、ＫＩｂ式であって本来はこの型式をさすものであろうと推測する。

又、汲田式としては、須玖Ｋ15が標式とされ、ほぼその型式、つまりＫⅡｃ式の図が提示されることが多い。折尾氏の金隈ＫⅡａ・ＫⅡｂ・ＫⅢａ式がこの時期を細分しているのみである。

後期後半以後は、大神氏が糸島地方の甕棺を神在式・福井式に二分するが、森、高島両氏ともに日佐原式、Ｘ式（日佐原式）としてほぼ後期終末、又は終末～土師器のものとして分類し

ている。岡崎氏が、三津式を狐塚Ⅰ式、神在式を狐塚II式に対応するものとしたのは、ありえないことといってよかろう。

次に、以上18型式に分類した甕棺型式と、日常容器との関係についてふれる。

2）甕棺編年と日常容器編年との関係

ＫⅠａ式甕棺併行期の日常容器（Fig. 117－１・２・３）

この時期の日常容器としては、まず剣塚K14、K15の棺外副葬小壺、K16の棺内に副葬された小壺があげられる。K15、16に副葬された小壺は口縁の段、肩の段、円盤貼付状の底部、又肩部に朱描の有軸羽状文、頸部に数条の朱描の縦線を施し、板付Ⅰ式に近い様相を示し、板付II式の最古期、いわゆる板付IIａ式に位置付けられる。K14副葬小壺は頸部より上を欠失しており全容は不明であるが、肩部にヘラ描きの斜交文を施こしている。この斜交文自体は板付IIａ式にはみられるが、器形に、前二者に比べるとやや後出の要素がうかがえる。しかしながら、K14はK15・K16と形態的には差は見い出し得ない。

したがって剣塚K15、K16の副葬小壺の示す時期、つまり板付II式の最古期（板付IIａ式）から、やや後出の時期までを、ＫⅠａ式甕棺の時期と考える。

ＫⅠｂ式甕棺併行期の日常容器（Fig. 117－４、５）

ＫⅠｂ式甕棺に併行する土器は、まず中・寺尾Ｋ２、K17の棺外副葬小壺があげられる。これらの壺は無軸の貝描羽状文が主体となり、いわゆる板付IIｂ式の範疇にはいる。K17副葬小壺は、肩部凸帯等が出現しており、Ｋ２副葬小壺に比べやや後出的である。

ＫⅠｃ式甕棺併行期の日常容器（Fig.118、119）

ＫⅠｃ式甕棺になると小壺を副葬した例はない。いま、これに併行すると思われる日常容器を転用した壺、甕等をあげると、北牟田Ｋ２、金隈K50、ハサコの宮K24等がある。

北牟田Ｋ２、金隈K50はほぼ基本形は同一であるが、北牟田Ｋ２の口縁内側（というよりは上端）には、粘土帯の貼付がみられない。肩部には両者とも三角凸帯を貼付している。ハサコの宮K24は如意形口縁を呈し、口縁下に三角凸帯を貼付している。

これらと同様な形態をもつ、壺、甕に福岡市飯氏出土の土器があげられる（Fig.119）。この壺は口縁上端に粘土帯を貼付し、肩部には２条の沈線と、貝描の無軸羽状文がみられる。甕はいわゆる亀の甲タイプのものである。又、ＫⅠｃ式の甕棺と同様の口縁をもつ壺が、この亀の甲タイプの土器と、唐津市柏崎貝塚で伴出したことが知られている。これらの土器は前期末に属し、ＫⅠｃ式甕棺が前期末に位置づけられることを示している。(37)

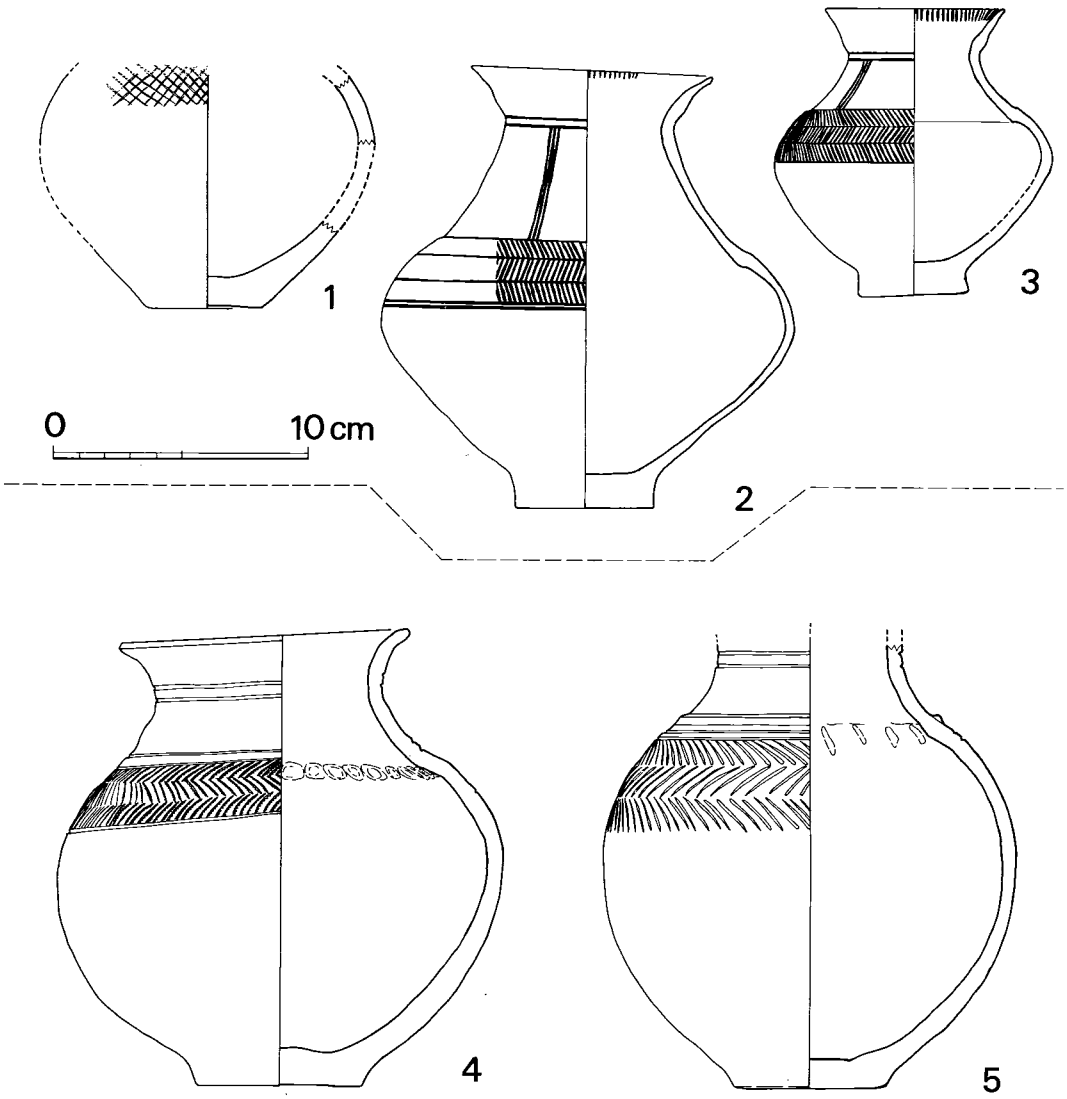


Fig. 117 KIa、KIb式甕棺の副葬小壺（縮尺1/3）

1剣塚K14　2剣塚K15　3剣塚K16棺内
4中・寺尾K2　5中・寺尾K17

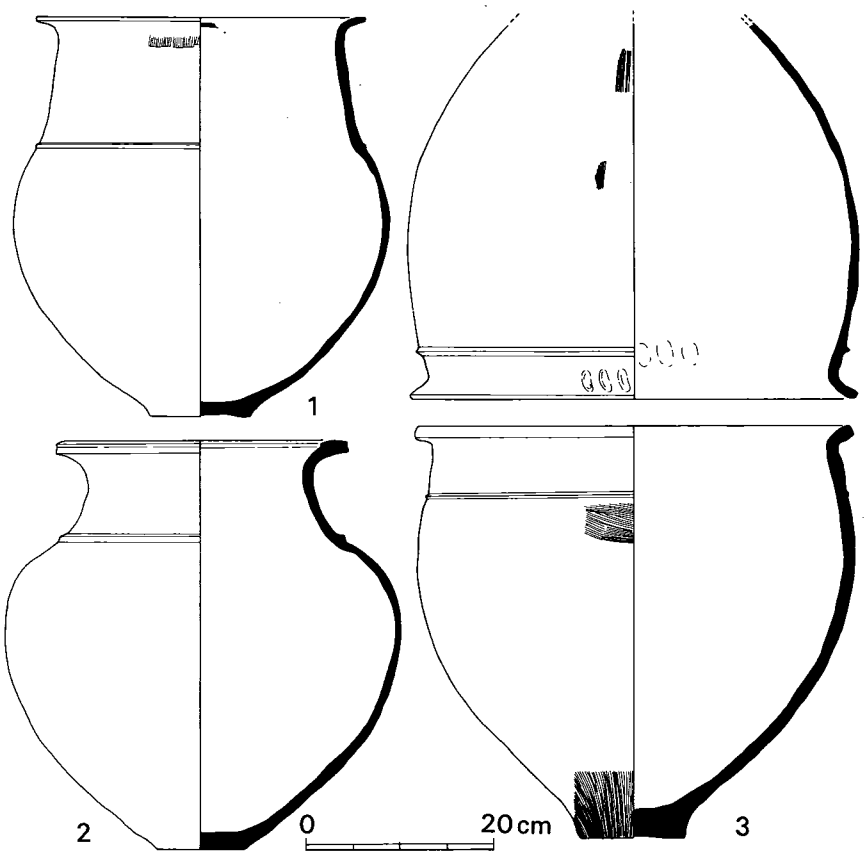
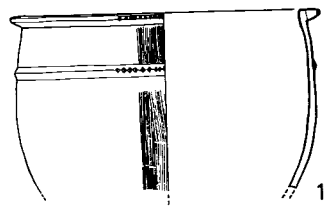


Fig. 118　K Ⅰc式甕棺併行期の小児棺（縮尺１/８）

１北牟田K２　２金隈K50　３ハサコの宮K24



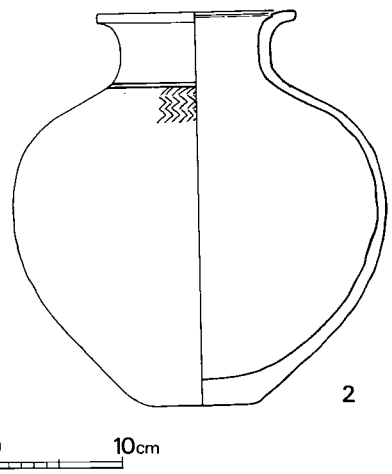


Fig. 119　飯氏出土土器（縮尺1/6）

KIIa式甕棺併行期の日常容器（Fig.120）

KIIa式甕棺に併行する時期の小児棺として、金隈K42、北牟田K19、北牟田K36等があげられる。金隈K42は、内に低く傾斜する逆L字状口縁を呈し、口縁下に三角凸帯を1条貼付する。胴部最大径はやや上位にある。底部は細くひきしまり、かなりの上げ底を呈する。北牟田K19、北牟田K36は三角口縁を呈し、K19は口縁下に沈線を、K36は三角凸帯を付す。胴部最大径はかなり上位にある。底部の特徴は金隈K42とほぼ同様である。北牟田K19、K36はいずれも亀の甲系の土器である。

これらの土器はいわゆる城之越式土器として中期初頭に位置付けられている。これらと同一時期に属する壺は、板付Ⅲ式として図示されたもの等があげられる。(38)

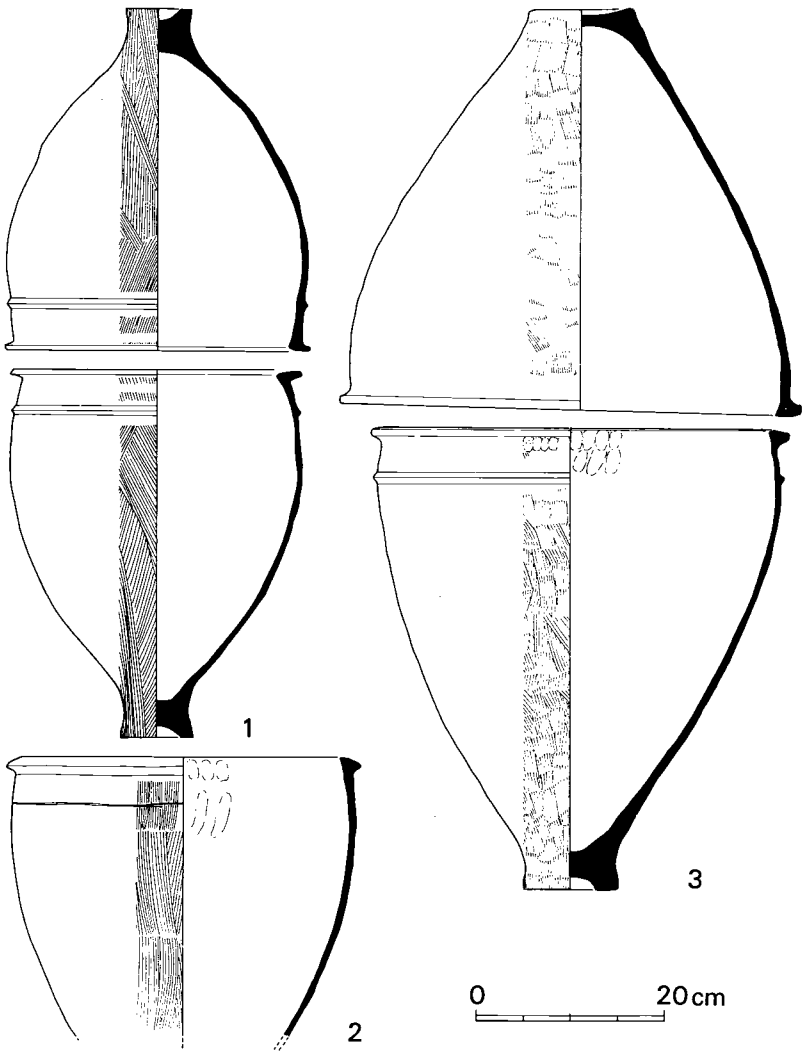


Fig. 120 KIIa式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）

1金隈K42　2北牟田K19　3北牟田K36

KIIb式甕棺併行期の日常容器（Fig.121）

KIIb式甕棺に併行すると考えられる小児棺として、金隈K146、ハサコの宮K14、K23、北牟田K32等があげられる。

ハサコの宮K23をのぞき他の三者は、やや内側に低く傾斜する逆L字状口縁を呈し、口縁下に1～2条の三角凸帯を貼付する。胴部最大径はやや上位にあり、底部は細くしまり、やや上げ底を呈する。これらは、前記城之越式の諸特徴を引き継いでいるが、後出的といえる。

ハサコの宮K23下は口縁がわずかに外側に低く傾斜し、口縁外側に刻目を付す。胴部最大径はやや上位にあり、その部位にM字形凸帯1条を貼付する。底部はわずかに上げ底を呈する。この土器だけをとってみるならば、前記三者に比し、やや後出的要素を認められるが、上甕に使用された深鉢ともいうべき土器の口縁が、前記三者に近似するもので、この時期のものとしておく。

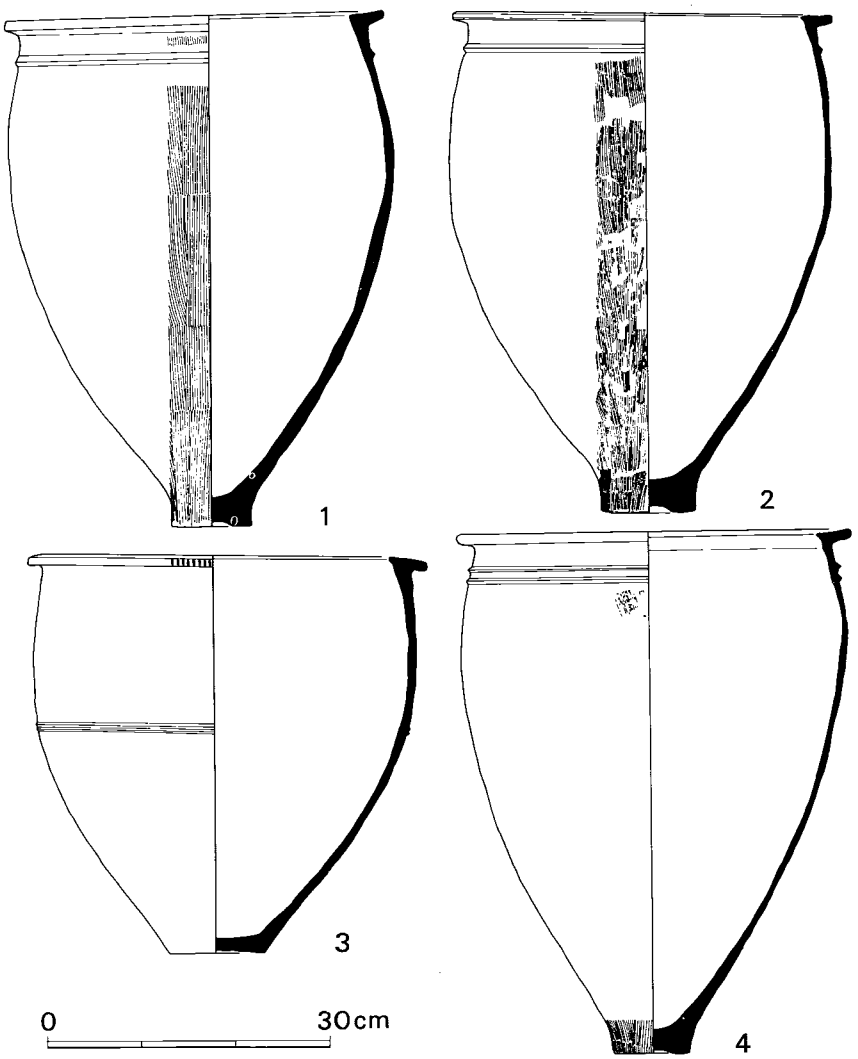


Fig. 121　KIIb式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）

1金隈K146下　2ハサコの宮K14下
3ハサコの宮K23下　4北牟田K32下

KIIc式甕棺併行期の日常容器（Fig.122、123）

KIIc式甕棺に併行する時期の小児棺として北牟田K29、永岡K47、K50等があげられる。これらの甕はわずかに内に低く傾斜する逆L字状を呈し、口縁下には、三角凸帯を付す。胴の張りは、ほとんどなくなり、底部も細くしまらず、上げ底もわずかである。これらの諸特徴は前二者と同様の要素をもちながら、後退的であり、時期的にも後出することは明らかである。

又、この時期のものとして、ほぼKIIc式の甕棺で構成される、永岡遺跡の甕棺墓群の供献土器と考えられる一群があげられる。これは外反する頸部[39]がそのまま開口するもの、口縁部のみを折りまげ、逆L字状につくるもの、いわゆる鋤先口縁を呈するもの等があり、鋤先口縁をなすものは、口縁が外側に低く傾斜し、甕棺の口縁と共通する。胴部は未だやや長胴形で、

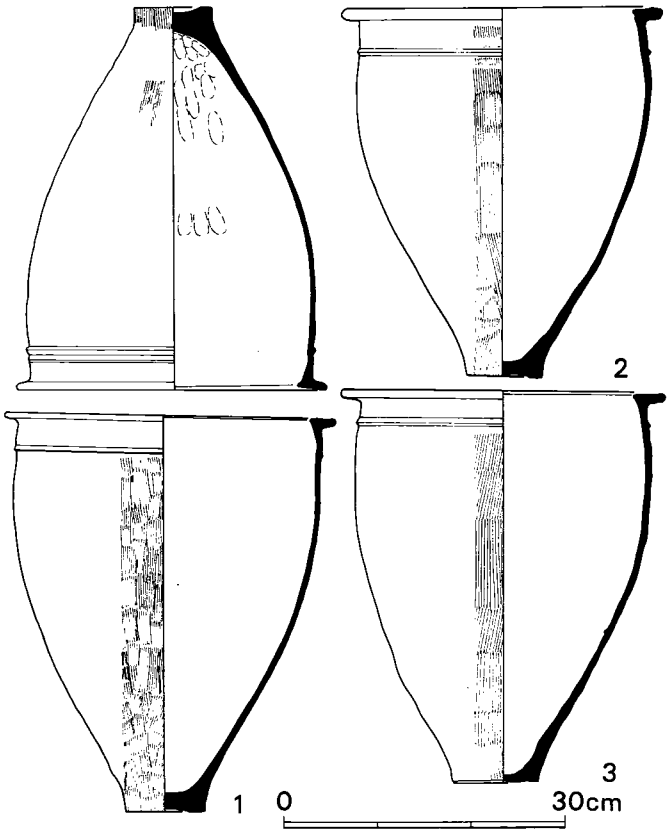


Fig. 122 KIIc式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）
1北牟田K29 2永岡K50 3永岡K47

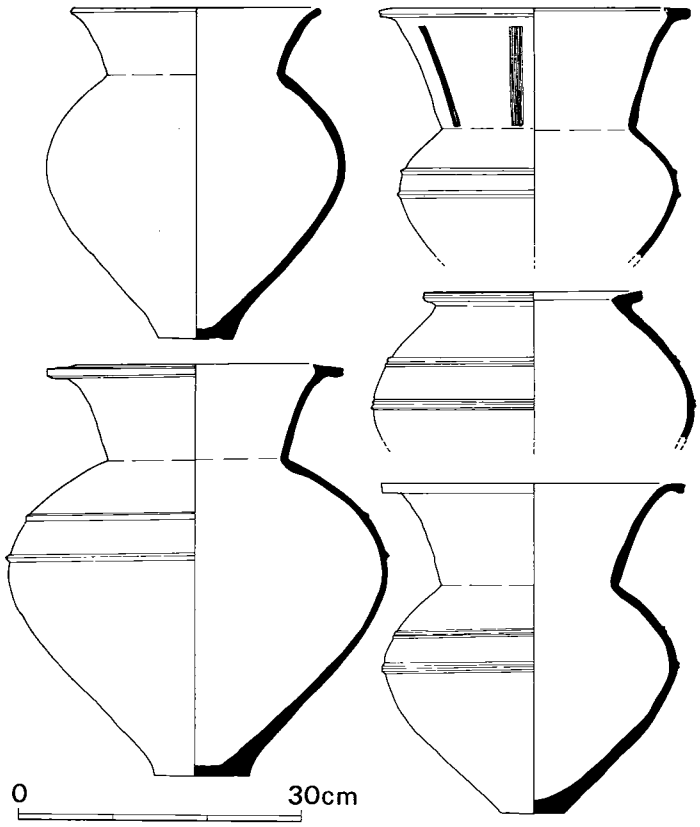


Fig. 123 永岡遺跡竪穴・溝出土土器（KIIc式甕棺供献土器）
（縮尺1/8）

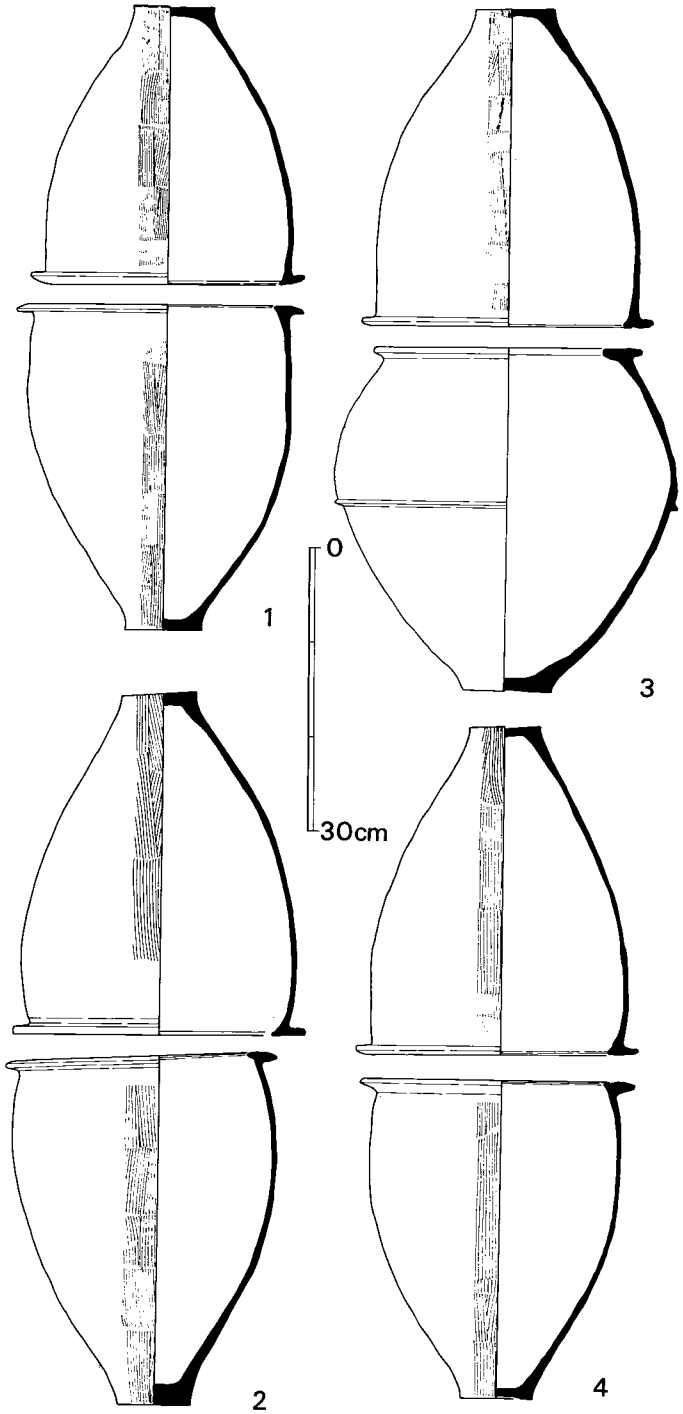


Fig. 124 KIIIa式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）

1 原K101 2 原K102 3 原K103 4 原K104

胴上位に最大径がある。その他に内側に低く傾斜する逆L字状口縁に紐通し孔をもうける無頸壺もみられる。

KIIIa式甕棺併行期の日常容器（Fig.124、125）

いまFig.124に図示したものは、同一墓壙に2基の甕棺が埋置された、春日市原K99、K100に伴なう小児棺である。原K99下はKIIc式の甕棺[40]の形態を踏襲しながら口縁下にコ字形凸帯を貼付するKIIIa式の甕棺で、胴上半はほぼ直立している。原K99上甕はKIIIa式に普遍的な鉢で、口縁は外側に低く傾斜するものである。原K100はKIIc式のなかで、KIIIa式に近いとしたハサコの宮K1下とほぼ同様の特徴をもつ。上甕は胴上半部を打ち欠いた甕を使用している。やや形態を異にしながら同一墓壙に埋置されたということは、本来両者が同一型式に属するものであるか、一型式古いものが新しい時期に残ったものかいずれかであるが、この2基同時埋葬の原K99、K100はいずれにしろ、原K99の時期をとり、

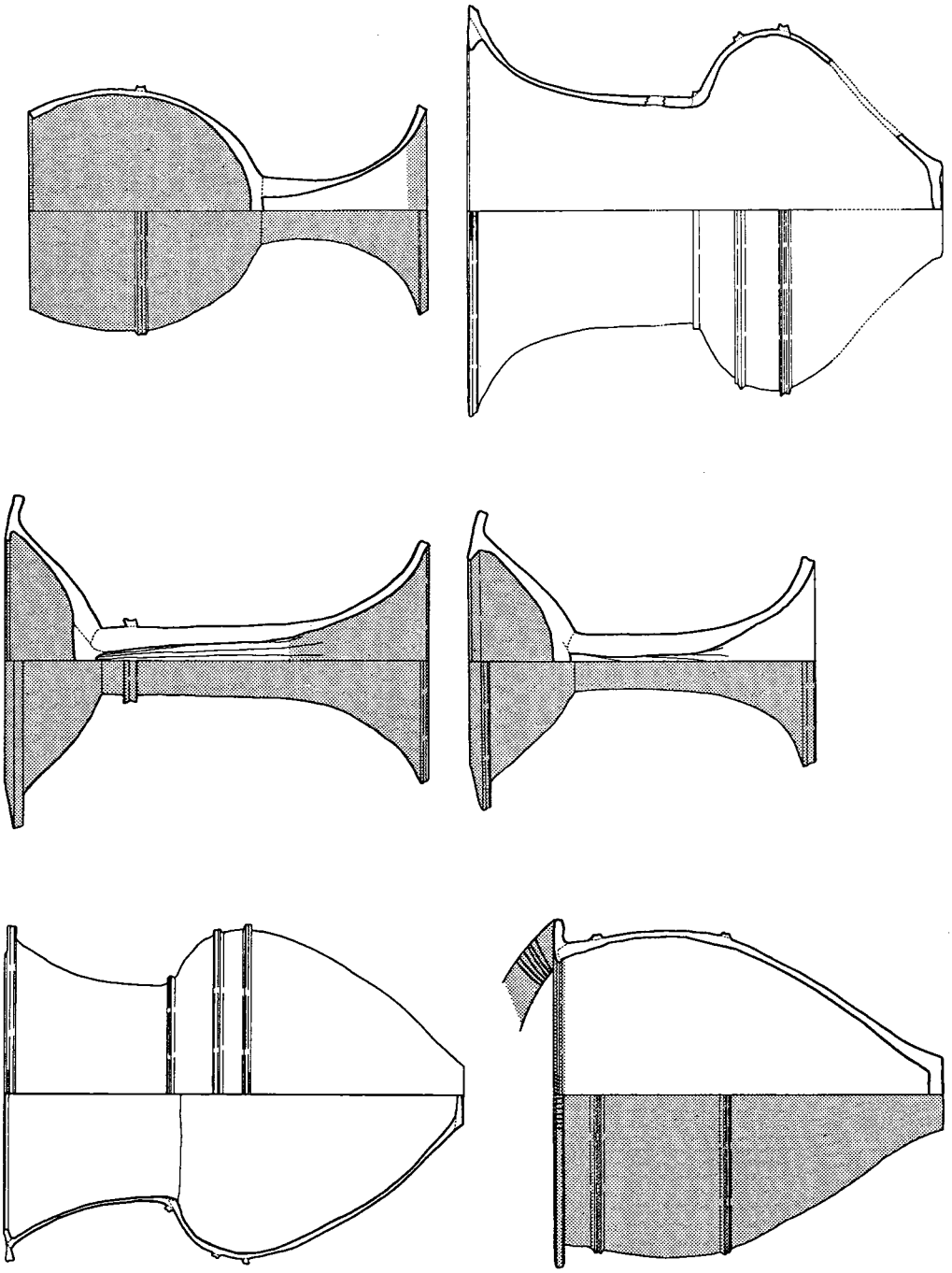


Fig. 125　宝台遺跡甕棺及び祭祀土器（縮尺不同）

1 宝台遺跡K14上、　2～6 宝台遺跡祭祀遺構（B地点）出土土器

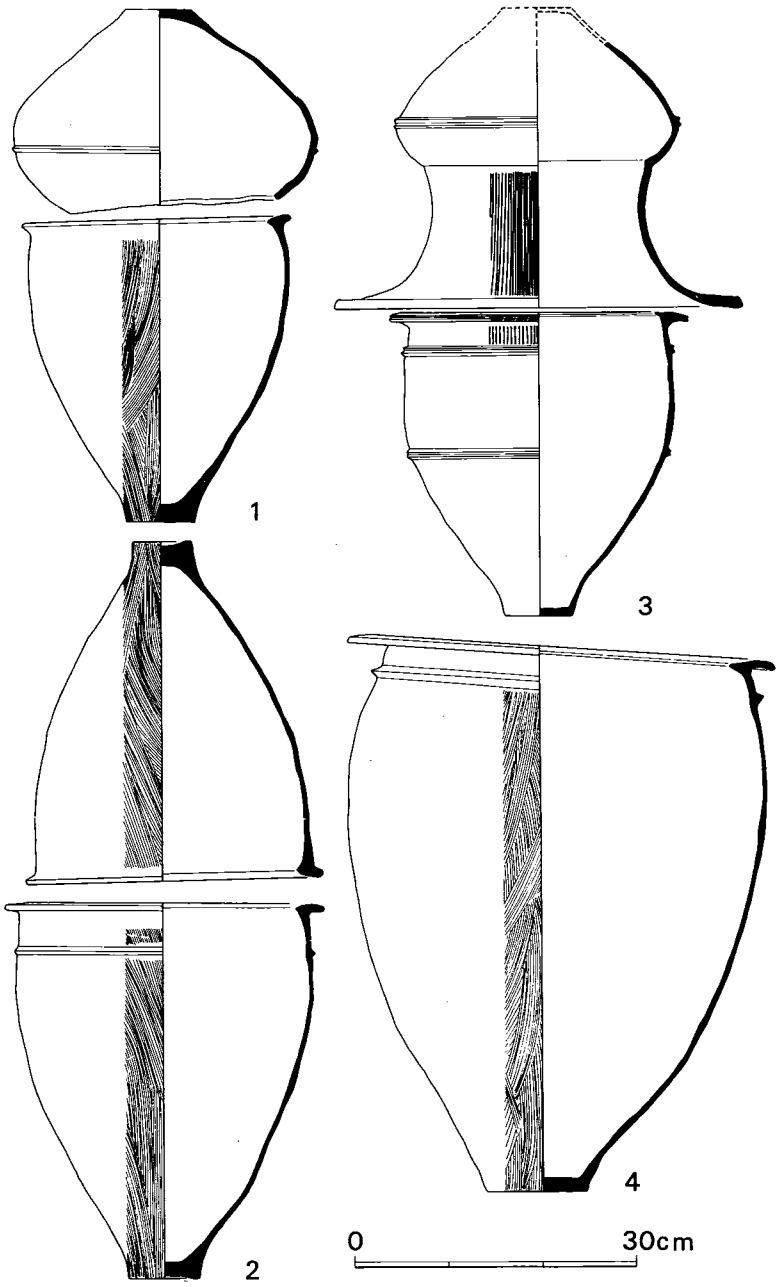


Fig. 126 KⅢb式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）

1金隈K70　2金隈K71　3金隈K62　4金隈K75

KIIIa式の古期に属することはまちがいない。したがって、それに伴う小児棺は当然KIIIa式に併行するものである。

これらは口縁がほぼ平坦か、やや外側に低く傾斜する傾向が生じ、口縁下凸帯はもたない。胴部の張り出しは、みられず、底部はわずかに上げ底を呈するもの、平底両者がある。K103下は前項で述べた、丸味を帯びた甕棺の系列下にあると思われ、胴中位に三角凸帯1条を貼付している。

同じく、KIIIa式に併行するものとして、宝台K14上甕に使用された壺、同じくその壺と同様の特徴をもつ壺を含む、A・B両地点の祭祀土器があげられる。これらから、壺・甕・高坏のセット関係が把握できよう。又、諸岡K33上甕の破損部を覆った高坏も好資料である(42)。高坏の口縁部は外側に低く傾斜しており、脚部は長くなる傾向が認められる。

これらはいわゆる狭義の須玖式土器としてとらえられてきたもので、中期中頃とされるものである。中期を前半、後半に二分すると、後半の最古期にあたる。

KIIIb式甕棺併行期の日常容器（Fig.126）

KIIIb式甕棺に併行する時期の小児棺として、金隈K62、K70、K71、K75等があげられる。この時期の甕は再び内側に低く傾斜する傾向にある。口縁には三角凸帯を付すもの、付さないもの両者がある。K62の上甕として使用された開口壺は、KIIIa式の壺に比し、さらに頸部が長大化し、胴部が小さくなっている。下甕は、やや外側に低く傾斜している。これらは甕棺墓の祭祀等にも使用されることもある特殊なものといえよう。

この時期に、大形特殊筒形器台、袋状口縁壺等、甕棺墓の祭祀等に使用される特殊な土器の出現がみられる。この時期の袋状口縁壺は、口縁が丸味を帯び、頸が細くて長く、口縁下、頸肩等にM字形凸帯をもつものが多い。

KIIIc式甕棺併行期の日常容器（Fig.127、128、129）

KIIIc式甕棺に併行する小児棺としては、道場山K35、K49等があげられる。これらの甕の口縁は、内側に低く傾斜するく字に近い口縁を呈し口縁内側に稜のつかないものであり、胴部はかなり張り出して丸味をもつようになる。

これと同時期のものは、板付遺跡J・K－25トレンチ・旧河川層出土の土器、板付F－6b井戸出土土器があげられる(43)。板付F－6b井戸出土土器は、調査担当者によって4層に分けてとりあげられている（1～4層へ、上→下の順）が、1～4層ほぼ同一時期に埋められたと考えていいようである。ただ2層出土の内彎する口縁をもつ甕は後期初頭のものと考えられ、又、1層の凸帯をもつ甕、3層の口縁下に凸帯をもたない袋状口縁壺はやや後出的であり、井戸の埋められた時期は後期初頭であると考えるが、他の土器のほとんどは中期末としてよい。

これらの資料から、高坏を欠くとはいえ、この時期のセット関係がとらえられよう。袋状口縁壺はKIIIb式併行期のものに比し、頸が短かく、大きくなっている点、及び頸部中位・肩部

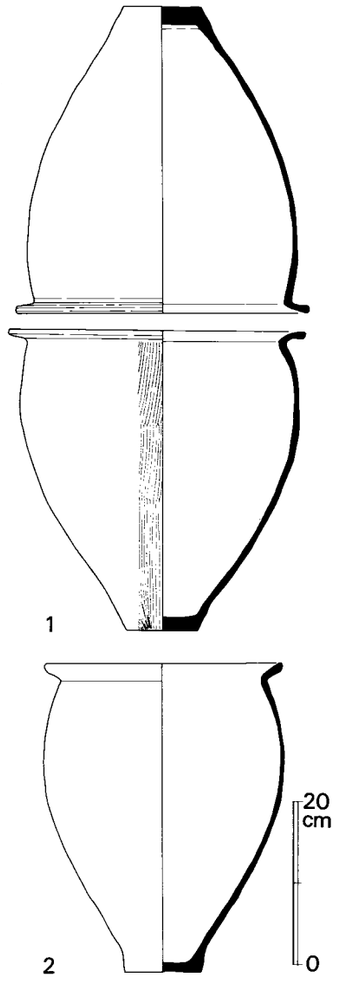


Fig. 127 KⅢc式甕棺併用期の小児棺（縮尺１/８）
１道場山K35　２道場山K49下

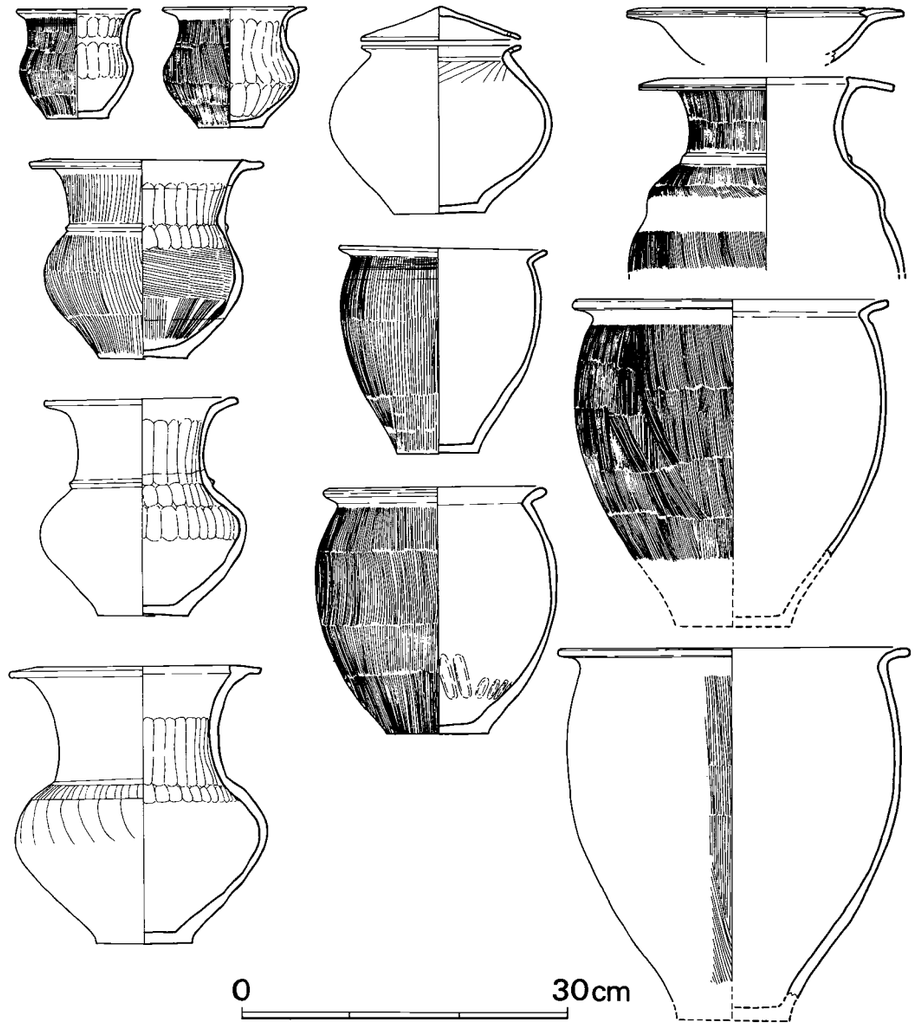


Fig. 128 板付遺跡Ｊ・Ｋ－25トレンチ旧河川層出土土器（縮尺１/６）

KⅢc式併行期

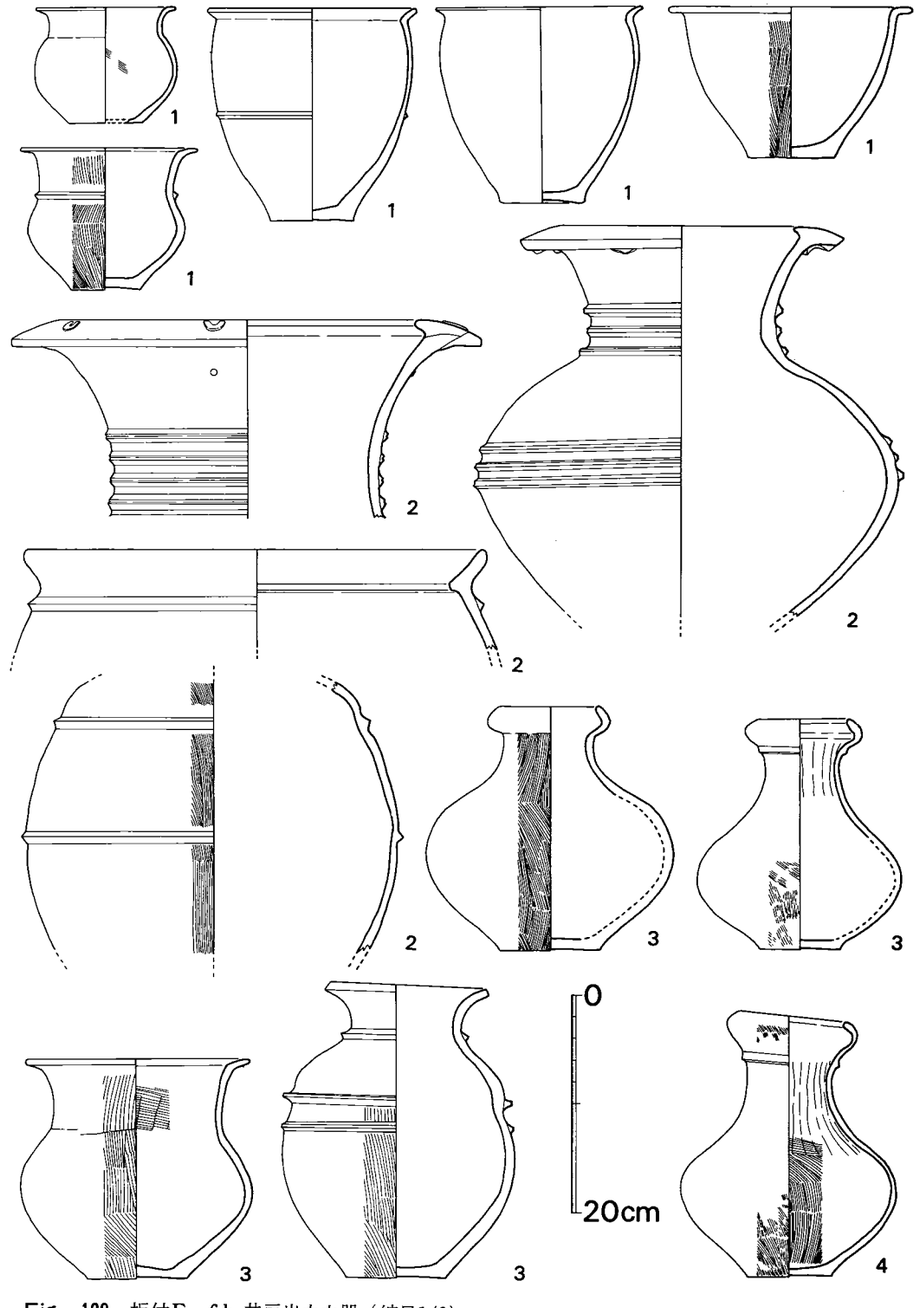


Fig. 129 板付Ｆ－６ｂ 井戸出土土器（縮尺1/6）

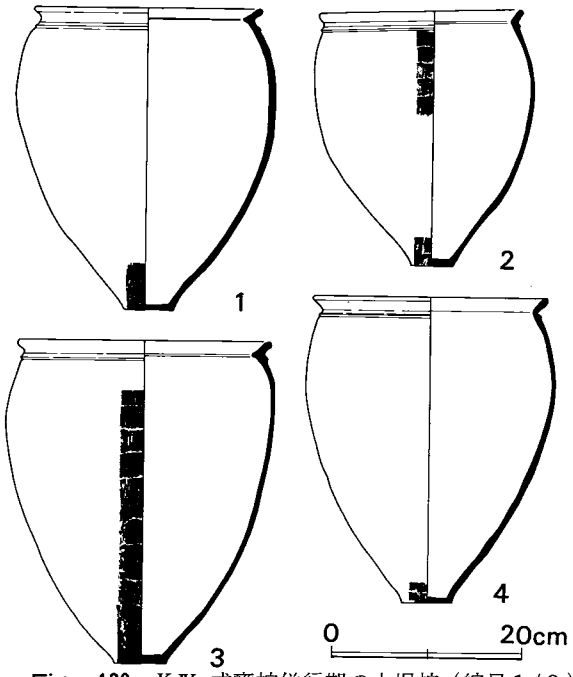


Fig. 130 KⅣa式甕棺併行期の小児棺（縮尺1/8）
1道場山K43 2道場山K53上
3道場山K59下 4道場山 K74

に凸帯が付されない点等が異なる。この袋状口縁壺は、葬送に伴う祭祀のみではなく、各種の祭祀に用いられた用途のひろいものと考えたがよい。

KⅣa式甕棺併行期の日常容器（Fig.130）

KⅣa式甕棺に併行する小児棺として道場山K43、K53上、K59下、K74等があげられる。これらの土器は、逆L字状口縁の傾斜がきつくなりく字となったもの、く字口縁で内側の稜が明瞭なもの等、ほぼ甕棺の口縁形態と軌を一にしている。またFig.111－6に図示した、口縁が内彎するものもこの時期の日常容器である。口縁下凸帯は頸部もしくは、頸部のわずか下位に貼付し、胴は張り出し、口径より胴径が大きい。底部はまだしっかりしている。

この時期の袋状口縁壺は、かつて対馬における弥生式土器の変遷をあつかった際に述べたが、口縁にやや稜が生じ、肩部の凸帯も大きくなり三角凸帯が多くなる。[45]しかし、この種の土器はまだ福岡地方では類例に乏しく、鹿部東町土器溜出土の同報告書第132 図に図示された5、6等があげられる。この土器は口縁形態は上述のとおりであるが、胴部は球形を呈し、肩部凸帯をもたない。福岡[46]市今宿小学校庭出土の袋状口縁壺も、鹿部山第132 図6と同様のものである。この時期の袋状口縁壺はまだ祭祀に使用されていることが多い。高坏はこの時期では鋤先口縁の退化形態のものが残るようである。[45]

KⅣb式甕棺～KⅤb式甕棺併行期の土器の形態変遷について

この時期の公表された資料は未だ少なく、不明な点も多い。資料的には春日市大南遺跡の周溝出土土器、福岡市弥永原遺跡周溝出土の土器等に好資料があり、これらの資料整理が行なわれることによって将来この時期の土器編年は急速に進行すると考えられる。

武末純一氏がこの時期の編年について考察を加えているので、[47]これを参考にしつつ、この時期の土器変遷についてふれたい。

武末氏は、後期土器をⅠA期、ⅠB期、Ⅱ、Ⅲ期に分類し、ⅠA期を森氏編年の高三潴式に、

ＩＢ期を下大隈式に、Ⅲ期を西新式に比定している。ＩＡ期の代表例として鹿部東町土器溜、ＩＢ期は久保長崎１・２・７号住居跡、第Ⅱ期は野方中原Ａ溝をあげている。

武末氏がＩＡ期の代表例としてあげた鹿部東町土器溜は報告者は、人為的なものとして把握している。この東町土器溜は、皇石神社境内内甕棺墓地と近接しており、土器の内容的な面からいっても祭祀的色彩をもつものがあり、甕棺墓地との関係が深いものと考える。土器は、ＫⅢｃ式併行期のものとＫⅣａ式併行期のものが混在しており、ＫⅣａ式の段階の祭祀に関係あるものとしてよい。

武末氏がＩＢ期の代表例とした久保長崎１・２・７号住居跡出土の土器を次にみてみよう。まず久保長崎１号住居跡出土土器のうち、甕ははねあげ口縁を呈するものがあり、遠賀川流域を中心に分布する甕の流入もみられるが[48]、多くはやや丸味を帯びて外反するく字口縁を呈し、内側には明瞭な稜をつくる。胴は張り、口径より大きい。底部をみると、平底ではあるがややしまりがなくなる傾向が生じている。袋状口縁壺があるが、口縁部がないので如何ともし難い。報告者がこの種の壺の口縁部としたものは、高坏の可能性が強い。壺の底部も甕と同様の傾向が生じている。ＫⅣｃ式甕棺に併行するものと考える。

２号住居跡出土の甕は、１号住居跡出土のものに比し、ほぼ同様の特徴をもちながらやや傾斜がきつい観を与える。胴の張りは強い。袋状口縁壺の口縁は内傾し、外側には明瞭な稜をつくる。胴部は長胴化したもので、肩部、胴部にややだれた三角凸帯をもつ。底部はやや丸底化の傾向が生じている。これらの特徴からすると明らかに１号住居跡出土土器より後出するものである。Fig.133に図示したＫⅤｃ式に併行すると考えられる板付Ｆ－５ａ・５号井戸、同Ｆ－５ｃ・３号井戸の土器に近似するが、袋状口縁壺の口縁にやや丸味をもち、胴部が大きい点など、やや古い様相を示している。ＫⅤａ～ＫⅤｂ式併行期のものと考える。この住居跡からは７号住居跡出土のものと同一のものの破片である銅戈鎔笵が出土している。７号住居跡出土の土器は、ＫⅢｃ式併行期のものから、上記２号住居跡出土土器と同一時期のものまで混在しているようである。

武末氏は５号住居跡出土土器は、鹿部東町よりも甕に新しい形態を含むが、鹿部東町よりも一時期下がるものか否かは、現段階ではなんとも言えないとする。５号住居跡出土の甕はＫⅣａ式に併行するものと、傾斜がきつくやや丸味をもって外反し、内側に稜をつくらないもの等ＫⅣｂ式以後の甕棺のつくりと共通するものがある。底部はまだ平底でしっかりしている。高坏は鋤先口縁の退化形態を示す口縁である。したがってＫⅣａ、ＫⅣｂ式併行期の土器と考える。

８号住居跡はＫⅣａ式併行の土器である。

したがって私見では、久保長崎の住居跡出土の土器は８号（ＫⅣａ式併行）→５号（ＫⅣｂ式併行）→１号（ＫⅣｃ式併行）→２号（ＫⅤａ～ＫⅤｂ式併行）の順に変遷するものと考える。

7号住居跡出土土器はかなりの幅をもっているので省く。鹿部東町土器溜の土器と久保長崎5号住居跡の土器は一部重複するが前者が古い。

次に武末氏がⅠB期の久保長崎1・2・7号住居跡に併行するとした、小笹遺跡の祭祀土器をみてみよう。氏は小笹A溝の土器群は古い様相（同氏掲載図第233図、1・8・5・6）と新しい様相（同図、2・3・4・7・9・12）にわかれるが、第Ⅰ期のなかでおさめてよいとする。

小笹遺跡祭祀遺構出土土器のうち、甕はく字口縁をなすがやや長くなる傾向を示している。袋状口縁壺は先にKⅣa式併行[49]とした鹿部東町土器溜出土のものよりやや退化した形態をもつ。したがってこれはKⅣb式併行期の土器と考えてよい。

次に同じく小笹遺跡第2次調査出土土器をみてみよう。たしかにA溝では武末氏の指摘する形態的差は認められる。KⅣa式併行期のものを含みながら、それより後出する土器があるが、ほぼ第一次調査と同時期のものが主体で、それよりなお、後出のものもみられる。袋状口縁壺に稜を明瞭につくり、直線的に内傾するものが後出的といえよう。高坏は鹿部東町土器溜・久保長崎5号住居跡にみられた鋤先口縁の退化形態からはなれ、やや内側に低い逆L字状を呈し、KⅣa式併行期の高坏より後出的である。したがって主体となる土器はKⅣb式併行期として位置づけられる。

以上、武末氏の考察を参考にして私見を述べてきた。資料的に限られており、不明な点もあるが、今後の調査、整理によって判明していくものと考える。

壺はKⅣa式併行期までは、袋状口縁壺はまだ祭祀に使用されることが多く、壺の主体は、鋤先口縁の退化形態のものであるが、KⅣb式併行期以後になって、袋状口縁壺は日常的にも使用されるようになり、その後壺の主体を占めるようになり二重口縁壺へと発展していく。KⅣb式では口縁はやや稜を生じる傾向にあり、丸味をもちながら内傾する。胴は、長胴化し、壺として大形化する傾向がある。肩部に三角凸帯、胴部にコ字形もしくは、三角凸帯を貼付する。この時期はまだ底部はしっかりしている。甕はやや丸味を帯び外反し、内側には稜をつくり、甕棺とほぼ同様の傾向を示す。高坏は小笹遺跡出土のものにみられるように、鋤先口縁の形態からはなれ、やや内に低く傾斜する逆L字状を呈し、脚はやや短かくなる。

KⅣc式併行期では基本形はいずれも前者と同様であるが、底部が平底ではあるがややしまりのない傾向が生じている。

KⅤa～KⅤb式になると、袋状口縁壺は明瞭な稜をもち、やや直線的に内傾する口縁をもつ。胴は長胴化し卵形をなす点はかわらないが、底部が丸底化する傾向が生じている。甕の口縁は丸味をもち外反するが、傾斜がややきつくなる。底部は壺と同じ傾向が生じている。KⅤb式併行期の甕の好例としては、原の辻第14試掘壙K2の上甕に使用されたものがあげられる[51]高坏の形態は不明。

ＫＶｃ式～ＫＶｆ式甕棺併行期の土器の形態変遷について

ＫＶｃ式甕棺～ＫＶｆ式甕棺としたものは、いわゆる西新式土器の範疇にはいり、森氏編年の日佐原式、高島編年のⅩ式（日佐原式）に相当するものと理解している。これらは弥生時代後期終末で一部は土師器にはいるものと位置づけられている。北九州における弥生時代後期終末から土師器については、筑後市狐塚の調査以来急速に進展している。[52]これらの諸業績を参考にして若干の考察を加えたい。

この時期に特徴的なものとしてまず、細頸・長頸壺がある。この土器の形態論からはじめよう。（Fig.131）

この種の土器についてはかつて次のように分類した。最も古い形態として、1類……頸の径が大きく、かつまだ頸がそれほど長くなく、底部は[45]やや大きく平底を呈しているがややしまりがなくなっている。頸・肩の接合部内面は滑らかで稜がつかない。器面は丁寧なヘラ研磨が施されている。この形態の土器は、対馬に若干みられるが、北九州ではまだ出土例は少ない。

2類……頸は細くて長くなるが、口唇部近くでわずかに内彎する傾向がある。底部は丸底化の傾向が生じているが、未だ平底を呈する。器面は全面にヘラ研磨が施される。頸・肩の接合部内面には稜が認められるが、屈曲の度合はゆるい。

3類は、頸は細くて長いが、口唇部は内彎せず外に開く。底部は丸底を呈する。器面は全面にヘラ研磨を施こす。頸・肩の接合部内面の稜は明瞭なものとなる。

3類としたものと同様な特徴を示すものに、北九州市高島遺跡第2遺構出土、山口県土井ヶ浜乾燥場北グループ出土のものがあるが、これらと比較すると、3類としたものは[53]胴部がより扁球形を呈し、頸部の外方への開きが強い。高島出土のものについて報告書は「やや上方に広がり気味の直線的立上りをみせ、口縁あたりでわずかに内彎気味がうかがわれる」としている。このことから高島・土井ヶ浜出土の類を2類と3類の間に位置づけられよう。したがって今回上記分類の3類を4類とし、高島・土井ヶ浜例を3類としたい。

以上4者の形態的差は時間的前後関係をなすものと考える。

次に高坏について述べよう。まず第1類として、口縁はやや外反し短かく、屈曲部は明瞭な稜をつくる。脚部は裾近くでやや内彎ぎみで、円形すかし孔が一般的には、3ヶ所施されている。器面調整にはヘラ研磨が加えられる。

福岡市野方中原Ａ溝、高島第2遺構、原の辻第9試掘壙出土土器のうちにこれらの高坏がある。[55]野方中原、[53]原の辻には口縁の外反の度合が少なく、かつ短いものを含む。この種は若干古い[51]要素を示すものであろう。

2類として、口縁は長くなり外彎ぎみに外反し、坏部のほぼ中位にある屈曲部の接合部は内外面ともに明瞭な稜又は、段を形成する。脚の形態・器面調整等にはほとんど差は認められない。

3類としては、ほぼ直線的に外反し、屈曲部は認められず、したがって器面の稜はないが、

痕跡的なものとなる。脚部の形態、器面調整等には前二者とたいした差は認められない。この三者の形態的差異も時間差を示すものと考える。

以上の細頸・長頸壺・高坏の分類を参考として共伴関係を追ってみよう。まず板付Ｆ－５ｃ・３号井戸出土土器が好資料としてあげられる（Fig. 133)。これは、細頸・長頸壺２類と高坏１類が共伴し、袋状口縁壺は直線的に内傾し、袋部はく字に屈曲して明瞭な稜をつくる。胴部の大きさに対し、口縁・頸部がかなり長大化している。胴部は長胴形を呈し、肩部・胴中位

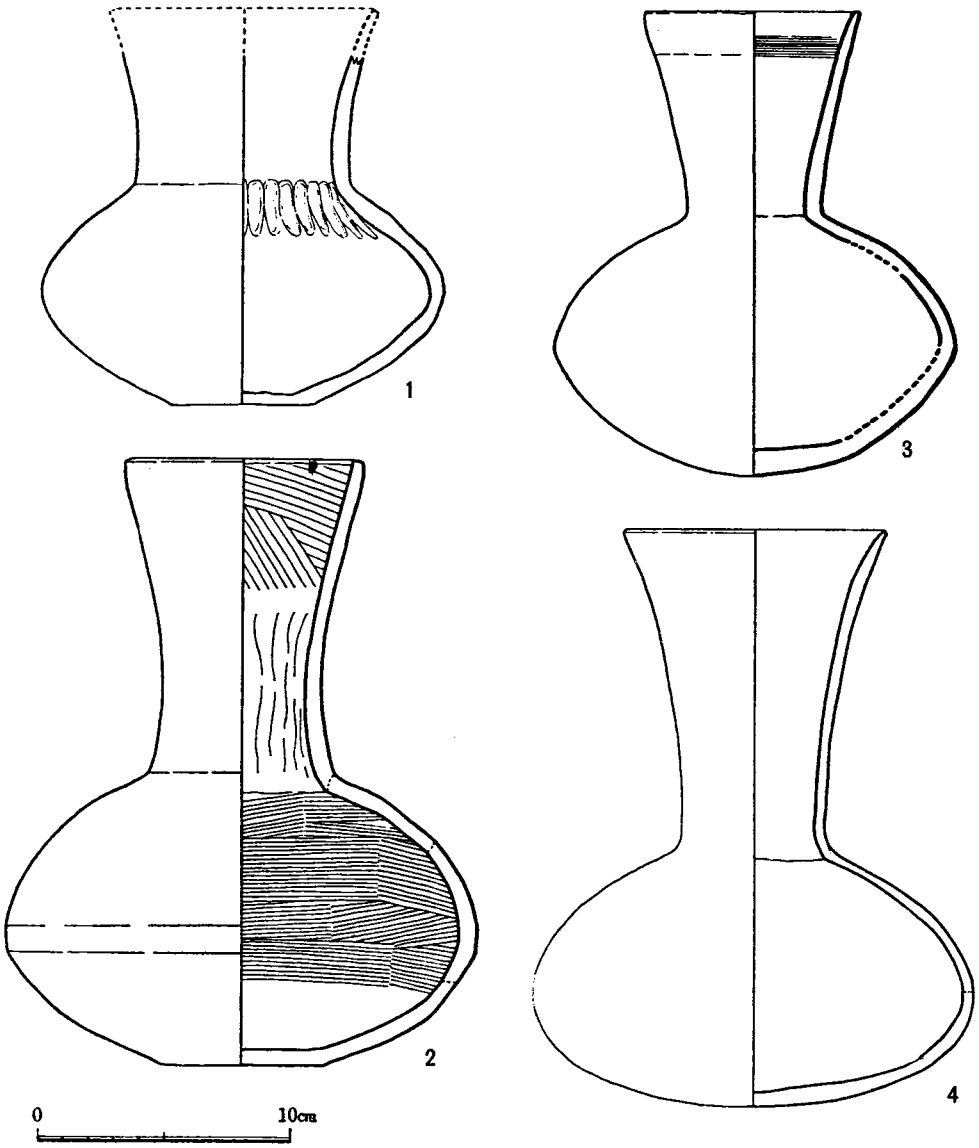


Fig. 131　細頸・長頸壺の形態分類（縮尺1/3）

１．弘法浦遺跡（１類）　２．白蓮江浦第２遺跡２号石棺（２類）

３．高島遺跡第２遺構（３類）　４．観音鼻遺跡第２号石棺（４類）

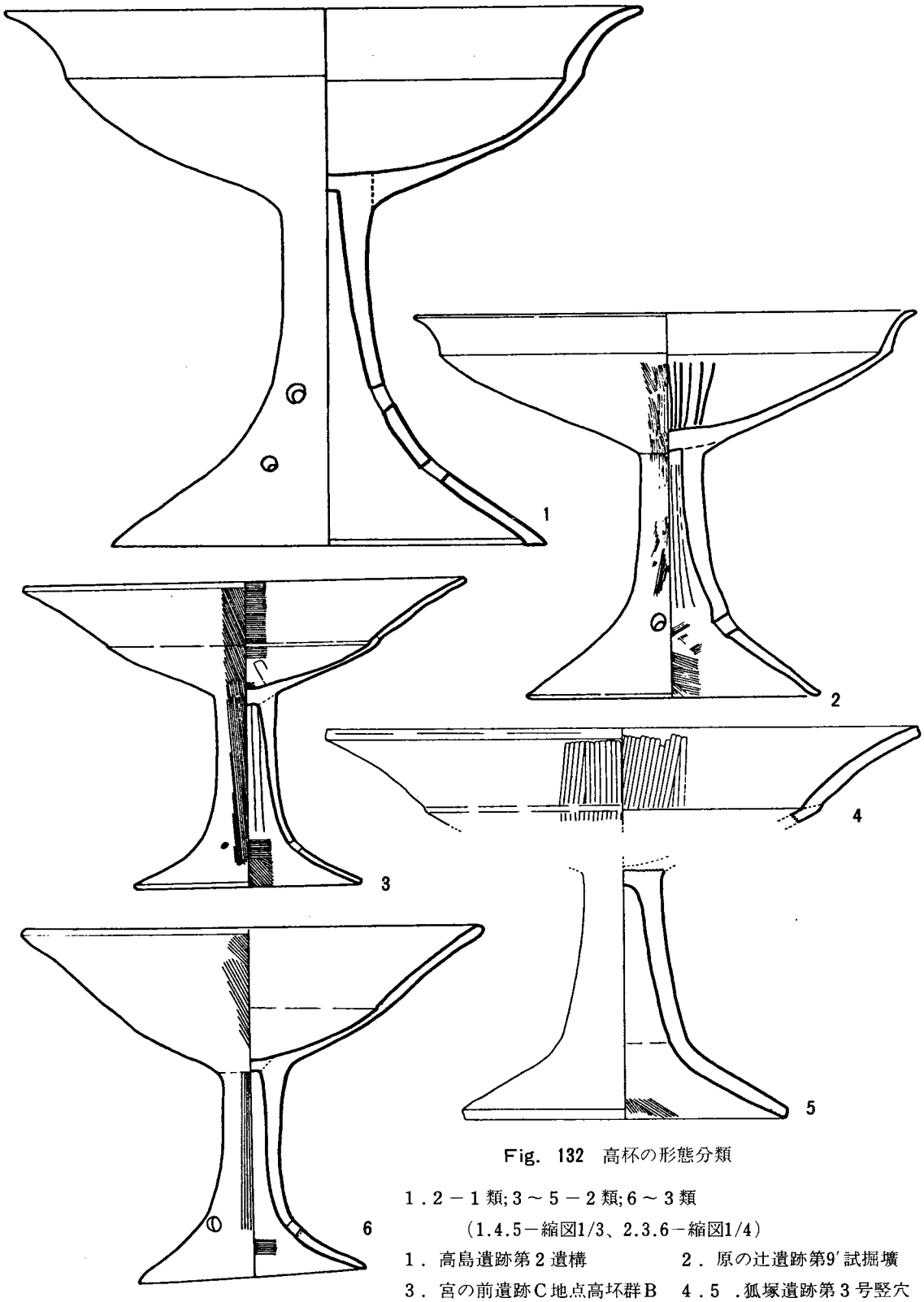


Fig. 132 高杯の形態分類

1．2－1類;3～5－2類;6～3類
（1.4.5－縮図1/3、2.3.6－縮図1/4）

1．高島遺跡第2遺構　　2．原の辻遺跡第9′試掘壙
3．宮の前遺跡C地点高坏群B　4．5 .狐塚遺跡第3号竪穴
6．宮の前遺跡D地区Eトレンチ暗褐色土下層出土

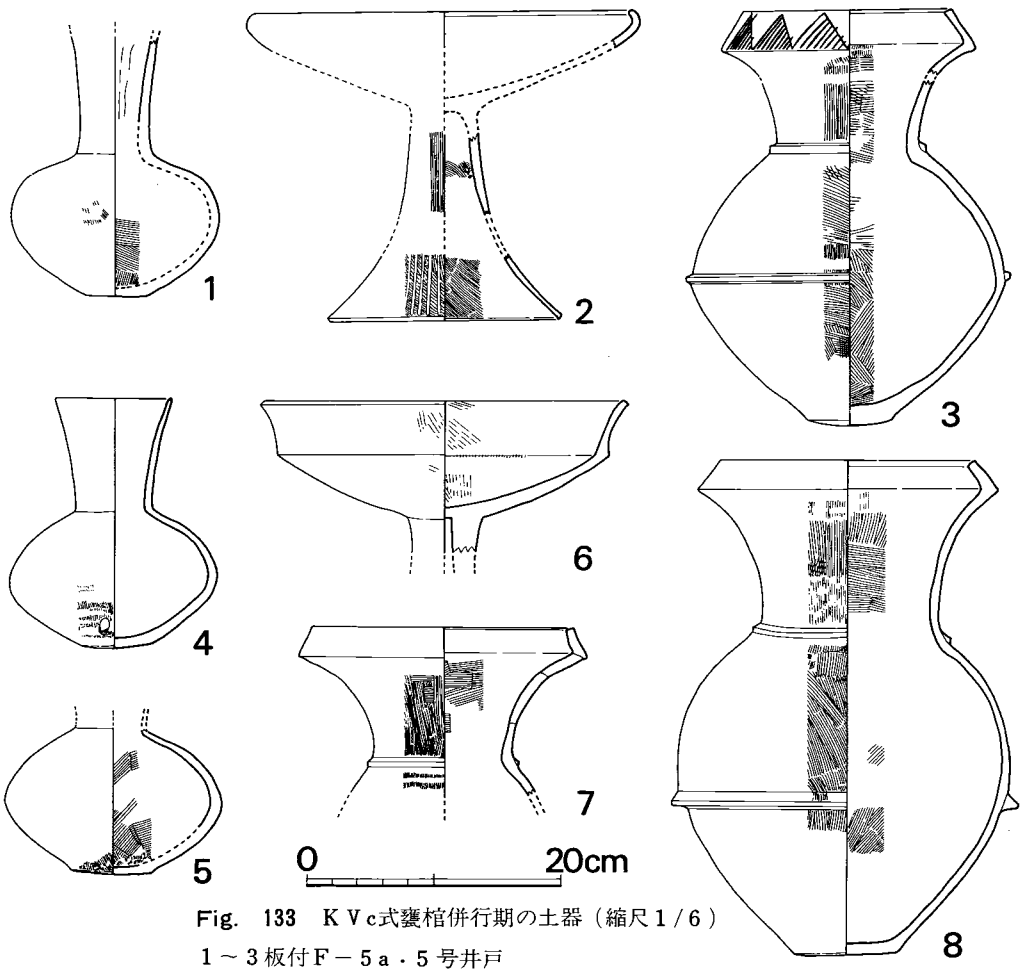


Fig. 133 ＫⅤc式甕棺併行期の土器（縮尺１/６）
１～３板付Ｆ－５a・５号井戸
４～８板付Ｆ－５c・３号井戸

にだれた三角凸帯を貼付している。底部は丸底化の傾向が生じている。同じく板付Ｆ－５a・５号井戸10層からもほぼ同様の細頸・長頸壺と袋状口縁壺が共伴し、これに東九州系の内彎する椀状の坏部をもつ高坏が共伴している（Fig.133）。高島第２遺構からも高坏１類とこの東九州系高坏は共伴しており、セット関係をなすものと考えられる。しかし高島第２遺構出土の細頸・長頸壺は３類に属する。高島の袋状口縁壺はやや直立ぎみで、屈曲部は張り出し凸帯状をなす。胴部はほぼ球形に近く、肩部に三角凸帯を貼付している。底部は丸底の傾向が生じている。この壺は前記板付井戸出土のものと形態を異にするが、時間差をあらわすものか否かの判断は難かしい。私は地域差をあらわすもの（つまり筑前と豊前・豊後地域との）として考えたい。したがって、高島第２遺構出土土器は細頸・長頸壺は後出的であるが、全体としては、板付井戸出土の土器とほぼ同型式と考える。

野方中原遺跡A溝出土土器として柳田純孝氏によって図示された土器群も、ほぼこれと同型式である。ここで注目されることは、ＫＶｃ～ＫＶｄ式の糸島地方の甕棺[55]と共通する大形甕が存在することである。（野方中原と糸島地方は至近の距離にある。）図示されたものは、底部がなく、いずれの型式に属するかは決め難い。原の辻第9′試掘壙出土として図示された土器群の新しい時期のものもほぼこれらと同型のものとしてとらえられる。又、原の辻では、第19試掘[51]壙から糸島地方系の甕棺が出土しており注目される。Ｋ１下の底部については、「底部は丸底に近く、まだ完全に整形しておらず、不規則な形をしている」と報告されている。[56]写真から判断すると志登出土甕棺の底部に類似し、タタキ痕も認められる。ＫＶｃ式に属するものと考えられる。

このように考えるならば、細頸・長頸壺３類と高坏２類、細頸・長頭壺４類と高杯３類は併行関係にあると考えられるが、住居跡等から出土する時は混在しているのが実態である。又、細頸・長頸壺は本来遠賀川以東に分布の主体を置く土器であり、筑前地方では出土例は少なく筑後ではほとんどみられない。いま高坏の関係でみると、宮の前Ｉ式では２類・３類を同型式に置き　狐塚Ｉ式でも２類・３類、同II式でも２・３類ともに同型式としている。狐塚２号住居跡[57]では、２類高坏と東九州系の内彎する高坏の退化形態と思われるものがあり[58]、前述の高坏１類、細頸・長頸壺２類を共伴した各遺跡出土土器より明らかに後出的である。又、壺、甕の胴下半部にヘラ削りを施しているものがあり、これらの土器の底部はほぼ丸底化し、痕跡的に平底を呈するものである。したがってこの狐塚２号住居跡の壺・甕は胴下半にヘラ削りが出現する時期とそれ以前に分類し得るものと考える。そしてこの胴下半にヘラ削りが出現し、底部の丸底化が進行した壺、甕等に高坏３類、細頸・長頸壺４類が伴ない、ヘラ削りがなく、底部の丸底化は進行しているが底部の稜が認められる壺・甕等に高坏２類、細頸・長頸壺３類が伴なうものと、形態学的に考えられる。

福岡市西新Ｄ区３号住居跡出土の土器は、胴下半にヘラ削りが施され、底部も丸底化が進行し、底部は痕跡的で、底部の稜は不明瞭である(Fig.134－１・２)。これは今宿出土の甕棺の形態・手法と一致しており、ＫＶｆ式とした祇園山Ｋ１とをつなぐ資料として好例といえる。したがってこれらを、埋葬専用大形甕棺としては未だ出土例はないが、ＫＶｅ式併行の土器と考えたい。

高坏２類、細頸・長頸壺３類、および丸底化は進行しているが、底部の稜が明瞭で、胴下半にヘラ削りが認められない壺・甕等をＫＶｄ式併行期のものとして考える。上述の高坏１類、細頸・長頸壺２類を共伴する板付井戸等の土器はＫＶｃ式行期のものとして位置付けたい。したがって細頸・長頸壺１類はそれより古いものと考える。

ＫＶｆ式とした祇園山Ｋ１にどのような土器が伴なうかは私の力の及ぶところではないが、井上裕弘氏が最古式の土師器とした、門田・辻田17号住居跡出土土器[59]等が伴なうものと予測できよう

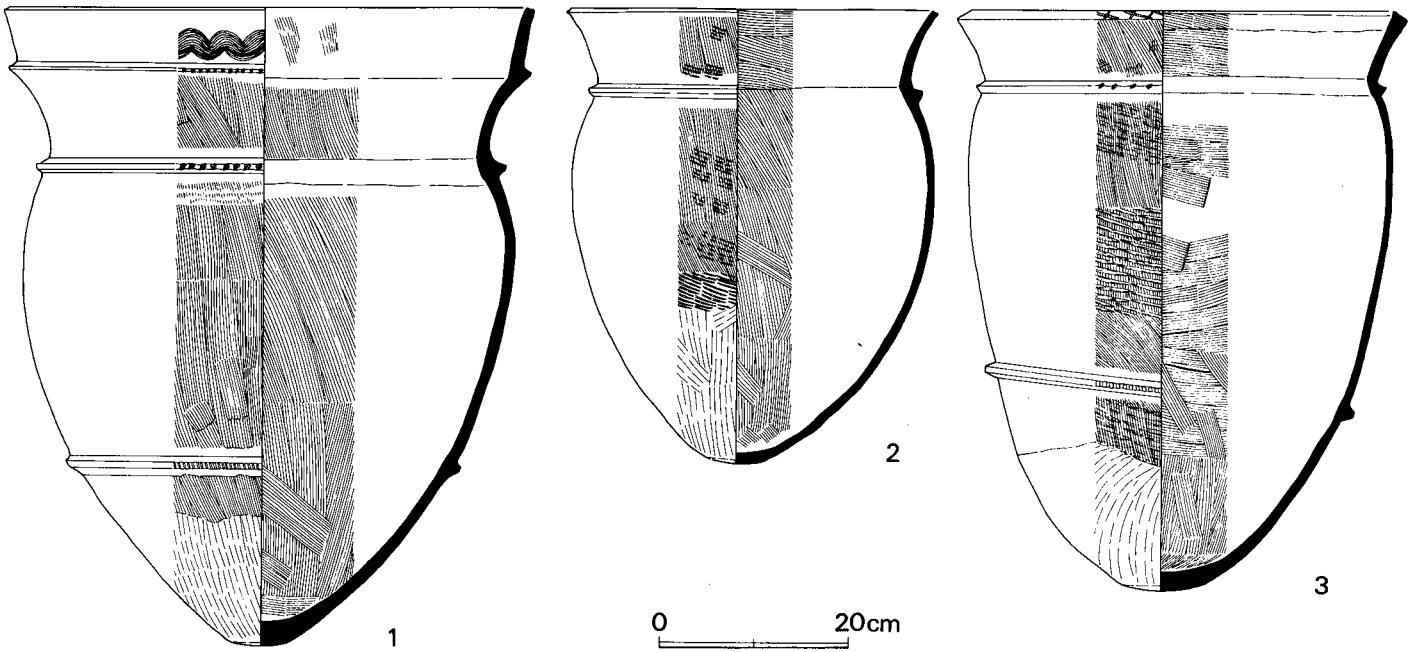


Fig. 134　K Ve式甕棺併行期の土器（縮尺１/８）

１・２西神Ｄ区３号住居跡　３今宿出土甕棺

3）甕棺副葬品からみた弥生時代年代論

a）各甕棺型式と副葬品との関係

副葬品をもつ甕棺墓の主要なものは Tab.17 に示すとおりである。

ＫＩａ式甕棺では現在のところ副葬品は知られていない。

ＫＩｂ式甕棺では中・寺尾Ｋ２、Ｋ17、金隈Ｋ103より朝鮮系柳葉式磨製石鏃の退化形態のものが出土している（Fig 135)。これらの磨製石鏃は伯玄社Ｄ－24[60]、志登８号支石墓[61]等で出土した細く鋭く、断面は厚く明瞭な鏑を有する身をもち、茎もしっかりしたものに比べ、幅広くなり、断面は扁平になり鏑は不明瞭である。又茎をもたないもの目釘穴を有するもの等がある。

金隈Ｋ103 人骨には南海産大形巻貝のゴホウラを原材とする貝輪（金隈型）を右腕に２個着装していた。

ＫＩｃ式甕棺では、細形銅剣・銅矛・銅戈等の副葬が始まっている。板付田端の甕棺は中山平次郎博士の報告からＫＩｃ式であることがわかる。慶尚南道金海会峴里Ｋ３は、森・高島両氏が指摘するように[62]、やや後出する要素をもち、ＫＩＩａ式に併行する可能性もある。この型式

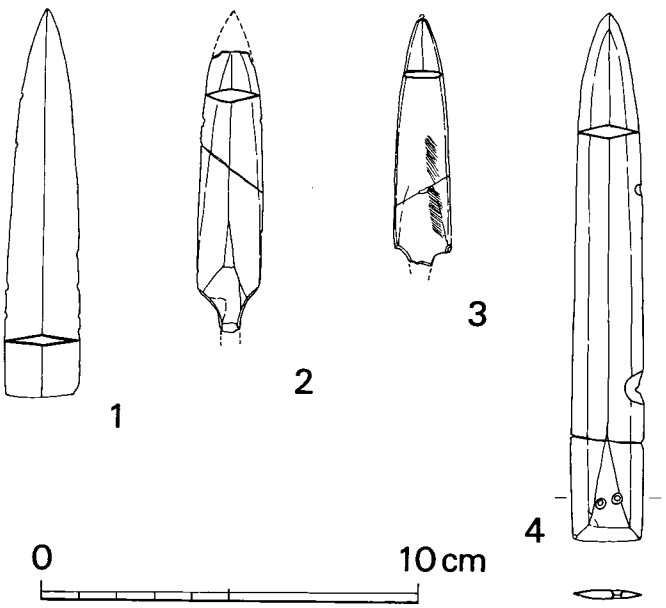


Fig. 135 ＫＩｂ式甕棺に副葬された磨製石鏃（縮尺１/２）

１金隈Ｋ103　２中・寺尾Ｋ２　３・４中・寺尾Ｋ17

では佐賀県呼子町大友遺跡第1次K1からイモガイ縦型貝輪が出土している。(63)

KIIa式甕棺では現在のところ副葬品は知られていない。

KIIb式甕棺では宇木汲田に代表されるように舶載の細形銅剣・矛・銅戈が副葬品の中心であり、宇木汲田K12は多鈕細文鏡を有する。又、永川漁洞等にみられる類の円形銅釧をもつものもある。(64)又、切通遺跡では諸岡型のゴホウラ製貝輪も出土している。

KIIc式甕棺では、ほぼKIIb式と同様である。

KIIIa式甕棺では、KIIb式、KIIc式甕棺とほぼ同様で、細形銅剣・矛・戈を副葬品の基調とし、銅剣もあるが、飯塚市下伊川等にみられるように、鉄製武器を伴うものが一部に出現する。(65)ゴホウラ製貝輪はこの段階でも諸岡型のものである。

KIIIb式では前漢鏡をもち、鉄製武器が副葬の主体となってくる。イモガイ縦型貝輪が道場山K48から出土し、この型の貝輪の下限が知れる。

KIIIc式でも(66)清白鏡・日光鏡等の前漢鏡をもち、鉄製武器が主体を占めることは変りがない。ゴホウラ製貝輪は立岩型のものが出現している。又、立岩K10では国産と考えられる中細銅矛がみられる。これを国産青銅器とした根拠は、1978年に調査された春日市大谷B地区10号住居跡から出土した滑石質の中細銅矛の鎔笵と、(67)立岩K10出土の銅矛が一致し、この鎔笵で鋳造した可能性があることである。

又、ここで立岩K28、K35をKIIIb式に、立岩K10、K34、K39をKIIIc式に分類した基準は、前項で述べたように、K28、K35は口縁が平坦であること。K10、K34、K39は口縁が内に低く傾斜していることである。K35→K34という切合関係からみても矛盾はない。又、丸尾台の甕棺は報告書に掲載された図をみると、上甕はKIIIa式の鉢の特徴を示し、下甕はKIIIc式で、組合せに疑問を感ずる。今後、実物の再検討を要すると考える。

KIVa式では方格規矩四神鏡、国産の貝釧を模したと思われる有鉤銅釧・巴形銅器・海星形銅器等を伴ない、鉄製武器が主体を占めている。佐賀県東宮裾では貨泉を出土したと伝えられている。又、道場山K100から鉄戈が出土しており、鉄戈の下限が知れる。

桜馬場の甕棺は、報告書に掲載された龍渓・(66)岡崎両氏によるとされた復原図は、実際にはあり得ない形態のものであるが、KIVa式の諸特徴は示している。東宮裾の甕棺は明らかにKIVa式に属するものである。

KIVb式甕棺では、二塚山IIK46から永川漁隠洞出土のものと同笵の小形仿製渦文鏡と鉄矛が出土しており、同IIK76からは、連弧文「昭明」銘鏡が出土(64)している。

KIVc式甕棺では三津永田K104から流雲文縁五獣鏡と素環頭太刀が伴出している。

KIVa～KVe式甕棺からは現在のところ副葬品の出土は知られていない。

KVf式では、祇園山K1から後漢鏡の画文帯神獣鏡片、鉄刀子が出土している。

以上各型式の甕棺と副葬品について概観してきたが、次に大量の副葬品をもちながら甕棺の

Tab. 17 副葬品を有する

甕棺番号	時期	舶載青銅器		国産青銅器
		鏡	武器	
中・寺尾K 2	KⅠb式			
〃 K17	KⅠb式			
金隅K103	KⅠb式			
有田K 2	KⅠc式		細形銅戈1	
飯倉唐木	KⅠc式		細形銅剣1	
宇木汲田K18	KⅠc式		細形銅剣1	
〃 K32	KⅠc式		細形銅剣切先1	
板付田端	(KⅠc式)		細形銅剣3 細形銅矛3	
金海K 3	KⅡa式か		細形銅剣2	
宇木汲田K 6	KⅡb式		細形銅剣1	
〃 K11	KⅡb式		細形銅剣1	
〃 K12	KⅡb式	多鈕細文鏡	細形銅剣1	
〃 K17	KⅡb式		細形銅戈1	
〃 K38	KⅡb式			
〃 K41	KⅡb式		中細銅矛	
〃 K58	KⅡb式		細形銅戈1	
〃 K61	KⅡb式		細形銅剣1	
〃 K64	KⅡb式			
切通K 4	KⅡb式		細形銅剣1	
須玖(1962)K15	KⅡc式		細形銅剣1	
宇木汲田K129	KⅡc式		細形銅剣1	
須玖(1929)K 1	KⅢa式		細形銅剣1	
須玖(1962)K13	KⅢa式		細形銅戈1	
宇木汲田K37	KⅢa式		中細銅矛1	
〃 K112	KⅢa式			
立岩K28	KⅢb式	重圏「昭明」銘鏡1		
〃 K35	KⅢb式	重圏「久不相見」銘鏡1		
〃 K10	KⅢc式	連弧文「清白」銘鏡1 連弧文「日有喜」銘鏡2 重圏「清白」銘鏡 重圏「姚皎」銘境1		中細銅矛1
〃 K34	KⅢc式	連弧文「日光」銘鏡		
〃 K39	KⅢc式	重圏「久不相見」銘鏡1		
三雲K 2	KⅢc式	連弧文「日光」銘鏡14 ＋α 小形星雲鏡1		
丸尾台	(KⅢc式)	連弧文「日光」銘鏡3		
二塚山ⅠK－15	KⅢc式	連弧文「清白」銘鏡1		

主要甕棺一覧表

鉄器		装身具		その他	文献番号
武器	その他	釧	玉類		
				柳葉式磨製石鏃1	1
				〃 2	1
		ゴホウラ製貝輪2		〃 1	2
					3
					3
					4
					4
					5
			碧玉製管玉3	銅鉇7	6
					4
			勾玉1		4
					4
					4
		銅釧5	勾玉1 異形玉1		4
			管玉45		
			管玉1		4
					4
					4
		銅釧18	管玉15		4
		ゴホウラ製貝輪10個			7
					8
					4
					9
					8
					4
		銅釧17	勾玉1 管玉3	付近より中細銅矛1出土	4
	素環頭刀子1		ガラス管玉553		10
			丸玉1 棗玉1		
剣1・戈1			塞杆状ガラス器5		
					10
剣1	鉇1			砥石2	10
戈1		ゴホウラ製貝輪14			
剣1					
			ガラス勾玉12 硬玉1		11
			ガラス片利用垂飾品1		
小刀1					12
					13

甕棺番号	時期	舶載青銅器		国産青銅器
		鏡	武器	
桜馬場	(Ⅳa式)	方格規矩四神鏡1 方格規矩渦文鏡1		有鉤銅釧 巴形銅器3
東宮裾K1	KⅣa式			海星型銅器数個 巴形銅器数個
二塚山ⅡK−46 〃 ⅡK−76	KⅣb式 KⅣb式	小形仿製渦文鏡1 連弧文「昭明」銘鏡1		
三津K104	KⅣc式	流雲文縁五獣鏡1		
祇園山K1	KⅤf式	画文帯神獣鏡片1		
須玖(1899)		草葉文鏡、重圏四乳葉文鏡、星雲文鏡、重圏「精白」銘鏡、同「清白」銘鏡、重圏「日光」銘鏡・連弧文「清白」銘鏡等前漢鏡33～35面	細形銅剣1 〃 破片3 中細銅矛5 細形銅戈	
三雲K1		重圏素文鏡・四乳雷地文鏡 重圏渦文帯「精白」銘鏡・重圏「清白」銘鏡、連弧文「清白」銘鏡等前漢鏡35面	有柄式細形銅剣1 中細銅矛2 細形銅戈1	
井原・ヤリミゾ(天明年間)		方格規矩鏡21＋α		巴形銅器1

参考文献

1，大野城市教育委員会「中・寺尾遺跡」大野城市文化財調査報告書 第1集 1977

2，福岡市教育委員会「金隈遺跡 第2次調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第17集 1971

3，福岡市教育委員会「有田遺跡—福岡市有田古代集落第二次調査報告」1968

4，唐津市史編纂委員会「唐津市史」1962の他、岡崎敬氏の御好意により、調査日誌、現物等にあたり検討した。この際K112、K129は実物はみれなかった。

5，中山平次郎「銅鉾銅剣の新資料」考古学雑誌7—7、1917

6，樫本杜人「金海貝塚の甕棺と箱式棺——金海貝塚の再検討——」考古学雑誌43—1、1957

7，金関丈夫・金関恕・原口正三「8,佐賀県切通遺跡」日本考古学協会『日本農耕文化の生成』1962

8，福岡県教育委員会「福岡県須玖・岡本遺跡調査概報」福岡県文化財調査報告書 第29集 1963

9，京都帝国大学「筑前須玖史前遺跡の研究」京都帝大文学部考古学研究報告 第11冊 1930

10，福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会「立岩遺蹟」1977

11，青柳種信「柳園古器略考」文献出版発行『柳園古器略考・鉾之記』1930 所収

鉄器		装身具		その他	文献番号
武器	その他	釧	玉類		
刀片		有鉤銅釧26	ガラス小玉1		14
(剣あり)			玉多数	伝貨泉(6～8枚)	15
矛1					13 13
素環頭太刀					16
	刀子				17
			ガラス勾玉1、 管玉12	ガラス璧片2	9
(鉄鏃1)			ガラス勾玉2 ガラス管玉60+α	ガラス璧 金銅製四葉蒂形飾 金具8	18
(刀剣類)					11

福岡県教育委員会「井原・三雲遺跡発掘調査概報昭和49年度」福岡県文化財調査報告書 52 1975
〃 「 〃 昭和50年度」 〃 53 1976
12, 中原志外顕・石井忠・下条信行「附録 丸尾台遺跡報告」日本住宅公団『宝台遺跡』1970 所収
13, 佐賀県立博物館発行「二塚山遺跡群——佐賀東部中核団地発掘調査展示会資料一」1977 及び調査担当者の七田忠昭氏より、資料の提供を受けた。
14, 杉原荘介・原口正三「6 佐賀県桜馬場遺跡」日本考古学協会『日本農耕文化の生成』1962所収
15, 柴元静雄「北方町東宮裾弥生遺跡発掘調査報告」新郷土 23—7、8 1970・7、8 23
16. 金関丈夫・坪井清足・金関恕「7、佐賀県三津永田遺跡」日本考古学協会『日本農耕文化の生成』1962 所収
17, 福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」 XXVII 1979
18, 福岡県教育委員会「井原・三雲遺跡発掘調査概報 昭和50年度」福岡県文化財調査報告書53 1976

不明な、須玖岡本、三雲K1、井原ヤリミゾの甕棺がどの型式に属するものであろうか、若干検討を加えよう。

冒頭で述べたように岡崎敬氏は、須玖岡本、三雲K1出土の鏡を立岩K10他出土の鏡と対比し、「鏡よりいえば、この埋葬および副葬の時代は時代的には三者さほどことなるところがないのである」としている。たしかに須玖岡本、三雲K1の大部分は重圏「清白」銘鏡、連弧文「清白」銘鏡等であり、立岩のものとさほど異なることはない。しかし三雲K1では、重圏素文鏡、四乳雷地文鏡の武帝代に草葉文鏡、星雲文鏡等の前漢鏡の型式が確立する以前の戦国鏡式の影響のつよい前漢前半のものを含み、須玖岡本では、草葉文鏡3、星雲文鏡5（もしくは6面）の武帝代の鏡を含む。これらの鏡の組み合せ方からいって両者は立岩K10よりも古い要素をもつ。このことは、須玖岡本、三雲K1副葬の鏡は舶載された時期が武帝代以前の鏡の残る時期すなわち重圏「清白」銘鏡、連弧文「清白」銘鏡等の成立初頭の頃であり、立岩K10ではすでに武帝代以前の鏡が残らない時期のものであったとする可能性も考えられる。

又、岡崎氏自身、立岩K10出土の銅矛は中細銅矛B類と分類し「朝鮮で鋳造され、舶載されたと考えるよりも、中細A類を模し、これを発展せしめた最初のグループのもの」とし、「日本製であることを推定」している。これははしなくも報告書刊行まもなく、大谷遺跡出土の銅矛鎔笵片の出土によって証明されたが(68)、氏の分類では、三雲K1副葬の2本は中細銅矛A類であり、「型式および長さからいっても宇木汲田出土のものとほぼ軌を一にしている」とする。中細A類の銅矛を副葬した宇木汲田K37、K41はそれぞれKⅢa式、KⅡb式の甕棺であり、氏の銅矛の分類からいえば、これに近い時期が考えられる。須玖岡本のものは、「すべてここのものと決定するのに躊躇するけれども」としながら2本は中細銅矛A類、2本は中細銅矛B類と推定している。

大谷出土の銅矛鎔笵片はKⅢc式甕棺併行期の土器を伴なう円形住居跡の柱穴内から出土し、それと対角の柱穴からは朝鮮系小銅鐸と考えられる滑石質の鎔笵片が出土している。この出土状態から考えるならば、KⅢc式併行期というのは廃棄された時期であって、溶笵が製作・使用された年代は若干朔る可能性もあるが、立岩K10の時期（KⅢc式）と共通していることは、この時点で明らかに中細銅矛B類が生産されていたことを示している。岡崎氏の銅矛分類にしたがって三者の関係をみると、三雲（中細銅矛A類）→須玖岡本（中細銅矛A・B類）→立岩K10（中細銅矛B類）の順になるといえよう。

以上のようにみるならば、副葬品の組合せからは、「鏡よりいえば、この埋葬および副葬の時代はさほどことなるところがない」とするよりも、三雲K1、須玖岡本の甕棺は立岩K10より先行すると考えるのが妥当であろう。したがって三雲K1、須玖岡本の甕棺はKⅢb式に属するものであろうと推定する。

井原ヤリミゾの方格規矩鏡・巴形銅器・刀剣類という組合せは、桜馬場に共通し、鏡の年代も同時期のものであり、これらを副葬した甕棺がKⅣa式であると推定することにはます異論はなかろう。

b）副葬品からみた甕棺の年代

鏡・銅矛等の組合せから、須玖岡本、三雲ＫⅠの甕棺をＫⅢｂ式と推定した。まず前漢鏡、後漢鏡の集中する、ＫⅢｂ式～ＫⅣａ式に焦点をあて絶対年代を考察してみよう。

洛陽焼溝漢墓では、134墓の漢墓を6期に区分し、第1期・第2期は前漢中期およびそのやや後、第3期（前期）は前漢晩期、第3期（後期）は王莽およびそのやや後、第4期は後漢草期に、第5期は後漢中期に、第6期は後漢晩期とし、鏡および五銖銭・王莽銭の分類から絶対年代を与えている。

それによると第1期は、Ⅰ型五銖銭の鋳造が開始された武帝元狩5年（B.C.118年）から、Ⅱ型五銖銭（宣帝五銖銭）が鋳造される宣帝元康2年（B.C.64年）までのB.C.118年～B.C.65年の間を、第2期は宣帝元康2年（B.C.64年）から、元帝建昭5年（B.C.34年）鋳造の五銖銭もⅡ型として、元帝までの期間、B.C.64年～B.C.33年の間を、第3期（前期）は、成帝即位から王莽の間、B.C.32年～A.D.6年の間を、第3期（後期）は新王莽から後漢光武帝建武16年（A.D.40年）鋳造のⅢ型五銖銭の出現までの、A.D.7年～A.D.39年を、第4期は光武帝建武16年から章帝まで、A.D.45年～A.D.75年までの間を、第5期は章帝～質帝の間、A.D.76年～A.D.146年を、第6期は桓帝～献帝の間をあて、第6期に属する147号墓出土の土器の朱書紀年銘が「初平元年」(A.D.190年）であることからA.D.146年～A.D.190年の間をあてている。

Tab.18　洛陽焼溝漢墓鏡出土状況

	第1期	第2期	第3期前期	第3期後期	第4期	第5期	第6期
草葉文鏡	1						
星雲鏡	4	3					
日光鏡		3	8	5			
昭明鏡		3	10	6			
変形四螭文鏡			9	2			
四乳鏡			3	1	2		
連孤文鏡				1			
規矩鏡				4	3	2	
雲雷文鏡						4	
夔鳳文鏡						1	
長宜子孫鏡						1	5
四鳳鏡							1
人物画像鏡							1
変形四葉鏡							2
三獣鏡							1
鉄鏡							7

以上のように分類した後、各期の鏡の出土状況をTab.18のようにまとめている。第1期には草葉文、星雲文鏡が出現し、第2期には日光鏡・昭明鏡が出現する。この昭明鏡には須玖岡本、三雲、立岩出土の鏡と同類の連孤文「日有喜」銘鏡、連孤文「日光凍治」銘鏡を含んでいる。第3期（前期）には変形四蝙文鏡、四乳鏡が出現し、第3期（後期）には規矩鏡が出現し、第4期には雲雷文鏡（いわゆる連孤文「長宜子孫」銘鏡を含む）、夔鳳文鏡、長宜子孫鏡が出現し、第6期では人物画像鏡等が出現している。洛陽西郊漢墓[69]でも以上とほぼ同様の傾向が認められる。[70]

これらのことから須玖岡本、三雲の鏡の組合せは洛陽焼溝漢墓第2期に、立岩K10等のKⅢc式甕棺副葬の鏡の組合せは洛陽焼溝漢墓第3期（前期）のなかでも古期に比定できる。いまだかつてKⅢb式、KⅢc式の甕棺に方格規矩四神鏡が副葬されたことは知られておらず、KⅢc式甕棺の下限が新王莽より前に位置付けられることは明らかである。したがって桜馬場、井原ヤリミゾ等を洛陽焼溝漢墓第3期（後期）に比定することも妥当であろう。対馬豊玉村佐保シゲノダンからは馬鐸（これは、洛陽焼溝漢墓等で出土状態をみると必ずしも馬鐸ではなく、銅鈴としたが適切であると考えるが）と貨泉、および双獣付十字形剣把頭飾他と共伴し、又同じく豊玉村佐保からは、馬鐸と巴形銅器が伴出し[71]巴形銅器と貨泉が同時期に存在していることを証明している。又、貨泉を伴なう双獣付十字形[72]剣把頭飾と同類の獣付剣把頭飾と、鉄剣、鉄矛と流雲文縁方格規矩四神鏡が、朝鮮慶尚南道酒村面良洞里より出土している。これらのことも桜馬場、井原ヤリミゾを洛陽焼溝漢墓第3期（後期）に比定する有力な傍証[73]であろう。馬鐸も洛陽焼溝漢墓第3期（後期）、洛陽西郊漢墓第3期でも、王莽銭と伴出することが多く、年代決定の一つの基準になると考えている。

KⅢa式では鏡を副葬した甕棺墓は現在のところ知られていないが、先のようにみて来るならば、草葉文鏡、星雲鏡を主体として、清白鏡等を含まないものが予測され、洛陽焼溝漢墓第1期に比定できるものと推測できよう。草葉文鏡は武帝の庶兄にあたる中山王劉勝墓より第Ⅰ型五銖銭を伴って出土しており[74]、劉勝の没時、武帝元鼎4年（B.C.113年）にはすでに成立していたことがわかる。これら前漢鏡が日本に舶載される契機は武帝による楽浪郡等の四郡設置、元封3年（B.C.108年）以後であることは明らかである。

以上のことをまとめると、KⅡa式は、B.C.108年～B.C.65年、KⅢb式はB.C.64年～B.C.33年、KⅢc式はB.C.32年～A.D.6年、KⅣa式はA.D.7年～A.D.39年を前後する絶対年代を付与できよう。

このような状況は甕棺墓に副葬される鉄製武器、また北九州中期後半以後に急速に普及する鉄器も、前漢後半に漢帝国の発展と伸長に伴なう、中国大陸とその周辺部での急速な鉄製武器の普及という国際的契機とも相俟って、青銅製武器にとってかわっていくという現象[75]とも一致している。

以上述べてきたことは各甕棺型式の上限を示すものであって「しかし、それらの銅鏡が中国で製作され、かれらがそれらを宝器として愛蔵し、ついに彼らの死とともに、副葬されたこの時期だけは、考えねばならない。銅鏡の製作年代にこの期間を加えた年代が、甕棺の年代である」として、「これにより、須玖式土器の行われた年代を西暦後一世紀、西暦元年――一〇〇年、伊佐座式土器の行なわれた年代を西暦後二世紀、西暦一〇〇年――二〇〇年と判断することとし、これに基準をおいて、須玖式土器の以前に編年される城ノ越武土器を西暦前一世紀に行われたもの……」とする杉原荘介氏の見解がある。これは鏡の製作から副葬の時期をほぼ(76)

Tab. 19　甕棺内人骨の死亡年令表

遺跡名	満年令	1	6	12	20	40	60			参考文献及び備考
		乳児	幼児	小児	若年	成年	熟年	老年	計	
金隈	♂					13	7		20	1
	♀					6	11	2	19	
	♂♀	1	16	2		5			24	
	計	1	16	2	0	24	18	2	63	
永岡	♂					3	5		8	2
	♀					8	5	1	14	
	♂♀		4		1	1			6	
	計	0	4	0	1	12	10	1	28	
道場山	♂					4			4	左の他成人（20才以上)が次のようになる ♂2　♀1　♂♀4
	♀					3	2		5	
	♂♀		3		2	2			7	
	計	0	3	0	2	9	2	0	16	
ハサコの宮	♂					1	7		8	
	♀					2(+1)	1		4	
	♂♀			1		1			2	
	計	0	0	1		5	8	0	14	
正原	♂					2	2		4	♂♀成人　1
	♀					1			1	
	♂♀									
	計	0	0	0	0	3	2	0	5	

参　考　文　献

註1．福岡市教育委員会「金隈遺跡　第2次調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第17集　1971に下記を追加した。

2．橋口達也・折尾　学「小児骨に伴なったゴホウラ製貝輪」九州考古学　47．1973
福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第5集　1977

3．福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」ＸＸＶ　1978

100年程考えておられるようである。鏡の製作から副葬の期間を100年程と考えると、それらがすべて100年程たって副葬されるのならばよいが、場合によっては短期間で副葬されるものもあることを考えねばなるまい。このようなことを考えると、例えば、前漢鏡と後漢鏡が混在し、又は後漢鏡が中期の甕棺に副葬されるという現象も生じ得るであろう。しかしながら、今までみてきたように、このような現象はなく甕棺の編年序列と、中国における鏡の製作年代順との関係はなんら矛盾なく、順を追って副葬されているのである。佐賀地方では、福岡、糸島、唐津よりも若干おくれて副葬されている例もあるが、このような現象は当然のことであり、舶載された後、さらにワンクッションおいて佐賀地方にはいったものと解される。

以上のようなことから鏡の製作、舶載、副葬の間はきわめて短時間であって、甕棺の一型式の示す時間とほぼ同期間およびそれ以下であったことがうかがえる。ではその期間がどれほどのものであったか考察を加えてみよう。

甕棺内人骨については、九州大学医学部永井昌文教授の鑑定と考察があり、それから死亡年令の傾向がわかる（Tab.19)。まず乳幼児期に一つのピークがあり、これをのりこえると大部分は成人に達し、成年・熟年でほとんどが死亡し、老年に達するものは、きわめて少ない。ほぼ全掘され、人骨の保存状態の良い金隈、永岡両遺跡をみると、さらに女が男よりも長生した傾向がみられる。成人してからの寿命は、40才前後に集中していることがわかる。又、金隈K146はKⅡb式併行期の日常容器を転用した小形棺であるが、棺内には5才半～6才の幼児が埋葬され、これには、ゴホウラ製貝輪を伴なっていた。これについてはかつて幼児期にすでに将来を約束されていたであろうことを想定し、世襲的要素の出現の可能性について言及した。副葬品をもつ甕棺は、宇木汲田、三雲、須玖岡本、立岩にしても、各地域でほぼ中心地を占める[77]1ヶ所に集中しており、これらの墳墓群が首長一族の墳墓であった可能性は、きわめて高い。弥生時代に第二次性徴を示す年令時に成人儀礼が行なわれたであろうことは、民俗例からいっても当然であろうが、この年令で、首長権を継ぐとは考えられない。やはり20才前後になってから首長権を継ぐものと考えられる。したがって首長権を継ぎ、同時に、漢に「使易を通じ」鏡をもらってきてから、副葬されるまでの間はほぼ約20年程のものと考える。甕棺内に副葬される前漢鏡、後漢鏡ともにかなり大形品でりっぱなものが多く、中国でも一級品と考えられるようなものが多い。したがって、製作から舶載までの間はきわめて短時間であると考える。いまやや幅をもたせても、製作—舶載—埋葬の間はほぼ30年ぐらいのものであったといえる。このように短期間で副葬が行なわれたことによって、甕棺編年と鏡の順列が矛盾なく、副葬されていると考えられる。

このように、製作から副葬までの期間を考慮にいれたうえでも、KⅢc式甕棺に方格規矩鏡等の副葬がみられない現在、KⅢc式の下限は新・王莽より前にあったといえる。

以上のことからKⅢa式の上限はB.C.108年、KⅢc式の下限はA.D.6年、KⅣa式の上限は

A.D.7年とすることができよう。いまB.C.108年から上述の30年を考慮するとKⅢa式の下限はほぼB.C.80年頃に考えられ、KⅢa式の下限とKⅢc式の下限との間を三等分すると約30年に近い年代が考えられる。甕棺の1型式をこのように平均的に約30年としてKⅢc式、KⅣa式の境を0年として、各型式に機械的にわりふると次のようになる(Tab.20)。若干前後することはあってもほぼ矛盾はないと考える。1977年度に福岡県教育委員会が行なった、筑紫野市御笠地区の調査において、KⅤd式併行期と考えた、高坏2類等を伴う住居跡から、洛陽焼溝漢墓で第八型二式としている蝙蝠座鈕連孤文「長宜子孫」銘鏡片が出土している。これは後漢晩期、いわゆる洛陽焼溝漢墓第6期に比定されており、この点からいっても矛盾はない。

Tab. 20　絶対年代推定表

	甕棺型式	年　代	
前期	KⅠa式	B.C. 270	
	KⅠb式	240	秦
	KⅠc式	210	前漢
		180	
中期前半	KⅡa式	150	
	KⅡb式	120	
	KⅡc式		四郡設置
		90	
中期後半	KⅢa式	60	
	KⅢb式	30	
	KⅢc式		
		0	
後期前半	KⅣa式	A.D. 30	新・王莽
	KⅣb式	60	後漢
	KⅣc式		
		90	
後期後半	KⅤa式	120	
	KⅤb式	150	
	KⅤc式	180	
	KⅤd式	210	
	KⅤe式	240	三　国(魏・呉・蜀)
古墳時代	KⅤf式	270	

このことから、板付Ⅰ式の開始はほぼB.C.300年を前後するころ、前期と中期の境はB.C.180年前後、中期と後期の境を0年前後、祇園山K1を土師器とすれば弥生の終末をほぼ3c中頃に比定できよう。したがって祇園山K1の年代は3c後半のはやい時期に位置づけられる。

おわりに

きわめて短時日でまとめたものであって、粗雑との批判はまぬがれないが、甕棺の編年、それと併行する日常容器の編年を、土器の形態論を中心にして考察した。甕棺の場合でも一型式古いものとセットをなすものがかなりあるが、日常容器の出土の実態は型式の異なるものが、混在する現象がさらに複雑であって、たとえば、夜臼・板付Ⅰ式の共存関係に苦慮して諸々の見解が論じられるようなことも生まれてくるのであろうと考える。このような時、土器の形態論、手法論を中心にして分類していくのは当然のことで、混在している状況のなかで、各型式を抽出し、どのような組み合せをもつものであるか検討を加えるべきであろう。この形態論に

Tab. 21

甕棺型式	唐津	糸島	福岡
KⅠa式			
KⅠb式	宇木汲田K18（細形銅剣） 〃 K32（銅剣切先） 大友K1（イモガイ縦型貝輪）		中・寺尾K2（柳葉形磨製石鏃） 〃 K17（ 〃 ） 金隈K103（ 〃、金隈型ゴホウラ貝輪）
KⅠc式			板付田端（細形銅剣・銅矛） 有田K2（細形銅戈） 飯倉唐木（細形銅剣）
KⅡa式			
KⅡb式	宇木汲田K12（多鈕細文鏡・細形銅剣） 〃 K38・K64（銅釧） 〃 K41（中細銅矛）		門田K59（土井浜型ゴホウラ貝輪） 金隈K146（ 〃 ）
KⅡc式	宇木汲田K129（細形銅剣）		須玖（1962）K15（細形銅剣）
KⅢa式	宇木汲田K37（中細銅矛） 〃 K112（銅釧）		須玖（1929）K1（細形銅剣） 〃（1962）K13（細形銅戈） 諸岡（1973）K43（土井浜型ゴホウラ貝輪） 〃（1974）K2（諸岡型ゴホウラ貝輪）
KⅢb式		〔三雲K1（Tab. 17参照）〕	〔須玖（1899）（Tab. 17参照） 道場山K48（イモガイ縦型貝輪）
KⅢc式		三雲K2（日光鏡・小形星雲鏡）	〔丸尾台（日光鏡・鉄小刀）〕 門田辻田K24（鉄戈）
KⅣa式	〔桜馬場（Tab. 17参照）〕	〔井原ヤリミゾ（Tab. 17参照）〕	道場山K100（鉄戈）
KⅣb式			
KⅣc式			
KⅤa式			
KⅤb式			
KⅤc式			
KⅤd式			
KⅤe式			
KⅤf式			

主要甕棺一覧表

嘉　　穂	佐　　賀	その他の地域	甕棺以外の遺構
			〔カルメル修道院（銅釧）〕
			〔北牟田D12（銅剣切先）
		金海K３（細形銅剣・鉇） 年の神K１(諸岡型ゴホウラ貝輪)	
	切通K４（細形銅剣・諸岡型ゴホウラ貝輪）		
スダレK１（諸岡型貝輪） 下伊川（鉄矛）	二塚山ⅡK59（イモガイ縦型貝輪） 〃 ⅡK71(諸岡型ゴホウラ貝輪)		
立岩K28(重圏昭明鏡・素環頭刀子他) 〃 35（重圏「久不相見」鏡・鉄剣・鉄戈）			
立岩K10（Tab．17参照） 〃 K34（　〃　） 〃 K39（　〃　）	二塚山ⅠK15（連弧文清白鏡）	吹田（鉄戈）	〔上り立2号石棺（鉄戈・立岩型ゴホウラ貝輪）〕
	東宮裾K１（巴形銅器、海星形銅器鉄剣・刀）		〔宝満尾D４（昭明鏡）〕 〔対馬佐保シゲノダン（馬鐸・貨泉）〕 〔　〃　（馬鐸・巴形銅器）〕 〔良洞里（方格規矩四神鏡他）〕
	二塚山ⅡK－46(小形仿製過文鏡・鉄矛) 〃 ⅡK－76(昭明鏡)		
	三津永田K104（流雲文緑五獣鏡）		
			筑紫野市御笠地区住居跡（蝙蝠座鈕長宜子孫鏡）
		祇園山K１(画文帯神獣鏡・刀子)	

加えて、遺構の切合い等の層位論を適用し、検証を加えるべきであろう。このような観点から修正すべき点、追補すべき点を今後検討していきたい。

又、短時日であったためもあって、隣接諸地域との併行関係にふれることができなかった。これをやらねば北九州――瀬戸内――畿内と共通の土台にたった討論は困難であろう。今後遠賀川流域、豊前等の調査が進むにつれ、一定の前進はあると考える。期待したい。

最後に本稿をまとめるにあたり、佐賀県文化課七田忠昭氏、福岡市文化課折尾学、沢皇臣両氏、福岡県立糸島高校、福岡県文化課宮小路賀宏、柳田康雄、石山勲、井上裕弘、浜田信也、木下修、新原正典、中間研志の各氏に未発表資料の使用、資料の提供他、便宜をはかっていただいた。記して感謝したい。

註1　森貞次郎「II弥生文化の発展と地域性1、九州」河出書房新社『日本の考古学』III1966所収
2　森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」金関丈夫古稀記念委員会編『日本民族と南方文化』1966所収
3　福岡市教育委員会「金隈遺跡第2次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告17、1971.
4　岡崎敬「日本考古学の方法—古代史の基礎的条件—」角川書店『古代の日本9研究資料』1971.
5　1976年度に復刻された「柳園古器略考・鉾の記」文献出版に付された同氏の解説でも同様の見解が示されている。
6　岡崎敬「鏡とその年代」福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会編『立岩遺蹟』1977. 所収。
7　小田富士雄「弥生土器—九州4」考古学ジャーナルNo.82. 1973. 5
8　高島忠平「Ⅳ. 甕棺の編年」福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会編『立岩遺蹟』1977　所収
9　高倉洋彰「大形甕棺の編年について—ことに型式設定の手続の問題に関して—九州歴史資料館研究論集4　1978
10　福岡県教育委員会「九州縦貫自動車関係埋蔵文化調査報告」XXIV下巻。1978.
11　文化財保護委員会「志登支石墓群」1956.
12　大野城市教育委員会「中・寺尾遺跡」大野城市文化財調査報告第1集1977.
13　福岡県教育委員会「福岡県伯玄社遺跡調査概報」1968.
14　鏡山猛「甕棺累考(二)」史淵55、1953.
15　高島忠平、「V. 甕棺の編年」福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会編『立岩遺蹟』1977) 所収。
16　福岡市教育委員会「板付」上巻・本文、福岡市埋蔵文化財調査報告書35、1976.
17　福岡県教育委員会「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集、1971.
18　佐賀県教育委員会「萬麓・寺ノ下遺跡」佐賀県文化財調査報告書第29集。1974.
19　大牟田市教育委員会「羽山台遺跡」1975.
20　福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」6、1978
21　福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」9、1978.
22　金関丈夫・金関恕・原口正三「8. 佐賀県切通遺跡」日本考古学協会編『日本農来井文化の生成』1962. 所収
23　福岡県教育委員会「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」5、1977.
24　20に同じ
25　日本住宅公団「宝台遺跡」1970.
26　福岡市教育委員会「金隈遺跡第2次調査概報」福岡市埋蔵文化財調査報告17　1971.
27　赤褐色を呈し、赤焼土器とも呼べる甕棺があるが、この問題については井上裕弘氏の考察があるので参照されたい。福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」9、1978.
28　福岡市教育委員会「板付」福岡市報35、1976.
29　春日市教育委員会「高辻遺跡発掘調査概報」春日市文化財調査報告書第3集、1973.
30　別府大学文学部「福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡調査報告書」別府大学文学部考古学研究報告書1　1970.

31　河口貞徳・旭慶男・最所大輔「下小路遺跡」鹿児島考古11　1976
32　福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」ＸＸＶ1978.
33　福岡県飯塚市立岩遺跡調査委員会「立岩遺蹟」1977.
34　金関丈夫・坪井清足・金関恕「７．佐賀県三津永田遺跡」日本考古学協会編『日本農耕文化の生成』1962．所収
35　大神邦博「福岡県糸島地方の弥生後期甕棺」古代学研究53．1968.
36　福岡県教育委員会「九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告」1979.
37　九州大学「北部九州（唐津市）先史集落遺跡の合同調査」1966.
38　森貞次郎・岡崎敬「福岡県板付遺跡」日本考古学協会『日本農耕文代の生成』1962．所収
39　福岡県教育委員会「福岡南バイパス２関係埋蔵文化財調査報告」５．1977.
40　調査担当の木下修氏の御教示による。
41　日本住宅公団「宝台遺跡」1970.
42　福岡市教育委員会「板付周辺遺跡調査報告書」Ⅰ．福岡市埋蔵文化財調査報告書第29集　1974.
43　福岡市教育委員会「板付」福岡市埋蔵文化財調査報告書35、1977.　　76
44　福岡市教育委員会沢皇臣氏の御好意により、未発表資料を使用させていただいた。
45　橋口達也「対馬における弥生式土器の変遷」長崎県教育委員会『対馬―浅茅湾とその周辺の考古学的調査―』　　所収　1974.
46　日本住宅公団「鹿部山遺跡」1973.
47　武末純一「３　遺物の検討(1)弥生土器」福岡県教育委員会『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』ＸＩＸ　1977．所収
48　松岡史「Ｃ　久保長崎遺跡」福岡県教育委員会『福間バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1973．所収
49　福岡市教育委員会「小笹遺跡発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第25集。1973.
50　福岡市教育委員会「小笹遺跡第２次発掘調査告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第34集。1975.
51　長崎県教育委員会「原の辻遺跡Ⅱ」長崎県文化財調査報告書第31集1　1977.
52　筑後市教育委員会「狐塚遺跡」1970．福岡県労働者住宅生活協同組合「宮の前遺跡（Ａ～Ｄ地点）」1971．北九州市埋蔵文化財調査会「高島遺跡」1976.
井上裕弘氏「弥生終末～古墳前期の土器群について」福岡県教育委員会『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』７下所収、1978.
武末純一「前掲書」1977.
武末純一「福岡県・早良平野の古式土師器」古文化談叢５、1978.
53　北九州市埋蔵文化財調査会「高島遺跡」1976.
54　金関丈夫・坪井清足・金関恕「Ⅸ，山口県土井ヶ浜遺跡」日本考古学協会『日本農耕文化の生成』1962.
55　柳田純孝「野方中原遺跡の遺物(1)―Ａ溝出土の土器―」福岡市立歴史資料館研究報告第２集　1978.
56　長崎県教育委員会「原の辻遺跡」1978.
57　福岡県労働者住宅生活協同組合「宮の前遺跡（Ａ～Ｄ地点）」1971.

58　筑後市教育委員会「狐塚遺跡」1970.
59　井上裕弘「弥生終末～古墳前期の土器群について」福岡県教育委員会『前掲書』1978.
60　福岡県教育委員会「福岡県伯玄社遺跡調査概報」福岡県文化財調査報告書36　1968.
61　文化財保護委員会「志登支石墓群」1956.
62　森貞次郎「弥生時代における細形銅剣の流入について」金関丈夫古稀記念委員会編『日本民族と南方文化』1968. 所収
高島忠平「Ⅳ. 甕棺の編年」福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会『立岩遺蹟』1977. 所収
63　佐賀県教育委員会「大友遺跡発掘概報（図録編）」佐賀県報22　1973.
64　梅原末治・藤田亮策編著「朝鮮古文化綜鑑」第一巻　1948.
65　小田富士雄「4. 鉄器」福岡県飯塚市立岩遺蹟』1977. 所収
66　福岡県教育委員会「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告」XXV　1978.
67　報告書近刊予定、春日市教委、佐土原逸男氏の調査による。
68　岡崎敬「3. 青銅器とその鋳型」福岡県飯塚市立岩遺蹟調査委員会「立岩遺蹟」1977. 所収。
69　中国科学院考古研究所編「洛陽焼溝漢墓」中国田野考古報告集、考古学専刊丁種第6号 1959.
70　中国科学院考古研究所洛陽発掘隊「洛陽西郊漢墓発掘報告　1963. 第2期
71　対馬遺跡調査委員会「豊玉村佐保シゲノダンと唐崎の青銅器を出土した遺跡の調査報告書」長崎県文化財調査報告書第8集　1969.
72　永留久恵・小田富士雄「対馬・豊玉村佐保発見の馬鐸・巴形銅器調査報告」九州考古学32 1967.
73　朴敬源「金海地方出土青銅遺物」韓国美術史学会『考古美術』106・107　1970.
74　中国科学院考古研究所満城発掘隊「満城漢墓発掘紀要」考古、1972－1
75　橋口達也「中国（戦国～漢代）における鉄器―とくに鉄製武器を中心として―」たたら研究17　1973.
76　杉原荘介「日本農耕文化の生成」日本考古学協会編「日本農耕文化の生成」1962.
77　橋口達也・折尾学「小児骨に伴ったゴホウラ製貝輪」九州考古学47　1973.

V　甕棺の接着と補強

工楽善通
秋山隆保

ハサコの宮K18号甕棺下甕については、遺存状況が良好でなかったため、甕棺の復原および復原後の補強のため、以下のような作業をおこなった。

①洗浄後の破片約70箇すべてを水溶性アクリル樹脂〔バインダー17〕の原液（固形分約20%）に1昼夜半浸したのち、表面に付着した濃縮された樹脂を取り除くため、ブラシを用いて水洗した。これは乾燥後に土器表面が光沢を発するのを防ぐためである。

②乾燥後、場所に応じて〔セメダインC〕およびエポキシ系合成樹脂〔アラルダイトラピッドタイプ〕を用いて接着した。この際底部近くで、復原後に上部からの荷重により変形する恐れのある部分および、重厚な口縁部一周のうち、永年の間に外へ開く可能性がある2箇所にステンレス芯を入れて接合した(A)。対向する2片にドリルで径約4mmの孔を互いにあけ、ステンレス棒（径約2mm、長さ2cm）を差し込む。この時、両孔と接着面に充分なアラルダイトラピッドを塗りつけておき、二片を接合する。口縁部の他の1箇所の接合部は、対向する2孔をあけたのち、試みにアラルダイトラピッドのみを注入して接着した(B)。

③胴部破片の接合面が風化して丸くなり、接着面積が少ない部分では〔アラルダイトラピッド〕による通常の接着をおこなったのち、空隙にはエポキシ樹脂と石炭酸樹脂製マイクロバルーンを粘り合わせた可塑材〔アラルダイトSV426〕を充填した。さらに、数片の接合箇所の筋に合わせて幅2cmのガラスクロスを〔アラルダイトラピッド〕で貼り合わせ裏打ちとした。このとき、樹脂が硬化してしまう以前に、顔料を樹脂に貼りつけて着色し、目立たないように配慮した。

④こうして全体の破片を接着し終り、形が出来上ったのちに、接合部が胴の円周にそって比較的直線的に通じ、しかも不整合を生じて少々段違いになっている箇所を〔アラルダイトSV426〕でうめて、先と同様にエポキシ樹脂でガラスクロスを2重に張り合わせ、帯状に裏打ち補強した（強化プラスチックス）(C)。これに使用したエポキシ樹脂は③の時とは違えて〔アラルダイトGY252、HY837〕の組み合わせである。

なお、裏打ちの際、塗布面積が広い場合には，〔アラルダイトラピッド〕では硬化速度が早やすぎて作業し難い。

以上、甕棺で実施した接着と裏打ち法は、他の大型土製遺物の補強に応用できる有効な方法といえるだろう。

〔　〕は商品名

Fig. 136　ハサコの宮K18下甕内部補強状況

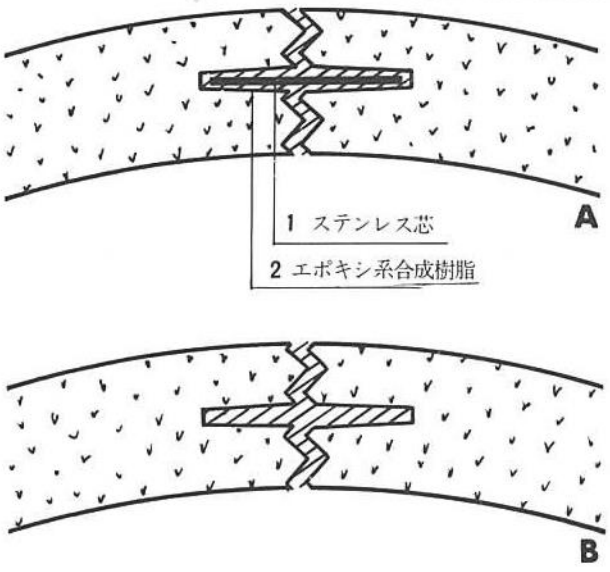
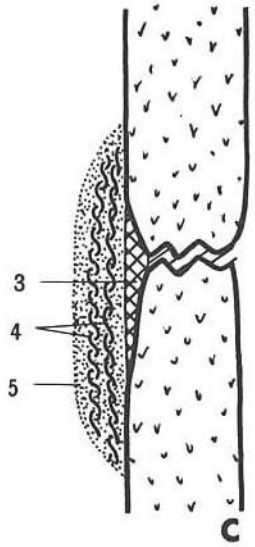


Fig. 137　甕棺の接着と裏打ち法模式図



3〔アラルダイトSV426〕
4 ガラスクロス
5〔アラルダイトGY252・HY837〕

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

中　巻

昭和54年3月31日

発　行　福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲6－29

印　刷　赤坂印刷株式会社
福岡市中央区大手門1丁目8番34号

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— XXXI —

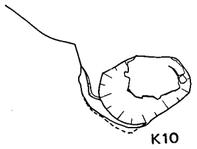
中　巻　付　図

1　北牟田遺跡遺構配置図（３枚）（縮尺１/50）

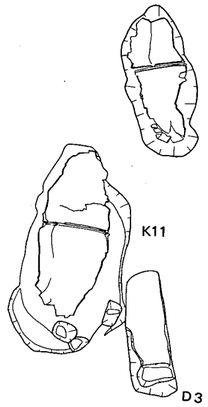
2　ハサコの宮遺跡遺構配置図（縮尺１/50）

1 9 7 9

福岡県教育委員会

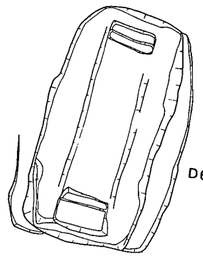

K10

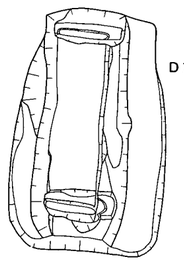
D38

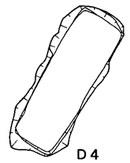

K12

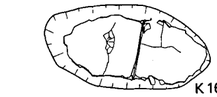
K11

D3

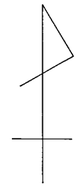

D6

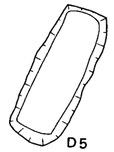

D7

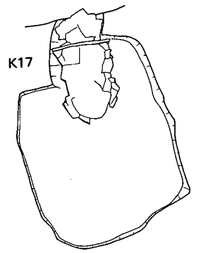

D4


K16

K15



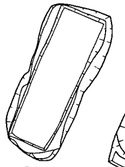

D5

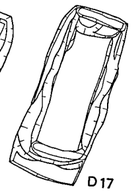

K17

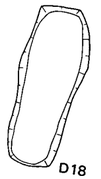
D2

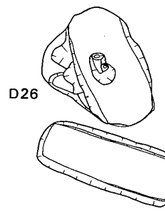
K14

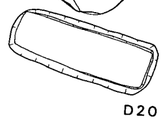
D15

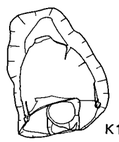

D16

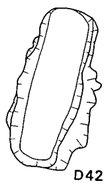

D17


D18


D26

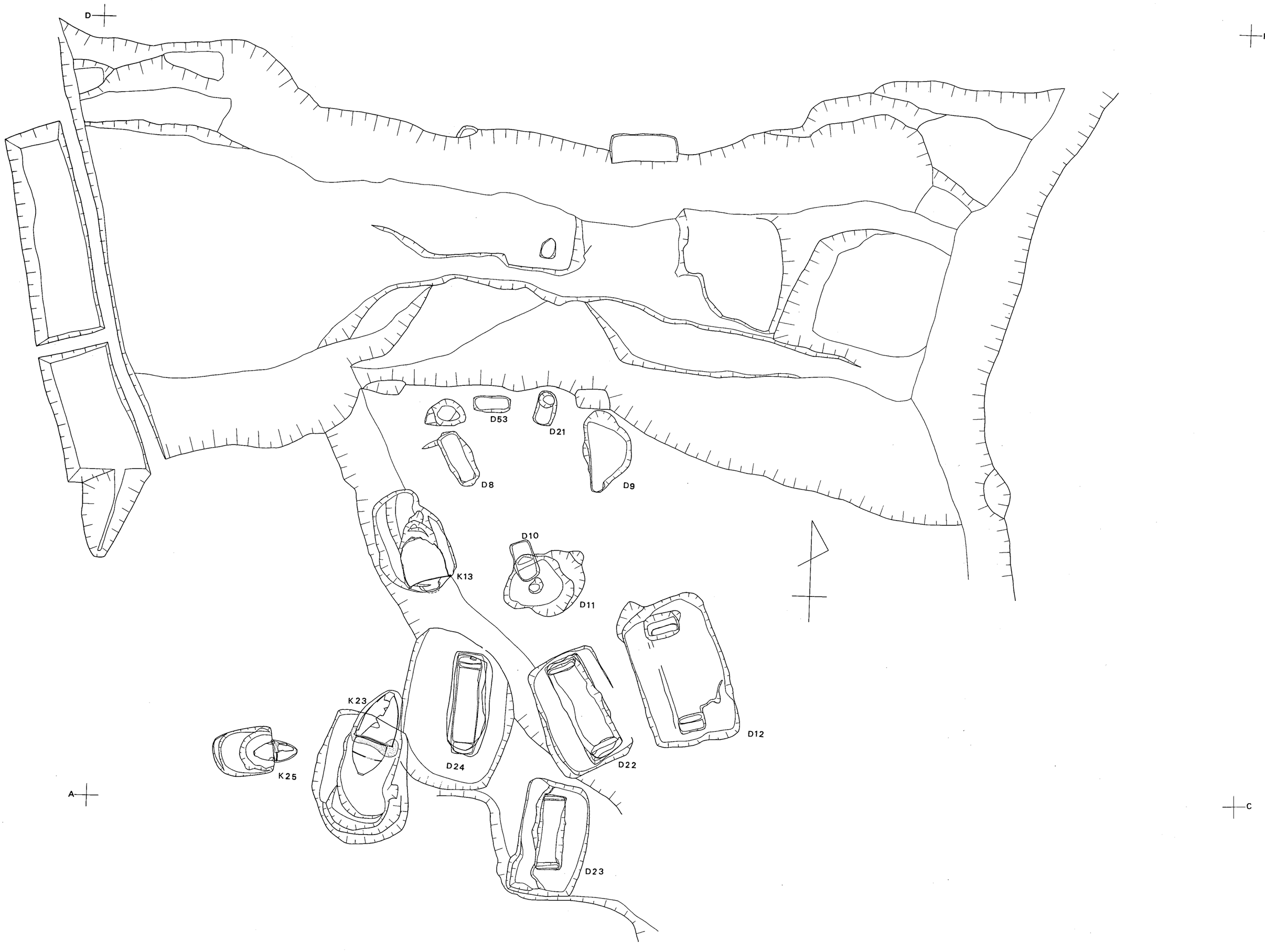

D20

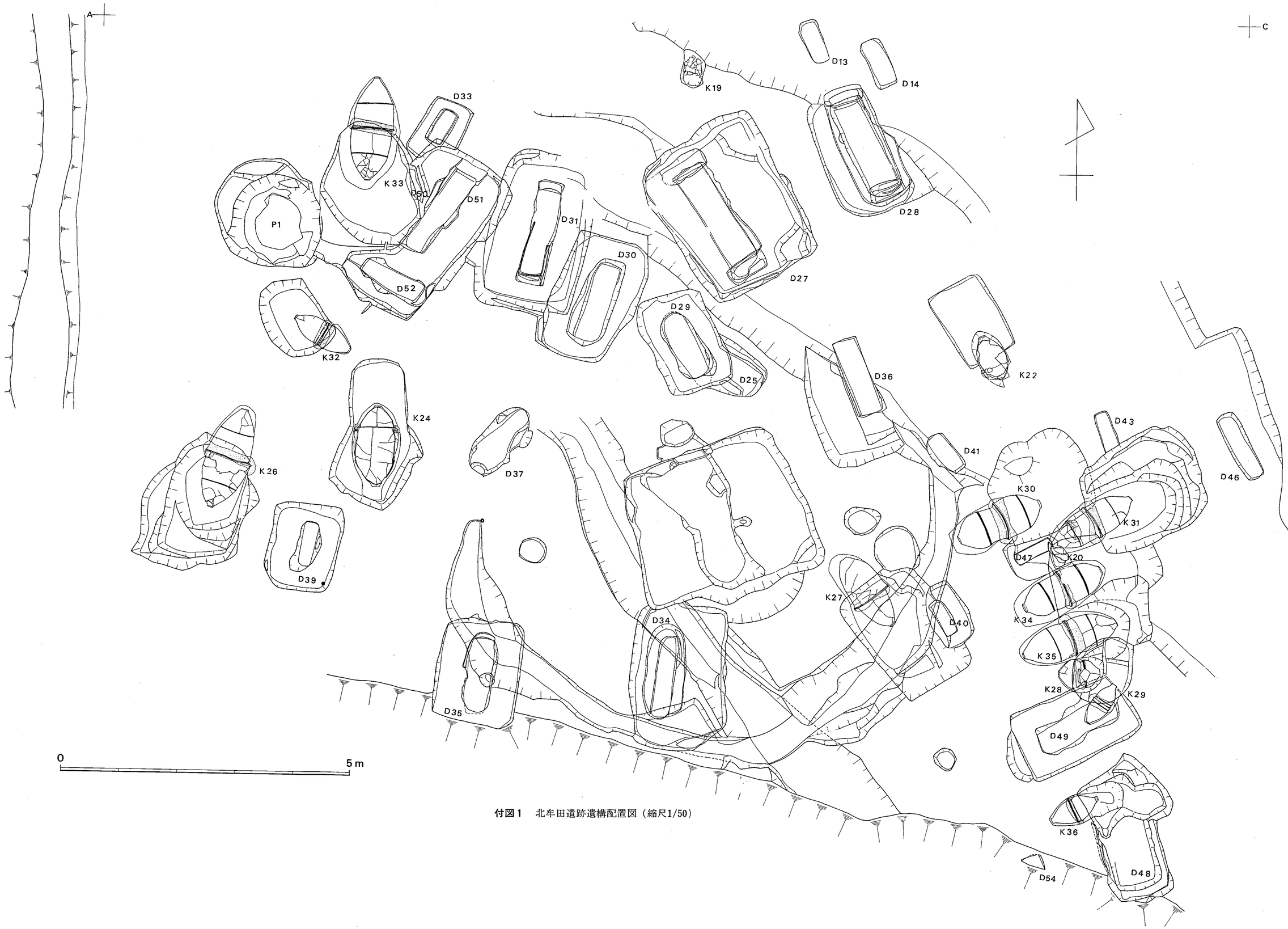

K18


D42

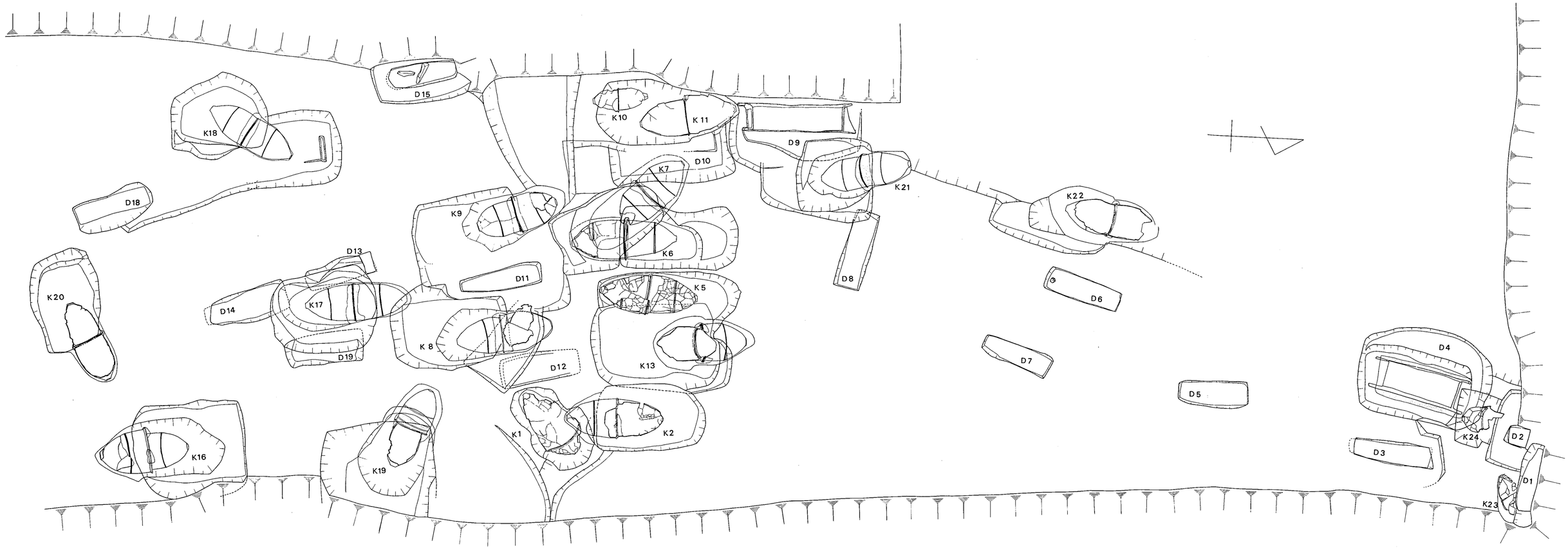
D

F


D
F
D53
D21
D8
D9
D10
K13
D11
K23
K25
D24
D22
D12
D23
A
C



付図1　北牟田遺跡遺構配置図（縮尺1/50）



付図2　ハサコの宮遺跡遺構配置図（縮尺1/50）